平成 22 年度
修士論文

家族生活の変遷に対する住宅共用空間の時間的適応性に関する研究

清家清：私の家、東孝光：塔の家、高橋公子：管の家の作品分析を軸として

指導教員　富岡義人教授

三重大学大学院工学研究科博士前期課程
建築学専攻

関口啓介

A Study on Common Spaces Facilitated in House Projects and their Adaptability to the Chronological Changes in Family Life

An Approach from the Analytical Comparison between Architects' Houses of Kiyoshi SEIKE, Takamitsu AZUMA, and Koko TAKAHASHI

2011

第 1 章　　序論
1.1　研究の目的
1.2　研究の背景
1.3　研究対象
1.4　研究方法
第 2 章　　分析
2.1　分析の第一段階
2.1.1　着想の萌芽
2.1.2　現地調査と聞き取り
2.1.3　空間形態・架構形態・仕上素材の分析
2.1.4　設計意図と住まい方の特徴
2.1.5　第一段階の分析から
2.2　昭和初期から現代に至る 24 住宅作品の空間構成
2.3　対象作品の分類
2.4　対象作品の分析
2.4.1　作品のアイデア（設計理念）
2.4.2　住宅形態の実現効果
2.4.3　居住経過
2.5　空間的適応性の分析
2.5.1　空間構成
2.5.2　外部空間と内部空間の関係
2.5.3　個室と共用室の関係
2.5.4　家族関係の形成に対する対応
2.5.5　空間的適応性を実現するための造形的着想
2.6　時間的適応性の分析
2.6.1　時間的転換のしつらえ
2.6.2　家族成員の発達段階に対する対応
2.6.3　家族関係の変容に対する対応
2.6.4　環境及びその変化に対する対応
2.6.5　時間的適応性を実現するための造形的着想
第 3 章　考察
3.1　対象作品の歴史的・社会的背景
3.2　場面転換の時間的適応性の考察
3.3　時間転換の時間的適応性の考察
3.4　空間構成の図式的シミュレーション
3.5　考察
第 4 章　まとめ

第 1 章

1.1　研究の目的
1.2　研究の背景
1.2　研究対象
1.3　研究方法

第 1 章　　序論

第一章　序論

1.1　研究の目的

本研究の目的は、住宅における、共用空間の形態とその空間構成が家族生活の変遷にどのように関わっているのかを実例を通してさし示すことである。そのことを通じて、家族生活の時間的変遷に対する、住宅の共用空間の形態及び空間構成の時間的適応性を探り、形態及び空間構成ごとの適応の傾向や可能性を明らかにする。

1.2　研究の背景

住宅において共用空間をどのように扱うのかは、多くの近代建築家が取り組んできたものである。菊竹清訓は「住宅の空間組織は家族室を中心にして、幾つかの個室がこれに付属し、台所や浴室が取り付いているという構成であることがわかる。」と言っている。篠原一男は「人間と空間とのやりとりのなかにだけしかリアリティをもちえないような、本当の「無駄な空間」をつくるべきであった。それは単純な「ゆとり」ではない。逆に生活のコアー（核）なのである。このような無機能な空間を中心にして、がっちりと機能を所有した空間を従えたようなすまいをつくってみたいと思っている。」と言っている。山本理顕は「空間の配列、<間>によってつくりだされる空間ユニットが、家族という関係を拘束し、補強しているということなのだと思う。」と言っている。これらの発言に共通している問題意識は、住宅において家族全員に共通される空間の存在が不可欠であり、その共用空間とその他の空間との関係及び構成がプランニングの中心を占めるというところにある。

住宅では、家族成員の関係や個々の生活が、時間とともに変化している。家族成員の発達段階は時間とともに変化している。乳児期と児童期では住宅が果たす役割も変わるように、発達段階によって、住宅に求められる性能は変化する。家族構成は家族成員の誕生、成長独立、結婚同居、老いて死を迎えるなどの出来事を経て、家族成員同士の関係も、構成員そのものも時間とともに変化している。家族構成が夫婦のみであるときと、青年期の子どもが居るとき、老齢期の親が居るときでは、その家族構成によって住宅に求められる性能は変化する。それゆえ、家族成員の関係や個々の生活の変化に対応できる性能が、住宅に求められる。

「家族生活の変遷」と「住宅の核になる共用空間」との間には、適応関係がある。家族生活の変遷に対して住宅は「そのまま」、「模様替え」、「修繕」、「追加」、「転用」、「改築」、「増築」、「解体撤去」などの段階の対応を経て、適応している。またその対応の程度は、極一部である場合もあれば過半や、全てという場合もある。「家族生活の変遷」と「住宅の核になる共用空間」との間にある適応関係には、適応の段階と適応の程度がある。

家族生活の変遷と住宅共用空間の適応関係を扱った研究は今までにない。家族生活の変遷は個別的・偶発的である。家族生活の変遷に対する住宅の対応も、形態や空間構成の特徴を反映したものというよりは、各家庭の事情や都合を優先した、各家庭固有の、別々の事象が殆どである。家族生活の変遷に対する住宅の対応の観察経過を記録されたものは少ない。

建築家の自邸は、建築主との妥協がなく、自らの設計意図や試行を、いかんなく発揮できる機会を与えるものであり、その建築家の関心や着想が、他の一般作品よりも明確に表現されやすい題材であるといえる。その住宅で展開される家族生活は、設計者自らが住み続けることで、設計意図や形態的特徴・空間構成を反映した住まい方である可能性が高いといえる。

建築家の自邸で、居住経過について語ったものがある。

清家清は「ここで四人の子供たちが生まれ育った。長女の家族が済んで、現在は次女の家族が住みついて、出ていってくれる気配がないのだが、私としてはもう一度、出発点に戻って自分の終の住処としたい気持ちも残っている。この間、「続・私の家」、「倅の家」が敷地内に増え、南の門には仕事部屋、「私の家」の上にはコンテナが置かれ、さらには国鉄が民営化されたときの払い下げ緩急車まで加わり、庭の木々も高く、太くなった。「私の家」と名づけて発表した住まいであるが、当然のことながら実際は「私たちの家」であった。」と言っている。東孝光は「塔の家に住み始めてからの二十年間は、私、東孝光にとっては建築家として独立して仕事を始めた出発点から今日までの重要な道程であるが、また妻、節子にとっても夫の仕事を支え、子供を育てることに集中したかけがえのない二〇年間であった。娘、利恵にとっても、小学校一年から大学、大学院を終えて社会に出るまでの、人間形成に決定的な二〇年間であっただろう。」と言っている。高橋鷹志は「住宅建築は、そこで人びとが演じる芝居の目撃者、記憶装置である。子どもの誕生を祝い、生きている喜びを共にし、はたまた死という結末を悲しむ演劇の舞台でもある。本書の主題のひとつである「管の家」に関して自状すれば、かくも短時間に演劇の場面がめまぐるしく変わろうとは、計画・設計の時点で誰もが予想だにし得なかった。ただ「管の列」だけが、このことを冷徹に予測し、諸々の出来事を見下ろし、記憶したに違いない。こうした「管の目」を通したドキュメンタリーが２章にまとめられている。」と言っている。これらの発言に共通していることは、家族生活とその家族生活の変遷に、それぞれの住宅が関わり続けてきたことを示している。さらに清家清「「私の家」白書」、東孝光「「塔の家」白書」、高橋公子「時間の中の住まい」の三つの著書には、家族生活の変遷と居住経過、住宅の変化や対応が本人や家族の証言とともに記録されている。三つの著書を題材に、「私の家 1954」

「塔の家 1966」、「管の家 1983」を分析することで、家族生活の変遷と住宅共用空間の適応関係を示すことが可能であるといえる。

1.3　研究対象

第一は、空間構成の歴史的経過と、その発展形態が確認できる住宅作品を選定し、1924 年以降の日本の住宅、24 作品を事例とする。

第二は、著書において居住経過の観察記録があり、設計意図と住まい方に整合があるものとして、清家清「私の家」、東孝光「塔の家」、高橋公子「管の家」を選定し、研究対象とする。いずれも建築家の自邸で、設計意図と住宅形態の対照ができ、居住経過観察が記録されているものである。また、社会的課題に私費と家族生活をかけて取り組んだ作品でもある。

清家清「私の家」は、戦後小住宅の代表的作品。

東孝光「塔の家」は、都心型住居の提案を果たした作品。

高橋公子「管の家」は、普通一般の人々の普遍的住宅を求めた作品。

1.4　研究方法

1.4.1　1924 年以降の日本の住宅、24 作品を空間構成原理ごとに分類し、作品分析（空間構成、外部空間と内部空間の関係、個室と共用室の関係）を行う。

1.4.2　「私の家」、「塔の家」、「管の家」を空間構成原理ごとに分類し、比較分析（どの範囲に属し、どの位置にあるのか）を行う。

1.4.3.　「私の家」、「塔の家」、「管の家」について

A：作品のアイデア（設計理念）について、本人陳述を整理する

B：その住宅形態の実現効果を作品形態・技法・効果に分類整理し、その関係と共通や差異を示す。

C：居住経過を、本人や家族の陳述、居住歴をもとに整理する。

1.4.4　場面転換の時間的適応性の分析

空間構成及びそれを実現する素材と工法

外部空間と内部空間の関係

個室と共用室の関係

家族関係の形成に対する対応

空間的適応性を実現するための造形的着想

1.4.5　時間転換の時間的適応性の分析

時間的転換のしつらえ

家族成員の発達段階に対する対応

家族関係の変容に対する対応

環境及びその変化に対する対応

時間的適応性を実現するための造形的着想

第２章

2.1　分析の第一段階
2.1.1　着想の萌芽
2.1.2　現地調査と聞き取り
2.1.3　空間形態・架構形態・仕上素材の分析
2.1.4　設計意図と住まい方の特徴
2.1.5　第一段階の分析から
2.2　昭和初期から現代に至る24住宅作品の空間構成
2.3　対象作品の分類
2.4　対象作品の分析
2.4.1　作品のアイデア（設計理念）
2.4.2　住宅形態の実現効果
2.4.3　居住経過
2.5　空間的適応性の分析
2.5.1　空間構成
2.5.2　外部空間と内部空間の関係
2.5.3　個室と共用室の関係
2.5.4　家族関係の形成に対する対応
2.5.5　空間的適応性を実現するための造形的着想
2.6　時間的適応性の分析
2.6.1　時間的転換のしつらえ
2.6.2　家族成員の発達段階に対する対応
2.6.3　家族関係の変容に対する対応
2.6.4　環境及びその変化に対する対応
2.6.5　時間的適応性を実現するための造形的着想

第２章　分析

第２章　分析

2.1　分析の第一段階

著作を通じて見た自邸の設計意図と形態

「私の家」、「塔の家」、「管の家」の作品分析

2.1.1　着想の萌芽

清家清「私の家」白書」、東孝光「塔の家」白書」、高橋公子「時間の中の住まい」、三つの著書には住み手の変化と、時間的移行の経過が本人や家族の証言とともに記録されている。各作品の比較を通じて、空間形態、架構形態、仕上素材、を分別し、著作から設計意図・住まい方の特徴・建築居住の経過・各自の検証を取り出して整理し、その差異と共通性を明らかにした。この分析を通じて本研究の着想を得て、分析方法を検討した。

2.1.2　現地調査と聞き取り

清家清「私の家」1957 は現地訪問の上敷地外から観察した。東孝光「塔の家」1967 は現地訪問の上、建物内外を調査し、東利恵氏（東孝光氏長女・東環境・建築研究所代表取締役）に聞き取りを行った。高橋公子「管の家」1983 は現地訪問の上建物内外を調査し、高橋鷹志氏（高橋公子氏夫　東京大学名誉教授）に聞き取りを行った。

清家清　私の家」の屋敷は、「私の家」、「続・私の家」、「倅の家」一連の建物で構成されている。建物と建物の間は、雑木が生い茂り、芝生と蔦の緑に埋め尽くされていた。「私の家」は敷地内の最北に位置し、長屋門のような趣を出して屋敷の一部を構成し、南から広がる庭を受けとめて囲うかのように建っていた。「私の家」の屋根に浮くコンテナは、緑の屋敷のなかで軽々と持ち上げられ、外部のノイズを遮っていた。

東孝光「塔の家」は入ると、コンクリートの垂直な洞穴にでも入ったような強烈な印象を受けた。座って話をしていると、手を伸ばせば届く壁や天井が身体スケールにあっていて、安らぎと心地良さを覚えていた。窓一枚隔てた外は、東京の真只中で、確かに動いている実社会が視角の端からリアルタイムに飛び込んでくる。すべての空間が共用されているため、空間が実容量よりも大きく感じられる。各層がスラブで緩やかに仕切られている。それはまるで衝立のような軽微な目隠しで、垂直方向に間仕切りが連続しているかのようである。「中心性もヒエラルキーもここにはなく空間の連鎖なのです」と利恵氏は語られた。

高橋公子「管の家」は、外皮の内側に管の列があり、反復しながらパイプがかご状に構成され、その連続はリズムを伴い流れていた。大きな鳥かごをふんわりと柔らかく包むように外皮の亜鉛板が覆っていて、内外の圧力差をつくらずにおおらかな空間をつくっている。多くのモノが空間内にあふれ出ているが、空間のボリュームとそれを構成するむき出しの構造が圧倒的であるため、気になることはない。座って話をしていると、恐らくその雑多なもののお陰で、緊張がほぐれていくのがわかる。「この空間は凍れる音楽ではない」と鷹志氏は語られた。

清家清：「私の家　白書」，住まいの図書館出版局，1997.
東孝光＋節子＋利恵：「塔の家」白書，住まいの図書館出版局，1988.
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，彰国社，2003.

2.1.3　空間形態、架構形態、仕上素材の分析

空間形態を、空間の覆われ方・囲まれる様態・内部空間の状態・内部空間の性質・空間構成・空間の効果に分類した（表 1）。

表 1.　各作品にみられる空間形態の特徴

		清家清「私の家」	東孝光「塔の家」	高橋公子「管の家」
空間形態	内部空間の覆われ方	分節された壁、屋根に囲われる	敷地の垂直ボリュームをコンクリートで覆う	鳥かごにふんわりと亜鉛を被せる
	囲まれる様態	内外の連続、内部のはみ出し	外皮の切削、切欠きで外部へ抜ける	柔らかくふんわりと覆わる
	内部空間の状態	空間の一体化と開口部による外部への融合	ついたて代わりのスラブが上下をゆるやかに区切る連鎖	管の列のリズム感と連続が流れをつくる
	内部空間の性質	均質で開放的な空間が、外部との同化を促す空間になっている	差異のある連鎖の層構成が序列ではなく特色ある空間になっている	柔らかな外皮が内外の差をつくらずに、おおな空間になっている
	空間構成	分割構成、一体化	重層連結構成、一体化（連続）	内包構成、貫入（による結）
	空間の効果	内部空間の外部への伸延と融合	空間の流れとよどみ	連続と速度感（時間）離感

三つの作品の空間構成が、それぞれ異なることがわかる。

清家清「私の家」は「分割構成」

東孝光「塔の家」は「連結構成」

高橋公子「管の家」は「内包構成」

である。

架構形態を、造形原理・架構・秩序・性質・効果に分類した（表2）。

表2.　各作品にみられる架構形態の特徴

		清家清「私の家」	東孝光「塔の家」	高橋公子「管の家」
架構形態	造形原理	分割構成、構造と空間の一体性 -ＲＣ造の側壁とハブマイヤートラスで支える長大屋根スラブ	一層一室の重層連結構成 -敷地を垂直に柱状体化したＲＣ壁とその切削	細ラーメン膜構造の内包構成 -60.5φのスチールパイプを鳥かご状に編込み亜鉛板で覆う
	架構	ＲＣ造+ハブマイヤートラス	ＲＣ壁式構造	II型鋼ラーメン・ブレース構造+60.5φかご状+ＣＢ造
	秩序	比例	3：4：5の三角形の切削	ＧＭモジュール
	性質	分解された壁と屋根	彫刻的	反復と連続
	効果	内外が入り混じる	象徴性	リズミカルな距離感

仕上素材を外壁・屋根・内部床・内壁・天井に分けて整理した（表3）。

表3.　各作品にみられる仕上素材の特徴

		清家清「私の家」	東孝光「塔の家」	高橋公子「管の家」
素材構成	外壁	コンクリート打放し	コンクリート打放し	亜鉛板t=0.4張り
	屋根	コンクリートスラブにアルミ瓦棒葺き	同上	亜鉛板t=0.4葺き
	内部床	鉄平石張り	同上	ビニール系フロアシート張り
	内壁	コンクリート打放し	同上	ＣＢ及び合板あらわし
	天井	コンクリート打放し	同上	合板あらわし

2.1.4　設計意図・住まい方の特徴・経過・各自の証言

著作から、設計意図・住まい方の特徴・建築居住の経過・各自の検証を取り出した（表 4）。
塔の家の建築居住の経過については、大きな変化がないため、建設までの経緯を記した。

表 4-1　設計意図

	「私の家」白書　1) 清家清	「塔の家」白書　2) 東孝光+節子+利恵	時間の中の住まい　3) 日本女子大学高橋研究室の会
設計意図	建築家が自宅を建てる目的のなかには、･･･、他人さまの住宅を設計するときにはできない**冒険や実験をやってみたい･･･**。この家は便所にも扉がない･･･、私の哲学がある。p. 56 単に容器としての建物、･･･、ソフトウェアとしての**家族や社会環境のようなモノでないものを含んでいるコンセプト**であるからだ。　p. 50 建物を**戸外と有機的に結びつけ**、生活を大気の中に溶け込まして、狭小住宅の解決を計っている。p. 34 **ホモジニアスな空間は広く感じ**、ゴタゴタと分節した空間は狭く感じる･･･。 「私の家」も多分に漏れず平坦にできている。　P. 58 わが家も、**黄金分割**になっています。p. 108	クライアントにとっての大事業に自己の模索を便乗させる罪を重ね･･･、･･･**自分のすまいについては一言あってしかるべき**　p. 24 この家が”実験的な住宅”と呼ばれている、しかし、当人たちにとっては、決して**実験などではない**。p. 36 **生活者としての本能に信頼を置き、それに忠実であろう**と割り切った時に、私の内部で何かが吹っ切れた。p. 136 住宅設計とは、私にとって、如何に苦しくともつくることが同時にその基盤をも**深く耕し、掘り起こす作業**でなければならない。p. 137 都市の真只中に住みたいという私の姿勢が、このすまいの**空間の量と質を決定**的にした。p. 28	家族と住宅の緊密な関係を解除する操作。細い鉄骨の架構に覆われたおおらかな空間は、家族という**人間関係とその時間の変化をルーズに包み込む装置**。p. 32 鉄骨は、裸のときが美しく、それぞれ骨をあらわにしたくなる。骨の建築は**外と内とがあいまいで**内にいるときは外を想い、外皮はふわりと浴衣の･･･。p. 40 **「鳥カゴ構造」**は「住み手が自分になじんだ生活を自らの手でつくっていくための**おおらかな空間**」を実現するための構造形式である。p. 42 高橋にとって、建築空間を決定するのは構造としての架構であり、それはすなわちインテリア　p. 65 いかに**混じり合い**、いかに**分節**されるか･･･。p. 80

表４２　住まい方の特徴、居住経過

	「私の家」白書　1) 清家清	「塔の家」白書　2) 東孝光+節子+利恵	時間の中の住まい　3) 日本女子大学高橋研究室の会
住まい方の特徴	寝室-居間-仕事部屋を区切るカーテンが唯一の間仕切、戸外を含めての**完全な一室住居**。年中行事や生活に合わせて**しつらえ**る。 移動タタミはもうひとつの部屋。p. 70 建築物は音楽と同じように動きがある。それは人と時間が動いているから。「舗設」という言葉も、時々刻々そのなかで変化がある。（中略）**時間のシークエンスの中で自由に空間をつくりかえて**いく。p. 101 自然と交流しながらしつらえをしていく･･･日本の住宅の演出･･･。p. 102 プランは二次元･･･、建物にしただけで三次元になるし、そこに**時間のシークエンスを入れると四次元になる**ものです。p. 106	**すべてのスペースを皆が利用**している。p. 37 小さく密度の高い室内では、人、物、空間すべて手のすぐ届く場所に共存し合う。･･･人は全てを掌握していると思い込む。（中略）手のすぐ届く其処に在るものは、自分で**管理出来る量と質**でよい。p. 44 街全体の環境の中で暮らしているので、室内空間の中に、すべてを求めるというわけではない。**ものや道具になるべく頼る度合いを少なく**して、むしろ身軽に生活的行動の方を調節している、･･･。p. 142 **快適さとは**、欲望の充足によって得られるものではなく、**欲望を野放しにせずしっかり抑え込んでコントロール**可能という状態から得られるもの。p. 143	自然との対話を大切にする姿勢があった。p. 94 玄関は親世帯、子世帯そしてアトリエに来る人々のための**共用空間**であり、･･･お互いの姿を確認したり、ちょっとした会話を交わす場所p. 82 家具を動かすなどの模様替えから、･･･軽工事まで、時に応じて**住まいに手を加え**て　p. 87 管の家という包容力ある大空間では、･･･アフォードする場が設えられ、それらは**使い手によって適宜可変可能**とされていたp. 100 高橋は、夫妻のみで私生活を完結させるのではなく、住まいを人々に積極的に開放した。**人と人、人と環境との繋がり**を考えるとき、高橋夫妻が「管＝パイプ」となっていた。p. 101
建築居住経過	1957年「私の家」 1962年　子ども用小屋 1964年　父の書庫 1970年「続・私の家」 1974年私の家:長女家族住 1978年書庫兼物置コンテナ 1985年　緩急車設置 1989年「倅の家」 1991年私の家:二女家族住	1956年　門屋での仮住まい 1957年春　麻布のアパート 1957年秋　大阪市アパート 1958年春　加古川の田舎家 1959年春　枚方市香里団地 1960年秋　中宮団地 1962年　池田駅前一戸建て 1963年　神宮前二丁目小さな家	1983年　「管の家」phase1 高齢者世帯との暮らし 1987年鷹志の書斎を父親寝室へ移す。居間拡大 1988年　「管の家」phase2 ひとが集まる住まい 寝室と鷹志書斎入れ替 1997年　「管の家」phase3 単身住まいへの転用

表４３　本人及び家族の証言

	「私の家」白書　1) 清家清	「塔の家」白書　2) 東孝光+節子+利恵	時間の中の住まい　3) 日本女子大学高橋研究室の会
本人及び家族の証言	もともとこの家は靴のまま入ろうと計画し、･･･子供達にはたいへん評判がよかったのだが、**掃除をする側から抗議**がでた。p. 42 この家の最大の実験はどのくらい扉なしで･･･。これは**家人に関する限り成功**している。pp. 43. 44 家相書には乾（北西）に蔵、巽（南東）に門を設けるのは吉相ということで、乾には貨車･･･。巽にはステイションワゴン･･･。なぜか孫六人全員男の子に恵まれて、**「私の家」住居群を十分に利用**･･･。p. 62 篤:人間というものは物理的な壁がないと、心の中に壁をつくるそうです。**まったく間仕切りがない家･･･、無条件で賛成できませんね。**　清：子どもたちは基本的人権の侵害だというわけです。p. 156 「私の家」と名づけて発表した住まいであるが、当然のことながら実際は「**私たちの家**」であった。p. 235	狭さを感じにくい理由のもう一つに、ドアがないことがある。**･･･分断されずにひとつにまとまる**のだ。p. 37 一層が一室で、縦方向に積み上げられているので、**ドアがなくとも視線は断たれ**、･･･　pp. 37. 38 この塔の家は、実は、石造りの西洋の住宅よりもずっと、日本の木造住宅に似ている･･･。p. 38 南に面した台所の、窓ガラス一枚の外は、東京の真只中、外苑、青山･･･。**調理する私と、我が街は、直かに繋がる**。p. 49 玄関以外は扉がない。･･･扉をノックすることができない。でも、階段の上り下りの**足音が**するから、それが、**ノックのかわり**となる。p. 80 **自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし**、建築、空間、人、その共存が、･･･、同じ香りの媒体、共有者、構成素材としての、･･･責任を果たしたいと望んでいる。p. 100	母親の発病とその原因が住宅にあるという高橋の分析は、生活が日々刻まれるものであり、年を重ねた高齢者･･･、**住まいとのかかわりも深い**･･･。p. 86 管の家は書籍をはじめ全体的に非常にモノが多く、･･･ちらかっているようには見えない。その理由は、住宅自体の構造体をはじめ空間を構成する実に多くの部材が隠されないで露わになっているため･･･天井の高い大空間がもつ包容力によるもの･･･。**空間の迫力のほうが勝っている**･･･。pp. 107. 108 日常的な動線の中に家事空間を配置し、男女を問わずに家事を生活の一部としてできるかたちになっている。「日常性と家事の自立」･･･、**住居とはすなわち人との日常生活を包む器**なのだ。p. 110 構造体を中に入れない大きなワンルーム形式をとるため、管の家は**用途転用を実に円滑に行う**ことができた。p. 114

2.1.5　第一段階の分析から

空間形態の項目で観察されるのは以下のことである。
清家は分節した要素の均質化と同一化により内外の融合を、東は衝立による重層とらせんにより差異と連鎖を、高橋は内包と反復によりおおらかさをデザインしている。
架構形態の項目で観察されるのは以下のことである。清家は構成要素の分節と分解により内外入り混じりを、東はＲＣ壁の切削により彫刻的な象徴性を、高橋は鳥かごの管の連続により距離感をデザインしている。
仕上素材の項目で観察されるのは以下のことである。清家は床を大地（岩・石）としてその他をコンクリート打放しに、東は全てをコンクリート打放し仕上に統一し、高橋は外部を仕上、内部はその下地のあらわしとしている。いずれも、仕上げを排除することで脆弱な表層イメージを取り除き、建築そのものの力感を高めている。
設計意図の項目で観察されるのは以下のことである。清家は建物を戸外と有機的に結び、東は都市に住む生活者としての本能に忠実に描き、高橋は住まいを時間に対してルーズに包み込むようにしている。
住まい方の特徴の項目で観察されるのは以下のことである。清家は時間のシークエンスの中で自由に空間をつくりかえ、東は「快適さは欲望の充足からではなく欲望の制御から」だと考え、高橋は住まいを人々に積極的に開放した。いずれも住宅内にドアがなく空間の機能特化を排除し、設えや住まい方の工夫で変化に対応している。
各自の検証では、清家は係達にも住居群が順調に適応していることを、東は自然に生じた空間として建築と空間と人が共存していることを、高橋は劇的な住み手の変化に対し用途転用が円滑に行われたことを証言している。

取り上げた三つの住宅を分析した結果みられるものは、設計意図と形態的特徴が明確に結びついていることである。清家は建物内外の有機的融合、東は自然発生的連鎖空間、高橋はおおらかな包容空間を実現している。その結果、住宅に呼応するように住まわれ方が展開され、環境移行に適応しながら構築されている。これらの住宅は四次元のシークエンスな時空間として、人と建築は共に時を刻み出来事を重ね、相互に作用しあいながら構築されてきたといえる。このことは、住宅は人に何かを刻印し規定するのではなく、人間の生活の可能性を含意し展開する空間になりうることを示している。

2.2　昭和初期から現代に至る住宅作品の空間構成

空間構成の歴史的経過と、その発展形態が確認できる住宅作品を選定し、空間構成原理、外部空間と内部空間の関係、個室と共用室の関係を分析し、空間構成原理ごとに分類整理する。それらの関係を図式化し、チャート化する。

空間構成原理は、

分割構成を、一つの空間がより小さい空間に分割されている。

連結構成を、複数の単一空間が連結されている。

内包構成を、大きな空間に複数の機能空間が内包されている。

と定めた。

空間の分割：土浦邸 1935、谷口邸 1935、若狭邸 1939、前川邸 1941、レーモンド自邸 1951、増沢邸 1952、私の家 1954、OTA HOUSE MUSEAM 2004

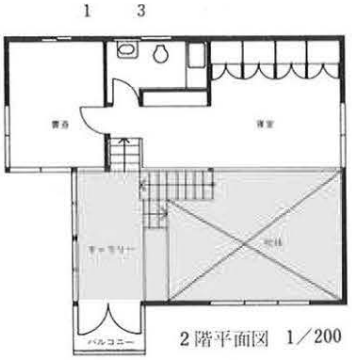
空間の連結：山邑邸 1924、聴竹居 1927、岡田邸 1934、笠間邸 1938、吉村邸 1958、塔の家 1966、中野本町の家 1976、SPRINGTECTURE びわ 2002

空間の内包：石津邸 1957、スカイハウス 1958、河合健二邸 1960、から傘の家 1962、箱の家 1983、シルバーハット 1984、PLATFORM1 1988、屋根の家 2001

空間構成分布図、空間配列と共用空間の相関分布図、空間配列と延床面積の相関分布図、共用空間と延床面積の相関分布図を作成し分析する[1]。

土浦邸 1935

地階平面図　　1階平面図



2階平面図　1／200

図 3.1-1
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 .P.82,1976.11

1　南側外観　脚は鉄骨
2　玄関
3　ギャラリーよりみる
4　居間をみおろす
5　寝室
6　居間とギャラリー
7　地階の浴室
8　食堂

図 3.1-1　平面図

写真 3.1-1　南側外観写真

写真 3.1-2　居間とギャラリー

写真 3.1-1 ~ 3.1.3
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 ,PP.82,83,1976.11

写真 3.1-3　玄関

設計　土浦亀城

所在地　東京都目黒区長者丸

構造規模　木造　地上1階　一部地下　延床面積 116.2 ㎡

1. 空間構成原理：分割構成 4、部分的内包構成 2、層連結構成 1
2. 空間相互の関係：連続　融合（食堂 - 居間）4
3. 内外空間の関係：テラス出入口と吹抜高窓による接続 3
4. 共用室の扱い及び配置：共用空間が大半を占める、南面配置 3
5. 個室と共用室の関係：吹抜を介して連続 4
6. 移行空間：スキップフロアギャラリー、共用空間兼用

谷口邸 1935

図 3.1 2
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 P.92.1976.11

図 3.1-2　平面図

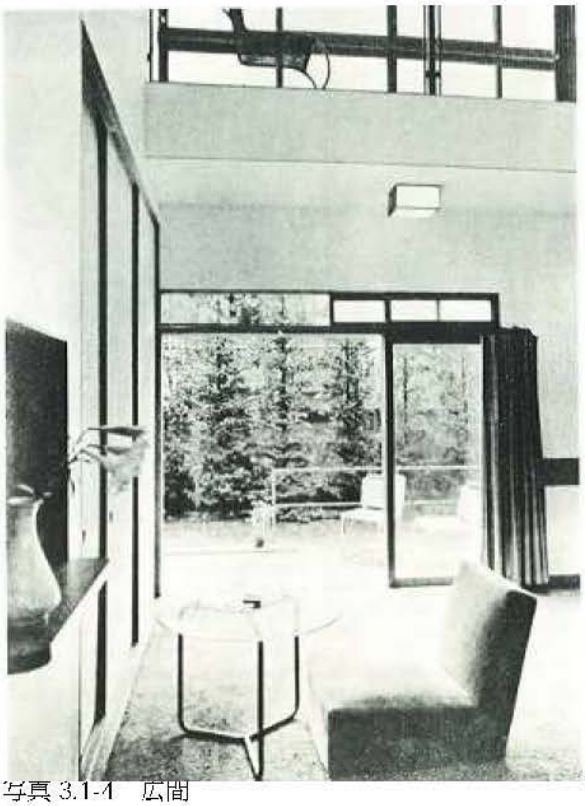


写真 3.1-4　広間

写真 3.1 5　2階書斎

写真 3.1 6　日本間

写真 3.1 4 ～ 3.1 7
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 PP.92.93,1976.11

設計　谷口吉郎

所在地　東京都目黒区小山

構造規模　木造　地上2階　延床面積 126 ㎡

写真 3.1-7　東側外

1. 空間構成原理：分割構成 4、部分的内包構成 1

2. 空間相互の関係：連結　吹抜を介した空間の連続 4

3. 内外空間の関係：テラスを通して接続　吹抜高窓から日差し 3

4. 共用室の扱い及び配置：中心的吹抜ホール　起点　南面配置 4

5. 個室と共用室の関係：吹抜を介して連続、寝室は分離 4

6. 移行空間：渡り廊下、共用空間兼用

若狭邸 1939

図 3.1-3　平面図

写真 3.1-8　居間

写真 3.1-9　居間からテラス

図 3.1-3
吉田正：新建築新時代住宅
居住性研究，
新建築社，P.88-176.11

写真 3.1-10　南東外観

写真 3.1-8～3.1-10
横山正：新建築新時代住宅
居住性研究，
新建築社 P.88-97.1976.

設計　坪井善勝

所在地　東京都江東区

建造規模　木造・鉄筋コンクリート造　地上2階　地下1階　延床面積256㎡

1. 空間構成原理：分割構成5、部分的内包構成1

2. 空間相互の関係：連続3

3. 内外空間の関係：庭との呼応3

4. 大開口の扱い及び配置：十分、明確の要、南面配置4

5. 個室と共用室の関係：隣接（大人室）、緩衝部を挟んで接続2

6. 移行空間：大開口（採光）、階段

Raymond House & Studio in Azabu 1951

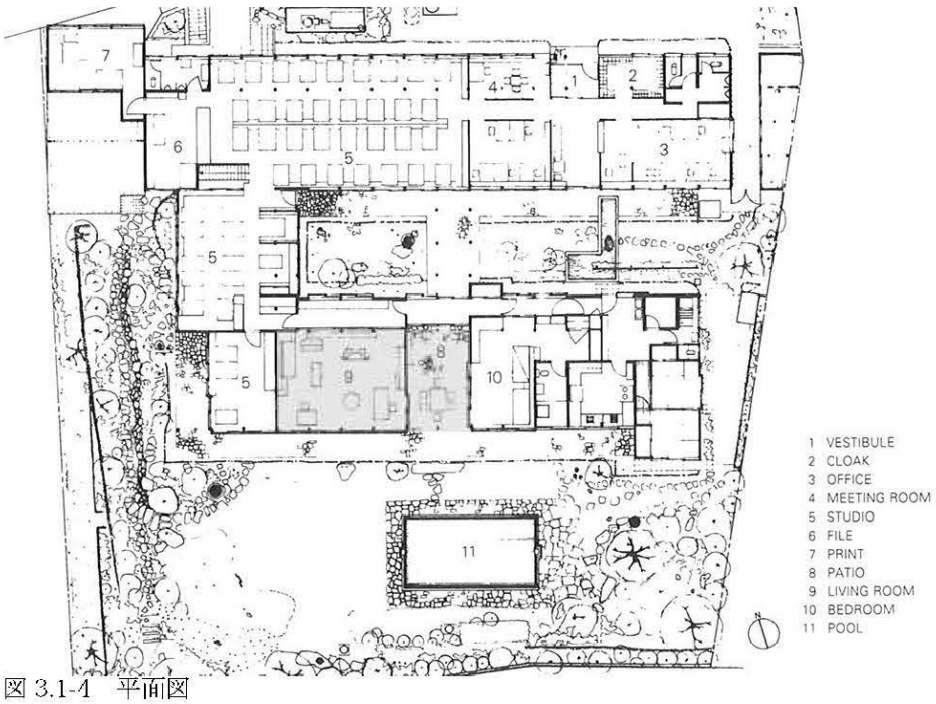


図 3.1-4　平面図

図 3.1 4
JA 33 ANTONIN RAYMOND
アントニン・レ モンド,
新建築社 ,P.30,1999.4

写真 3.1-11　南側外観

写 真 3.1 12　パ

写真 3.1-13　寝室

写真 3.1-11 ～ 3.1-13
JA 33 ANTONIN RAYMOND
アントニン・レ モンド,
新建築社 ,P.31,1999.4

設計　アントニン・レイモンド

所在地　東京都港区（現存せず）

構造規模　木造　地上 1 階　一部地下

1. 空間構成原理：連結的分割構成 5、連結的 2、東西軸、片（北）側廊下

2. 空間相互の関係：連結 3

3. 内外空間の関係：南面全面開放やパティオによる内外融合 4

4. 共用室の扱い及び配置：パティオが居間と寝室を繋ぐ、南面配置 3

5. 個室と共用室の関係：パティオを通じて連続 4

6. 移行空間：パティオ、北側廊下

SH-1　1953

図 3.1 5　平 面

図 3.1 5
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 P.133,1976.11

写真 3.1-14　東側外観

写真 3.1 15　居間

写真 3.1 16　南東部分

写真 3.1 14 ～ 3.1 16
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 PP.132.133.1976.11

設計　広瀬鎌二

所在地　神奈川県鎌倉市

構造規模　鉄骨造平家建て　延床面積 47.01 ㎡

1. 空間構成原理：内包的分割構成 4、内包的 3、 ワンルーム

2. 空間相互の関係：一体化 5

3. 内外空間の関係：南面開放、内外融合 5

4. 共用室の扱い及び配置：渾然 一体 5

5. 個室と共用室の関係： 一体化、家具によるレイアウト 5

6. 移行空間：一体化

月下邸 1953

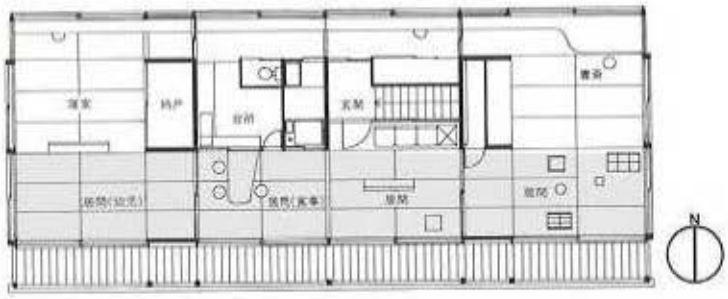


図3.1-6
吉田正：新建築新時代住宅
居住研究，
新建築社，P.35，976.11

図3.1-6　平面図　　2階平面図　1／200

写真3.1.17　南側外観

写真3.1.18　居間

写真3.1.19　北側外観

写真3.1.20　玄関

写真3.1.17～3.1.20
横山正：新建築新時代住宅
居住研究，
新建築社，P.36，123.1976.

設計　月下俊一

所在地　東京都世田谷区成城

建築規模　本造2階建て　延床面積140㎡

1. 空間構成原理：可変内的分割構成5、内外第2、無限定的
2. 空間相互の関係：コアを中心に均質な空間がとりまく4
3. 内外空間の関係：ピロティにより持ち上げられ全周開放4
4. 共用室の扱い及び配置：建具による分割と一体化、両面配置3
5. 個室と共用室の関係：住み分け5
6. 移行空間：コア北側及び北側廊下

私の家 1954

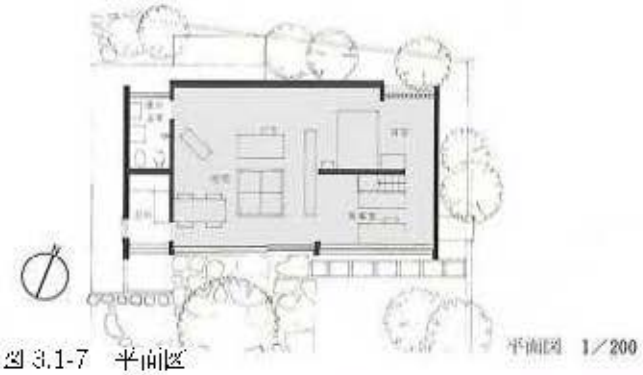


図3.1-7　平面図

図3.1-7
吉田正：新建築新時代住宅
住宅研究，
新建築社，P.38，976.11

写真3.1-21　庭よりみる

写真3.1-22　室内

写真3.1-23　東側外観

写真3.1-21～3.1-23
横山正：新建築新時代住宅
住宅研究，
新建築社 PP. 38,139,1976.

設計　清家清

所在地　東京都大田区雪ヶ谷

建造規模　鉄筋コンクリート造地上1階地下2階　延床面積70㎡

1. 空間構成原理：内的分割構成5、内的3
2. 空間相互の関係：連続、一体化、ワンルーム5
3. 内外空間の関係：内外両全　内外を通じて生活空間5
4. 収納室の扱い及び配置：キッチン、ワンルーム、壁面配置5
5. 個室と共用室の関係：一体化、住み分け5
6. 移行空間：収納空間兼用

OTA HOUSE MUSIUM 2004

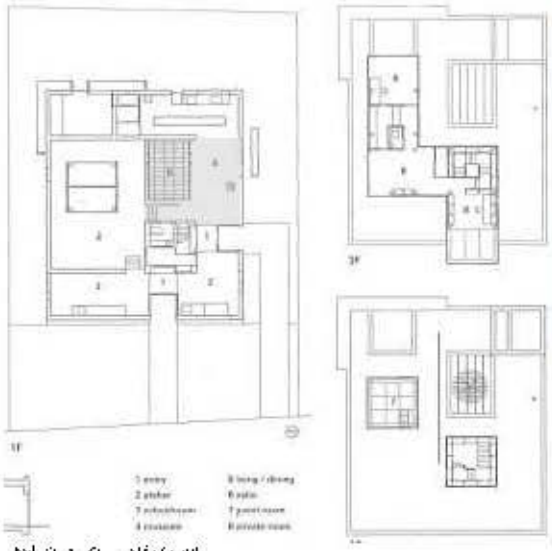


図 3.1-8　平面図

写真 3.1-24　2階平面

写真 3.1-25　階段

写真 3.1-26　階段室

写真 3.1-27　共用廊下

図 3.1-8
白井晟一の建築，
丸木俊現代美術館 1985-2005，
TOTO 出版，P.395,2005.12

図 3.1-26～3.1-28
白井晟一の建築，
丸木俊現代美術館 1985-2005，
TOTO 出版，P.395,2005.12

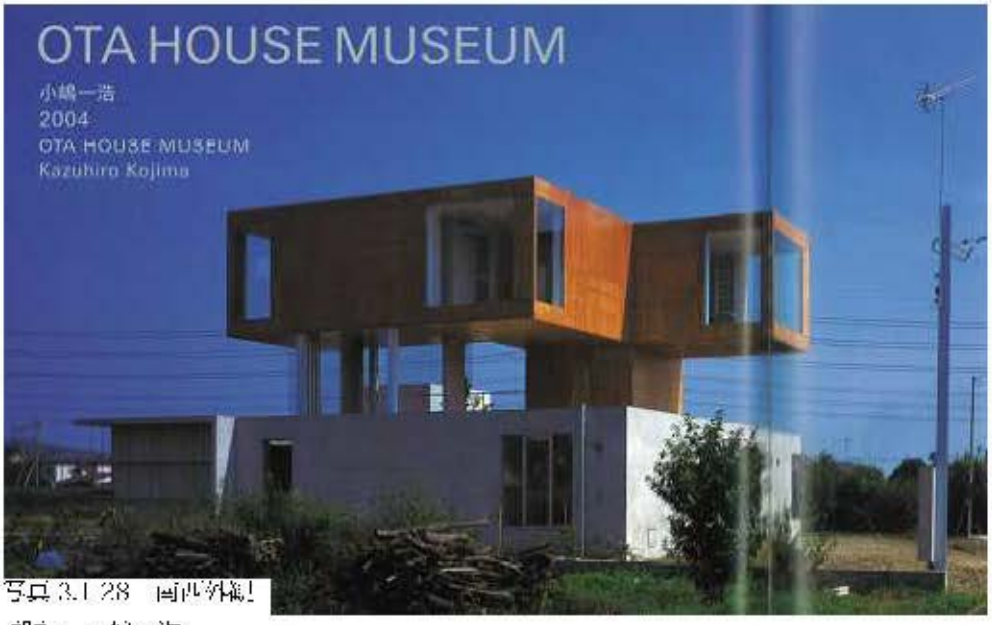


写真 3.1-28　西面外観

図 3.1-28
白井晟一の建築，
丸木俊現代美術館 1985-2005，
TOTO 出版，
PP.395,398,2005.12

設計　小嶋一浩

所在地　群馬県太田市高山町

構造規模　鉄筋コンクリート造－鉄骨造　地上3階建て　延床面積 219.00 ㎡

1. 空間構成原理：分割構成 4　二次操作・分離とズレによる神殿構成 3

2. 空間相互の関係：連続的 3

3. 内外空間の関係：屋上及び空間にて外部と接続 2

4. 共用室の扱い及び配置：美術館と住宅の接続的役割、南北配置 3

5. 個室と共用室の関係：壁による分節 1

6. 移行空間：共用・個室空間接続 1

山邑邸 1924

図 3.1-9
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，P.41.1976.11

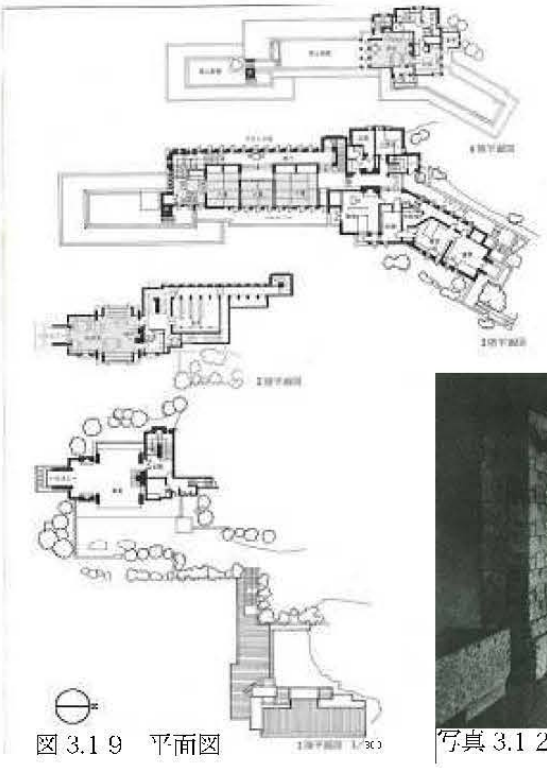


図 3.1 9　平面図

写真 3.1 29　車寄せ

写真 3.1-30　東側外観

写真 3.1 31　応接室

写真 3.1 29 ～ 3.1 31
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，PP.40-42,1976.11

設計　フランク・ロイド・ライト　遠藤新

所在地　兵庫県芦屋

構造規模　鉄筋コンクリート造地上４階建て　延床面積 660 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成 5、部分的段階：分割構成 2

南北軸、片側（西）廊下、4 層、地形との応答

2. 空間相互の関係：連続、見通し 3

3. 内外空間の関係：外部空間の取り込み 3

4. 共用室の扱い及び配置：寄付き待合 - 待合 - 茶室のような構成 3

5. 個室と共用室の関係：分離、接続 1

6. 移行空間：茶室の露地のような空間

聴竹居 1927

図 3.1-10
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 P.47,1976.11

写真 3.1 22　縁

写真 3.1-33　居間北面

図 3.1 10　平面

写真 3.1 34　南側外観

写真 3.1 32 ～ 3.1 34
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 PP.46-47,1976.11

設計　藤井厚二

所在地　京都・大山崎

構造規模　木造平家建て　延床面積 173 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成 5、二次的段階：内包構成 2、部分的段階：分割構成 2
　　南北軸、中廊下
2. 空間相互の関係：居間（ホール）を中心に連結、見通し、数寄屋的構成 3
3. 内外空間の関係：縁側を介して接続、各部屋は直接接続 3
4. 共用室の扱い及び配置：中心的ホール、各部屋への起点 4
5. 個室と共用室の関係：中廊下を介して接続 2
6. 移行空間：共用室兼用、中廊下

岡田邸 1934

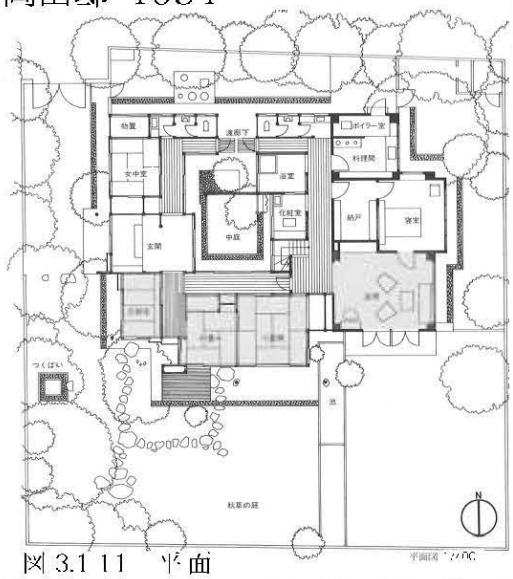


図 3.1 11　平面

写真 3.1-35　居

図 3.1-11
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，P.66,1976.11

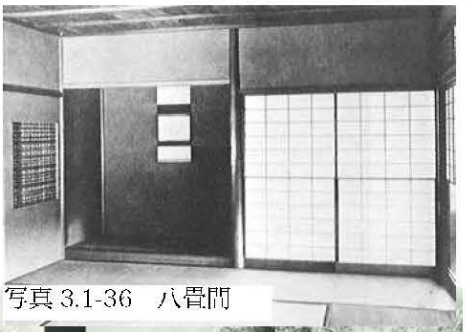


写真 3.1-36　八畳間

写真 3.1 37　八畳間と

写真 3.1 35 ～ 3.1 37
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，PP.65 67,1976.11

設計　堀口捨己

所在地　東京・大森

構造規模　木造＋鉄筋コンクリート 2 階建て　延床面積　不明

1. 空間構成原理：連結構成 5、中心 - 周縁系、部分的段階：分割構成 1

2. 空間相互の関係：数寄屋的連結構成 3

3. 内外空間の関係：全ての部屋が庭に接続続 3

4. 共用室の扱い及び配置：南面一面に用途に応じて配置 3

5. 個室と共用室の関係：隣接 4

6. 移行空間：共用室兼用、中庭に面した廊下

笠間邸 1938

写真 3.1-38 縁側

図 3.1-12
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，P.115,1976.11

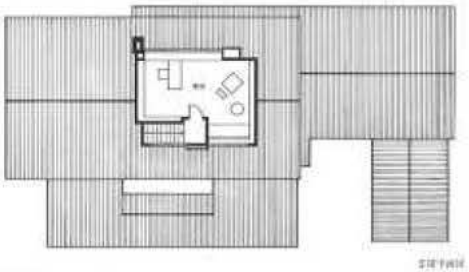


図 3.1-12 平面図

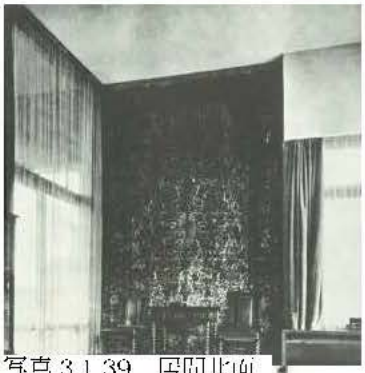


写真 3.1-39　居間北面

写真 3.1-40　南側外観

写真 3.1-38～3.1-40
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，PP.114,115,1976.11

設計　前川国男

所在地　東京・目黒区

構造規模　木造２階建て　延床面積 250 ㎡

1. 空間構成系列：連結構成 5、東西軸、部分的段階：内包構成 1
2. 空間相互の関係：連結、機能特化、西欧的 3
3. 内外空間の関係：テラスをして接続 2
4. 共用室の扱い及び配置：居間＋食堂のワンルーム独立型、南東角配置 1
5. 個室と共用室の関係：廊下を介して接続 2
6. 移行空間：共用室兼用、中廊下

吉村邸 1958

図 3.1-13　平面

写真 3.1-41 縁側

写真 3.1 42　居間北面

図 3.1 13
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史．
新建築社 P.145,1976.11

写真 3.1-43　南側外観

写真 3.1 41 ~ 3.1 43
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史．
新建築社 PP.144.145,1976.11

設計　吉村順三

所在地　東京・中野区

構造規模　木造２階建て　延床面積 178 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成 5、東西軸、部分的段階：分割構成 2

2. 空間相互の関係：連続 3

3. 内外空間の関係：南面開放、池を取り込む 3

4. 共用室の扱い及び配置：中心的空間、南北貫通 4

5. 個室と共用室の関係：分離接続 2

6. 移行空間：共用室兼用、２階中廊下

塔の家 1966

写真 3.1-44　南西側外

写真 3.1 45　居間と階

写真 3.1 46　中 3 階踊

写真 3.1-47　階段詳細

図 3.1 14　平面

図 3.1-14
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 P.191,1976.11

写真 3.1 44 ～ 3.1 47
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社,PP.190.191,1976.11

設計　東孝光

所在地　東京・青山

構造規模　鉄筋コンクリート造地下 1 階地上 5 階建て　延床面積 65.0 ㎡

1. 空間構成原理：重層連結構成 5、二次的段階：重層一体化による内包構成 3、
　　部分的段階：分割構成 1

2. 空間相互の関係：連続的 3

3. 内外空間の関係：都市風景や日照の取り込む 3

4. 共用室の扱い及び配置：中心的空間、上下貫通 1

5. 個室と共用室の関係：連続、時間的住み分け 4

6. 移行空間：階段、共用室兼用

中野本町の家 1976

図3.1-15 平面

写真3.1-48 玄関より

図3.1-15
参考文献：新建築住宅特集
『伊東豊雄』
新建築社，P.207，1976.11

写真3.1-49 玄関

写真3.1-50 中庭と風

写真3.1-48～3.1-50
撮影者：新建築住宅特集
『伊東豊雄』
新建築社 P.203,207,1976.

設計　伊東豊雄

所在地　東京・中野区本町

建造規模　鉄筋コンクリート造地上1階建て　延床面積146.2㎡

1. 空間構成原理：壁による神殿構成 5

2. 空間相互の関係：連続的 3

3. 内外空間の関係：閉じられた庭 1

4. 太陽光の扱い及び配置：環として諸室を囲む 3

5. 個室と共用室の関係：環で接続 2

6. 移行空間：太陽光採用

SPRINGTECTURE びわ 2002

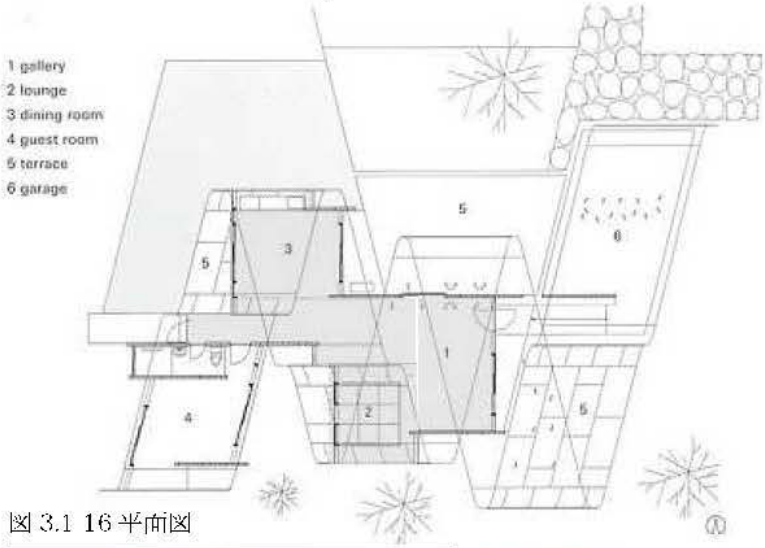


図 3.1 16 平面図

図 3.1 16
石堂威・小巻哲：
日本の現代住宅 1985 2005.
TOTO 出版 ,P.357,2005.12

写真 3.1 51　ギャラ

写真 3.1 52　西側外観

写真 3.1 51 ～ 3.1 52
石堂威・小巻哲：
日本の現代住宅 1985-2005,
TOTO 出版 ,P.356,357,2005.12

設計　遠藤秀平

所在地　滋賀県長浜市びわ町

構造規模　鉄骨造　平家建て　延床面積 173.14 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成 5、　二次操作：ねじれと交差による内包構成 3

2. 空間相互の関係：連鎖的 3

3. 内外空間の関係：内外反転による連続 4

4. 共用室の扱い及び配置：中心的接続 3

5. 個室と共用室の関係：連続 4

6. 移行空間：共用空間兼用

前川邸 1941

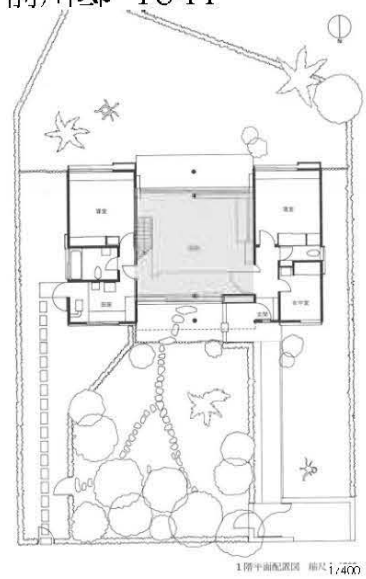


図 3.1-17 平面図

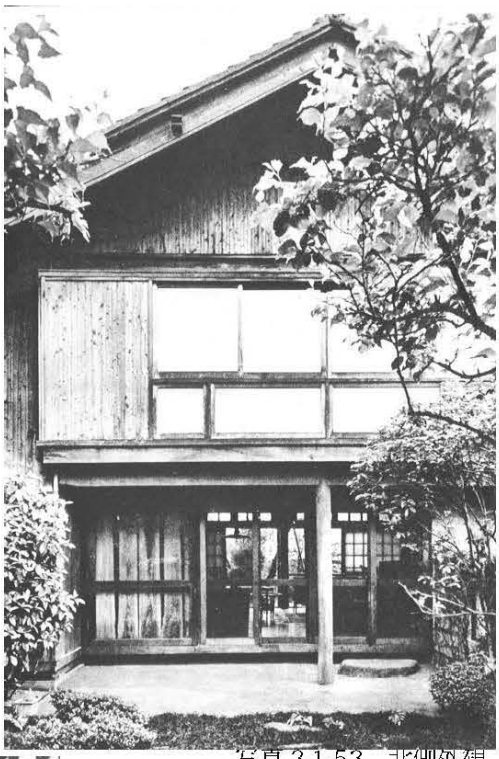


写真 3.1-53　北側外観

図 3.1 17
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，P.117,1976.11

写真 3.1-54　居間吹抜部分

写真 3.1-55　居間北面

写真 3.1-53 ～ 3.1-55
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，PP.116.117,1976.11

設計　前川国男

所在地　東京・品川区

構造規模　木造２階建て　延床面積 108 ㎡

1. 空間構成原理：分割的内包構成 5、分割的 4

2. 空間相互の関係：共用室は居間吹抜空間に内包、その他は接続 5

3. 内外空間の関係：南面、北面の大開口による接続 2

4. 共用室の扱い及び配置：中心的大空間、南北貫通 4

5. 個室と共用室の関係：前室を介して接続 2

6. 移行空間：共用室兼用、前室

増沢邸 1951

2階平面図

1階平面図 1／200

図 3.1-18 平面図

写真 3.1-56　北側外観

図 3.1-18
増沢正：新建築増刊住宅
居住性研究，
新建築社，P.28，976.11

写真 3.1-58　居間北面

写真 3.1-57　居間吹抜部分

写真 3.1-56～3.1-57
横山正：新建築増刊住宅
居住性研究，
新建築社 PP. 32,163,1976.

設計　増沢洵

所在地　東京・渋谷区大山

建築規模　木造2階建て　延床面積 49.5 ㎡

1. 空間構成原理：内向構成 5、二次的段階：分割構成 3

2. 空間相互の関係：連合 5

3. 内外空間の関係：南面，大きな建具で南側外部に接続 3

4. 共用室の扱い及び配置：キッチン　居間，食堂　台所、浴室三要素 4

5. 個室と共用室の関係：隣接 4

6. 移行空間：共用部採用

石津邸 1957

図 3.1-19　平面

写真 3.1-59 居間から子供室

図 3.1 19
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社 P.159.1976.11

写真 3.1-60　居間を見下ろ

写真 3.1 61 南側外観

写真 3.1 59 ～ 3.1 61
横山正：新建築臨時増刊
昭和住宅史，
新建築社，PP.158.159,1976.11

設計　池辺陽

所在地　東京・新宿区四谷

構造規模　鉄筋コンクリート造２階建て　延床面積 66.9 ㎡

1. 空間構成原理：内包構成 5、二次的段階：連結構成 3

2. 空間相互の関係：内包的融合、子供室は接続 4

3. 内外空間の関係：南・北面、天井までの開口で内外接続 3

4. 共用室の扱い及び配置：中心的　南北貫通 4

5. 個室と共用室の関係：隣接、子供室は分棟的接続 3

6. 移行空間：共用室兼用

スカイハウス 1958

2階平面図　縮尺1／200

図3.1-20 平面図

写真3.1-62 居間

図3.1-20
宮内正：新建築新時代住宅
居住空間，
新建築社，P.83.976.11

写真3.1-63 食堂と台所

写真3.1-64　住宅外観

写真3.1-62～3.1-64
横山正：新建築新時代住宅
居住空間，
新建築社 PP. 68.179.1976.

設計　剣持清則

所在地　東京・文京区音羽

建造規模　鉄筋コンクリート造2階建て　延床面積98㎡

1. 空間構成原理：持ち上げられた床による内包構成 5
2. 空間相互の関係：内包的融合、等質化 5
3. 内外空間の関係：4面開口、空間連続 1
4. 居間室の扱い及び配置：中心的　一体化、住み分け 5
5. 個室と共用室の関係：　一体化、住み分け 5
6. 移行空間：一体化

笹の家　1983

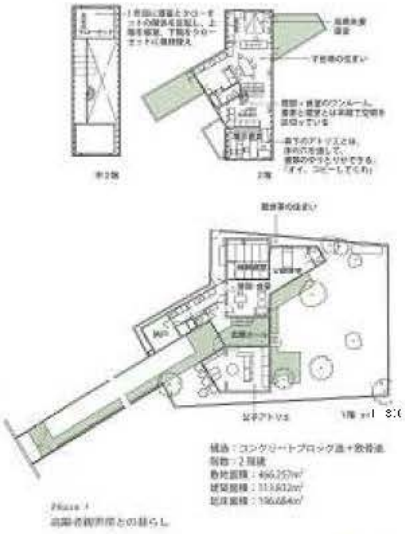


図 3.1-22　平面

写真 3.1-67　2 階内観　竣工時

図 3.1-22
日本女子大学高橋研究室の会：
時間の中の住まい
高橋公子と五つの住まいの現在，
彰国社 P.74.2003.7

写真 3.1-68　2 階内観　2003 年

写真 3.1-69　2 階内観　2003 年

写真 3.1-67 3.1-69
日本女子大学高橋研究室の会：
時間の中の住まい
高橋公子と五つの住まいの現在，
彰国社 P.巻頭 2003.7

設計　高橋公子

所在地　東京都世田谷区

構造規模　コンクリートブロック造　鉄骨造　地上２階建て　延床面積 196.68 ㎡

1. 空間構成原理：内包構成 5、二次的操作貫入による連結構成 3

2. 空間相互の関係：内包的一体と接続 3

3. 内外空間の関係：天窓等による接続、柔らかく閉じる 2

4. 共用室の扱い及び配置：中心的・内包 3

5. 個室と共用室の関係：接続 3

6. 移行空間：共用空間兼用

シルバーハット　1984

図 3.1-21 平面図

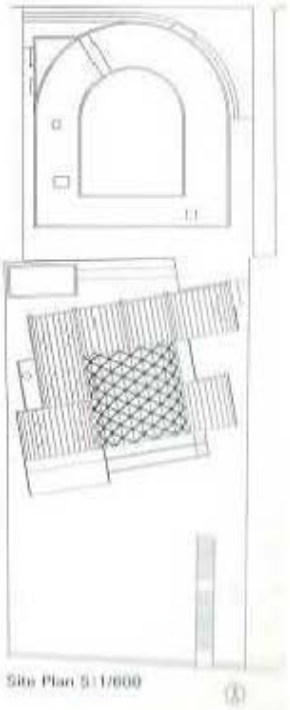


図 3.1-21
石井敏・小巻哲：
「日本の現代住宅 1985-2005」，
TOTO 出版，2007.12

写真 3.1-65 コートから居間を見る

写真 3.1-66　玄関からダイニング

写真 3.1-65～3.1-66
石井敏・小巻哲：
「日本の現代住宅 1985-2005」
TOTO 出版，PP.52-54，2006.12

設計　伊東豊雄

所在地　東京都中野区

構造規模　鉄筋コンクリート造，鉄骨造　地上 2 階建て　延床面積 138.81 ㎡

1. 空間構成原理：内包構成 5、二次的段階：連結構成 3

2. 空間相互の関係：内包的・一体と連続 3

3. 内外空間の関係：内外ともに内包 2

4. 共用室の扱い及び配置：中心的・内包 4

5. 個室と共用室の関係：分離接続 1

6. 移行空間：共用空間共用

PLATFORM1　1988

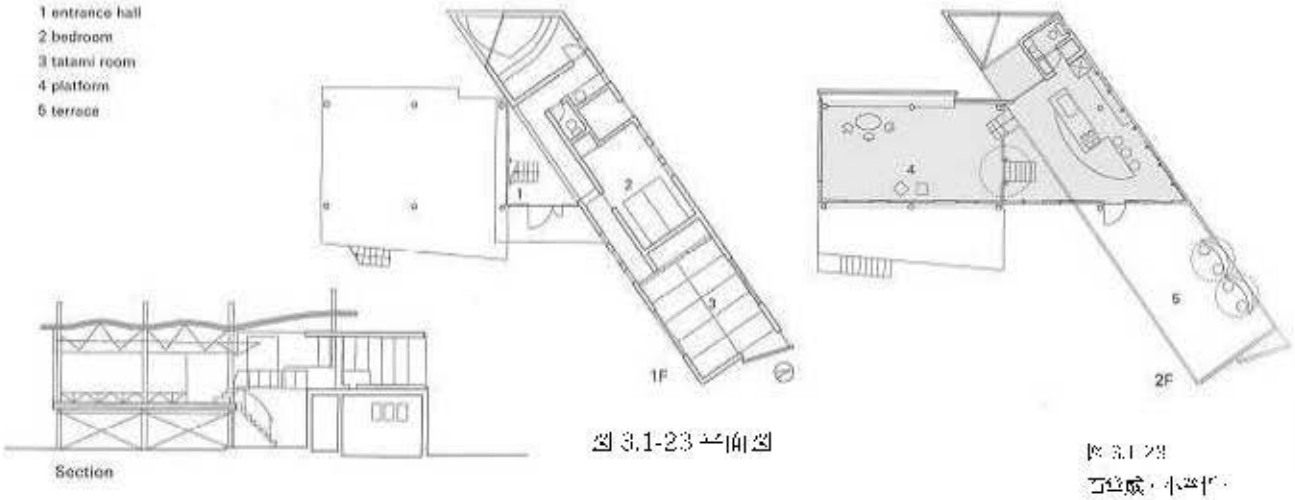


図 3.1-23 平面図

図 3.1-23
西澤威・小澤明：
日本の現代住宅 1985-2005，
TOTO 出版，P70-2005.12

写真 3.1-70　テラス内 3

写真 3.1-71　外観夜景

写真 3.1-70～3.1-71
西澤威・小澤明：
日本の現代住宅 1985-2005
TOTO 出版，P76-77-2005.12

設計　妹島和世

所在地　千葉県勝浦市

建築規模　鉄筋コンクリート造－鉄骨造　地上2階建て　延床面積 120.47 ㎡

1. 空間構成原理：内包構成 5　　二次操作・交差・貫入による神経構成 3.5

2. 空間相互の関係：内包と流通、接続 3

3. 内外空間の関係：壁と屋根の分節による内外接続 2

4. 共用空間の扱い及び配置：キコ字・内包 4

5. 個室と共用室の関係：壁による分節 1

6. 移行空間：共用空間兼用

屋根の家　2001

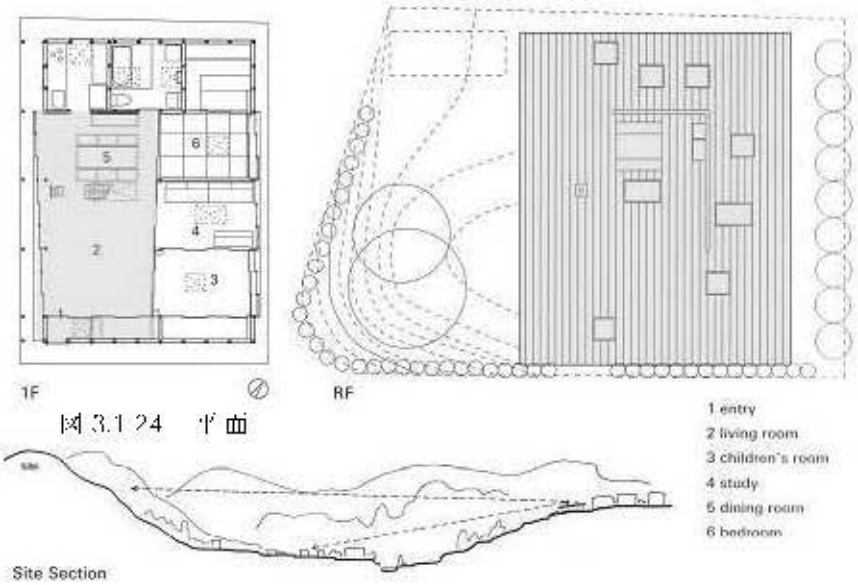


図 3.1.24　平面

図 3.1.2[illegible]
石井敏・小泉雅生：
日本の現代住宅 1985-2005
TOTO 出版 P.342-343,2005.12

写真 3.1.72　屋根　外観

写真 3.1.73　居間から子供室を見

写真 3.1.72～3.1.73
石井敏・小泉雅生：
日本の現代住宅 1985-2005
TOTO 出版 P.342-343,2005.12

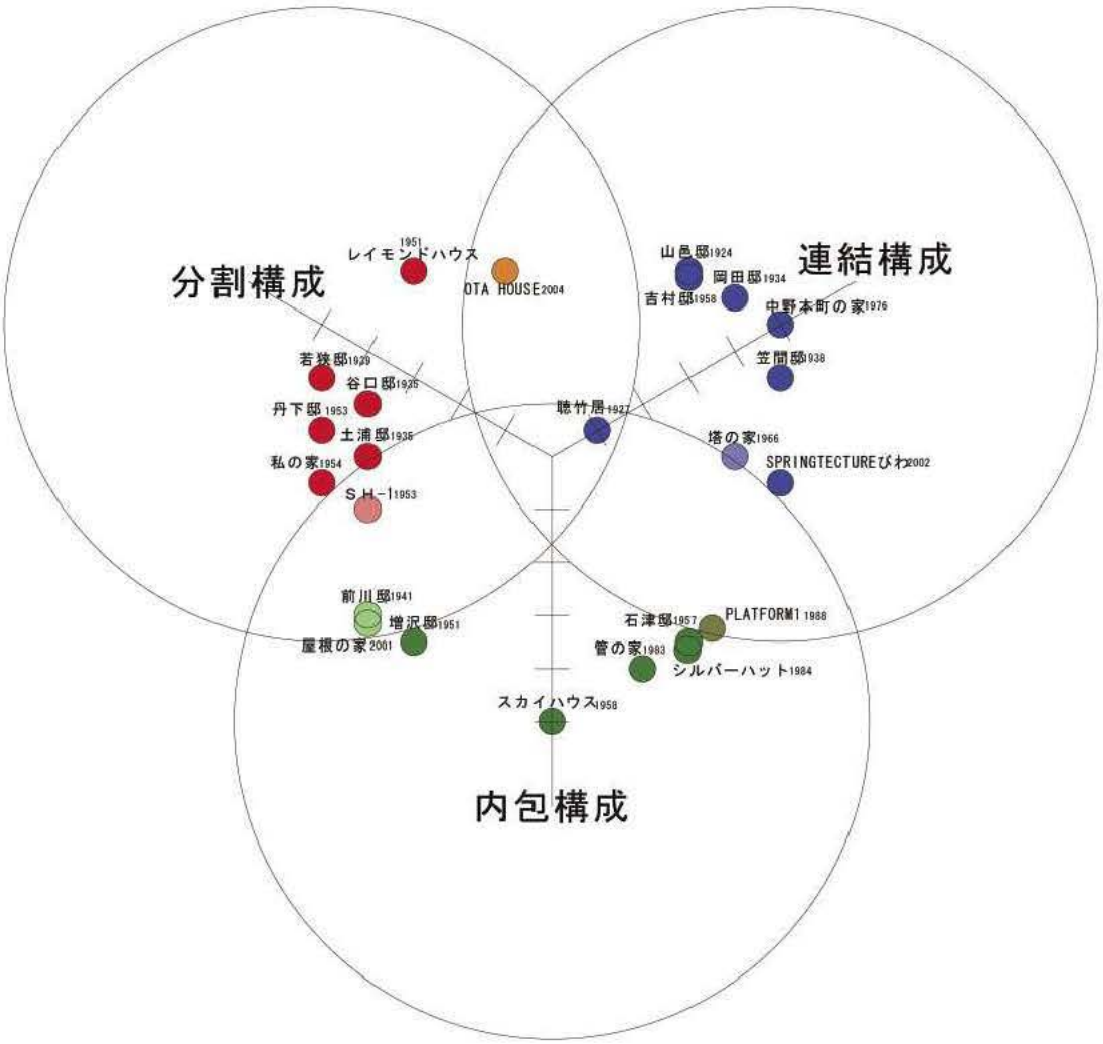
設計　[illegible]家当時 [illegible]塚山[illegible]、[illegible]県

所在地　神奈川県[illegible]郡[illegible]

建築規模　木造　[illegible]家建て　延床面積 96.89 ㎡

1. 空間構成原理：[illegible]による内[illegible]成 5、[illegible]は分割構成 4
2. 空間相互の関係：一体化、連合 5
3. 内外空間の関係：内外[illegible]、外部空間の[illegible]化 5
4. 共用室の扱い及び[illegible]置：[illegible]・[illegible]置 4
5. 個室と共用室の関係：一体的連続 4
6. 移行空間：共用空間兼用

表 1. 空間構成分布



空間構成原理に基づき、昭和初期から現代に至る 24 住宅作品を分類した。

空間構成原理の定義をこのように定めた。

分割構成：一つの空間がより小さい空間に分割されている

連結構成：複数の単一空間が連結されている

内包構成：大きな空間に複数の機能空間が内包されている

空間構成原理を読み解き、その状態に合せて配点及び加点をし、表に示した。

・構成原理による形態的特徴があきらかに判明できる：5

・構成原理による演算の痕跡が判明できる：4

・二次的段階の操作により別の構成原理が判明できる：3

・部分的段階の操作により別の構成原理が判明できる：2

・極一部の段階の操作により別の構成原理が判明できる：1

空間構成原理に基づき分類すると、概ね３つに分類できた。

分割構成：土浦邸 1935、谷口邸 1935、若狭邸 1939、、レーモンド自邸 1951、
ＳＨ-1　1953、丹下邸 1953、私の家 1954、OTA HOUSE MUSEAM 2004

連結構成：山邑邸 1924、聴竹居 1927、岡田邸 1934、笠間邸 1938、吉村邸 1958、
塔の家 1966、中野本町の家 1976、SPRINGTECTURE びわ 2001

内包構成：前川邸 1941、増沢邸 1952、石津邸 1957、スカイハウス 1958、
シルバーハット 1984、箕の家 1987、PLATFORM1 1988、屋根の家 2001

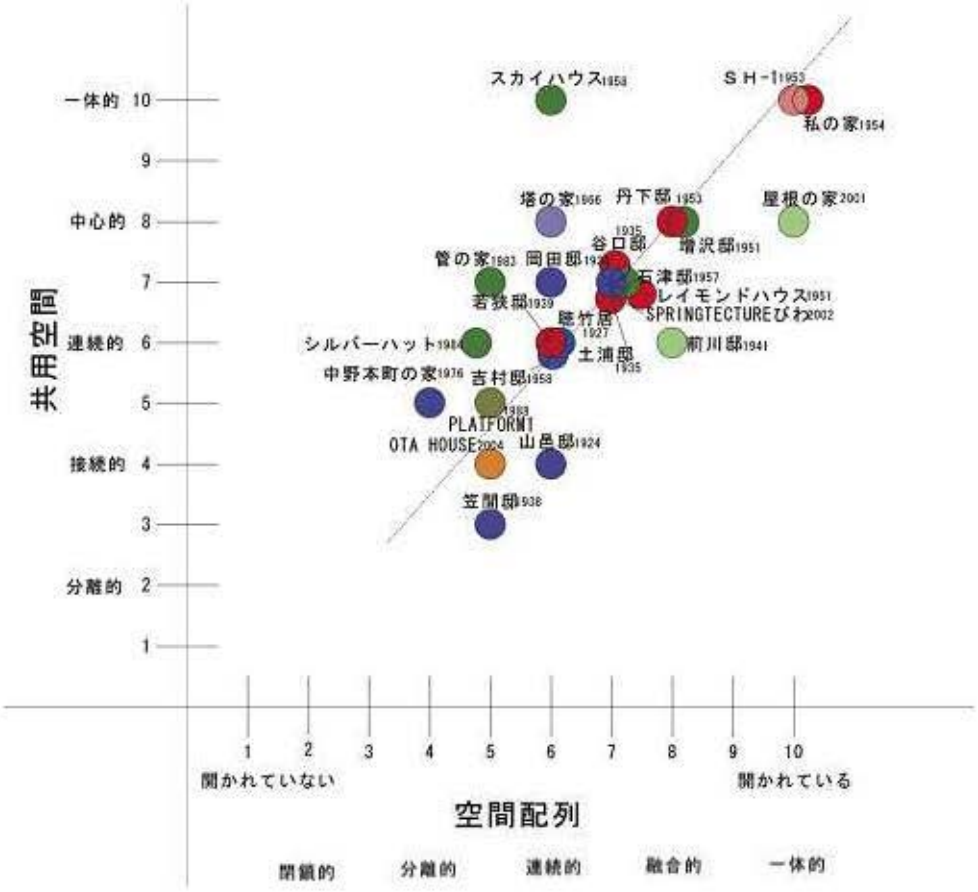
空間構成は、基本となる構成原理の演算により組み立てられるが、二次的操作段階や部分的操作段階で別の構成原理が作用していることも多い。分割構成：赤、連結構成：青、内包構成：緑で表記しているが、別の構成原理の影響を強く受けているものを別の色で表記した。連結の影響を受けた分割構成：橙色、内包の影響を受けた分割構成：桃色、内包の影響を受けた連結構成：紫、分割の影響を受けた内包構成：黄緑、連結の影響を受けた内包構成：黄色とした。

時系列を追って系譜的に空間構成原理の変遷を見た。大正末期のフランク・ロイド・ライトの山邑邸 1924 は洋館としての連結構成というだけではなく、庭（車寄せ、バルコニー）から露地（廊下、階段）を通って寄付き待合（応接室）、腰掛待合（談話室）、茶室（和室）への構成は、茶室的連結構成ともいえる。藤井厚二の聴竹居 1927 は数寄屋的連結構成をとっており、内包的なホールの試み、日本の伝統的な分割構成の採用もあり、日本人建築家による西洋文化の移植や折衷ではない模索が、ここから始まっているともいえる。堀口捨己の岡田邸 1934 は藤井厚二の数寄屋的連結構成を掘り下げたものといえる。土浦邸 1935・谷口邸 1935・堀口捨己の若狭邸 1939 は日本的分割構成をとりながら吹抜を採用することでモダンな空間を造り上げている。前川国男の笠間邸 1938 は西洋的連結構成を日本的な外観で覆っている。前川邸 1941 は分割構成を近代的に扱うことで民家的な内包構成を造り上げている。第二次大戦後のレイモンドハウス 1951 の分割構成は日本的なるものの再解釈や翻訳ともいえるものである。増沢邸 1951 は最小限の空間に内包された合理的な空間である。広瀬鎌二の SH 1 1953 は分割構成のボーダーレスによる融合空間である。丹下邸は持ち上げられた床により均質（無限定用途）な分割構成を造り上げている。清家清の私の家 1954 は抽象化した分割構成による外部へのあふれ出しが内外の融合空間を造り上げている。池辺陽の石津邸 1957 は内包構成に連結構成を接続することでモダンリビングを造り上げている。吉村邸 1958 は連結構成と分割構成を使い分けること

めている。菊竹清訓のスカイハウス 1958 は持ち上げられた床による内包空間を造り上げている。東孝光の塔の家 1966 は重層連結による一体的内包空間をつくりあげている。伊東豊雄の中野本町の家 1976 は閉鎖的連結構成が象徴的空間を造り上げている。同じく伊東豊雄のシルバーハット 1984 は、連結を用いた内包構成で明るく広い空間を造り上げている。高橋公子の管の家 1983 はスチールパイプの内包構成と貫入による連結で、大空間と機能的空間を造り上げている。妹島和世の PLATFORM1 1988 は内包構成と交差・貫入による連結で溜まりと流れを造り上げている。手塚貴晴＋由比・池田昌弘の屋根の家 2001 は屋根床による内包構成が外部空間を生活空間に取り込んでいる。遠藤秀平の SPRINGTECTURE びわ 2002 は連結構成からねじれと交差を加えることで内包的空間を造り上げている。小嶋一浩の OTA HOUSE MUSEUM 2004 は分割構成からずらして分離させることで連結的空間を造り上げている。

フランク・ロイド・ライトやアントニン・レイモンドによる日本的空間の読取や解釈が、日本の近現代住宅の変遷の系譜の中で重要な役割を果たしていることは注目すべきことである。日本人建築家の中において、日本的なものから近代化を目指した源泉ともいえる藤井厚二の役割も大きい。藤井厚二の聴竹居は日本で最初の自邸による実験住宅であり、数寄屋的連結構成を初めて扱った日本人建築家である。それだけでなく内包構成や分割構成も合せて扱っていたことは、構成原理の段階的操作を試た実験住宅ともいえるだろう。分割構成、連結構成、内包構成は現代に向かう程、複雑な操作や多段階的操作、アクロバティックな操作を伴い変化しているといえるが、そのプロトタイプを聴竹居にみることができるというのは言いすぎであろうか。

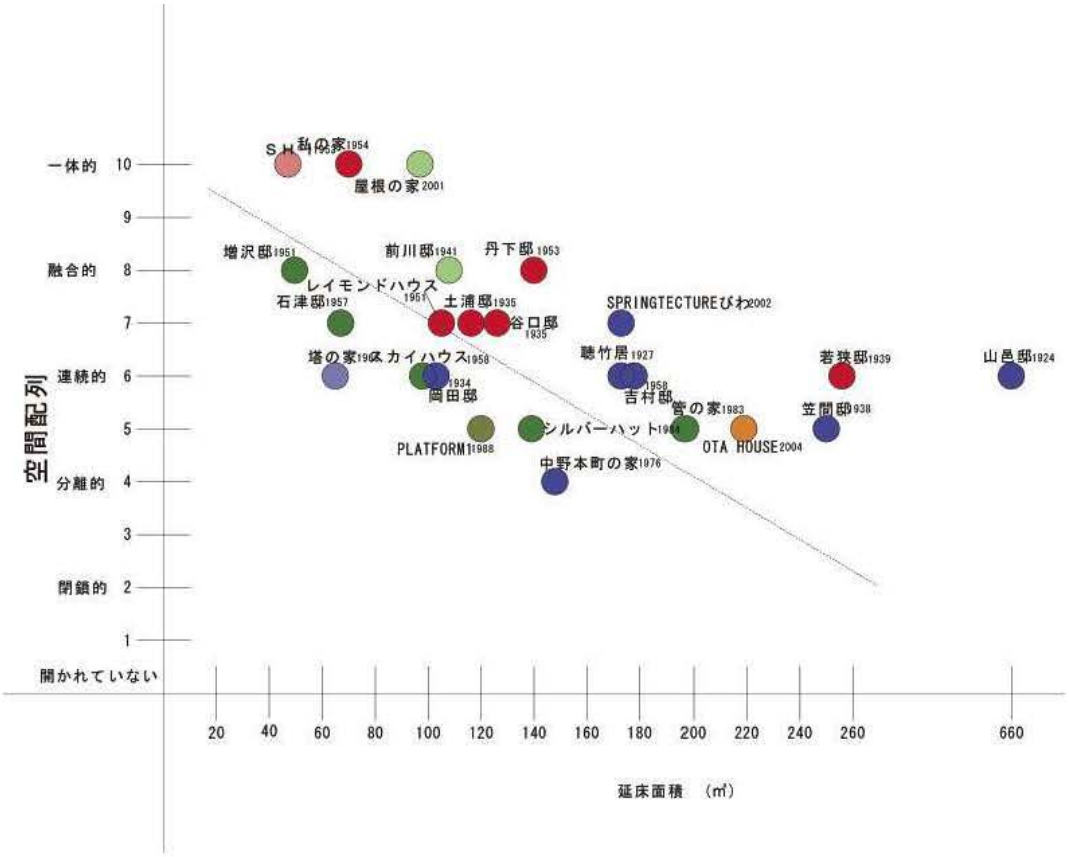
表 2. 空間配列と共用空間の相関



空間配列と共用空間の相関について昭和初期から現代に至る24住宅作品を図式化した。
空間配列は「空間相互の関係」と「内外空間の関係」を合算したものである。
共用空間は「共用室の扱い及び配置」と「個室と共用室の関係」を合算したものである。
空間相互の関係は「閉じる：1 分離：2 接続：3 連続：4 融合：5」
内外空間の関係は「閉じる：1 分離：2 接続：3 連続：4 開放：5」
共用室の扱い及び配置は「部分的閉鎖的：1 部分接続的：2 連続的：3 中心的：4 一体的：5」
個室と共用室の関係は「独立：1 分離：2 接続：3 連続：4 一体：5」
夫々の項目についてこのように採点し、空間配列は「空間相互の関係」と「内外空間の関係」の配点を合算したものを、共用空間は「共用室の扱い及び配置」と「個室と共用室の関係」の配点を合算したものを表に示した。

全体的には空間配列の開かれていると共用空間の一体性は正比例の図式をとっている。分離構成はまさしく正比例であり、連続構成は平均よりも開かれていなく分離的な方向により、内包構成は空間配列と共用空間の扱いは比較的に独立している。

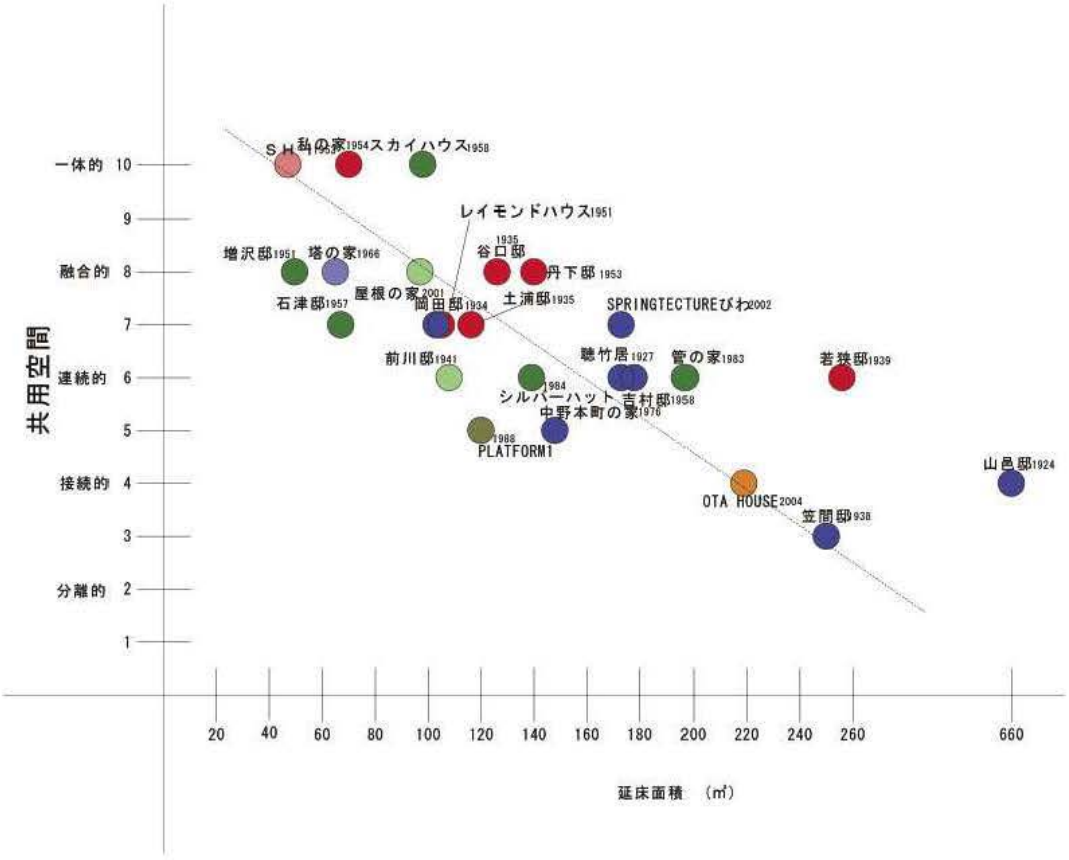
表3. 空間配列と延床面積の相関



空間配列と延床面積の相関について昭和初期から現代に至る24住宅作品を図式化した。
空間配列は「空間相互の関係」と「内外空間の関係」を合せたものである。
空間相互の関係は　閉じる：1　分離：2　接続：3　連続：4　融合：5
内外空間の関係は　閉じる：1　分離：2　接続：3　連続：4　開放：5
夫々の項目についてこのように配点し、空間配列は「空間相互の関係」と「内外空間の関係」の配点を合算したものを、延床面積は実際の延床面積の数値を元に表に示した。
註）堀口捨己の岡田邸とアントニン・レイモンドのレイモンドハウスは、参考文献に延床面積の記載がなかったため、平面図をもとに計測した。

全体的に空間配列は面積が小さい程一体的となり、延床面積が大きい程分離的になる。分割構成は平均よりも閉かれている方向により、連結構成は面積の大小にあまり影響をうけておらず、内包構成は平均よりも開かれていない方向によっている。

表 4. 共用空間と延床面積の相関



共用空間と延床面積の相関について昭和初期から現代に至る 24 住宅作品を図式化した。
共用空間は「共用室の扱い及び配置」と「個室と共用室の関係」を合せたものである。
共用室の扱い及び配置は　部分閉鎖的：1　部分接続的：2　連続的：3　中心的：4　一体的：5
個室と共用室の関係は　独立：1　分離：2　接続：3　連続：4　一体：5
夫々の項目についてこのように配点し、共用空間は「共用室の扱い及び配置」と
「個室と共用室の関係」の配点を合算したものを、延床面積は実際の延床面積の数値を
元に表に示した。
註）堀口捨己の岡山邸とアントニン・レイモンドのレイモンドハウスは、参考文献に延床
面積の記載がなかったため、平面図をもとに計測した。

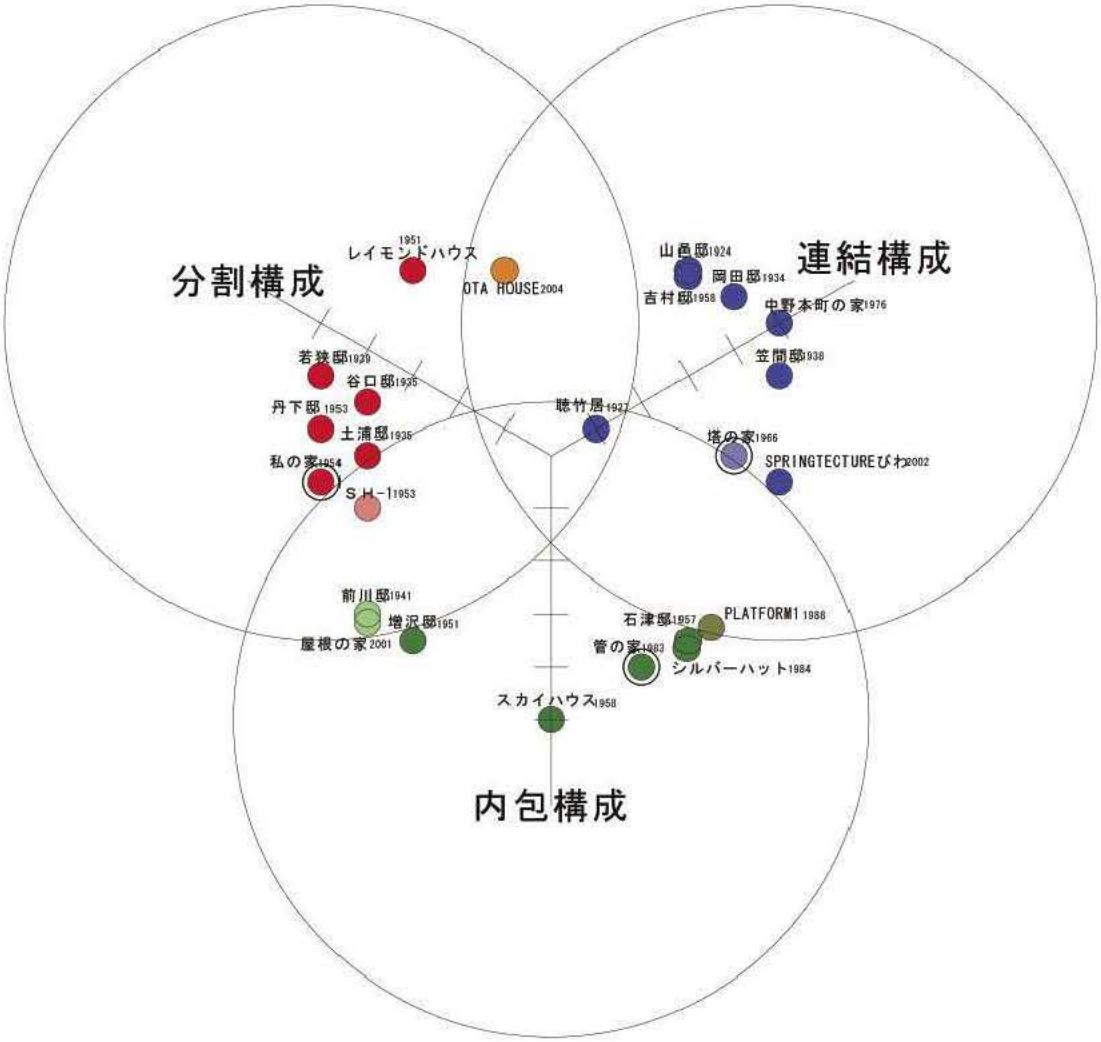
全体的に共用空間と個室は面積が小さい程一体的となり、延床面積が大きい程分離的になる。
分割構成は平均よりも一体的な方向により、内包構成は平均よりも分離的な方向によって
いる。

2.3　対象作品の比較分析 ---(X)

「私の家 」、「塔の家」、「管の家」が空間構成原理の分類ごとのチャート図のなかで、全体のチャート図のなかでどのような位置にあるかを読み取り、比較分析する。

2.3　対象作品の比較分析

表 1. 空間構成分布

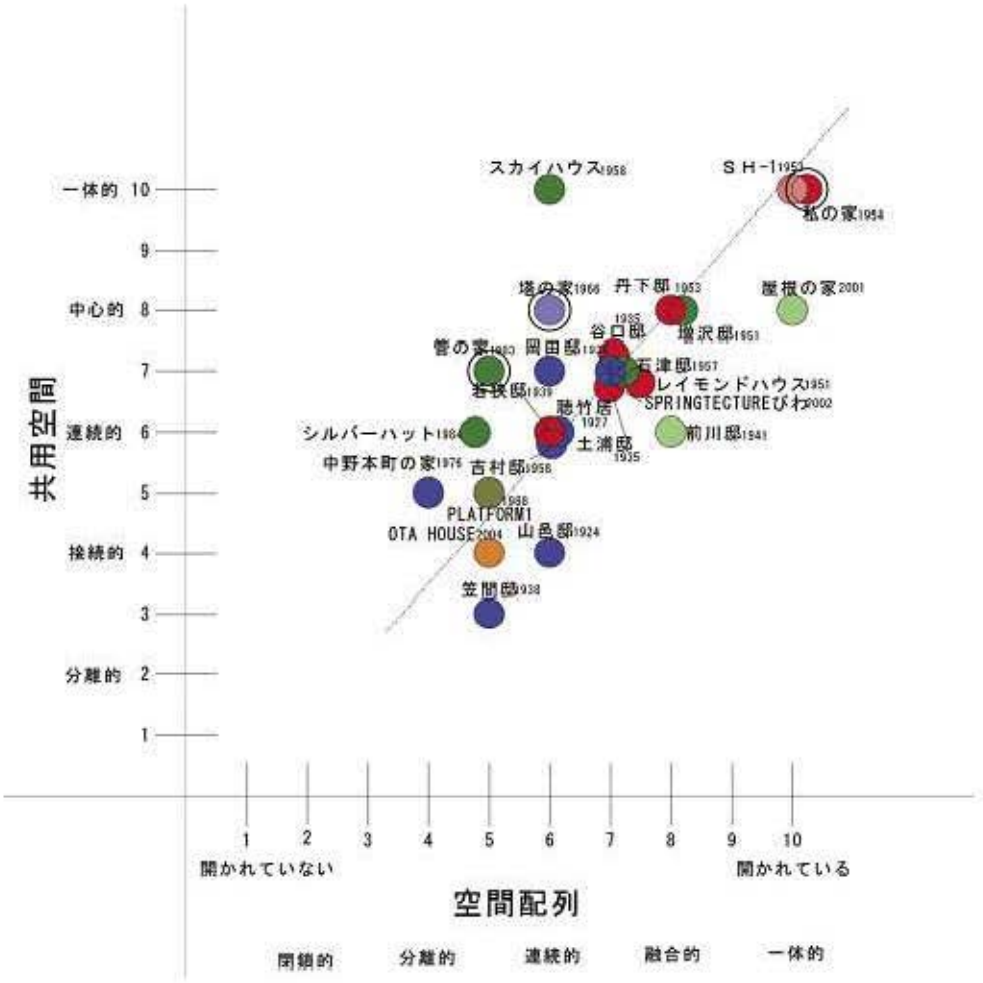


清家清「私の家」1954 ができた第二次大戦後は、戦災による住宅不足からの復興が急がれただけでなく、住宅を取り巻く議論も活発に行われ、一般の人々の関心も集めていた時期である。西山卯三は都市住宅のありかたについて「食寝分離」を唱え、浜口ミホは「床の間」や「玄関」は封建的反動であると否定し、日本の伝統につながるいっさいのものが封建的で排斥すべきとみなす論調が横行していた。そのような中完成した清家清の「森邸」1951、は日本調の復活といわれ大きな話題を投げかけた。「私の家」1954 は、その後の「斎藤邸」1952、「宮城邸」1953 に続く同様のワンルーム構成で、一連の作品が結実した住宅といえる。戦後小住宅の代表作の一つといってもいいであろう。空間構成は抽象化した分割構成でワンルームになっている。そのため内包的空間構成を併せ持つ。

東孝光の「塔の家　1966 ができたのは東京オリンピック後の日本の高度成長期の真只中である。戦後小住宅の時代を終え、大邸宅も建つようになる一方、都市の過密化は激しさを増し、都市に住むということは閉じた空間をつくることとなっていた。そのような中あえて都市に住もうとした試みが東孝光の「塔の家」1966 であった。6 坪の極小で変形した敷地に建った住宅は、建物そのものへの関心と同時に、如何に住んでいるのかという興味も注がれてきた。都市住居の特殊解として扱われがちであるが、その中に先進的事例や試みが潜んでいる可能性は高い。空間構成はロケットをドッキングさせたような重層連結構成で、重層連結の一体化による内包的構成を併せ持つ。

高橋公子の「管の家」1983 のできた 1980 年代は、1970 年代半ばからのポストモダニズムが広がりを見せ始め、1985 年のプラザ合意後のバブル景気に支えられて開花した時期であった。「管の家」1983 は、ポストモダニズムとは正反対の工業化・量産化を可能とする合理的プロセスと、現実的な生活を設計する姿勢から生まれた。工業化・量産化はハウスメーカーが担い、公的な住宅供給は一定の軌道にのり、建築家の社会的使命は住宅に関しては終わったかのように思えた時期であるが、一般の人々に共有されうる普遍性を探し続けた高橋公子の一つの解といえる。空間構成はスチールパイプによる内包構成であり、二次的操作段階の貫入による連結構成も併せ持つ。

表 2. 空間配列と共用空間の相関

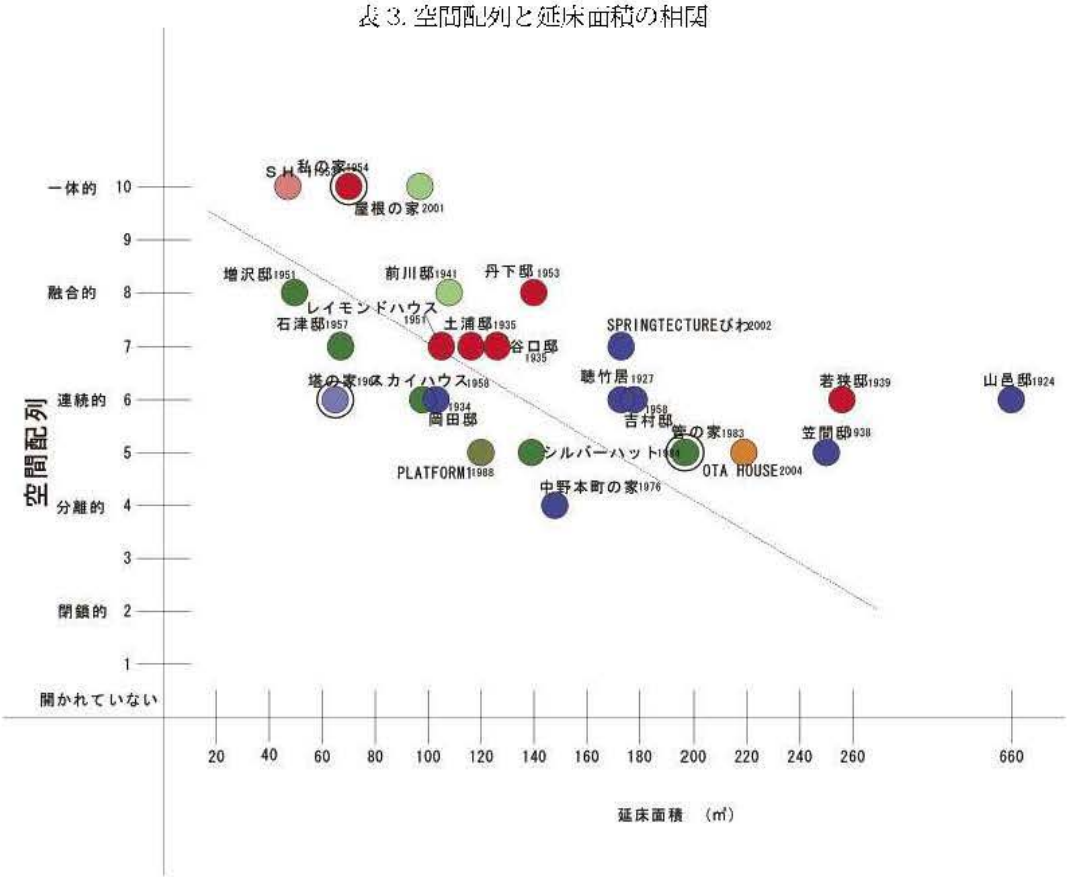


「私の家」1954 の空間配列は内外が一体となった住住空間として最も開かれており、個室と共用室との関係は濃密度に混合された最も一体的である。

「塔の家」1966 の空間配列は都市型住宅ということもあり外部に対して接続的であるが開かれているとはいえない。空間相互の関係は連続的に展開され、一体的ともいえる。共用空間の扱いは中心的で、住宅でさえも母屋型に共有されていて、連続性成の中では最も一体化が高い。

「管の家」1983 の空間配列は壁により分離的で、2 階は全てが閉じられている。外部に対して天窓や高め窓で接続されているが、開かれているとはいえず、内色構成の中でも開かれていない方による。2 階の大空間は個室や共用室、機能室も全てを包含するような包容力を持ち、空間配列の状態に比べ住宅と共用室の一体化は高い。

表 3. 空間配列と延床面積の相関

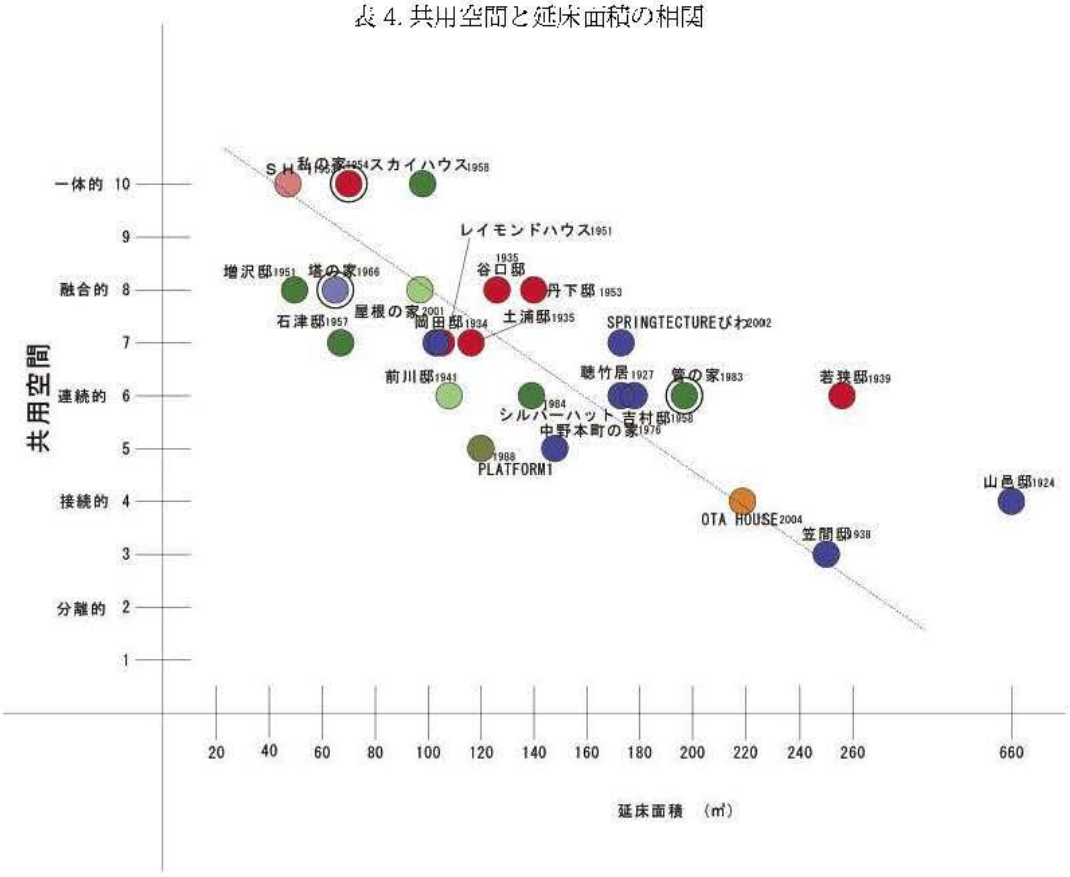


「私の家」1954 は空間配列の一体化は最も高く、面積は地下室を除けば最小の部類に入る。

「塔の家」1966 の空間配列は連続的で連結構成の中では平均的であり、面積は連結構成の中では最小となる。

「管の家」1983 の空間配列は分離的方向によっており、面積は二世帯住居でもあるため内包構成の中では最大となる。

表 4. 共用空間と延床面積の相関



「私の家」1954 の個室と共用室の関係は最も一体的なものであるが、当初使われていなかった地下室が子供室として使われるようになり、家族の変化とともに使われ方も変化している。

「塔の家」1966 の個室と共用室の関係は、連結構成の中では最も融合的なものである。

「管の家」1983 の個室と共用室の関係は連続的であるが、2 階のみで考えれば融合的といえる。

2.4　対象作品の分析

「私の家」、「塔の家」、「管の家」の作品分析

2.4.1　作品のアイデア（設計理念）---(Ａ)

作品のアイデア（設計理念）について、本人陳述を整理する。

2.4.2　住宅形態の実現効果---(Ｂ)

その住宅形態の実現効果を作品形態・技法・効果に分類整理し、その関係と共通や差異を示す。清家清、東孝光、高橋公子の住宅作品を対象作品の他３作品程度を選定し、併せて比較分析することで、共通や差異を明らかにする。

2.4.3　居住経過---(Ｃ)

居住経過を、本人や家族の陳述、居住歴をもとに整理する。（住宅の経過、家族成員の発達段階、家族関係の変容、環境変化）

2.4　対象作品の分析

2.4.1　作品のアイデア（設計理念）

「私の家」作品のアイデアについて、本人及び家族の陳述を整理

	「私の家」作品のアイデア
空間構成及びそれを実現する素材と工法	①-1「「私の住宅」と表記しないで、「私の家」としたのは、それが単に容器としての建物、いわゆるハードウェアである住宅ではなくて、ソフトウェアとしての家族や社会環境のようなモノでないものを含んでのコンセプトであるからだ。「居は気を移す」という。もちろんハードウェアも大切だが、ソフトウエアはさらに大切で、それが両々相俟って日本語のイエという概念をこしらえている。」P.50 ① 2「1954年、戦後9年目のことである。私は東京工業大学の建築材料研究所の若い助教授で、当時の国家的大問題であった戦後復興の課題に取り組んでいた。この自宅もその解決方法の一つとしての、自作自演の試作住宅である。」P.146 ①-3「真善美というようなものは、それが科学的に測定できないから、従って非科学的、前時代的なものだと考えられている。神などというものは誰も見たものはいないから、その神を信ずるなどというのはバカげた善人のすることだと考えている人も多い。美しい建築などというものは、贅沢でムダなものだと考えられていて、そうした美しさのような評価のアイマイなものに使う金があるなら、もっと使利で快適なものに命を使ったほうがトクだという極めて「合理的」な考えもある。こういう連中は美しさというものの本質がわからぬから、美しさというものは何かゴテゴテと飾りたてたものだと思っているらしい。・・・・科学者と称する人たちを見ていると、何百万年もかかって自然が築き上げてきたモノを人類の発展のためという美名のもとに、実は人間の自分勝手な利益や便利のタメに破壊したり、折角私たちの生活の中で生きながらえてきた事象まで、非科学的とか迷信ということでキメつけている。・・・・古いものは何でも悪いという考えがいつまでも残っていて、もうそういう考え方自体が古い考え方になっても、夫子自身それを反省しようとしない。公害問題とか、環境汚染がよくその逆説を証明している。 「私の家」を建てる少し前に、森於菟先生、宮城音弥先生の住宅を設計させてもらった。これは私にとって住宅についての興味をかきたてる大きな契機になった。偶然、両先生とも医学博士で、森先生は鷗外のご長男という血統から見ても文学・芸術にご造詣が深かったし、宮城先生も、もとを正せば文学士、科学者であると同時にその近代科学のつい見過ごしたり軽視しがちな文学や芸術をしっかり見つめているという生活であった。医学というものが人間の生物的なフィジカルなモノを基本としながら、最終的には生死のガイステイッヒな問題に及ぶというレーゾンデートルを持っている。建築は本来そうした形而上的な存在をひとつの調和のある個体として形而下的というかフィジカルな存在として獲得する技術であろう。特に住宅について言えば医学がそうであるように生理学や心理学の問題が物理学以上に必要であると言えそうだ。もちろんそう断定してしまうのは独断の謗りを免れないが、近代科学とか近代文明といわれているものが、建築を含めて物理・化学の問題の解決に終始し、工化学工業の発展の度合いが開発国と低開発国の定義づけになっていることを思えば、そうした偏見に対するには、この独断も許されよう。 しかし、このことは重化学工業や物理・化学の発達を阻害しようとしていることではない。特に住宅や家具・什器のような文字通り生活に密着したモノにあっては、従来ともすれば見過ごされたり、非科学的とか迷信として軽蔑されて来たものに、もういちどスポットを当ててみてはどうかという提言である。伝統と言えば聞えはよいが、因襲と言われているようなもののうちにも再検討を加えてよいものがあるかもしれない。」PP.52-54 ①-4「建物の方は文字通り不動産ですが日本人の住まい方は、生活の中のシークエンスに動きがあるわけです。だからディメンションとして増えるのです。時間のディメンションがそこに入ってくるから。建築というのは、あるいは住宅といってもいいですが、二次元です。プランは二次元だというけれど、建物にしただけで二次元になるし、そこに時間のシークエンスを入れると四次元になるものです。マルチ。ディメンションだからね。ユークリッド幾何学からリーマン幾何学になってくるのだと思います。」P.106 ①-5「「森博士の家」もわが家も、黄金分割になっています。あの頃、モデュロール神話が流行った頃ではないでしょうか。吉阪隆正さんも、レイモンドも使っていますね。レイモンドはコルビュジェの家を真似て「軽井沢夏の家」(1933) などにも使っています。 私のは、私の手の高さかな。私はあの家の亭主であり、全部をコントロールするという、専制君主的な平清盛的な発想があるんです。天井直付けの電球の取り換えも亭主がするわけです（笑）。」P.108 ① 6　近代主義のなかでは、構造的合理性は、架構の経済性として再認識されている。この、経済性に裏付けされた構造的合理性を、戦後単純に平面計画の方法論として出発していた住居計画の中に持ち込んで、これに建築家への可能性を開拓したのが、空間の創造に次ぐ清家清の第二の成果である。 P.179

「私の家」作品のアイデア

外部空間と内部空間の関係	②-1「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込まして、狭小住宅の解決を計っている。内外の生活をオーバラップさせるためのliving-gardenは厳冬の数週間を除いては有効に働いている。室内も石敷、庭も石敷と意匠的な連りがあるように、生活も内外の同じ場で連ばれている。建物の南面は全部開放して戸外と接触できる。そのために、東西方向の耐震壁を建物の中心軸に後退させて、外壁を開放した。」P.34 ②-2「「夏巣冬穴」というフレーズもある。巣という文字の巛は鳥の象徴、田は鳥の巣の象徴、木はその環境である。越冬するには穴にもぐるか南の国に渡る。それはもともと私が考えていた家族の生活は、いってみれば自然な姿でいきいきと暮らすものであったからである。その意味ではわが家はいたって快適で、文字通りスキンシップの濃厚な生活であった。」PP.231.232
個室と共用室の関係	③-1「寝室―居間―仕事部屋を区切るカーテンが唯一の間仕切りだから、極端にいって、戸外を含めての完全な一室住居。それを年中行事や生活に合せて舗設　しつらえる。 P.35 ③-2「この家は便所にも扉がないことで有名になっているが、それには私の哲学があって、他所さまではできないことだろう。畏友故池辺陽（東大教授）氏の自宅も便所に扉がなかった。」P.56 ③-3「清家教授はインタビューにこたえて、親豚のまわりに子豚が集まってくるような暮らし方、住み方をしたいとのべている。」P.194
家族関係の形成に対する対応	④-1「この戦後小住宅の底流には、一方でアメリカの住宅、住まいについての考え方が色濃く反映していたともいえる。敗戦の痛手から立ち直ろうとすると当時、どっと流入したアメリカ流民主主義とともに、われわれもこのhomeという言葉と、そこに込められた深い意味への憧れを感じたのかもしれない。実際、住宅にはそのようなスピリットが必要なのである。」P.233 ④-2「「夏巣冬穴」というフレーズもある。巣という文字の巛は鳥の象徴、田は鳥の巣の象徴、木はその環境である。越冬するには穴にもぐるか南の国に渡る。それはもともと私が考えていた家族の生活は、いってみれば自然な姿でいきいきと暮らすものであったからである。」PP.231.232 ④-3「清家教授はインタビューにこたえて、親豚のまわりに子豚が集まってくるような暮らし方、住み方をしたいとのべている。」P.194
空間的適応性を実現するための造形的着想	⑤-1　屋根のスラブは東西にたる中心軸に架けられたトラス梁（ハゾマイヤ　トラス）と耐震壁に支えられて、南北の両方向で天秤構造になっている。スラブの厚みは棟（中央）で二五センチ、軒先で一〇センチ。耐震壁はH型に配してある。スラブの上はスラブの型枠に使った板を野地板に使って、アルミの瓦棒葺になっているから、屋根スラブの気候に対する抵抗はよい。トラス梁は鉄筋の溶接で、下弦は二二ミリを二本、ラチスは一八ミリを使ってある。」P.70 ⑤-2　ユカはパネル暖房になっているが、寝室と仕事部屋は低温のほうがよいので輻射暖房はなく、床下は地下室になっている。パネル暖房のユカは、地表面に割栗をつき、捨コンクリート（一〇センチ）、敷砂（二センチ）、軽量コンクリートブロック等で熱遮断してそのうえに一インチのパイプコイルを三〇センチのピッチで配管してコンクリートに埋め、鉄平石を貼って仕上げた。P.69 ⑤-3「タタミの台は下にゴムの車が付いていて、どこへでも転がして行ける。天気のよい日には庭にも出せる。夏の夕涼みなどにもよい。また、我々の生活の中にはどうしてもタタミのいる伝統的な仕様式があって、たとえば和服をたたむ時などにはどうしてもこのくらいのタタミがいる。また、資料の整理などの時にもそれを広げるに便利。勉強机は檜で、製図板にもなる。食卓・製図机・仕事机・タタミの台・ガラス戸のモジュールを統一して、しつらえを楽にしようと試みている。」P.36 ⑤-4「われわれはこの与えられた空間に舗設し、年中行事にあるいはその他のいろいろなファクターにしたがつて「几帳」「屏風」「障子」「置畳」等で生活空間と与えられた空間の不調をカヴァーしなければ到底人間的な生活は送れないであろう。このような意味からも家具の固定化よりも家具の本来的な使命にしたがつて自由に舗設――すなわち自由に置き換えて生活空間のフレキシビリテイを保持させる方向を支持したいと思っている。大きな一室をとってそこに自由に舗設する、そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義というのもこういう点を多く含んでいる。PP.136 138

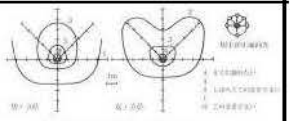
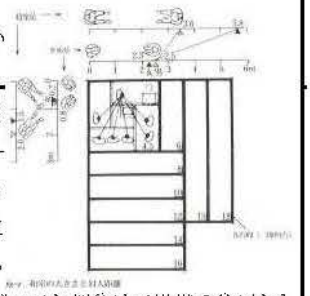
「塔の家」作品のアイデアについて、本人及び家族の陳述を整理

	「塔の家」作品のアイデア
空間構成及びそれを実現する素材と工法	①-1「私は前に個室を「家の中の家」といいましたが、居間はそういう意味では「家の中の広場」か「公園」というぐらいに捉えれば良いと思うんです。つまり、日くじら立てて応接間は不要だとか、団らんを優先してとか、仰々しく考えなくとも、広場または公園と考えれば、ある程度のスペースとかコーナー分けが必要ですが、片隅で老人が日なたぼっこをしている、こちらではこちらでは子供が走り回って遊んでいる、お母さんが乳母車で赤ちゃんと散歩などという公演風景が想像できるでしょう。居間も、家族がめいめい勝手気ままに使っている方が、さあ団らんしましょうというわざとらしい家族のあり方よりは、ずっと現代人らしい素直な居間の風景ではないかと思うんですね。」PP.64.65 ①-2「塔の家の設計は、たった六坪の土地の上に、六割の建ぺい率で3.6坪という極限的な広さで住居が成立するかという命題が、デザイン上の私の意図を超えて圧倒的な強さで私の上におおいかぶさってくるというものであった。だから、もちろん外観などについての初期のスケッチもいろいろ残ってはいるが、図面としての正念場は、平面と断面、つまり内部をどうつくるかにほとんど百パーセントの比重がかかっていたように思う。」PP.116-118 ①-3「セメントも何処でも採れるといいながらやはりその国の大地から生まれたものですし、まして砂利とか砂は地域的なものだと思うんですね。そういう意味ではコンクリート打放しというのは、土地の匂いと”人間の手”みたいなものを仕上げに反映させていくことのできる素材なんです。」P.151 ① 4　私は、ある広がりがあっても、それを知覚する存在がないかぎり、空間は存在しないという認識論の次元をいっているわけではない。人がたんなる空間を知覚するだけでなく、その場所に存在する意味を知って初めて、その場所が空間となるだろうことをいうのである。建築家の設計作業とは、その意味づけの行為でなくて何であろうか。注意しなければならないのは、それが、建築家の意味づけだけに終っている間は、仮りのものであって、やがて空間性を失ってしまうこと。彼の意味づけと一致してもしなくても、その空間を占める人間が、どんな意味を獲得することができるのかが、重要なのである。私の住まいは、東京の都心にあるが、それはたえず直接間接にたくさんの友人にかこまれていたいという欲求からすべてが始まった。どうしても都心に住みたいという意味づけがなければ、そしてそれが見る人にも伝わらなければ、それは狭い土地を私有化した、階段ばかりの不便な家でしかありえないのだ。」P.164
外部空間と内部空間の関係	② 1　やはり自分のすまいについては一言あってしかるべきであると、私自身も内心ひそかに賛成しているからである。そこで私は、このすまいはどんなことをしてでも都会の真只中に住みたいという私自身の姿勢の実体化に他ならないと答えることによってその責を果たすことにしよう。 P.24 ② 2　私たちの場合、この町に住む、住みたいというこだわりがあって、その上での塔の家なのだ。しかも、事実この町全体で生活が成り立っている。みどりが欲しい時は公園で、人とのつき合いは町かどの喫茶店、仕事場は歩いてゆける近くのビルという風に。たしかに郊外でも変形の土地とか狭い敷地なら割安で、そこに建てる方法があるなら経済的だろう。しかし、町に住むという総体がなくて、ただ塔状の家というだけでは不便さが先に立つだけなのである。」P.113
個室と共用室の関係	③-1「全ての部屋にプライバシーが必要なのではなくて、家の中のパブリックスペース、つまりみんなで使う共用の場所に対して、個人の場所にプライバシーが必要なんだというふうに考えていた方がいいと思います。 P.83 ③ 2「自分の城に閉じこもる子にはしたくなかった。どんな環境にいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった。」P.181
家族関係の形成に対する対応	④ 1　家族は分解する。つまり今まで住宅は社会に対する防波堤であり、その内側で同じ屋根の下に住む家族が団結して暮らし、同じ考え方や興味の対象を持っていた。しかし大家族主義の否定、個人の人格優先で家族を結びつける枠がゆるむ。そして核家族化。寝室とか食堂という決まった用途の部屋はそう変化がなくとも、居間というような家族の関係と対応する部分は大きく変化して当然なんです。」P.60 ④-2「自分の城に閉じこもる子にはしたくなかった。どんな環境にいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった。」P.181 ④ 3　外の社会に対するプライバシー。これは必要です。しかし、家族同士については厳密に考えすぎていたのではないでしょうか・それを手に入れるために、私たちはもっと大きな何かを失って来たような気がします。」P.182

「塔の家」作品のアイデア

空間的適応性を実現するための造形的着想	⑤ 1　内外共、普通パネル型枠打放しのまま。床はナイフで切断したビニールフローリングを置いただけ。窓は錆止めのままアングルサッシュに網入ガラス。家具はラワン材そのまま。釘頭が見えている。勿論予算の関係もあるが、ここしばらく店舗インテリアデザインで試みて来た、建築家が内部空間を緻密に構成すればする程それに加えられる仕上げや家具の自由度が開けるのではないかと言う持論の延長でもある。」P.26 「私にとってはその壁の内側の広さが、本当に自分や家族の身の置き所を作り出してくれるのかどうか、それを確かめるために、より大きな図面を描き、その空白部分をにらんでは、椅子を置いたりベッドを描き込んだりしては身体で確かめていったのであった。」P.119 ⑤-2「各家族には、それぞれ自分達の形態があり、一家族たりとも、まったく同じであるはずはない。とすれば、各家族に合った住宅の形が、無数にあっていいはずである。そして建築家は、その家族に合った住宅をみつけだす手助けの役目を担っていると私は思っている。」P.36 「快適さとは、欲望の充足によって得られるものではなく、欲望を野放しにせずしっかり抑え込んでコントロール可能という状態から得られるものらしい。居住空間の場合にも、これ迄の快適さ追求路線では、欲望の充足に応ずるハードな空間や道具のつくり方に偏り過ぎていた嫌いがある。ここでは触れ得なかったが、使用者の空間形成への「主体性」とか「参加」の問題と共に、生活行動の姿勢や哲学の掘り起しという面が、今後大いに望まれるところだと私は考えている。」P.143 ⑤-3「小さく密度の高い室内では、人、物、空間すべて手の届く場所に共存し合う。手の届くすぐ其処にすべてが在る故に、人はすべてを掌握しいると思い込む。手の届くすぐ其処にあるからと、何時でもすぐ、何処でもすぐ、何れでもすぐ、手がすぐ届くからと言って、その故に、人はすぐ疎かにする。もし、疎かにしたならば、手にすぐ届く其処に在るものは、すぐ互いに入り乱れ、手のすぐ届く所に在れば有る程、持て余し、遂にお手挙げとなる。手のすぐ届く其処に在るものは、自分で管理出来る量と質でよい。」P.44 「私の経験からいうと、見えない所、安心して散らかせる所をつくればつくるほど、また安心して散らかす分だけ片づけ物がふえてくる。追いかけっこにすぎないのだ。そんな時、私は台所の作業台を、食堂側に向けてつけることにしている。台所に入って食堂のほうを向いて立つ。そうすれば調理の時もあと片づけの時も、話しながら作業ができる。そうすれば食後の話らいから離れなくてすむし、お父さんや息子を動員することも多少はたやすくなる。しかも、手元はかえって見えないのだ。立上り壁の陰になって。」P.59 「本来、ものの収納や整理をどうするかというハードな面にしても、如何にものに対処するかという生活態度が明確でないと、設計そのものが出来ないし、作っても有効に働かないのである。そひて、そのことが、どうやら居住空間の快適さ快適さにも重要に関与するらしいことが、たとえばシンプルライフのすすめといったかたちで漸く一般にも浸透し始めているということだろうか。」PP.139.140

「管の家」作品のアイデアについて、本人及び家族の陳述を整理

	「管の家」作品のアイデア
空間構成及びそれを実現する素材と工法	①-1「管の家で鉄筋コンクリート造にしなかったのは、鉄筋コンクリートだと自由自在にいろいろな形が作れてしまうからであり、前述した木造でなく鉄骨造を選択する理由と同じである。コンクリートブロックは高橋にとっては、何時でも同じ大きさと性能のものが集められる工業製品の一つであったから、「被い壁」であるとか、「ふんわりとした空間の基壇」が必要となる場合選択されていたのである。工業製品を住宅に使うのは品質上の安定性と量産による経済性が普通の人のための住宅に相応しいからという理由だった。PP.49-50 ①-2「高橋の選択は、より現実的だった。キッチンの作業台の高さと住宅政策を等価な問題として捕らえるスタンスは、今と将来を同時に考えるということであり、それが高橋の住宅設計へのスタンスであった。そんな高橋がした現実的選択とは、モダンリビングの日本化と言えるかもしれない。「管の家」に代表される高橋の住宅の中には、伝統的な日本の住宅のもっていた機能に対するルーズさに通じるものがある。それは、家族と住宅の緊密な関係を解除する操作とも言い換えられる。高橋の建築に現れた細い鉄骨の架構に覆われたおおらかな空間は、家族という人間関係とその時間の変化をルーズに包み込む装置である。P.32 「管の家」でも鉄骨が選択された。かねてから「がらんどう」な空間を状況に合せて使いこなして行く空間をつくってきたが、それには空間の大外枠だけをつくり、中に柱が存在しない、構造によって空間と暮らし方を規定しないことをモットーとしており、そのためには体育館のような大きさでも出来てしまう鉄骨造が最適であった。同じような柱梁の構造に木造があるが、鉄骨の方がより大空間が可能である。また、鉄骨造を好んだもうひとつの大きな理由は、高橋が常にこだわっていた「GMモジュール」が通常木造に用いられる尺貫法（関東間）やメートル法のモジュールとは異なるからでもある。P.46 ①-3「ドライな印象を与える管の家だが、その建設プロセスは鉄骨工事と金物工事の職人との多くのやりとりの中から形を探し出し細部を決定していくというものだった。高橋はそういうものをつくるプロセスに大きな喜びを感ずると記しており、人と話すこと、協同することを楽しんでいた。こうした思いこそ、高橋が設計を一生の仕事とした大きな理由の一つだったかもしれない。いくら部品が機械生産されたとしても、実際に現場でつくっていくのは何人もの生身の人間の手に依っている。彼らの仕事に依って設計という仕事は成立しているのである。P.58
外部空間と内部空間の関係	②-1「鉄骨は裸の時が美しく、それで骨をあらわしたくなる。骨の建築は外と内とがあいまいで、内にいるときは外を想い、外観はふわりと浴衣のように着たいものだ。」P.40 ②-2「築20年を経て、管の家の変化は大変なものだが、そのずっと前から変わらずそこにあるものがある。庭の大きなヒマラヤ杉と敷地分割の時に移植した欅の木。この木は第二次世界大戦の大空襲からこの近辺の延焼を防いだという木である。管の家における外構工事は、その大きな木を残すことと、自分たちの手で庭の芝をつくり、時間をかけて育てるものであった。フェンスの蔦も伸びては刈られながら元気に生きている。建物も植物も生き物であり、手を入れることでより愛着がわき、長生きする。PP.66.67
個室と共用室の関係	③-1「玄関がこの二世帯住宅を積極的に繋ぐ空間であるとすれば、ゆるやかに親世帯と子世帯を分節する装置として機能したのが階段である。」P.82 ③-2「fig-3は、他人から離れたい感覚の分布であり、パーソナルスペース（個人空間、固体空間）と呼ばれているもののひとつである。fig 4は、人間同士がさまざまな姿勢で対面するとき「しばらくはこのままでもよい」と感じる距離について、空間の大きさと比較したものである。椅子に腰かけるより、床に座る方が距離が近く、真正面より斜め向きの方が距離が近い。ここから「集まるには「おおざっぱにいって、最小で8畳は欲しい」と高橋は言及している。P.94  
家族関係の形成に対する対応	④-1「高橋は「住居は、不自由さを内に含んだ」まざる空間」だと主張する。巷には二世帯住宅っておきながら、プライバシーを重視するあまり、玄関もお風呂もトイレも全部別々、インターホンをつけて「おばあちゃん元気？」といった住宅もある。しかし高橋は二世帯住宅（3章case2）の設計に携わり、かねてから二つの世帯がいかに混じわり合い、いかに分節されるかについて考えていた。そして自邸（管の家）においても、両者の微妙な関係をデザインの力によって演出しようと試みた。管の家は、基本的に1階が親世帯の住居と高橋のアトリエ、2階およびロフト部分は子世帯の住居として構成された。旧宅においても1階が親世帯、1階の一部（ダイニングキッチンと魔志の書斎）と2階が子世帯という空間配置であったこと、また高齢である両親への配慮から同じ空間構成を取り入れた考えられる。しかしこの空間的配置は、両者（この場合は二つの世帯）の心理的距離にも影響することを、環境心理に精通していた高橋は感じ取っていた。PP.80-82

「管の家」作品のアイデア

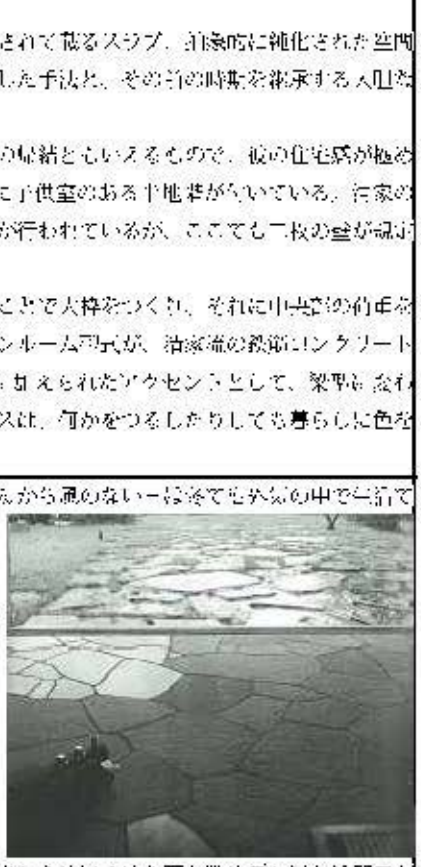
空間的適応性を実現するための造形的着想	⑤1　スチールパイプや素地に近いラワン合板（シナ合板に比べて色も木目もきついのでより物質感があり、「濃い」印象を与える）、コンクリートブロック、テント地の間仕切りなど、空間を構成する部材、部品は多いといえる。カゴの両端は鉄骨のスラブで低い天井のコーナーをつくっているが、そこは、こもってオペラの映像を楽しんだり、気に入ったお酒をゆっくり飲むのに心地よい小空間である。こうした多種多様な因子を統合しているのが、あの林立するパイプであり、大きなボリュームであるといえよう。」P.68 ⑤-2「高橋公子は建築の空間を音楽になぞらえて、次のように語っている。「住居はそこにいることに喜びがなくては、と思う。空間は音楽と同じように人の心に呼応するものである」。そして、高橋はどんなに小さな家を設計するときでも天井高や吹抜けや階段で広さやリズムを感じさせるように設計したと記している。実際、管の家の２階部分には空間のリズムを肌で感じられる楽しさがある。天井をぐるりと見渡すと、視線を遠くまで伸ばし、吹抜けやロフトを通じて上下に居る人の気配を感じることができる。リビングの中心にあるらせん階段は上下の空間をつなぎ、ロフトに上る楽しさを演出する。それらは結果として何とも心地よい人と人の距離をつくり出しているのである。 「管の会」がいまでも続き、管の家に人が集まる所以は、住まい手の人柄と併せて、やはり空間のもつ魅力が大きいからであろう。」PP.112-114 「きまったリズムで刻まれる強い構造。小さな空間なら特に目についてしまうことも気にならなくなる大きな空間。生活の中で存在してくる、たくさんの大事なものたちを排除してしまうまっさらな空間よりも、気に入ったものを好きなだけ並べておける大らかな空間を提示したといえよう。」P.70 「管の家という包容力ある大空間では、さりげなく各ふるまいをアフォードする場が設えられ、それらは使い手によって適宜可変可能とされていたからこそ、そこには円滑なパーティー展開があった。」P.100 ⑥F「日常的な動線の中に家事空間を配置し、男女を問わず自然に家事を生活の一部としてできるかたちになっている。「日常性と家事の自立」が自然なかたちで実践された管の家を通して、住居とはすなわち人との日常生活を包む器なのだということを今一度改めて気付かされる。」P.100 ⑥3　CMモジュールは、池辺研究室が開発した寸法体型である。建築の世界でも、尺単位からメートル単位に移行しようとしていたが、１Mを基準として設計すると生活空間には不適切だと気付き、京間の寸法体型などを参考として基準とする寸法を探し出したものである。木造の在来工法ではタタミの３尺６尺を基準に様々な寸法がきめられているが、寸法の中に何らかの法則性を見出さなければ、使いよい、また美しい建築が出来ない。」P.55

2.4.2　住宅形態の実現効果

私の家　の住宅形態の実現効果について、　人及び家族の関係

「私の家」　実現効果

空間構成およびそれを実現する素材と工法	①-A「施工に当たって、建設省建築研究所の口麦等・吉成元男氏に技術的な知恵をお借りした。口麦さんは設人になられたが、建築工事の機械化・合理化について、吉成さんはRC造の現場家が研究の主テーマだった。それと、業大学ではプレコンの代表者故田辺平学先生がご健在で、その人達のアイデアマン後輩・榊原主税のすぐれた実践上右というにもあったので同研究室テクノロジー・ブップ工法の実験をやってみようと計画した。しかし、そういう新有構造は基礎公庫では金を貸さないといわれ、やむを得ず在来工法のRC造に切り換え施工した。それでも口麦さんのところから、新鋭機械を借りてくるなど、いろいろ相当上の試作が盛り沢山にある。壁と天井スラブとの継目など端部にディテール・アップのディテールの工夫がある。ハブマイヤー・トラスもトラスが交差する交点で少しく開いていて、その間を利用して主筋にうまく溶接されているところ等、ディテールをよく研究されている。」P.56 ①-B「教育・厚生の不健康な住宅デザインの答問のなかで、私たちは、住宅をなぜもなく、空間についてでなく、材料や木割や、紙やとしかプロポーションについて心労を費していかようである。そこでは、空間は、空間ではなくて、展開面に囲まれた箱にしか過ぎなかった。住家清は、材料や木割や、その他細々とした工夫はどうでもよくて、デザインとは、要するに空間を作る技術なのだと主張しているようである。」P.178 ①-C「間取り」という言葉も、時々刻々ものなかで変化があるわけです。明治期、春夏秋冬、人間、「人の住宅の住まい方のよいことは明、ご飯を食べたところで、ちゃぶ台をトンと、そこへ御膳を持ってきておかみさんが到着をする。亭主が帰ってくる前に、また食事の用意をして、そこで酒を飲うしつらえをする。今度はまたそこに布団を敷いて寝る。でまた翌朝、布団をたたんでそこへちゃぶ台を出して、という時間のシークエンスの中で自由に空間をつくりかえていくところにあったと思います。さらに春夏秋冬のもので、夏に対しては夏のしつらえをする、秋には秋のしつらえをする、自然と交流しながらしつらえをしていくというのが日本の住宅の特徴だと思います。」P.101 ①-D「見事に空間に溶け込まされた構造壁の配置、ハブマイヤー・トラスにバランスされて載るスラブ、自然的に純化された空間と家族等、設計者の巧みさと対照に、小住宅の設計が確立されが為めたこの間の安定した手法と、その背の時代を継承する人間を感じるのがある。」P.186 ①-E「この住宅は表裏の来、清家が一貫して追求してきたソフト・ムの住宅の一つの帰結ともいえるもので、彼の住宅観が極めて明確に表明されている。建築面積は10×5メートルの50平方メートル。これに子供室のある平地階がついている。清家のこの期のコンクリート造住宅である構造はプレーンな壁構造であるが、ここでも二枚の壁が組合する空間がさらに広い空間の存在で、その内部に分かれている。」P.188 ①-F「柱も梁も斗栱・梁型も使わず、両妻面に二枚の壁を立て、屋根スラブで覆うことで大枠をつくり、それに中央部の柱を設けるとともに妻面の壁とは直角方向の耐震壁として働く壁を加えた、H型壁ワンルーム型式が、清家流の鉄筋コンクリート住宅の基本形でした。「私の家」はこの基本形の代表です。その平面をさらに加工を加えられたアクセントとして、梁型に表れる鉄筋のハブマイヤー・トラスがありました。住宅のスケールにぴったりのこのトラスは、何かをつるしたりしても暮らしに色を添えていました。」P.Appendix 11
外部空間と内部空間の関係	②-A「この建築平面の特徴は、カーテンの正面の部分は床の幅が広くなっているから通のないーはなくてもよいの中で生活できる。庭と室内の間でにいちいち靴を脱がないで、そのまま戸入りする。」P.35 ②-B「庭のまま室内に入る生活様式は困難もあるが、何とか続けていきたい。その困難というのは来客の教養の問題だけで、家の室内、室内から庭のcirculationで靴をいちいち履いたり脱いだりしていては、庭と室内を一体に評価できない。家族はそれしきのガンバリで生活様式を出している。庭の使なもずっとよくなってきた。」P.39 ②-C「西側の住居部屋のガラス窓は常時は上に巻いてしまうから、開口が広いに開く。台風などの非常時はガラスの窓の更にその外側に雨戸が引き下ろされる。窓台の壁は建築材料とポルトランド・セメントの人造石材を使用し、室内は同じ原料の人造石材。柱はテクスチャ仕様（蒸気 (condensation)）し難いので、室内はよい。北側は家の通のため日当りの悪い所があるので、浴槽の板のためにつくった工夫の中のはかなりコツがない。」P.35

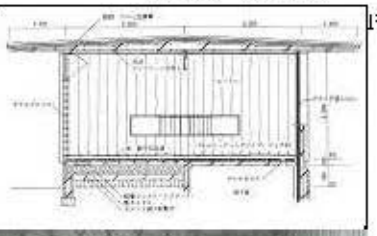


「私の家」実現効果

外部空間と内部空間の関係	②-D「地下室のお陰でつくられた、寝室の窓ガラスがスーッと地下へ引き込まれる装置でした。その結果、枠もなく、桟もない一枚ガラスの窓が、何気ない姿ですっきりと納まっていたのです。P.Appendix 11
個室と共同室の関係	③-A「清家の自邸は、地下室に在る長男・長女のヘヤの間に扉一枚があるだけで、あとは便所さえもドアがなく、夫婦寝室もカーテンでしきっているだけである。住宅の中で、家族の内にかくすべきものは何もない。・・・・プライバシーを確立するため空間を遮断するという「単純」な解決方法は、子供の非行化の温床になったり、それをまた心配してかぎ穴からのぞいたり、留守中に日記を開けて読むと言った重大なプライバシーの侵害を親がやってのけるといった過ちにつながる。単純素朴な発想であることは明らかである。プライバシー要求の内容や強度は家族成長の時期によって微妙に変化するし、その過程での家族間の人間関係・付き合いのし方、その処理のし方は、それぞれの家族によってちがっている。日本の戦後の家族生活の民主化は、その処理の確然とした方式を提供しうるほど経験を蓄積していない。それは、それぞれの家庭で様々な形をとって進行しつつあり、全体としては激しく変わりつつある。そのようにみるべき現位、その解決の方法を一つの枠にはめることはむつかしい。」PP.194,195 この移動タタミである。 て自由に移動し、なんにでも使 の前 遊ぶといった細かい生活行為が いる しか 一般化しなかったのが不思議な ッシ にまるで昔のままの和室和風の る意 最近の状況を見ると、日本人の きれ とで ってしまう。この移動タタミには、日本と欧米、家の内と外。 寝室から居間を見る。奥はトイレでドアはない
家族関係の形成に対する対応	④-A「清家のワンルーム形式に対する執着は、彼の理想とする日本的な同居を主体とする家族の生活像からきており、これは近代的な個室至上主義に対するアンチテーゼともなっていて、30年後の現在において再び意味深いものがある。」PP.200,201 ④-B「その意味ではわが家はいたって快適で、文字通りスキンシップの濃厚な生活であった。」P.232 ④-C「有名な物語としてこの家には便所を含むどんな場所にも、屋内には一枚のドアもないということがあります。個室は必要ない、便所でもドアがいらないのが家族というものだという、独特に見えて実は家族の原点を見つめて見ればだれにも納得のいく、温かい絆で結ばれた家族の像が、そこには明確に打ち出されています。それが家族像・住宅像としてしめされているだけでなく、清家清という現実の家族が、そのようにくらしていたのでした。」P.Appendix 9 ⑤ C屋根スラブについて

空間的連続性を実現するための形的工夫

「私の家」大阪市東

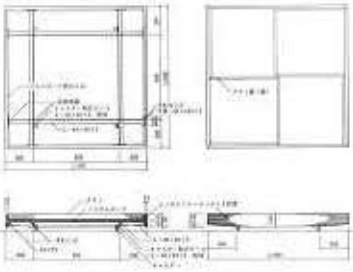


P.69

◎A　建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ませて、食糧問題の解決を計っている。戸外の生活をオーバーラップさせるためのliving-gardenは厳冬の数週間を除いては年効に使いている。室内も石敷、庭も石敷と素材を違えがあるように、生活も戸外の同じ様で押されている。建物の南面は全部開放して戸外と接触できる。そのために、東西方向の間仕切を建物の中心部に後退させて、外壁を開放した。P.34

P.37

◎B　「狭い空間を広く感じさせるにはどうすればよいかという研究があって、ホーミングアスな空間は広く感じ、こまこまと分割した空間は狭く感じるという一応の結論を持っていた。それで、その頃の私の作品は、どれも二方、三方、壁なし何となくノッペラボウで、この「家の家」も多分にもれず平面にできている。　二方の鉄平石は庭にある経済性の平坦な石敷きパターンとしてもホーミングスに連続して、二方の広さというよりはわずか50センチメートルの狭さを設っている。P.58

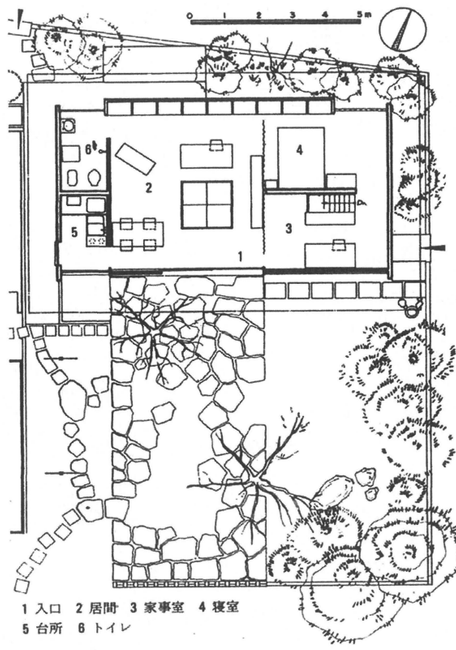
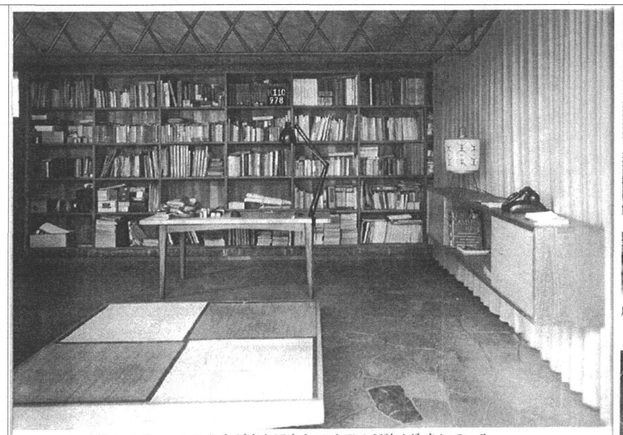
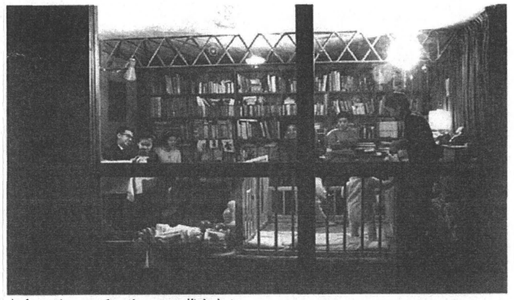


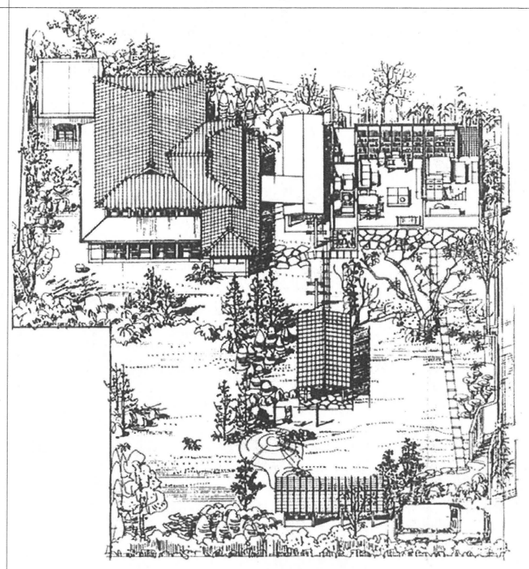
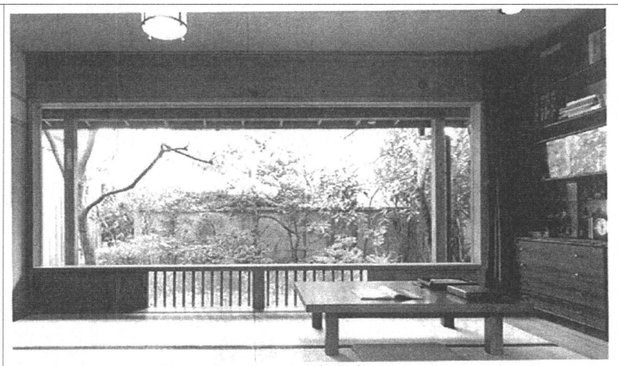
P.70

◎C　「舗装」という言葉も、時々刻々そのなかで変化があるわけです。朝夕朝、春夏秋冬。本来、日本の住宅の住まい方のよいところに、ご飯を食べたところそこでちゃぶ台を上げ、そこへ布団を持ってきておかみさんが仕事をする。亭主が帰ってくる前にまた食事の用意をして、そこで寝を使うしつらえをする。今度はまたそこに布団を敷いて寝る。できた朝、ちゃぶ台をたたんでそこへちゃぶ台を戻して、という時間のシークエンスの中で自由に空間をつくりかえていくところにあったと思います。さらに春夏秋冬の中で、夏になれば夏のしつらえをする、秋になれば秋のしつらえをする、人数と交流しながらしつらえをしていくというのが一人の住宅の演出だと思います。(TP.101,102

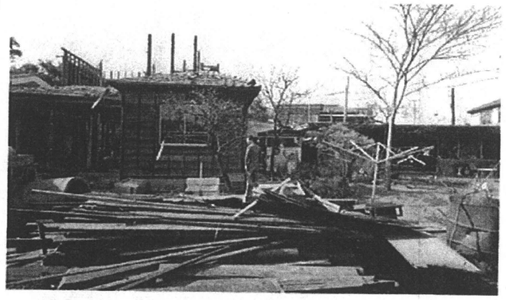
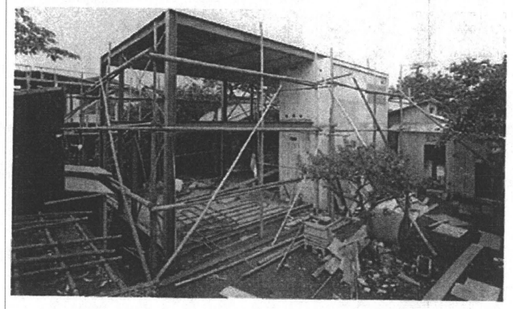
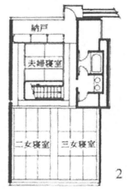
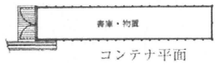
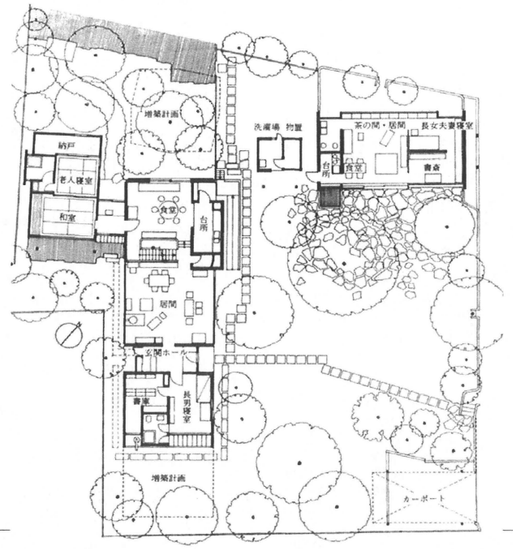
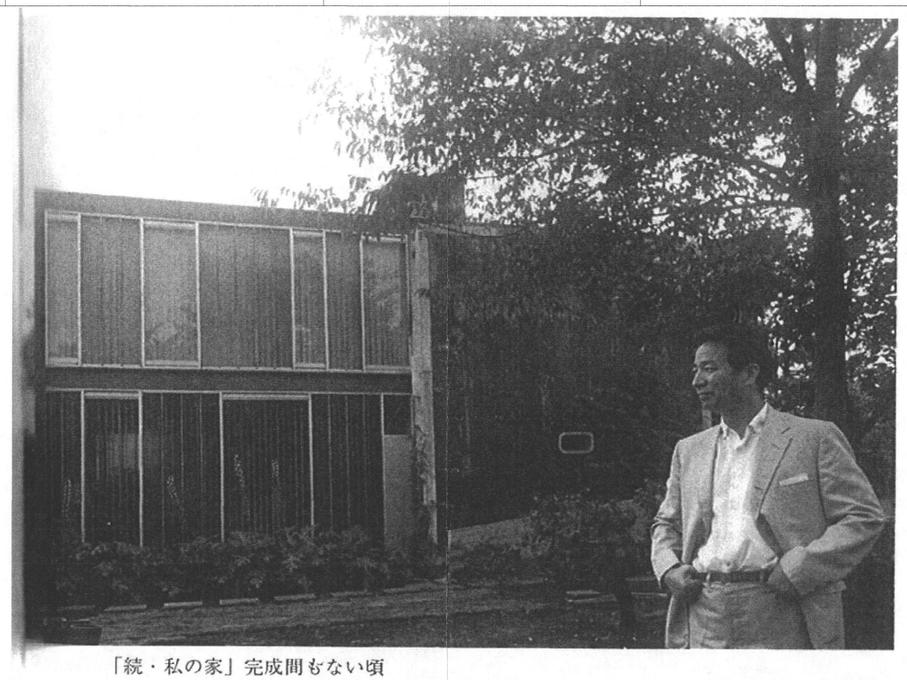
P.129

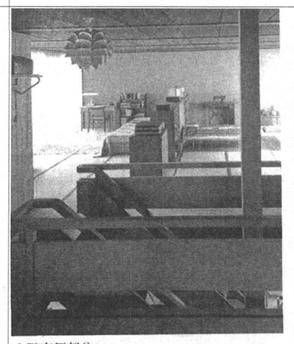
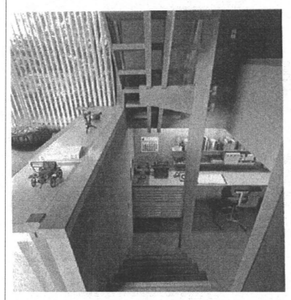
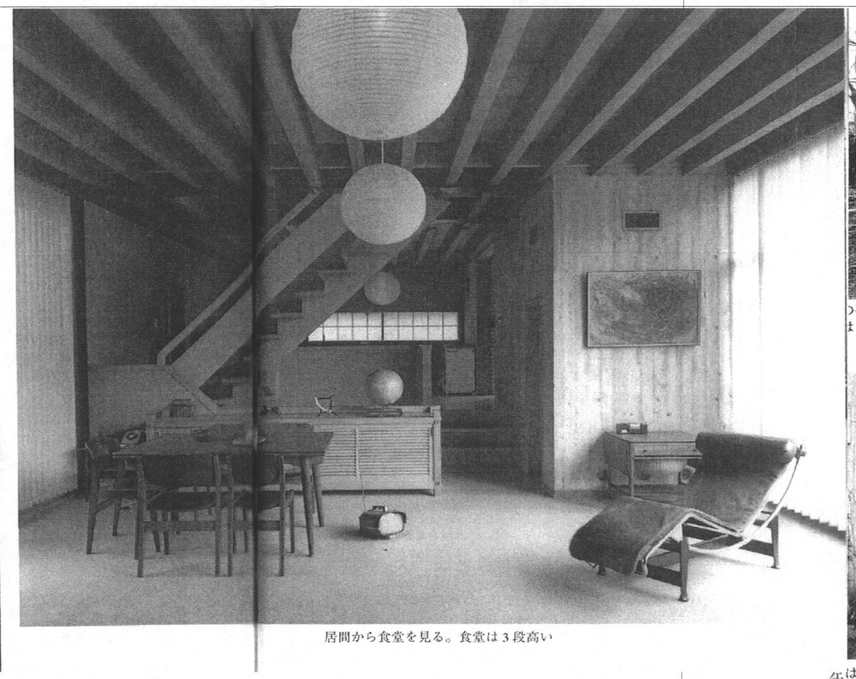
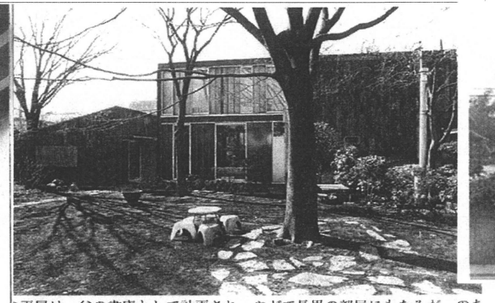
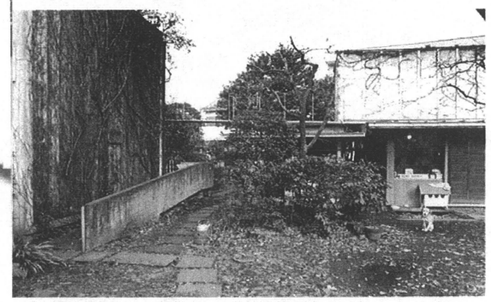
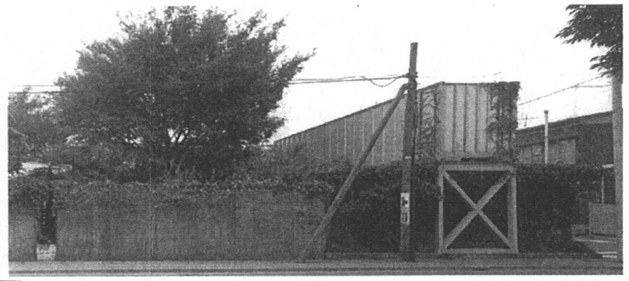
◎-D「不要なものにそうろうにおいて、必要なものだけをこちらに移す。親父の家が隣にあったから、あのような15坪のところで暮らせたわけです。
実は作品の中に私の妻が亡くなって、その時期は私たちの住宅に戻り、現在の私の住まいである「新・私の家」の工事、もともとはなくなった父母のための居室として増築された続き部屋で行われました。この部屋の離設をちょっと変えることにより、そこはわが家の小さなギャベルになります。そのときは、奥の和室の襖戸を外して子宮の和室の茶タンスの前面にして、代わりに和室の襖を和戸のようにして約めて離設をしました。P.128

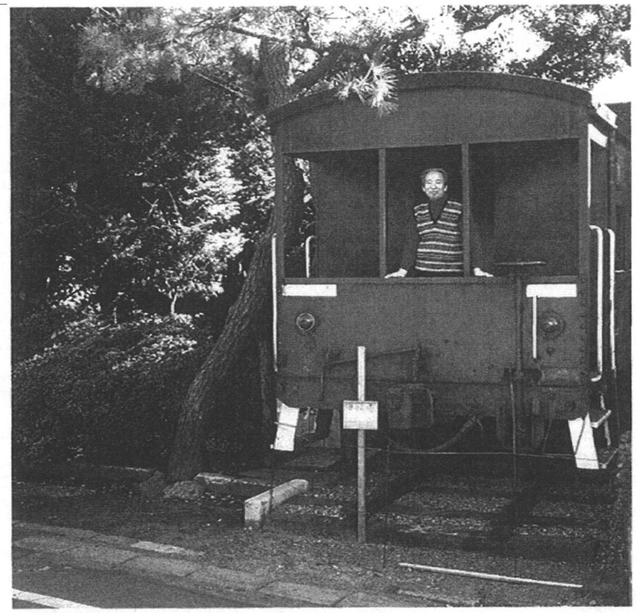
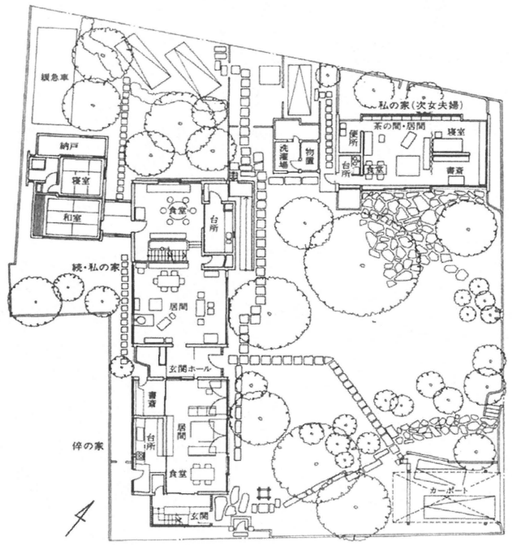
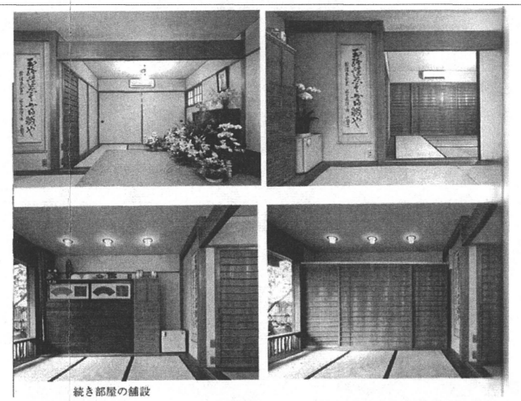
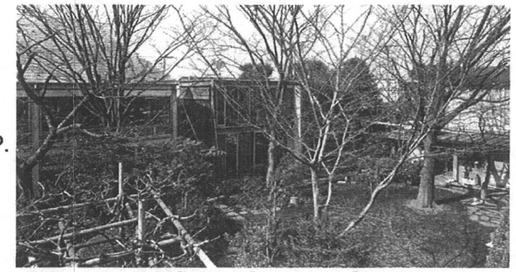
	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960
住宅の経過	「私の家」竣工　グロピウス見学 一九五四年、戦後九年目のことである。私は東京工業大学の建築材料研究所の若い助教授で、当時の国際的な大問題であった戦後復興の課題に取り組んでいた。この自宅もその解決法のひとつとしての、自作自演の試作住宅である。 広さは、東西一〇メートル、南北五メートルで、五〇平方メートル。この広さ、あるいは狭さも、当時の研究調査の結果である。P.146		この頃から靴を脱ぐ	床暖房が作動	**⑥-A タタミの台は下にゴムの車がついていて、どこへでも転がして行ける。天気のよい日には庭にも出せる。夏の夕涼みなどにもよい。また、我々の生活のなかにはどうしてもタタミの要る伝統的な仕様式があって、例えば和服をタタムときなどにはどうしてもこの位のタタミがいる。また、資料の整理などのときにもそれを拡げるに使利。勉強机は檜で、製図板にもなる。食卓・製図机・仕事机，タタミの台・ガラス戸のモジュールを統一して、しつらえを楽にしようと試みている。**P.36 この家は竣工届を出して四年も経っているが、本当にはできあがっていない。永久に完成しないだろう。**⑦-A 妻の健康のこともあるので最小限のhouse keepingですむように設計したから、台所にしてもおそらく最小の台所に属する。それでいて、パーティなどのときは誰かが手伝えるようにもなっている。**ほかにも御自慢はあるが、建ってから日が経つと、いろいろよくないところもわかってきて、たとえば北壁の温泉の脱衣箱然とした棚など、露出過度なので、半分ぐらいは一罪をつけてもいいと考えている。靴のまま室内に入る仕様式は困難もあるが、何とか続けていきたい。その困難というのは来客の教養の問題だけで、庭から室内、室内から庭のcirculationで靴をいちいち脱いだり履いたりしていては、庭と室内を一体に運営できない。家族はむしろハダシで庭へ飛び出している。庭の樹々もずっとよくなってきた。小市民的な希いのようだが、「私の家」をよいhouseであると同時によいhomeにつくりあげたい。PP.36-39 石の上にも三年といって、この鉄平石の床にパネルヒーテイングの配管が当初から設置してあったのですが、ボイラーを買うお金がなくて冷たい石の上に二年も生活していました。クリスマスのパーティで、お客からは「また、今年も入りませんでしたね」といわれたものです。さすがに寒かった(笑)。でもまだ若かったからね。**⑦-A かみさんがその少し前に肺浸淵になったので、「大気。安静。栄養」をテーマにした家でもあるのです。だから開けっ放しです。親父がよく「この家は寒いね」って感心してました。**P.107			**⑦-B この頃から防空壕であった地下室を子供室として利用** **⑥-B 門がはじめは東側に建物に接してあったのに、いまではずっと南東隅に移っている。この位置に門が移る前には、今のと、初めのとの丁度中間ぐらいのところに門があったこともある。いまの門はずっと本屋から離れて庭を縦断して門から玄関への長いアプローチになっている。**動線学的にいえば門から玄関までは近いのがよいのにきまっているし、その玄関までのアプローチが延々と主庭の中を抜けているなどというのは建築評論家をして云わしめなくても、世に流布されている住宅書の公式からすれば最も愚かしいことのようである。だからこそはじめは公式通りに、玄関のすぐ横に問があったのだが、この来客にとっての都合のよい動線は同時にコソ泥棒氏にとっても都合がよいわけだし、こうした一室住居に住んでいると、突然目の前にどこかよその人が現われるよりも、玄関からは三〇メートルもある門から延々と誰かが入ってくるのを木の間がくれに発見できるほうが、暮らし易い。P.40	
図面及び写真	 ①-C 最小壁量 ①-D 構造と空間の一体化 ①-E ワンルーム住宅の一つの帰結 1 入口　2 居間　3 家事室　4 寝室 5 台所　6 トイレ 私の家　平面配置図　S=1:300 P.11		 寸法やモジュールにさまざまな工夫とアイデアが詰め込まれている ①-F 梁型にかわるハブ・マイヤートラス ⑤-C 屋根スラブとハブ・マイヤートラス P.37	 庭先にて、父と篤。1959年頃 雪の降った日、ちょうと誌社の取材があった		 移動式タタミの上はものを広げるのにも都合がいい  ときには、ベビーサークル代わりに	
家族関係	清、ゆき、長女、長男　「私の家」同居 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男　「私の家」同居 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居　長女:地下室を利用 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居　長女:地下室を利用 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居　長女:地下室を利用 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居　長女:地下室を利用 父、母　主家に居住
家族成員の発達段階	清:36歳　東京工業大学助教授 一連の住宅により日本建築学会賞 グロピウスの尽力により奨学金を得て一年間彼の事務所TACに招かれる ゆき: 長女　ゆり:7歳　小学2年生 長男　篤:誕生	清:37歳　ヨーロッパ経由で帰国 ゆき: 長女　ゆり:8歳　小学3年生 長男　篤:1歳	清:38歳 ゆき: 長女　ゆり:9歳　小学4年生 長男　篤:2歳 次女　いせ誕生	清:39歳 ゆき: 長女　ゆり:10歳　小学5年生 長男　篤:3歳 次女　いせ:1歳	清:40歳 ゆき: 長女　ゆり:11歳　小学6年生 長男　篤:4歳 次女　いせ:2歳	清:41歳 ゆき: 長女　ゆり:12歳　中学1年生 長男　篤:5歳 次女　いせ:3歳	清:42歳 ゆき: 長女　ゆり:13歳　中学2年生 長男　篤:6歳　小学1年生 次女　いせ:4歳

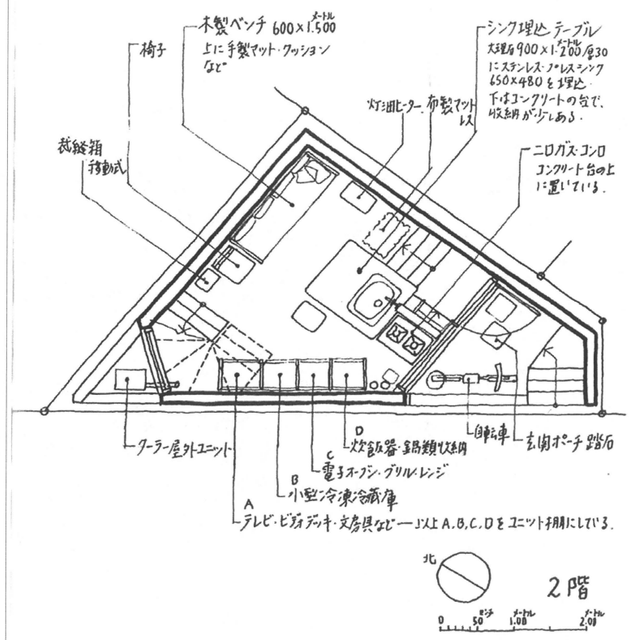
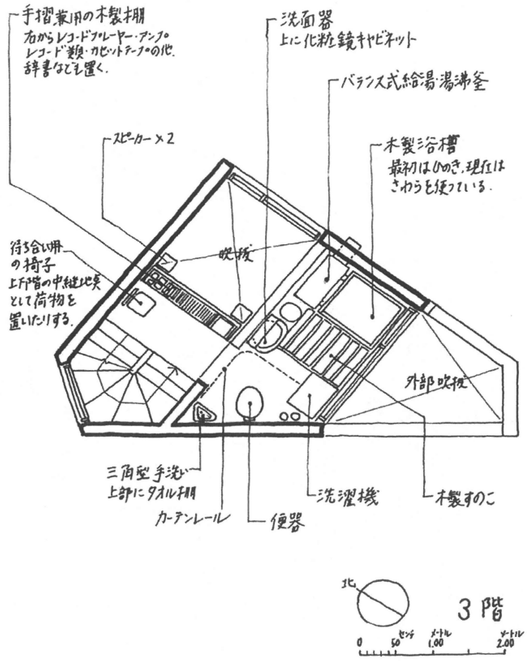
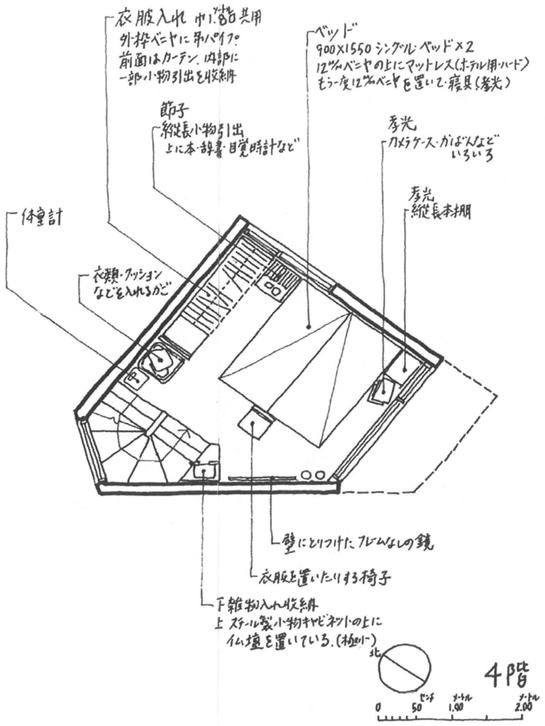
	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967
住宅の経過	前庭の緑片石は軒下の一部を残して剝す 敷地南西の隅に子供用の小屋を建てる わが家には玄関らしい玄関も、門らしい門もないから、はじめての人は家の回りをグルグル回って当惑されたあげく、隣の父の家の門から入って来る方もある。門がないのは戸別割りのお祭の寄附も父の家と一緒で済ませられるという特徴もあるが、玄関のないというのは靴脱ぎに困る。⑨-A **もともとこの家は靴のまま入ろうと計画し、はじめの二年ほどはそれを実行し、子供達にはたいへん評判がよかったのだが、掃除をする側から抗議がでた。家の連中だけのときは、家の近所は完全な舗装道路ばかりだし、庭も芝生と緑泥片岩の石畳みで、ちょっと気をつければ泥が家の中へ入ってくるハズはない。私を含めて、夏などはむしろハダシで庭へ出たり、自動車で出かけるときなどはハダシのほうがアクセルの感じがでてよいものなので、いわゆる下足と上足の区別なしで暮らしていた。しかし掃除側の苦情というのは、お客の泥靴と煙草の灰や吸殻の始末である。泥拭いのマットを置いてあっても、まず靴を拭う人は殆んど稀で、さらに悪いことは煙草の吸殻を絨毯の上に棄てた上をその泥靴でギュッと踏みつぶす人まで現れて、とうとう下足のまま室の中に入ることはそういう外部事情からやめてしまった。** P.42		庭の南に父の書庫を建てる ⑥-C **特に冬のパネルヒーティングをはじめてからは、椅子などもあまり利用しないで石のユカの上にみんなペッタリと尻を落着けたり、靴など履いているよりも足袋だけか、ハダシのほうが気持ちがよい。靴を脱ぐというよりもハダシの生活は内部事情からはじまって、いまは庭でも子供達は勿論私も合めてみんなハダシ同様で暮らしている。家には犬と猫がいるが彼等はもちろんハダシで家の内外を歩きまわっている。この家の最大の実験はどのくらい扉なしで暮らせるだろうかということであった。これは家人に関する限り成功している。** 「先生の家はトイレに扉がないから……」ということが知れわたったので、お客さまも、予め用を足してきてくれるので、それほどは不便を掛けないようになったが、どうしてもという方には隣に住んでいる旧態依然の両親の家のを利用してもらっている。庭の樹々や壁に這い上った蔦が、軒裏を匐い軒先に垂れ下って、スダレのようになっている。道を隔てた向いの雑木林には小島が棲んでいて、夕方や朝のさえずりはいまだに郊外の詩情をしのばせてくれる。 ⑨-B **建てた頃は追剥が出そうなほど静かだった家の前の道は、近頃では車が氾濫して、毎月一回ぐらいは衝突の事故が近所である程になった。** PP.43.44.	西北隅にあった応接室を取り壊し、 両親の隠居所を建てる ⑦-C **そのうち、子ども達も大きくなってきて、RC造の五〇平方メートルに私たち夫婦と四人の子どもがヒシメキ、隣の六〇坪の木造は老人二人と女中だけというアンバランスと、機能が老朽化、陳腐化した昭和初期の木造住宅は、掃除にしても接客にしても老境に入った両親達の手に負えなくなってきた。折角いてくれた女中も良縁を得て暇をということ等、この木造家屋の建て換えの必然性が生じてきた。しかし、それを一気にこわしては、建て替える間の両親の居場所がなくなるので、まず両親の居室を建てることにして、まずは無用の長物化し、家人は洋館といいならわしていた、室内の壁と天井はプラスター、外壁はラスモルタルの人造石洗い出しという大正末から昭和初期にかけて流行した応接室を取りこわし、その跡とその西側にあった庭をつぶして両親のための隠居所を建てた。**それから、老人の私有財産の整理も考えたのだが、これは老人の強い反対にあった。両親は昔から新しがり屋だったのに、これも齢のセイだろうか、役にもたたぬ古物を後生大事に保存しておきたがるものとは思ったが、⑥-D **親孝行の一環として、プレファブの小屋を前庭に建ててこの古物収容所とした。**PP.45.46		
図面及び写真	 1960年代初め頃の様子。右側はバス通りで防音のためにコンクリートの塀を建てた。すぐ右にあった門はすでに南東側に移っている。左側は父が購入した木造の二階屋で昭和初期に建てられたもの。下の方にあるのは物置をかねた小亭 P.41			 隠居所の南側の大きな1枚ガラスはめ殺し窓	P.49	 わが家の先輩 (海+山+庭)×四季の暮らし 清家 清 家を語れば、家族を語った 『家庭画報』1966年2月号より	
家族関係	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居　長女:地下室を子供室として利用 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母　主家に居住	清、ゆき、長女、長男、次女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母　主家に居住 父は書庫も利用	清、ゆき、長女、長男、次女、三女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母　隠居所に居住	清、ゆき、長女、長男、次女、三女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母　隠居所に居住	清、ゆき、長女、長男、次女、三女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母　隠居所に居住
家族成員の発達段階	清:43歳 ゆき: 長女　ゆり:14歳　中学3年生 長男　篤:7歳　小学2年生 次女　いせ:5歳	清:44歳　東京工業大学教授 ゆき: 長女　ゆり:15歳　高校1年生 長男　篤:8歳　小学3年生 次女　いせ:6歳　小学1年生	清:45歳 ゆき: 長女　ゆり:16歳　高校2年生 長男　篤:9歳　小学4年生 次女　いせ:7歳　小学2年生	清:46歳 ゆき: 長女　ゆり:17歳　高校3年生 長男　篤:10歳　小学5年生 次女　いせ:8歳　小学3年生	清:47歳 ゆき: 長女　ゆり:18歳 長男　篤:11歳　小学6年生 次女　いせ:9歳　小学4年生 三女　あさ:誕生	清:48歳 ゆき: 長女　ゆり:19歳 長男　篤:12歳　中学1年生 次女　いせ:10歳　小学5年生 三女　あさ:1歳	清:49歳 ゆき: 長女　ゆり:20歳 長男　篤:13歳　中学2年生 次女　いせ:11歳　小学6年生 三女　あさ:2歳

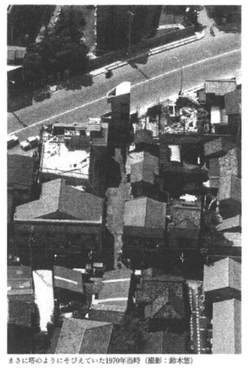
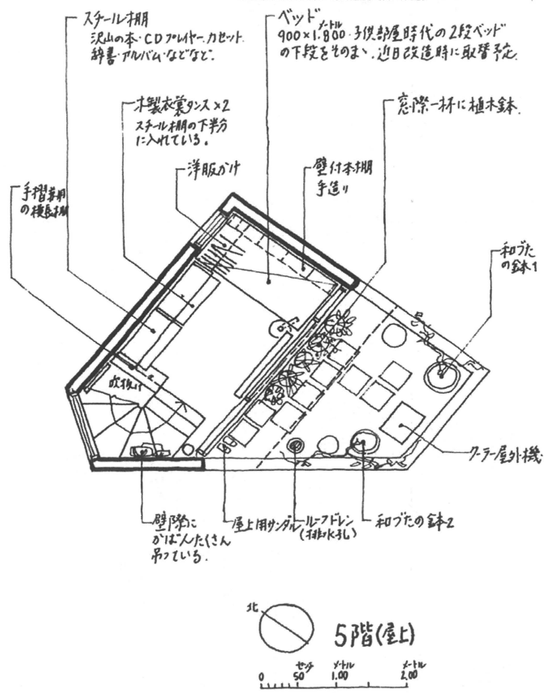
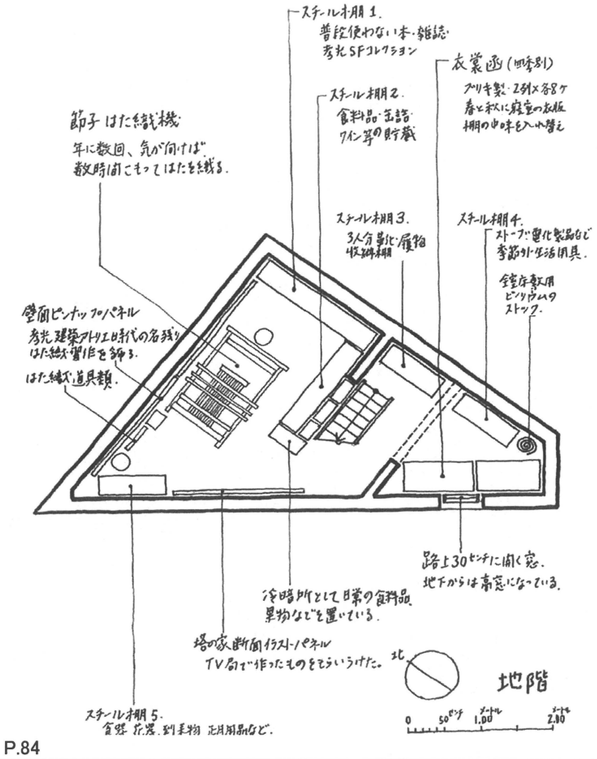
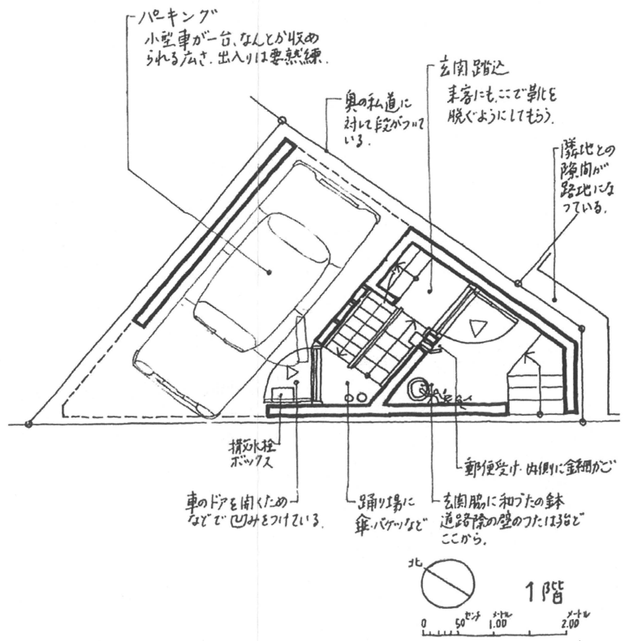
「私の家」居住経過

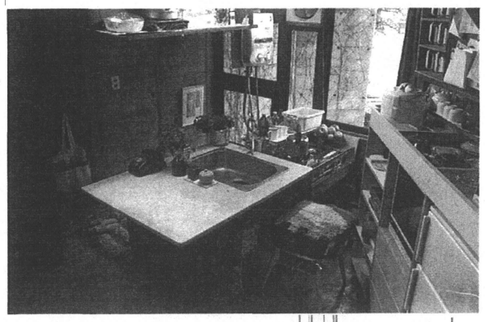
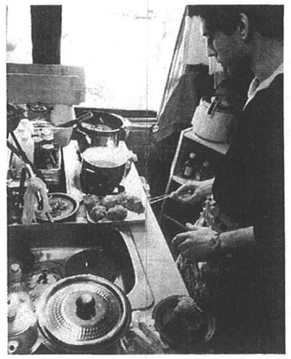
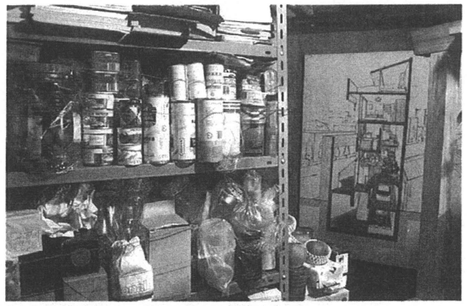
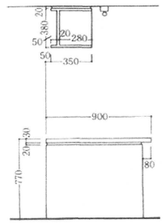
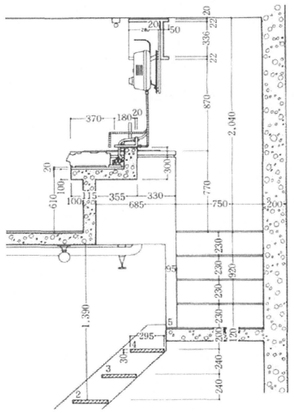
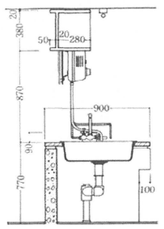
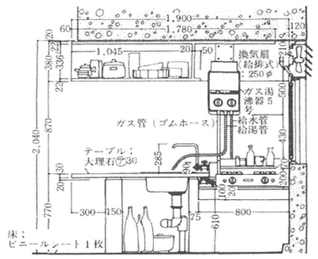
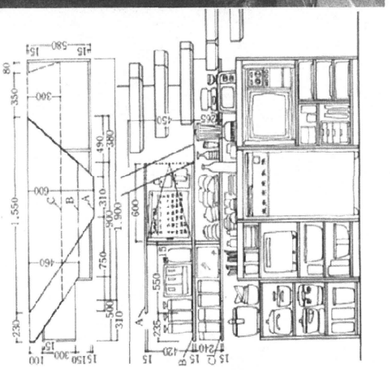
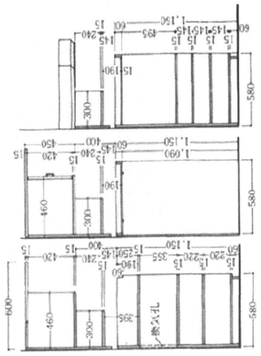
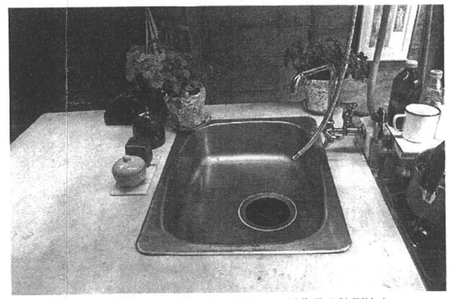
	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974
住宅の経過	⑧-A こうしたライフサイクルの中での過渡期現象は、タイミングを失うとなかなかできないものだ。もう少し早くやっておけばよかったかと思うが、まずまずの成功だった。それで私たちのときはもう少し早くやらなければならないと思って、いま次の計画を立てている。 ⑦-D 両親は新居が気に入って、二人ともこの隠居所で死んだ。ほとんど隣地いっぱいに建てたので隣地との間の外壁はRC造とし、RC造の浴室を控え壁にしてあとは木造になっている。南の窓は4メートル×ニメートルの大きな一枚ガラスはめ絞しのピクチャーウインドーになっていて、窓下は掃き出し窓の通風窓になっている。母はこの窓から戸外を見るのが好きだった。庭の四季の移り変わりが見えるように植樹にも気を配った。大きなザクロの樹は妹が小学生の頃に植えた樹だったり、母にとっては思い出が多かったのだろう。 P.47		「続・私の家」竣工 ⑧-A 昭和二九年に旧居五〇平方メートルを父の裏庭に建てた。その後一六年、家族計画と建築計画の齟齬、生活諸般の変化に対処して、新しくこの家をつくった。 ⑨-C この新主屋は、昭和初年に建った旧主屋の改築である。この一六年間に環境も変った。静かだった住宅地も、自動車の騒音、ちりがみ交換のスピーカーと、勉強のときは窓も開けておけないほどになってしまった。私も静けさが必要な齢になったのかもしれぬ。 まず、旧居の失敗の第一は靴をはいたままで暮らそうと企てたこと。それで、当時いいふるされたことばだが、玄関というような封建的な所産は排除するという意味もあって、庭からじかにという試みをしてみた。ところが招かれざる客だけでなく、ゴミ, 大, 騒音etc.が遠慮会釈なく侵入してくるのにはおどろいた。それで、こんどの家は立派な玄関がついている。 P.46		家の維持管理はむずかしい。放っておくと建物というものはドンドン悪くなっていく。管理を充分にしても老化は避け得ない。それが、庭のほうは放っておいても、それはそれで、それなりに充分美しい。放って荒れるに任せたような庭をわざわざつくっているひとさえある。 P.142		⑧-B「私の家」に長女の家族が住む 現在もこの家に世代交替して次の世代の親子四人が住み、その狭さをエンジョイしている。 P.147
図面及び写真	 一九六七年、それまで両親が住んでいた母屋を取り壊す  一九六九年、鉄骨が立ち上がった「続・私の家」 P.46		 2 階平面 地階平面  コンテナ平面  平面配置図 1970 S=1:400		 「続・私の家」完成間もない頃 P.21		
家族関係	清、ゆき、長女、長男、次女、三女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母 隠居所に居住	清、ゆき、長女、長男、次女、三女「私の家」同居 子供達は子供用の小屋を利用 父、母 隠居所に居住	清、ゆき、長女、長男、次女、三女「続・私の家」同居 父、母 隠居所に居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 父、母 隠居所に居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 父、隠居所に居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住
家族成員の発達段階	清:50歳 株式会社ﾃﾞｻﾞｲﾝｼｽﾃﾑ設立 ゆき: 長女 ゆり:21歳 長男 篤:14歳 中学3年生 次女 いせ:12歳 中学1年生 三女 あさ:3歳	清:51歳 ゆき: 長女 ゆり:22歳 長男 篤:15歳 高校1年生 次女 いせ:13歳 中学2年生 三女 あさ:4歳	清:52歳 ゆき: 長女 ゆり:23歳 長男 篤:16歳 高校2年生 次女 いせ:14歳 中学3年生 三女 あさ:5歳	清:53歳 ゆき: 長女 ゆり:24歳 八木幸二と結婚シリア へ 長男 篤:17歳 高校3年生 次女 いせ:15歳 高校1年生 三女 あさ:6歳 小学校入学 母:逝去	清:54歳 ゆき: 長女 ゆり:25歳 長男 篤:18歳 次女 いせ:16歳 高校2年生 三女 あさ:7歳 小学2年生	清:55歳 ゆき: 長女 ゆり:26歳 帰国 長男 篤:19歳 次女 いせ:17歳 高校3年生 三女 あさ:8歳 小学3年生 父:逝去	清:56歳 東京工業大学工学部長 ゆき: 長女 ゆり:27歳 長男 篤:20歳 次女 いせ:18歳 三女 あさ:9歳 小学4年生 「私の家」に長女家族が住む

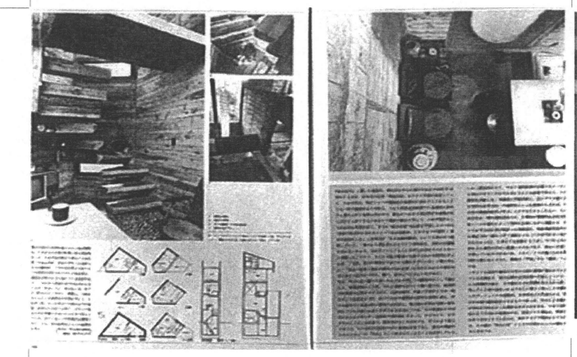
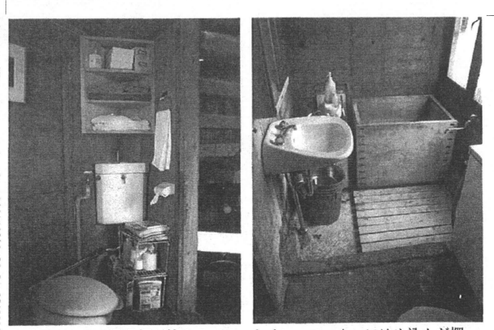
	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981
住宅の経過	⑧-C オモヤの木造をつぶしたあとには鉄骨造の新しいオモヤ(「統・私の家」)を建てた。工期を短縮しなければ上期中の仮り住まいが解消しないので、半地下と基礎の部分はRC造にしたが、あとはH鋼で全構造を一気に組立て、地階から二階までの三階分を同時に竣工させる方式にした。鉄骨造はプレファブ化が容易で、工場加工が多いから、現場工程が少なくてすみ、建て替えなどのときに具合がよい。RC造だと仮枠の梁下の文柱を外すのに四週間はかかり、コンクリートの固まるまでは、造作工事もできないが、鉄骨造なら、溶接のホトボリが冷めればすぐに大工の仕事ができる。PP.47-49			書庫兼物置として船舶用中古コンテナを載せる ⑦-E「私の家」が建ってから四半世紀が経って、家族のライフサイクルでは一世代が交替することになる。 一九七八年、私は還暦となって東京工業大学を定年。大学に置いていた本だの、何かと滞った垢のようなものを持ち帰らねばならなくなり、外洋船に乗せる中古コンテナを購入してそれに格納、「私の家」の上に載せた。と言ってもそれは建物の上には直接載っていない。コンテナを単純梁に見立て、「私の家」の西側にこしらえた洗濯場と、東側の道路の間に丁度あった余地を利用した支柱に渡し込んで架けた。コンテナ自体は剛体の単純梁。洗濯側がピンで、東側の支柱がローラということになる。道路側からクレーンで釣り込んだが、釣り込みに二〇分も要しなかった。P.57		⑩-B「清家は、生活が複雑であるのに単化してゆく「機能主義」には限界があるといって、「舗設方式の復活」を提案する。しかし彼は、このような転用よりもむしろ耐用年限のながくなってゆく建築が、めまぐるしい生活の変化に耐えられるようにと、生活様式の急速な変化の方を重く見ている。たしかに戦後は住様式の変化がめまぐるしかった。P.197	
図面及び写真	 2階南側部分  P.24	 居間から食堂を見る。食堂は3段高い		 の平屋は、父の書庫として計画され、やがて長男の部屋にもなるが、のちはここに「倅の家」が建つ  左は台所から庭へ降りるランプ。正面には洗濯室上に載ったコンテナへのブリッジが通る		 P.55 P.57	
家族関係	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、次女、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住
家族成員の発達段階	清:57歳 ゆき: 長女　ゆり:28歳 長男　篤:21歳 次女　いせ:19歳 三女　あさ:10歳　小学5年生	清:58歳 ゆき: 長女　ゆり:29歳 長男　篤:22歳 次女　いせ:20歳 三女　あさ:11歳　小学6年生	清:59歳　東京芸術大学教授 ゆき: 長女　ゆり:30歳 長男　篤:23歳 次女　いせ:21歳 三女　あさ:12歳　中学1年生	清:60歳 ゆき: 長女　ゆり:31歳 長男　篤:24歳　3月に慶應義塾大学経済 学部を卒業 次女　いせ:22歳 三女　あさ:13歳　中学2年生	清:61歳 ゆき: 長女　ゆり:32歳 長男　篤:25歳 次女　いせ:23歳 三女　あさ:14歳　中学3年生	清:62歳　東京芸術大学美術学部部長 ゆき: 長女　ゆり:33歳 長男　篤:26歳　3月に慶応大学大学院商 学研究科修士課程を修了 慶応大学助手 次女　いせ:24歳 三女　あさ:15歳　高校1年生	清:62歳　日本建築学会会長 ゆき: 長女　ゆり:34歳 長男　篤:27歳 次女　いせ:25歳 三女　あさ:16歳　高校2年生

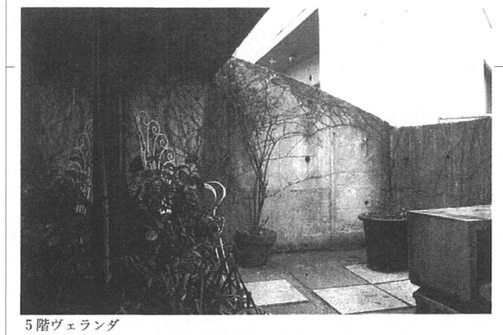
	1982	1983	1985	1986	1989	1991	1996
住宅の経過	緩急車設置 「緑の街づくり」などと簡単にいう人は多いのですが、さて樹木や植生を保存保護するのは、経済的にも並大抵のことではありません。長男が生まれたとき、岳父が噌ってくれたのが、中央の欅です。区役所が区の保護樹に指定して、毎年七千円の補助金をくれます。そのほかにも桜の老樹と、もう一本「倅の家」の前に保護樹に指定された樹があります。 **⑨-D 成人ひとりずつが自動車の運転免許をもっていて、文句をいえる義理ではないのですが、この五〇余年の間の社会変化の中で大きいのは、モータリゼーションとコミュニケーション・システムです。お蔭で騒音・排気ガス公害と長電話に悩まされています。** **⑩-A 家相書には乾(北西)に蔵、巽(南東)に門を設けるのは吉相ということで、乾には貨車(緩急車ワフ、七・五×二・五メートル)があります。巽にはステイションワゴンがあります。なぜか孫六人全員男の子に恵まれて、その孫の友人の男の子たちが、この「私の家」住居群を十分に利用してくれているようです。子供たちと犬と烏と鳩と小鳥と昆虫と……、芝生は倅や娘、さらに孫と犬とがすっかり荒してしまいました。踏まれてやっと伸びたところで、名も知らぬいわゆる雑草が越冬するようです。宿根もあるでしょう、蒔種もしないのに生えてくる草花があって、孫と一緒に図鑑で探しています。そのうち草葉の陰から・・・・・。** PP.60-62				「倅の家」竣工 **⑦-F 昨年の九月、ちょうど10年間連れ添った私の妻が亡くなった。この春から体調をくずしてすぐ向かいの在原病院に入院していたが、九月初めにわが家に帰って月が変わらぬうちに帰らぬ身となった。わが家は代々プロテスタントのクリスチャンなので、葬儀は私たちの信仰に則り、牧師夫妻と近親者だけで、私たちの家の西側の統き部屋で行なわれた。 ⑥-F 母が亡くなったときも父が亡くなったときも、同じ部屋で葬儀は行なわれた。ちょうど彼岸のときで、彼女の故郷の北葛飾の家の庭に咲いていた秋の野草を取り寄せ、ささやかな飾りつけは私のロータリークラブの友人の葬儀社の主人がやってくれた。立派な檜の棺が二〇万円、あと霊柩車その他の費用も込めて六〇万円でやってくれた。こうしてわが家の小さなチヤペルの舗設が聖霊に満たされた。** 改めて振り返ると、「私の家」は、父母のために設計されたものであるが、かわりに私たち夫婦が住みはじめ、ここで四人の子供たちが生まれ育った。そのあと、長女の家族が住んで、現在は次女の家族が住みついて、出ていってくれる気配がないのだが、私としてはもう一度、出発点に戻って自分の終の住処としたい気持ちも残っている。この間、「続・私の家」、「倅の家」が敷地内に増え、南の門には仕事部屋、「私の家」の上にはコンテナが置かれ、さらには国鉄が民営化されたときの払い下げ緩急車まで加わり、庭の木々も高く、太くなった。 「私の家」と名づけて発表した住まいであるが、当然のことながら実際は「私たちの家」であった。PP.234.235	「私の家」には、長女の家族に代わって次女家族が住む
図面及び写真	 堂々と道路に面して置かれた緩急車 P.61			 P.26	 続き部屋の舗設  中庭を囲んで、左から、「倅の家」、「続・私の家」、「私の家」		
家族関係	清、ゆき、長男、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、長男、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住	清、ゆき、三女「続・私の家」同居 「私の家」に長女家族が居住 「倅の家」に長男家族が居住	清、ゆき、「続・私の家」同居 「私の家」に次女家族が居住 「倅の家」に長男家族が居住	清、ゆき、「続・私の家」同居 「私の家」に次女家族が2005年まで居住 「倅の家」に長男家族が居住
家族成員の発達段階	清:63歳 ゆき: 長女　ゆり:35歳 長男　篤:28歳　3月に慶応大学大学院商学研究科博士課程を単位取得退学 次女　いせ:26歳 三女　あさ:17歳　高校3年生	清:64歳 ゆき: 長女　ゆり:36歳 長男　篤:29歳 次女　いせ:27歳 三女　あさ:18歳　高校3年生	清:66歳 ゆき: 長女　ゆり:38歳 長男　篤:31歳 次女　いせ:28歳 三女　あさ:19歳	清:67歳　東京芸術大学退官 ゆき: 長女　ゆり:39歳 長男　篤:32歳 次女　いせ:29歳 三女　あさ:20歳	清:70歳 ゆき: 長女　ゆり:42歳 長男　篤:34歳 次女　いせ:32歳 三女　あさ:23歳 長男　篤　「倅の家」に住む	清:72歳　札幌市立高等専門学校長 ゆき: 長女　ゆり:42歳 長男　篤:34歳 次女　いせ:32歳 三女　あさ:23歳 「私の家」には、長女家族に代わって次女家族が住む	清:77歳　　2005年に86歳で逝去 ゆき:　逝去 長女　ゆり:47歳 長男　篤:39歳 次女　いせ:37歳 三女　あさ:28歳

	1966	1967	1968	1969
住宅の経過	等の家　工事中 私が最初に行った建築現場って覚えてる。小学校一年の時。その年に、大阪から上京して、この家ができるまで、近くで仮住まいしてたでしょう。その時。建設現場って初めてだったし、まだ工事の途中でいろんなものがちらかっているでしょう。ここに住むのかと思うと、子ども心になんだかみじめな気持になったわね(笑)。　利恵 PP.242.243 現場で原寸で寸法を確認した。 私にとってはその壁の内側の広さが、本当に自分や家族の身の置き所を作り出してくれるのかどうか、それを確かめるために、より大きな図面を描き、その空白部分をにらんでは、椅子を置いたりベッドを描き込んだりしては身体で確かめていったのであった。　孝光 P.129	**塔の家竣工** **⑥-A 新築の当初、最小限の家具をということでテーブルの上につり戸棚をつけた。テーブルの上は食器棚のつもり、・・・。 私は我が家の食器の数など、どれ位あるのか全然知らなかったので、これ位の棚で適当に使ってくれると思っていたらこれだけでは忽ち駄目が出た。そこで流しコンロの反対側、吊戸棚の下に何か家具をということになった。それに冷蔵庫とあり合わせの台の上に置かれたガスオーブンの廻りも処理しなければならない。台所だけでなく、居間の廻りに必要な最小限の事務用品や薬品庫、それにテレビの収納台などが必要だ。それらをひとまとめにしてユニット式の棚を作ろうということになったのが現在の収納家具で、その上部を全部使って食器類の置き場所にしている。孝光P.56** **1967年4月　地下室にて東孝光建築研究所設立**	塔の家居住経過 住みはじめのころ、東と探して青山の店で見つけたのを、挿木で増やしたのが玄関ポーチの和蔦。葉の大きさと落葉することが、東のお気に入りである。壁に掛けたベゴニアの鉢は、越冬したもの、春に買い足したもの、とりどりに花を咲かせる。他の花もいろいろ飾ってみたが、ホロホロ花びらを散らす原種ベゴニアを、私達は好んでいる。P.95 1968年11月　事務所を地下室から原宿セントラルアパート459号室へ移転	塔の家居住経過 **⑥-B 我が家は、日本古来の仕来たり" 衣替え" を保っている。地下室納戸にブリキ製の衣裳缶が一六佃。結婚当初、東と私、一つずつ持って来たのが、 一つずつえて一六個。今では、衣服をこれに合わせて納めるのに懸命の衣替え。その時は、藍染めの大風呂敷数枚に衣服を包み込み、寝室⇔i地下室、何度も何度も上下する。重い衣裳缶を、荷役人夫並みに、下ろしたり積んだり、それはもう、大へんな重労働。何時もこの時、私は、われながら"何と、力持ちである事よ！"と自賛する。P.76**
図面及び写真	 	 	
	P.42	P.66	P.74	
家族関係	単身赴任だった孝光が、自邸建設に伴い家族を大阪から東京に呼び寄せる。仮住まいで家族同居しながら、現場を家族とともに観に行く。	塔の家入居　父親・母親・長女　同居	塔の家入居　父親・母親・長女　同居	塔の家入居　父親・母親・長女　同居
家族成員の発達段階	孝光：33歳　坂倉準三建築研究所勤務 節子：34歳　1957年に孝光と結婚 利恵：7歳　　小学校入学	孝光：34歳　東孝光建築研究所設立 節子：35歳 利恵：8歳　　小学2年生 小学校の低学年の時は年上の人は招んでもいいけれど、年下の子は危ないから、と母にいわれてました。小学生のとき、引越して初めての誕生日に、 一〇人ぐらいの同級生を招んで、家中で隠れんぼをして遊びましたが、結局、誰も階段から落ちたりはしませんでした。P.254　利恵	孝光：35歳　自邸地下室にて東孝光建築研究所設立 節子：36歳 利恵：8歳　　小学3年生	孝光：36歳　事務所を地下室から移転 節子：37歳 利恵：9歳　　小学4年生

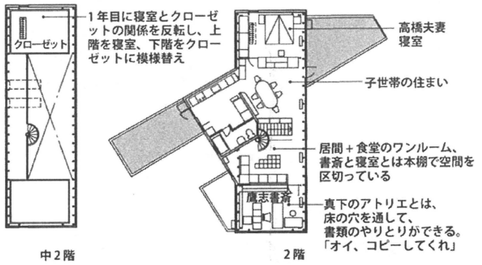
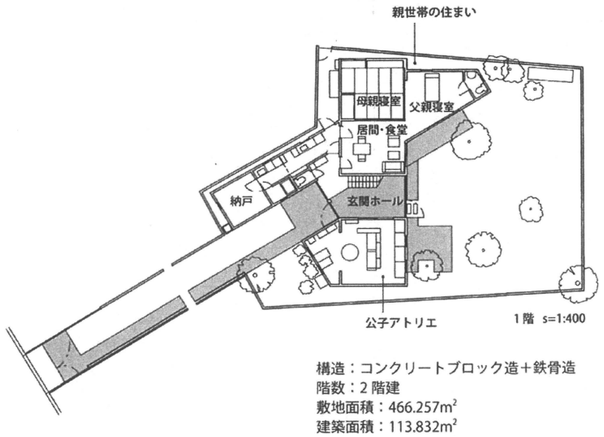
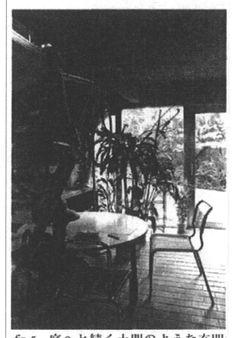
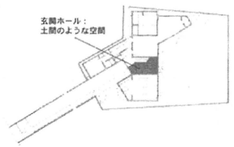
	1970	1971	1972	1973
住宅の経過	塔の家居住経過 周囲の建物はまだ低く 聳えたっていた  まさに塔のようにそびえていた1970年当時（撮影：鈴木恵）	塔の家居住経過 ⑦-A「白分の城に閉じこもる子にはしたくなかった。どんな環境にいても、白分を見失わず、白分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった」節子 この家じゃ必死で自分を保とうとしなければ親の暮しにて引きずり込まれてしまう。だから、イヤなことはイヤと大声ではっきり叫ぶ主体性が身についたはずですよ」孝光 P.181	塔の家居住経過 ⑥-C 年に二回の大片付けが、地下室の保持方法。その時、私は夜叉と化し、情愛、執着かなぐり捨てて！わが身、わが心、切り刻む思いでバッサバッサと、家から物を切り捨てる。普段でも私は、かなり物離れの良い方で、「読んだものは頭の中へ」「感じたものは心の中へ」と、自分にかけ声をかけているのだが、それでもこの整理時には、本当に大切なものを見極めて、なんとなく大事に思えるものは思い切って切り捨てる。切り捨てた時には、確かに寂しく心細いが、心細さを補い、寂しさを埋めようと、次を求め希んで活きる。人間生活の新陳代謝。 P.87	塔の家　居住経過 昭和四〇年代　仕事にドライブに車の使用回数多く、ガレージの空き多し。 P.91
図面及び写真	P.105  	 	 	
家族関係	塔の家入居　父親・母親・長女　同居	塔の家入居　父親・母親・長女　同居	塔の家入居　父親・母親・長女　同居	塔の家入居　父親・母親・長女　同居
家族成員の発達段階	孝光：37歳　東孝光建築研究所 節子：38歳 利恵：10歳　小学5年生	孝光：38歳　東孝光建築研究所 節子：39歳 利恵：11歳　小学6年生	孝光：39歳　東孝光建築研究所 節子：40歳 利恵：12歳　中学1年生	孝光：40歳　東孝光建築研究所 節子：41歳 利恵：13歳　中学2年生

	1974	1975	1976	1977
住宅の経過	塔の家　居住経過 地下室の中央に鎮座するのは、古風な木の織機一台。ここに住み始めて数年目に、東が買ってくれたもの。今は年に二、三枚、マフラー等を織る。織機に触れると心が和む。もっと広く利用したい地下室に、隠し秘めるようにこの機を置いていることが私の贅沢である。P.87	塔の家　居住経過 狭いがゆえに、立居振舞は、ほとんど一点に立ったままの回転動作である。設備器具すべてが、その動作で手の届く範囲に納まっている。収納面積もごく僅か、親子三人の日常生活に事足りる数が、その最小限度の基礎であり、それにほんのプラスアルファの物があるだけ。従って、一枚の皿も使用頻度夥しく、多目的に使われる。コンロ、湯沸し器、ガスオーヴン、電気釜、冷蔵庫、一応文明の利器の部類に入るこれらも、付属機能の多々ついた物はこわれやすく、また、場所を取るとて、全くそれぞれそれの原型の物である。P.47　⑨-A **南に面した台所の、窓ガラス一枚の外は、東京の真只中、外苑、青山を通り抜ける環状四号線。調理する私と、我が街は、直に繋がる。・・・大都会の真只中の出来事が、窓ガラス一枚こちらの台所で働く私に、ビンビン伝わってくる。我が家の一隅に取りついているのみか、流動する社会の一隅にも。しっかりと取りついた我が台所。世の中と一緒になって動いているこの場所。**PP.49.50	塔の家　居住経過  P.45	 この家のミニ台所で、見事六人分のフルコース料理をつくったディーン・モルツ君 (写真提供：著者) P.45
図面及び写真	 棚には昭和49年からの梅酒や備えの缶詰がズラリ 夏でもひんやりした地下室。１階への階段方向 P.86	 台所断面詳細図   台所展開図  P.51	  P.55	 大理石テーブルに埋込まれたシンクは縦置き。試作品を特別注文。
家族関係	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居	父親・母	父親・母親・長女　同居
家族成員の発達段階	孝光：41歳　東孝光建築研究所 節子：42歳 利恵：14歳　　中学3年生	孝光：42歳　東孝光建築研究所 節子：43歳 利恵：15歳　　日本女子大付属高校入学　高校1年生	孝光：43歳　東孝光建築研究所 節子：44歳 利恵：16歳　　高校2年生	孝光：44歳　東孝光建築研究所 節子：46歳 利恵：17歳　　高校3年生　演劇部の部長 「高校時代は、建築よりも演劇に熱中していて、演劇部の部長をしていましたよ」節子 「高校の頃は、さっきも言ったけど演劇に夢中だったということもあるけど、自分の生活のペースを意識的に守ろうとしていたみたい。家の構造が構造だからすぐ人に巻きこまれちゃうのよね。」利恵 P.245

	1978	1979	1980	1981
住宅の経過	塔の家　居住経過 しかもこの三人は、 一五年後の今もまだその家に住んでいる！設計者であり施主である東は、「このすまいには、 一枚もとびらがない」と竣工時に強調している(「ある抽象的解明」とおり、地下のアトリエにはじまり、居間のある三階から子供部屋の四階にいたるまでの空間はいわば重層化されたワンルームとなって連統している。建物の内外ともに施工精度のあまりよろしくない打放しのままであり、その限られた内部空間の一角を、キャンチレバーの階段が連続的に突きさして迫っている。つい先年、私はあらためてその家をつぶさに見学する機会を得たけれど、その家は竣工時に雑誌に発表された状態とほぼ変わらない荒々しさの中で、彼と彼の家族によって、ゆうゆうと住みこなされているのを見て驚いた。ただ、中での唯一の変化は、雑誌に発表された写真のなかに、おそらく小学校にはいりたての頃と思える可憐な姿が写っている彼の愛嬢が、すでに大学の最終学年をむかえるほどに見事に成人していたことであった。東夫妻もこの狭い空間の中で生きてきたし、お嬢さんも立派に成長した。PP.184.185 長谷川尭	塔の家　居住経過 この木の風呂桶は、保温の具合とか、入った時の肌ざわりがよくてずっと使っていたんですが、一〇年以上たつとやはり老朽化して水が漏れ始めたりしたので、取り替えようということになりました。・・・さわらという、檜に準じて腐りにくい材料のものに取り替えて、現在もその木の風呂を使っています。P.70 **⑦-B「娘も大きくなりまして、家族三人で同じ本を読みそれについて話し合うのが楽しみ」なだけに、特に本か増えてきた。「本は地下室と娘の部屋と東の枕元、それに建築の専門書は事務所に置くようにしていますが、大分一杯になりこれからどこに本棚を作ったらいいか考えている所です。P.175** **⑦-C「三〇代から四〇代へという変化だからまだ余り差はないけれど、六〇歳位になると新しい局面を迎える可能性があると思う。正直な所、多少、若さというものが必要な家かもしれない。絶えずしゃきっとしていないと住みこなせない、という緊張感を幾らかは感じている。」**P.177	塔の家　居住経過 **⑩-A 台所道具もなるべく買わない。道具を使うとかえって手間が煩雑になるからだ。たとえばとろろいも。ミキサーですりおろせば一見簡単そうに見えるが、後始末が大変。それくらいなら、すり鉢で丹念にすった方がいい。洗うのも簡単だし、その上ずっとおいしいのだから。お鍋も大中小と揃えなくとも、小さいものひとつで回数を増やせば済むというわけだ。**P.217　節子	塔の家　居住経過 しかし今となってみると、屋上の三角になっているところは私の造形的な「しっぽ」といいますか、都市住居の機能に徹し切れていなかった部分ではないかと話すことがあるんです。じつは、この家の外壁もコンクリート打放しですけど、道路にまったく平行に建てています。というのは、周囲にビルが並んだ時デザインとか形態が違っても、また材料とか色は違っても壁面がずっとつながっていくことによってある街並みが構成されるわけです。ですから壁面線は大切だと最初から考えました。しかし周囲にビルができて壁面が揃った時に、 一軒だけ背空に突き立った斜めの線で違和感がある。しかし最初は私の家だけしかありませんから、やはり三角にして格好よくやりたいという矛盾があって大変悩みました。結局「まあ先のことはいいや」と三角にしたわけです。その結果、両側のビルは容積率いっぱいに私のところより一層か二層高く建ちましたから、私の家の三角屋根はやはり少し違和感があって街並みに対してあまり溶け込んでないわけです。ですから都市住居には、そういう自分自身のアイデンティティを示す外観だけでなく、街の中でどうつながっていくかという課題があることをもうひとつ指摘しておかなければいけないわけです。PP.106.107　孝光
図面及び写真	 P.214	 二代目さわらの風呂桶が控えるバス・トイレ。コーナーにはめ込んだ棚。 P.70	 P.217	 P.1
家族関係	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居
家族成員の発達段階	孝光：45歳　東孝光建築研究所 節子：46歳 利恵：18歳　　日本女子大学家政学部住居学科入学　大学1年生	孝光：46歳　東孝光建築研究所 節子：47歳 利恵：19歳　　大学2年生	孝光：47歳　東孝光建築研究所 節子：48歳 利恵：20歳　　大学3年生	孝光：48歳　東孝光建築研究所 節子：49歳 利恵：21歳　　大学4年生

	1982	1983	1984	1985
住宅の経過	塔の家　居住経過 ⑩-B　最後にその快適さのこと。住まいは、丈夫で長持ちして、快適でなければならない。当然のことだ。ただし、その快適さの内容が問題らしい。 いくつもの住まい、いくつもの家族とおつき合いしてみると快適さというか、その家に対する満足度と、実際の家の内容とが、必ずしも一致しない。つまり予算がなくてかなり切り詰めたり、省略したりした簡単な家でも(そんな例が私の場合には多いのだが)、住み始めてからの様子を拝見すると、家族が実に楽しく、生き生きと暮らしている。P.147　孝光	塔の家　居住経過 ⑨-B この二〇年近く、青山の界限で暮らしてきた。暮らしてきたなどと何気なく書いているようだが、実は私の場合、文字どおりの意味なのである。″職住近接″それも都心に住み、かつそこで仕事をするというのが私の主義。そのため、神宮前に家をつくり、原宿や青山にアトリエを置いて、毎日歩いて通ってきた。私にとって、この街を歩くということが大切な暮らしの一部だし、またそのお陰でこの街の魅力や変化を見守ることもできたのである。P.102 孝光	塔の家　居住経過 ⑨-C 最初にベゴニアの鉢を三つ、玄関先に、屋上テラスでは、和蔦、柾木、グレープフルーツなどの他に、バラ、チューリップ、山椒、橙々、紅葉、紫蘇、朝顔、水仙、折鶴蘭などが、この二〇年に交代した。玄関脇と屋上に置いた和蔦が外壁の一部を蔽う。P.92 節子 ⑧-A この家は、もともと夫婦と子供のために設計された、言うなれば2．5人向け住宅なので、成人が三人ともなるとさすがに、狭くなってくる。特に私の部屋は本であふれかえってしまう。家族同士の関係も、子供時代とは違った友人的な関係に移行している。P.39　利恵	塔の家　居住経過 塔の家に生きて二〇年、数えきれないお客様をここに迎え、私は彼らから学んできた。日本各地から、海外諸国から。国毎の気質の違い、だが共通の人間性。ロンドンの街中に住む人の、低く細く小さい話し振り、オーストラリア人達の、高く太く大きい話し声。北欧人達は、素朴でシャイ、ラテン系は、愛想よく調子いい、ヨーロッパでの自分のルーツを必ず名乗るアメリカ人。建築を創る人、教える人、学ぶ人。建築に興味を持つ人、持たぬ人。彼等皆、夫々の立場で、建築、生活、人間を語り、親しく心を通わせて、礼儀正しく去って行った。P.238　節子
図面及び写真	 P.219	 01・10 クロワッサン 住まいから家族を考える トイレにも、寝室にも、ドアがいっさいなし。狭い敷地をモードに仕切った夏孝光さんの家。 (利恵さんの話)「ドアのないこと、気にならないし、かえってよそでドアの開け閉めが面倒くさかったりすることもありますね。トイレも家族の間ではカーテンも閉めません。子供のときからそうでしたから。それに広い明るいところでお風呂に入れるってことで気持いいですね。この家は客観的にもいい建築だと思います。広く使っていること、実際の面積、容積よりも豊かな空間であることで、いい建築だと思います。ドアがないことで困惑するのは、そこに住む家族でなく、訪れる側にあったのだ。 P.221	 5階ヴェランダ ヴェランダから見下した玄関回り P.93	 1985年、当時ベルリン工科大学生ウルリカ・バートベルク嬢来訪 (写真提供：著者) P.48
家族関係	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居	父親・母親　同居、長女海外留学	父親・母親　同居、長女海外留学
家族成員の発達段階	孝光：49歳　東孝光建築研究所 節子：50歳 利恵：22歳　　東京大学大学院修士課程1年	孝光：50歳　東孝光建築研究所 節子：51歳 利恵：23歳　　東京大学大学院修士課程2年	孝光：51歳　東孝光建築研究所 節子：52歳 利恵：24歳　　コーネル大学大学院修士課程1年	孝光：52歳　東孝光建築研究所 節子：53歳 利恵：25歳　　コーネル大学大学院修士課程2年

	1986	1987	1988	
住宅の経過	塔の家　居住経過 その前後から、 コンクリート打放しの変化について意識するようになった。つくってから一二、二年頃まではそうでもなかったが、このクラックからポロリの事件が一六、七年日にあたり、点検してみると壁の出っ張ったところ、特に三角にとんがったあたりなどでまず風化が進んでいることに気付くようになった。 中性化が進み、クラックから水が浸入して内部の鉄筋が錆ると膨張してクラックを押し広げる。この時、壁の末端部や三角形のとんがった所など、コンクリートの断面の少ない所だと余計風化が進む。 一九年日には細かく全体を点検して風化のひどい所は落ちるところを叩いて落し、鉄筋に錆止めをして防水モルタルでとりあえずの補修をした。ここ数年のうちには外壁の防水補修を考えねばならないだろう。 錆と言えは、外に面する建具は全部二・三ミリの鉄板折り曲げのものを使ったが、仕上げ塗装は自分でやるつもりで、サッシュ屋さんには光明丹の錆止めの塗装で作らせた。出来上かった後は、暇がなくて光明丹の色か悪くないこともあって、ついそのままに五年、一〇年と経ってしまった。普通なら、鉄の錆が流れて打放しの壁を汚し始め、あわててペンキ塗替となるのだが、この塔の家の場合、 一向に錆が流れないのが不思議であった。鉄鋼メーカーの人に聞いても「多分、昔の鉄は不純物が多かったからでしょうかねえ……」と判ったような判らないような返事だ。つまり、現代の鉄は精錬の技術が進んで鉄の純度が上がり、その分すぐ錆るということらしい。塔の家ではとうとう二〇年近く、 一度もサッシュのペンキ塗をしないままに過ぎてしまった。その代り、動かさない建具はやはり摺り合わせの所に錆がつまって動きにくくなっている。これも、数年のうちには枠とも入れ替えをしようかと考えている。 内部の仕上げや家具については、この二〇年にほとんど何もつけ加えず、また変更しないで使ってきた。ここへ来て、台所廻りの家具を少し整えようかと、これが家中の話題になり始めている。そこで、私のワープロにメモ代りにタイトルと項目だけを打ち込んだ。以下の通りである。 「塔の家改修計画」 一、各所コンクリート補修――特に突出部、庇裏など緊急に。 二、食堂収納家具作り替え――手づくりのものを作り替える。 三、個室サッシュの移動――個室幅を二〇センチ増として大人用ベッドを入れる。 四、屋上防水の修理――「三」に関連、ドレイン回りの傷み修理。 五、サッシュの作り替え――各階共コールテン鋼に作り替え、枠回り防水シールを行なう。 六、水回りの修理――床アスファルト防水の点検、床仕上げを行ない、浴槽を新しくする。 七、空調設備の――現在のクーラーをエアコンに替え、ただし居間は灯油ヒーター補助を行なう。 八、玄関回り整備――簡単な床防水とポーチ床仕上げ。PP.157.159　孝光		塔の家　居住経過 **⑦-D 最近、私の部屋の模様替えをした。中学生時代から使っていた勉強机と椅子をます追放した。パネル型の暖房器も、背の低い横長のコンパクトなものに替えた。階段の壁に取り付けてあった棚も取り外した。古い、子供用二段ベッドの下の部分を母が改造したベットも取り替える予定だったが、これは、部屋の寸法が大人用ベッドをいれるのに数センチ短く断念した。三畳あまりの広さの部屋だが、少し広くなった。二十数年、″ 子供部屋″ だった部屋が、″ 寝室″ になった。**P.81　利恵	
図面及び写真			 1987年12月に新たに改装した台所家具 P.55	
家族関係	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居	父親・母親・長女　同居	
家族成員の発達段階	孝光：53歳　東孝光建築研究所 節子：54歳 利恵：26歳　　コーネル大学大学院修士課程修了　帰国 アメリカでは、自分の満足のいくアパートが見つかりましたが、住宅事情の悪い日本では、果たして、自分の収入にみあう、しかも満足のいくアパートが見つかるのでしょうか。これは、現在の日本の状況では贅沢とも言える価値観かもしれません。いよいよ、この夏、三度目の引越しです。東京に帰ったら、塔の家から独立して一人暮しをしようと思っていますが、今から、少々アパート捜しに関しては、危惧しています。P.265　利恵	孝光：54歳　東孝光建築研究所 節子：55歳 利恵：27歳　　東孝光建築研究所勤務	孝光：55歳　東孝光建築研究所 節子：56歳 利恵：28歳　　東孝光建築研究所勤務 結局のところ、やはりこの贅沢病が災いして、アパート捜しはうまくいっていません。まだ、塔の家の最上階に仮住まいの身です。 P.266　利恵	

	1983	1984	1985
住宅の経過	⑥-A 寝室(2階)とクローゼット(ロフト)交換、寝室をロフトへ移す 可動トップライト(小)2カ所新設　大トップライト外部に電動ブラインド設置 ⑦-A 引っ越しからの最初の5年間である第一期は、二世帯住宅として、高橋が親世帯と一つ屋根の新しい住まいにいかに生活を形づくるかという試行錯誤の時期であった。5年という短い時間ではあったが、高橋が建築家や研究者としてだけでなく、生活者として高齢者介護に直面し、高齢者と住まいとの関わりについて自らの問題として受け止めるきっかけとなった時間であった。P.78 ⑦-B引っ越しから間もなくして母親が発病し、闘病の末、管の家完成からわずか1年後に他界、またその3年後に父親も亡くなった。プロの設計者としてまた娘として、自宅の新築に携わりその後間もなくして両親を失うという経験は、高橋にとってまた大きなショツクであった。大学の教壇で高橋が「建築は人を生かすことも、また殺すこともできるのよ」ときっぱりと言い切ったその言葉には、重みと実感がこもっていた。P.80	ロフト布団入れ、本棚新設 ⑦-C 親世帯の住居には専用の台所と浴室があり、高齢であることを考慮して寝室にも便所が設けられた。またトイレや風呂場には母の身が不自由になってから手すりが設置された(fig-10)。つまり機能的、住居計画的には、充足されていたといえる。 しかし後年、高橋は両親の日常における生活行動を分析することで、母親にとっての「居場所」が確保されていなかったと振り返っている。父親は耳が遠くなっており、 一日中大音量でテレビを付けていた。チャンネルの主導権はもっぱら父親にあり、旧宅において母親はこの騒音から逃れるように、1階や2階の子世帯の領域に自分の居場所を獲得していたのである。それが新居に移り、ふたりは一日中1階の住まいに一緒に居ることになったのだ。その数カ月後、母親は疲れやストレスが原因といわれる脳梗塞を発病することになる。 PP.84-86	ロフト冷房機設置 2階に居を構えた高橋夫妻の住まいにおいても、移り住んだ後に変化があった。建替え以前から飼っていた雌猫が、2階の床暖房が熱過ぎて(部屋の容積が大きいので普通より設定温度を高めていた)、そこで「ピョン子」と改名したのだが、母より一足先に息を引き取った。これも高橋にはだいぶ応えたようだ。 ⑥-B 場所については、竣工時は寝室が食堂の奥にあり、その上部のロフトは洋服などを収納する納戸になっていた。しかし、いつからかベッドの上に脱いだ服がたまるようになったため、この関係を逆転して、ロフトを寝室、その下つまり食堂の奥をクローゼットとした。その結果、洋服を着替えてから折り畳み階段を昇って寝るという、動線に従った使い方となり、これにより衣服の散乱は止んだようである。 ⑩-A 高橋は「住む人が考えるべきこともある」と、設計者や住宅メーカーが住宅の隅々までつくりすぎてしまうことを嫌っていた。大和ハウス工業の石橋社長とのある対談で、「最近浴室にはシャンプーやらトリートメントやらで物が溢れているから、壁面を凹ました置き場所でもつくるかなんて考えているのですが」との石橋の提案に、「それはまずいですよ。メーカーがそこまで親切にならなくても。置く棚などは色々売っているわけですし」と高橋は語っていた。この主張は自邸でも実践され、家具を動かすなどの模様替えから、窓を大きくするといった軽工事まで、時に応じて住まいに手を加えていった。PP.86.87
図面及び写真	  構造：コンクリートブロック造＋鉄骨造 階数：2階建 敷地面積：466.257m² 建築面積：113.832m² 延床面積：196.684m² *Phase 1* 高齢者親世帯との暮らし P.74	 *fig-1*　父と娘 *fig-2*　親世帯と子世帯 P.79	 *fig-3*　滑り止めのシートが置かれた階段  *fig-5*　庭へと続く土間のような玄関ホール、簡単な打合せはここで行うこともあった  *fig-4*　「管の家」1階平面図 P.81
家族関係	父、母、鷹志、公子　同居	父、母、鷹志、公子　同居	父、鷹志(一時海外留学)、公子　同居
家族成員の発達段階	父　詮:82歳 母　ヒデ:74歳 鷹志:47歳 公子:51歳	父　詮:83歳 母　ヒデ:75歳　逝去 鷹志:48歳 公子:52歳	父　詮:84歳 鷹志:49歳　ボストン・ロンドン留学 公子:53歳

1986

物置三カ所設置

⑧-A 83歳で伴侶を失った父親の日常生活の自立もひとつの課題となった。明治生まれ、明治育ちの長男で家事にまったく無縁であったという父親に対して、家電製品の使い方指導から始まったようだ。「ガスが怖い」とのことで、電磁調理器や電気ポットなどを設え、パン食であった朝食の支度を手始めに、洗濯機の操作をおぼえ、靴下三足を洗濯したいのだが、2階のほうで何か洗うものはないかというほどの変化を遂げた。もともと機械関係の仕事をしていたことから、道具の使い方には長けていたようである。その父親はカメラを趣味としており、四季折々の管の家の姿をアルバムに多く残してい(fig-11)。人生の達人である高齢者の能力は、その可能性を引き出すことで、日常生活に結びつけることができるといえる。1階の住まいで父親は見事に自立した生活を送り、週末には可能な限り2階で夕食を共にしながら妻なき後の3年間を過ごしたのであった。P.88

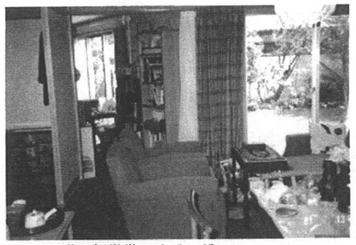


fig-6　1階の親世帯のリビング

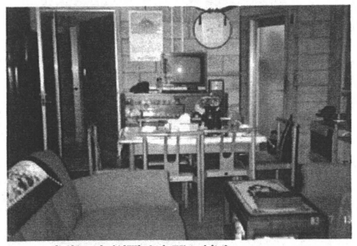


fig-7　食堂、左側扉は玄関へ続く

fig-8　父親寝室　ガンで吐血が多かったのですぐに寝室に洗面所を設けた（右手扉奥）

P.83

父、鷹志(一時海外留学)、公子　同居

父　詮:85歳

鷹志:50歳　留学より帰国　東京大学助教授
公子:54歳

1987

⑧-B 鷹志の書斎(2階)を父親寝室(1階)へ移す。居間拡大。

1階外壁ブロック(一部)防水塗装

同居していた両親の死後、高橋夫妻ふたりとピョン子の後に迷い込んできた猫11匹(愛称トントン)からなる生活が管の家にて繰り広げられた。
⑦-D 当時、高橋公子は56歳、日本女子大学住居学科の教授であり、教鞭を執ると同時に、多岐に波る研究活動(ライフスタイル、高齢者、女性、空間認知など)を行いながら、省庁(建設省、国土庁、通出産業省、大蔵省、経済企画庁など)や学会(日本建築学会、都市住宅学会など)における埋事、主査、委員を精力的にこなしていた。さらに主宰している建築ユニット設計事務所の活動として「枝垂れ桜の家」を1992年に竣工、遺作となる「えごの木の家」の設計を1995年に着手している(3章case3、case4参照)。
こういった過密スケジュールの中であっても、充実したライフスタイルを展開した。P.90

fig-9　2階の高橋夫妻食堂、食器棚の奥がクローゼット

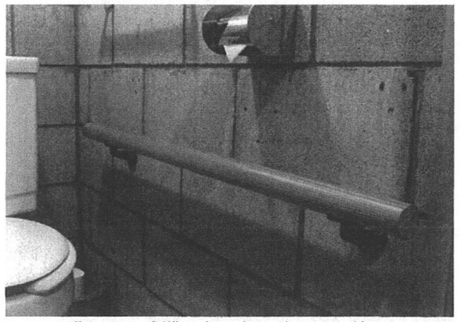


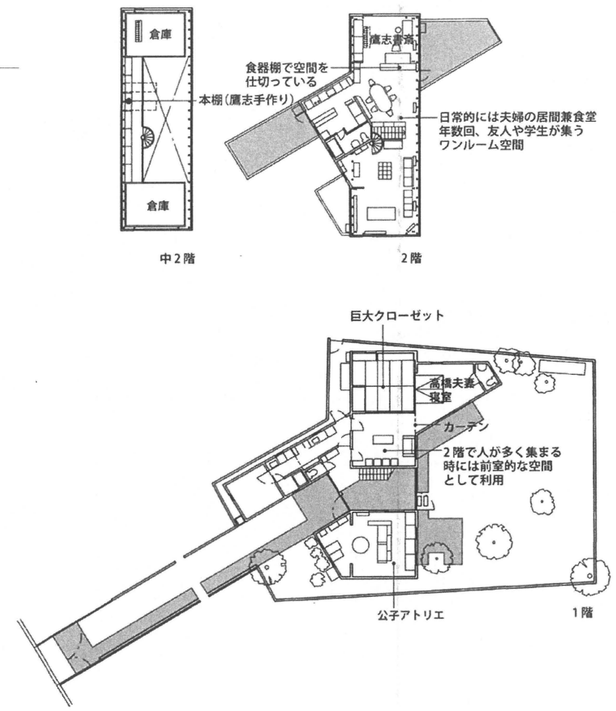
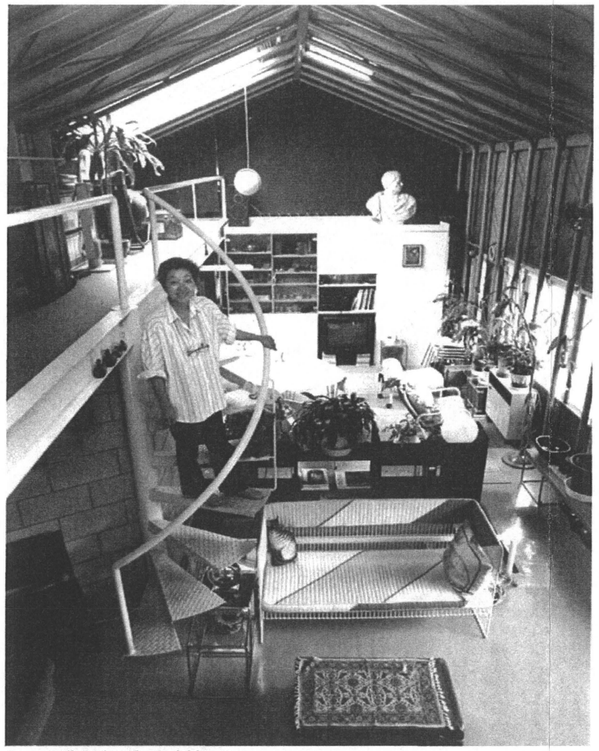
fig-10　1階トイレ、標準の高さ（85cm）で取り付けたところ、身長の低い母親には高すぎた。現在でも前に取り付けた穴の跡が残っている

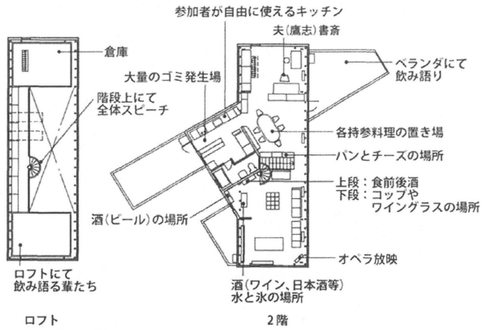
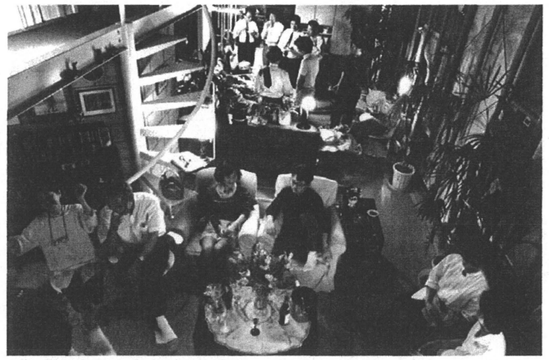
P.85

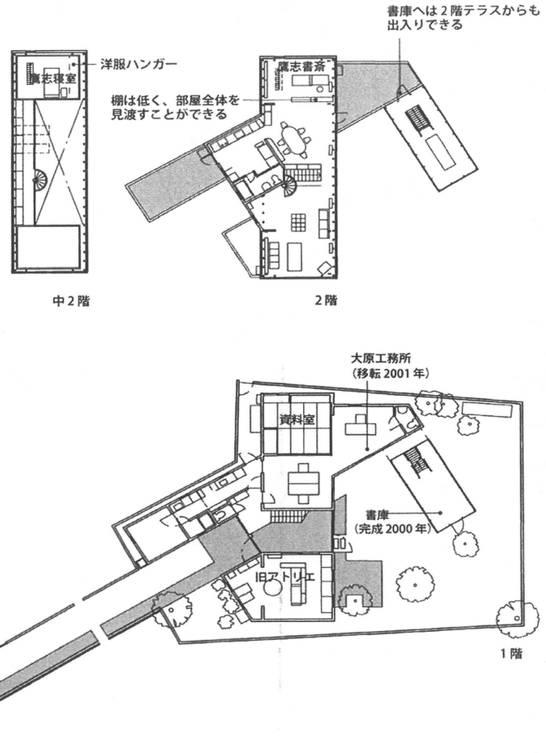
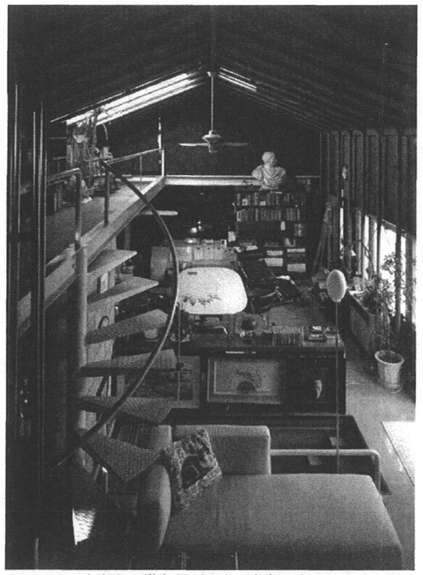
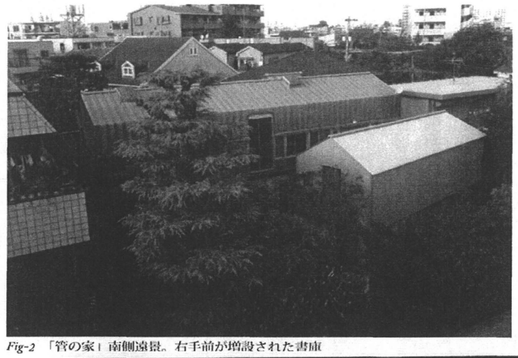
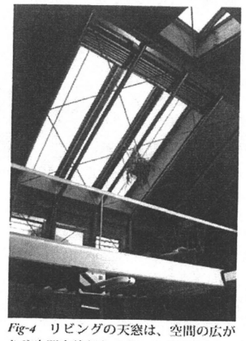
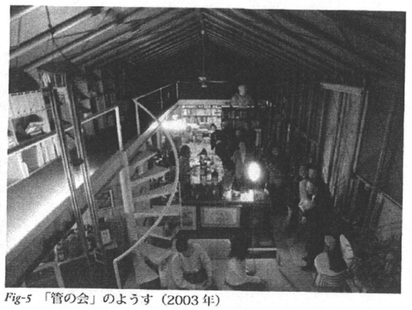
父、鷹志、公子　同居

父　詮:86歳　逝去

鷹志:51歳　東京大学助教授
公子:55歳　日本女子大学家政学部教授

	1988	1989	1990
	寝室(ロフト)と鷹志書斎(1階)を入れ替える。ｸﾛｰｾﾞｯﾄ(2階)を和室(かつての母の寝室)へ移動 1階床、木フローリング張りへ変更(アトリエ、和室も同様) ⑧-C 二世帯から一世帯となり、管の家の使われ方も変化した(75頁参照)。 これまで親世帯部分であった1階の父の寝室に鷹志の書斎を移し、その分2階のリビングスペースを拡大した。その後、両親の遺品などの整理が一段落したところで、場所を大きく変化させた。具体的には、ロフトにあった寝室と2階のクローゼットと1階の鷹志の書斎とを入れ替えた。 1階のアトリエでは、高橋は、大学その他の打合せを行うこともあった。ちなみに風呂については、1階が和式、2階が洋式と形式が異なり、1階は夫が愛用、2階は高橋公子が愛用した。P.92  *Phase 2* ひとが集まる住まい P.75	2階階段上壁を透明はめ殺し窓に。2階外・窓下土台、樋交換修理。 ⑥-C「管の会」とは、管の家にて2カ月に1回開かれるパーティーのことであり、1988年から今日に至るまで開催されている。夫妻共に社交的であるため、メンバーは、学生、建築関係者のほか、ひいきの飲食店、出版社、旅行関係者といった多彩な面々であり、数十人が三々五々に集う。 主会場となる管の家2階の約300㎡の大空間には、芳醇なアルコールや料理が待ち受け、ジャズ主体のBGMが人々を心地よく包み込み、宴たけなわともなればドン・ジョバンニのオペラ放映、と楽しい時間が夜更けまで続いた。 「男子厨房に入るべからず」とは対極に、キッチンでは男性たちが極めて自然に料理をしていた。 一方、高橋はというと、教壇とは打って変わったカジュアルスタイルに身を包みグラス片手に、リビングで場を盛り上げている。「カナッペはいかがですか」と学生陣に働めるエプロン姿の紳士は、高橋の夫、鷹志である。PP.96.97  *fig-1* 2階リビングでの高橋公子 P.91	
	鷹志、公子 同居	鷹志、公子 同居	鷹志、公子 同居
	鷹志:52歳 公子:56歳	鷹志:53歳 公子:57歳	

	1991	1995	1996
	2階食堂・リビング床に竹すのこを敷く ハナミズキ(白)枯れる。新しく植える ⑩「管の家においては、住まいもそして人もまた創意工夫の中で変化してきたといえる。その過程の中で、家族が相互の気配を感じつつ、人として基本的な生活の作法といったものを互いに気遣いながら、生活を築いてきたようすが浮かんでくる。」P.88  *fig-6* 管の会での人とモノの配置  *fig-7* 管の会のようす（1990年ごろ） P.99	2階台所上の屋根防水やり直し ⑦-E 1996年の夏ごろから、高橋公子は体の不調を感じていた。当時の高橋は、大学の講義、設計活動、学会や宮庁の委員会活動等々で、その生活はまさに多忙を極めていた。自覚症状はそれほど重大ではなく、近くの病院で診察を受けながら相変わらず仕事に忙殺される日々を送っていた。そのうちに、休調が思わしくないまま迎えた新年の早々、検査入院が必要であるという電話を受けて、急きょ東大病院に入院することになる。1997年1月のことであった。 急な入院のためにやりかけの仕事がそのままで、高橋は病室の中まで持ち込んで熱心にそれらを片づけていた。本書の3章で紹介する「えごの木の家」もその一つであり、高橋公子が入院中に設計が終了して工事が始まっている。1月というと大学も大変な時期である。卒業論文。修士論文の提出、入学試験、年度末提出の報告書、病室で高橋はそれらのことをしきりに気にかけていた。また周囲が自分の病気を心配することを嫌い、見舞いの訪問も基本的に断っていた。 検査の結果は良くなかった。かなり進行した癌にかかっていたのである。そして、わずか5カ月後の6月12日、高橋公子はついにその病院から一度も出ることなく65歳の若さで亡くなった。高橋公子の居なくなった管の家に残ったのは、夫の鷹志と愛猫であった。しかし1カ月後、その猫もすぐ後を追うように病気でこの世を去り、管の家は急に単身世帯となった。 PP.102-104 *fig-2* 南側の外観。2階の庭に面した壁中央を大きく開けてはめ殺しの窓とした。ここから自然の光や色が室内に感じられる P.93	ロフト道路側、窓下防水やり直し
	鷹志、公子　同居	鷹志、公子　同居	鷹志、公子　同居
	鷹志:55歳　東京大学教授 公子:59歳	鷹志:56歳 公子:60歳	鷹志:60歳 公子:64歳

	1997	1998	1999	2000	2001
	家具・衣類等分配 ⑧-D 家族が減り、当然ながら管の家にも徐々にいくつかの変化が見られた。 一つはモノや書類が急に増えたことである。それは、高橋公子が職場で使用していた物品や本・書類を自宅に引き取ったこと、そして夫の鷹志もちょうどこの時期22年間勤めた大学の退官を迎え、書物の山々が研究室から自宅に運ばれたためである。その量は段ボール50箱分にも及び、結果として2階西側の壁全面に自作の棚が備え付けられ、他にも多数の本棚が管の家の各所に増設されることになる。しかし、それでも収まらない大量の物品・書物のために、とうとう庭に足場パイプと現場囲いを使った2階建ての大型書庫が新設されるのは2000年のことであった PP.104-106	ホームセキュリティ会社と契約 1階外壁コーキング補修 ⑨-A「これからの住宅を予測する上でのポイントは、一つは女の人が働きに出ること、二つ目は科学技術が住居の中に入ってくること、三つ目は高齢者の存在です。中でも女の人が家の中にいなくなって家が無人化するようになる点が決め手だと思っています。」 P.108	2階南バルコニー防水やり直し 2階床暖房ガスボイラー交換	芝生枯れる。庭の書庫新設 P.105	大原工務所1階に 寝室(1階)をロフトへ 書斎・食堂(2階)を一体的に 1階改変(空間利用の大改造) 2階冷房交換機交換 ハナミズキ(白)、藤伐採 ⑧-E 永年にわたり高橋公子と一緒に仕事を統けてきた大原工務所が管の家の1階に入居することになるのは、2001年のことである。こうして、4年間続いた単身世帯に終止符が打たれ、管の家は最近増えている「住宅十オフィスの混合」という利用形式に転用されることになる。これを機に各部分の使い方は、76貞のphase3に示すように改変された。1階にあった寝室はロフト階に、2階の書斎と食堂は一体的に利用する形式に家具が移動された。P.114
	 Phase 3 単身世帯そして住まいの転用	 Fig-3 ロフトから2階を見下ろす。室内には沢山のモノが置かれるが、なぜか不思議と散らかっているようには見えない P.76	 Fig-2 「管の家」南側遠景。右手前が増設された書庫 Fig-7 玄関の入口部分。大原工務所が1階に入居して、この部分は事務所と共有で使用されるようになる。右手のホワイトボードでスケジュールを確認する。右正面にある籐製の収納は池辺陽によるデザイン P.107	P.113	 Fig-4 リビングの天窓は、空間の広がりや空間自体がもつ楽しさを演出する。  Fig-5 「管の会」のようす(2003年) P.111
	鷹志 単身及び新潟勤務	鷹志 単身及び新潟勤務	鷹志 単身及び新潟勤務	鷹志 単身及び新潟勤務	鷹志 単身及び新潟勤務 大原工務所1階に入居
	鷹志:61歳 新潟大学教授 公子:65歳 逝去	鷹志:62歳	鷹志:63歳	鷹志:64歳	鷹志:65歳

清家清　森博士の家　1951

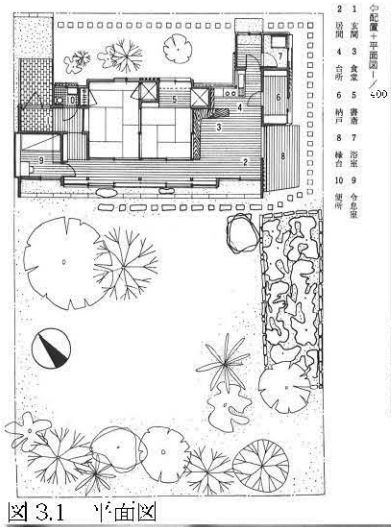


図 3.1　平面図

写真 3.1　南側から見る

図 3.1
栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，P.43,1974.8

写真 3.1 ～ 3.2
栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，PP.43-45,1974.8

写真 3.2　居間から各室を見通す

写真 3.3　東側すのこ周辺

設計　清家清

所在地　東京・曙

構造規模　木造　平家建て　延床面積 90 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成、部分的段階：分割構成

2. 空間相互の関係：連結的、可変的融合性

3. 内外空間の関係：開放的

4. 共用室の扱い及び配置：中心的

5. 個室と共用室の関係：接続的

6. 移行空間：片（南）側廊下

技法：舗設、ホモジニアス、日本的エレメント（障子、畳）

効果：ホモジニアス（均質）な空間はパースペクティブが強調されるので見かけの空間は奥行きが増大し、室の広さを大きく感じさせる。

清家清　斎藤助教授の家　1952

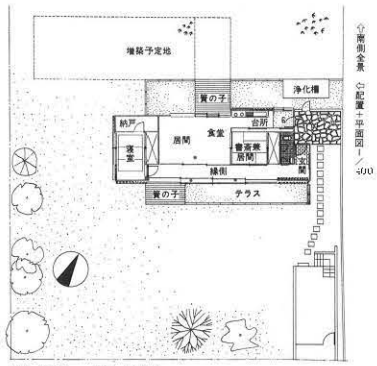


図 3.1　平面図

写真 3.1　南側から見る

図 3.1
栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，P.46,1974.8

写真 3.1 ～ 3.2
栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，PP.46-48,1974.8

写真 3.2　居間から各室を見通す

設計　清家清

所在地　東京・曙

構造規模　木造　平家建て　延床面積 63 ㎡

1. 空間構成原理：分割構成、ワンルーム

2. 空間相互の関係：連続的

3. 内外空間の関係：開放的

4. 共用室の扱い及び配置：中心的

5. 個室と共用室の関係：接続的

6. 移行空間：縁側、共用空間兼用

技法：舗設、ホモジニアス、日本的エレメント（置畳）、未分化

効果：未分化のままの単位空間であるから、住まう人がより使いやすい場所、快適な場所を選んで利用できる。

清家清　宮城教授の家　1953

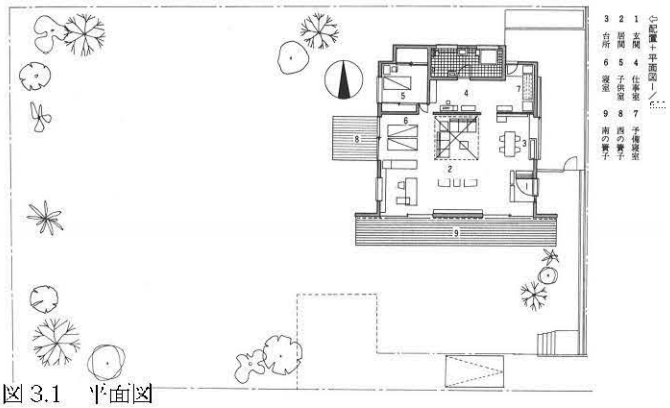


図 3.1　平面図

写真 3.1　居間

図 3.1
栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，P.54,1974.8

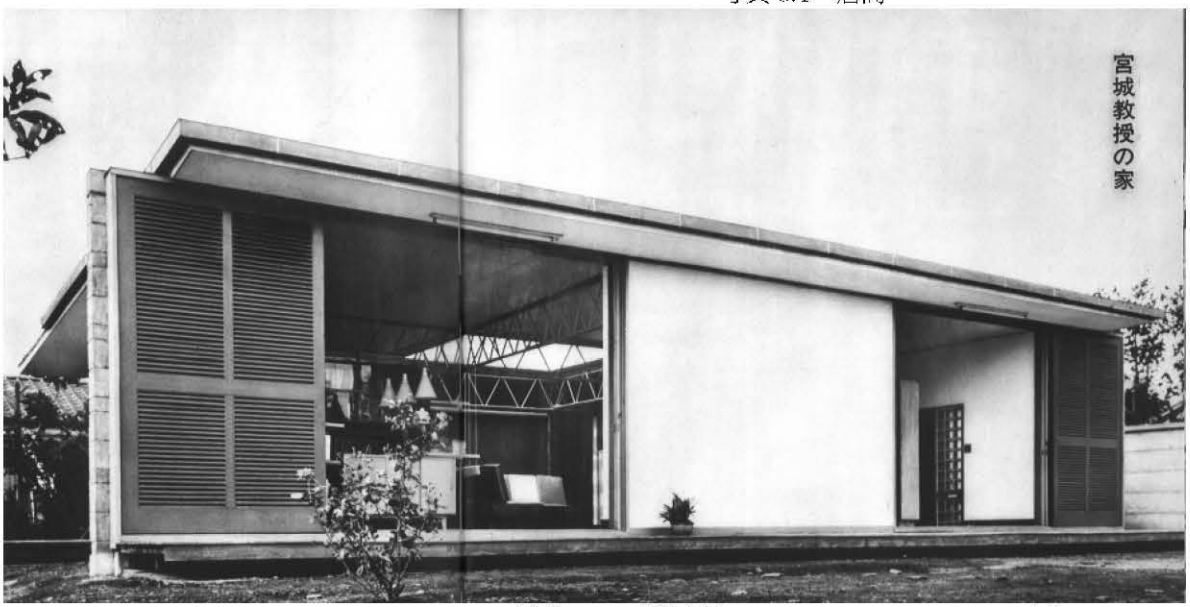


写真 3.2　南側全景

写真 3.1 ～ 3.2
栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，PP.52-54,1974.8

設計　清家清

所在地　東京・雪ヶ谷

構造規模　木造　平家建て　延床面積 102 ㎡

1. 空間構成原理：分割的内包構成

2. 空間相互の関係：融合的

3. 内外空間の関係：開放的

4. 共用室の扱い及び配置：一体的

5. 個室と共用室の関係：一体的

6. 移行空間：共用空間兼用

技法：舗設、ホモジニアス、無柱空間、スケルトン・インフィル、屋根の開閉、ハブマイヤー・トラス

効果：無柱空間が、変化する家族生活に自在に対応する。

「私の家」と「森博士の家 、「斎藤助教授の家 、「宮城教授の家」の比較分析

	私の家	森博士の家	斎藤助教授の家	宮城教授の家
空間構成原理	内包的分割構成	連結構成 部分的：分割構成	分割構成	分割的内包構成
空間相互の関係	融合、一体化 ワンルーム形式	連結融合、可変一体化 ワンルーム形式	連結融合、可変一体化 ワンルーム形式	融合、一体化 ワンルーム形式
内外空間の関係	内外融合、内外を通じて生活空間	開放的	開放的	開放的
共用室の扱いと配置	中心的、ワンルーム、南面配置	中心的、ワンルーム、南面配置	中心的、ワンルーム、南面配置	中心的、ワンルーム、南面配置
個室と共用室の関係	一体化、棲み分け	開閉による分節	開閉による分節	一体化、棲み分け
技法	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設 ハブマイヤー・トラス 内外融合 床：石張りパネルヒーティング 未分化	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設 未分化	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設 ハブマイヤー・トラス 内外融合 スケルトン・インフィル
効果	ホモジニアス（均質）な空間は空間のパースペクティブが強調されるので見かけの空間は奥行きが増大し、室の広さを大きく感じさせる。 未分化のままの単位空間であるから、住まう人がより使いやすい場所、快適な場所を選んで利用できる。 建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ませて、狭小住宅の解決を図っている。 そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義である。	／ ／	／ ／	／ ／ ／ ／

「塔の家」の住宅形態の実現効果について、本人及び家族の陳述を整理する。

「塔の家」実現効果

空間構成及びそれを実現する素材と工法	①-A「居間・食堂の吹抜けの手前に階段スペースがあり、踊り場があって、その右手がトイレと浴室です。私の家は家中どこにもドアや間仕切がありません。家全体がワンルームです。しかし風呂場だけは多少プライバシーのこともありますから、吹抜けとの境はコンクリート壁を立ち上げていますが、それも天井との間に二〇センチ程、隙間をあけているんです。この隙間は、空間の連続性を強調するために、壁を自立させて天井から切り離してあるわけですけれど、実際上もこの隙間が風呂場の湿気を全体に散らして緩和するという役目を果たしているようですね。」P.69 「一層が一室で、縦方向に積み上げられているので、ドアがなくとも視線は断たれ、その面でのプライバシーは守られる。」PP.37.38 「塔の家では、各室各室、縦に積み重ねられている故に、ノー・ドアにも拘わらず、視線のプライバシーは保たれている。外界へのそれは、将来、周辺により高い建物が、密接して建ったとしても、直通の視線は避けるよう、当初、東が、設計した故に、近隣との視線に関する摩擦はない。むしろ、上へ下へと流動する視線の移動が、開放的な景観をつくって快い。」P.98 ①-B 地下の書庫からガレージ、食堂、バスルーム、寝室からペントハウスの子供室まで、六坪の敷地に建築面積三・六坪、延約二〇坪の六層のすまいがその結果である。浴室のガラス越しに足許を走る自動車の流れが視野を横ぎり、階段を登りおりするにつれて細長い窓から歩道を歩く人、向う側のビルが次第に変化して、屋上へ出ると遠く東京タワーや渋谷、新宿のスカイラインを望む。内に向っては、吹抜けの上の窓から朝の光が食卓のテーブルに落ち込み、階段の窓から夕陽が斜の細い線となって、コンクリートの壁に縞模様を画く。夜は再び高窓に月がうつり、私が地下の書庫にとじこもると、歩道面に設けた窓のあかりでその存在を通る人に示すことになる。時々奥通りに通り抜けとなっているガレージの床からコツコツと靴音が私の頭の上でひびく。このすまいには、一枚もとびらがないので、日曜日など小学生の娘がパーティを開くと十数名の子供達のカン声が上から下までにひびきわたって私達夫婦にうれしい悲鳴を上げさせる。PP.25.26 ①-C「このコンクリート打放しの壁が意外に暖か味のある、優しい表情を持っていることに気付いたのは、やはり自分で住んでみての実感なのである。私のところでも、いずれは壁の仕上げをと話し合ってのスタートであった。ところが、そんな必要もないと妻や娘たちは言うのである。ただ、それなりの工夫が自然に生まれてのことであることを忘れてはなるまい。いつの頃からか、妻は玄関ポーチにつたの大きな鉢を置いて壁にそれをはわせ始めた。またそのうちに植木鉢をたくさん針金で壁にしばりつけてベゴニアの鉢植えも始まった。寒くなるとみどりは室内に引越してきてにぎやかである。また、布を織り、手造りのクッションを家中に氾濫させて、それなりのインテリアが、自らできあがった。ところがそうなってみると逆に、室内のみどりや布、クッションの向う側に控えているこの灰色の壁の表情が、意外に生々と豊かに見えてくることにも気付くようになった。コンクリート打放しは、流し込む型枠の木目や小さな凹凸が写し出されて、人間の手でつくられたことを感じさせてくれる。色も、単に灰色というものではなく、半光沢で、かすかにみどりを感じさせる暖か味のあるグレー、多少の吸湿性もあって、晴の日と雨の日では肌も違う。永年一緒に暮らしてみると、結構、表情豊かな素材なのである。」PP.154.155 ①-D「この塔の家は、実は、石造りの西洋の住宅よりもずっと、日本の木造住宅に似ているということだ。P.38 「道路のレベルにカーポートがあり、その上にこの居間兼食堂兼台所の解がある。道路から約1メートル上がってポーチがあり、そこにガラス貼りの玄関ドアがある。ガラス貼りであるのは、少しでも南側からの日光を採り入れるためで、ドアを開いて一歩踏み込んだ場所ふぁ玄関ホールというわけだが、ガラス貼りにした結果、そのホール（?）の内外に立つ人の様子が上方の台所の定位置にいる家内の所から手に取るようにわかるということになっている。P.52 「昔の日本人は畳に触れる足の感触を大切に考えていたんじゃないだろうかと。じつは私は自分の家でそのことを思い知らされたわけです。といいますのは靴下ひとつで歩いていますと、凸凹の床ですから非常に足ざわりがいいというか、床の感触が伝わってくるんですね。それに馴れてきますと大体この辺に山っ張ったところがあるなあということが全部分かってきます。つまり細かな床の感覚というものがはっきりしてくる。これは健康のためにもいいんじゃないかと。」P.149 「この家のどこが日本的であるのか、という説明が、はじめの頃はなかなかできなかったのです。なぜタタミがないのか、なんて議論を吹っかけられたりしたときに。結局、上下の空間のつながり方が日本的なんだということが10年ぐらい経ってから分かるようになった。」P.253

「塔の家」実現効果

外部空間と内部空間の関係	②-A「南に面した台所の、窓ガラス一枚の外は、東京の真ん中、外苑、青山を通り抜ける環状四号線。調理する私と、我が街は、直かに繋がる。テクノカットにもんぺパンツの若者たち。花金（花の金曜日）と月末の定期的な、加えて、突発事態を予測させる定期的ならざる、車の渋滞。景気の度合を感じさせる交通量の変化。デモの回数とその主張で知る大衆の動き。日前でバーンと起こる交通事故。大都会の真ん中の出来事が、窓ガラス一枚こちらの台所で働く私に、ビンビン伝わってくる。我が家の一隅に取りついているのみか、流動する社会の一隅にも、しっかり取りついた我が台所。世の中と一緒になって動いているこの場所。」PP.49.50 ②-B「南！　最上部のヴェランダは、南面上方いっぱいに口を開け、光る太陽の熱を吸い飲み込む。太陽　　この源なるもの！　塔の家は、その敷地面積に通常受ける以上の量の太陽を受けている。太陽の故に、台所の臭は日光消毒され、風呂場の本の風呂桶はよく乾き、寝室のベッドを光の手が伸びて撫で、ヴェランダではシーツや布団が蘇る。 人間生活での一番の贅沢は清潔さ。わが家のサン&バスルームは、全階通しての真ん中の一階に、太陽と家族にこよなく愛されて、塔の家の生活の核を成す。 PP.67.68 ② C「私の部屋はバルコニーに面している。勉強をしている時、本を読んでいる時、ふと顔を上げると、バルコニーの植物などの自然や青い空が目に入ってくる。雪が降ると、誰にも荒らされていない雪を踏むことができる。庇にぶら下がった"つらら"を食べることもできる。雀がやってきて、山椒の若芽やグレープフルーツの若芽を食べてしまった。蝶が卵を産みつけていった。光に誘われて、虫がガラスにへばりついた。これは、皆んな、私の部屋からの眺め。」P.80 ②-D「一段一段廻る階段空間を昇るにつれて、縦に並ぶ小窓を軸に、大窓、中窓、東窓、南窓、口線の流動を誘って、何時の間にか昇り着く最上階。上⇔下、流動する階段空間。最初の階段小窓は、外苑から来る車の走行を見るのに良い角度。続く浴室の窓いっぱいに街路樹の大枝小枝。さらに東側大窓は、すべての南面窓とは正反対に、ひっそりした東側の家並みと道を描く風景画。二つ目の階段小窓は、視線を上に引き上げて写す向かいの原宿団地。左に上れば、右手壁の鏡に写る、寝室内部の相似形を疑似体験し、や！や！　とまごつく目に入る、左手大窓の、銀幕上の都市的近景。ここでの車の走行は、青山方向を強く感受させる。同じ道路を走る中の受け止め方か、窓の向き向きにより異なる事を知った窓。最も高い階段小窓からは、空と同地とその向うのビル達の連なり広がる、都市的遠景。そして、ヴェランダへの開口部、最上階の窓へと上る。部屋の里から伸びた間いか、ウェランダの日隠しとなっている故に、ヴェランダは空に向かってパックリ開いた、空へのステップ。下から廻り廻って昇った上昇感を空いっぱいに放出する。」PP.95.96
個室と共用室の関係	③ A「私は、家中の部屋を使っているので、実際には、友人よりも広い部屋に住んでいることになるのではないだろうか、などと思ってしまう。」P.37 ③-B「高校の頃は、さっきも言ったけど演劇に夢中だったということもあるけど、自分の生活のペースを意識的に守ろうとしていたみたい。家の構造だからすぐ人にまきこまれちゃうのよね。 P.245
家族関係の形成に対する対応	④-A 「都市的なところに住みたいという欲求がみんなの中に広まっています。それは、昔なら住宅の中で要求されたいろんな機能が、外で果たされるようになるということなんです。例えば、たまにはレストランで食事するとか、お客さんをホテルに泊めるとか、あるいは子供が喫茶店やスナックに入りびたっていて、夜寝に帰るだけという現象もある。これは、個人の人格優先で、家族の各人が属する職場とか学校とかの外部での結びつきが相対的に強くなるからです。」P.61 ④-B「高校生までは、父と私の生活がまったくずれていて、なかなか顔を合わすこともできない時には、寝る前の数十分、出かける前の数分、父はベッドで、私は階段にすわって、お互いの近況を報告しRったりしたこともある。」P.37 「この家じゃあ必死で自分を保とうとしなければ親の暮しに引きずり込まれてしまう。だから、何なことは何と大声ではっきり叫ぶ主体性が身についてはずですよ。 P.181 ④ C「浴室とトイレの同時使用なども、家族同士ならぜひ試みられてはいかがかと私は思う。最初は抵抗があるだろうが、馴れればそれほどでもない。それこそ裸の対話になったりするのもよいではないか。」P.73

「塔の家」実現効果

空間的適応性を実現するための造形的着想	⑤-A「全部の部屋が方形の形ではなく、階段で繋がり、その間にドアが一枚もない、まるで鉛筆のようで、たいへんおもしろい楽しい家だとワクワクした気持ちを感じたことも覚えている。近所や学校の友達にも、おもしろいと人気の家で、よく、"かくれんぼ"などをして遊んだものだった。今でも、この家にやってくる子供たちは、喜びの声をあげて、階段を駆けあがったり、降りたりする（不思議にこの階段でケガをした人は、家族三人の中にも、お客さんの中にも一人もいない）。おとなにとって、時には衝撃を与えることもあるこの家も、子供たちには、すんなりと受け入れられるようだ。」PP.34.35 「私の部屋は、「塔の家」の最上階、バルコニー付の屋根裏部屋である。この部屋は、小さい頃、友達にたいへん人気があった。この部屋は、私達にとってお姫様の閉じ込められた塔の天辺の部屋であり、宝物の在りかをしるしだ秘密の地図が隠された屋根裏部屋だった。家中を使っての"かくれんぼ"や"探険ごっこ"。その頃、代々木のオリンピック競技場や富士山まで見えたバルコニーと私の部屋を使っての"おままごと"。「小学生になったらね」と母親に言われてわが家で遊べず、泣いていた近所の男の子がいた。」P.79 「「塔の家」の各室独自の臭香は、廻り階段上下して、相交じり、複合香を醸し出す。「塔の家」の空間は、極々自然に造り出されたその結果、外には風情を、内には香りを齎した。作家が意識意図して演出した空間は、無機的、固定的、拘束的。自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人、その共存が、一つの匂いとなり、香る。その香りを糧として、建築も、空間も、人も、同じ香りの媒体、共有者、構成素材としての、各々の持ち分の責任任を果したいと望んで、生きる。有機的臭香の立ち込める「塔の家」の、連続流動する空間を、上下しながら無意識に、においのポリフォニーを聞く私。」PP.99.100 ⑤-B　なぜ両親が快適にこの家で暮らせるのかと言えば、それは、両親の性格や、家族の生活に対する考え方と子の住宅の性格があっているからだろう。」P.36 「隅々まで計算されつくした、精緻きわまりない、作品とも呼べそうな住宅は訪ねにくいところがあるけれど、ぼくはその一歩手前か二歩手前で、生活が加えられうる住宅を目標としているんだと思う。」P.258 ⑤-C「この原始的にすら見える我が台所は、私一人の手と僅かな備品に頼るだけなのに、実に簡単に調理をして遂げる。私にとって台所仕事は、一日の大半をかけるものではなく、一日を満たす諸仕事の一部に過ぎぬ。もしこの台所が広く、器具も多く、且つ複雑であれば、私は多くの時間を台所のために割かねばならぬ。大豆やシチューの煮込み具合を目前に見ながら、縫物をし、書類をあらため、タイプを打つこともできないに違いない。」P.49 「私は我が家の食器の数など、どれ位あるのか全然知らなかったので、これ位の棚で適当に使ってくれると思っていたらこれだけでは忽ち駄目が出た。そこで流しコンロの反対側、吊戸棚の下に何か家具をということになった。それに冷蔵庫とあり合わせの台の上に置かれたガスオーブンの廻りも処理しなければならない。台所だけでなく、居間の廻りに必要な最小限の事務用品や薬品庫、それにテレビの収納台などが必要だ。それらをひとまとめにしてユニット式の棚を作ろうということになったのが現在の収納家具で、その上部を全部使って食器類の置き場所にしている。」P.56 「私の家はものとの格闘には一瞬の気のゆるみも許されないという感じで、一寸油断すればそこら中に雑物が散らかる。しかし最初から極限状況なので、散らかると動きがとれないから、かえっていつも意識して整理に努めているということだろうか。デパートや家具屋さんで良いなあと思う品物も、家の寸法と厳密に照らし合わせ、それもぎりぎり必要最小限のものしか置かない。P.140 ⑤-D「何と言ってもお、広々としているのがよい。浴室としてというよりは、トイレとして、である。悲しいかな、まだまだ私たちの住宅のなかでは、二畳敷き以上のトイレをつくるだけの余裕がない。しかし一方では、子供たちは個室を与えてもらっていることが多いが、親はもちろん夫婦共用の寝室である。一人で孤独をたのしむのは、トイレか浴室なのだ。」P.73 ⑤-E「階段から寝室の床に、おみあしを上げられたお客様方の殆どは、「あら、こちらにお部屋が」と。不審な面持ちになられ、そして気付かれ、納得なされ、「この鏡は、もう一室を感じさせるのネ！」。 右手の等身大の鏡（180 × 60 ㎝）から、左手の南面壁面いっぱいの窓（200 × 210 ㎝）への連続が、室内を写す鏡から、外景を通す窓への視線の導線となり、写体と被写体の思いがけない出現と交錯を楽しんで、お客様方のみならず、私共住人の目線も、自然にこの連続をなぞりゆく。P.75

東孝光　矢野邸　1968

写真 3.1　南側から見る

写真 3.2　居間から食堂テラスを見る

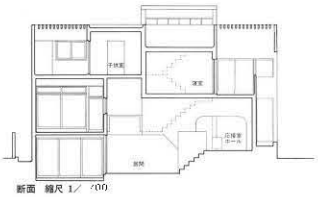


図 3.1
馬場璋造：日本現代建築家シリーズ④　東孝光，
新建築社，P.72,1982.4

写真 3.1 ～ 3.2
馬場璋造：日本現代建築家シリーズ④　東孝光，
新建築社，PP.72-73,1982.4

図 3.1　平面図

設計　東孝光

所在地　東京都世田谷区

構造規模　鉄筋コンクリート造３階建て　延床面積 160.16 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成、スキップフロア６層連結

2. 空間相互の関係：連結的

3. 内外空間の関係：連続的

4. 共用室の扱い及び配置：中心的

5. 個室と共用室の関係：連続的

6. 移行空間：階段室、中廊下

技法：スキップフロア、重層連結、コンクリート打放し

効果：上下にスキップする迷路空間が部屋と部屋、室内と外部を繋いでいる。

東孝光　赤塚邸　1969

写真 3.1　遠景

写真 3.2　3 階居間と吹抜

写真 3.3　居間南側展開

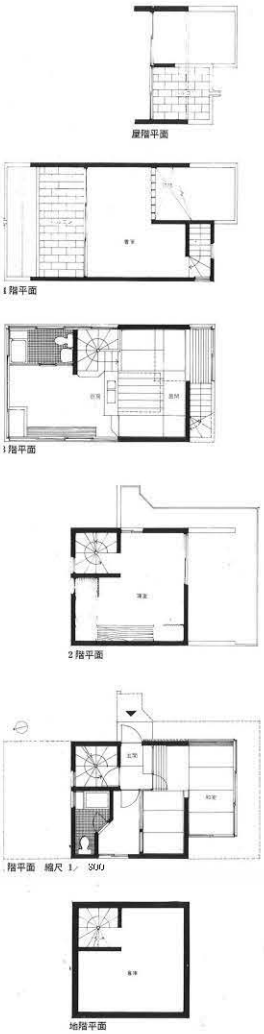


図 3.1
馬場璋造：日本現代建築家シリーズ④　東孝光，
新建築社，P.80,1982.4

写真 3.1 ～ 3.2
馬場璋造：日本現代建築家シリーズ④　東孝光，
新建築社，PP.77,80,1982.4

図 3.1　平面図

設計　東孝光

所在地　大阪府東大阪市

構造規模　鉄筋コンクリート造地下 1 階地上 4 階建て　延床面積 120.21 ㎡

1. 空間構成原理：重層連結構成、5 層連結

2. 空間相互の関係：接続的

3. 内外空間の関係：展望の取り込み　接続的

4. 共用室の扱い及び配置：主要な扱い（通過義務）

5. 個室と共用室の関係：接続的

6. 移行空間：階段室、共用空間

技法：重層連結、コンクリート打放し、連結層の拡大縮小

効果：砦に立つ塔

東孝光　大山邸　1969

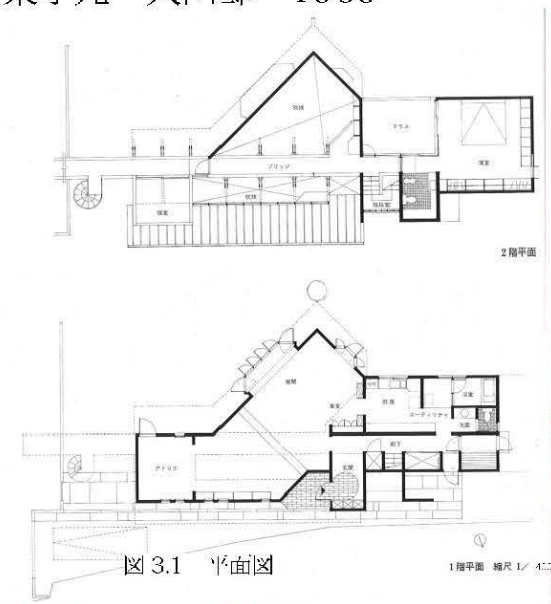


図 3.1　平面図

図 3.1
馬場璋造：日本現代建築家シリーズ④　東孝光，
新建築社，P.85,1982.4

写真 3.1 ～ 3.2
馬場璋造：日本現代建築家シリーズ④　東孝光，
新建築社，PP.82-84,1982.4

写真 3.1　南東面テラス遠

写真 3.2　居間とブリッジ

写真 3.3　アトリエ西側展開

設計　東孝光

所在地　大阪府池田市

構造規模　鉄筋コンクリート造，木造　地上２階建て　延床面積 160.63 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成、レベル差や屈曲による断裂と連続

2. 空間相互の関係：連続的

3. 内外空間の関係：接続的　ブリッジによる接続

4. 共用室の扱い及び配置：中心的な扱い　核

5. 個室と共用室の関係：接続的

6. 移行空間：ブリッジ、共用空間

技法：レベル差や屈曲による接続を用いた連結、コンクリート打放し、ブリッジ貫入

効果：ブリッジが多様な空間を貫くことで、統一的な役割を果たしている。

「塔の家」と「矢野邸」、「赤塚邸」、「大山邸」の比較分析

	塔の家	矢野邸	赤塚邸	大山邸
空間構成原理	重層連結構成、二次内包、部分分割	連結構成、スキップフロア６層連結	重層構成、５層連結層の拡大縮小	連結構成、レベル差や屈曲による断裂と連続
空間相互の関係	連続的	連結的、迷路性	接続的	連続的
内外空間の関係	都市風景や日照の取り込み	連続的、連続空間が外部まで拡張	接続的、展望の取り込み	接続的、ブリッジによる接続
共用室の扱いと配置	中心的、上下貫通	中心的、落ち着いた空間	主要な扱い	中心的な扱い
個室と共用室の関係	連続、時間的棲み分け	連続的、レベル差	接続的	接続的
技法	重層連結構成 塔状住居 都市型住居 コンクリート打放し 吹抜空間 身体的空間 全ての空間の共有 まちに暮らす 階段室型住居 バス・トイレ共用 仕上なし	重層連結構成 水平連結構成 田園型住居 コンクリート打放し 吹抜空間 余裕のある空間 個／共　層による分節 内外連続空間 スキップフロア 世帯を繋いで分ける 仕上あり	重層連結構成 塔状住居 山の上の塔 コンクリート打放し 層の拡大縮小 見晴らしの良い空間 個／共　層による分節 山に暮らす 階段室＋空間 住まい手の参加 仕上なし	ブリッジによる連結 水平連結構成 アトリエ付住宅 コンクリート打放し 吹抜空間 大空間 ブリッジによる貫入 ブリッジの外部接続 生活パターンの空間化 多様と統一 仕上あり
効果	密度の高い空間は仕上やディティールに頼らずに成り立つ 自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人間が、一つの匂いとなり、香る 家中の部屋を使っているので広い部屋に住んでいる 世の中と一緒になって動いている場所 西洋の住宅よりも日本的である	スキップフロアによる迷路的空間 夫婦、成人に近い子ども、老母を繋ぎながらエリア分けしている 連続空間が外部まで拡張し、外の庭も建築的空間構成に編込まれている 敷地全体の建築的空間化	室内から見えるパノラマが内部空間を構成 住み手が積極的に建築の形成に参加し、創造的対話の可能性を示唆 敷地の領域を区切らず開放することで、誰でもが敷地を散策し横切る 層による緩やかな分節	変化の多い空間がブリッジの貫入で統一されている 住まい手がもつ固有の生活パターンを空間化 ブリッジの比率が高く、魅力的な連続空間が可能となった レベル差や屈曲や小さな遮断を繰り返しながら繋がる生活空間となった

「管の家」の住宅形態の実現効果について、本人及び家族の陳述を整理する。

	「管の家」実現効果
空間構成及びそれを実現する素材と工法	①-A「コンクリートブロックという素材自体は、ラフな表情の工業製品の筆頭である。管の家には、内部外部でコンクリートブロックを素地であらわすところと被覆をしているところがある。２階より上の層を鉄骨によるシンプルなカゴの様につくり、カゴからはみ出す水回りの部分をブロック造にしている。鉄骨のボリュームには、外壁をパネル化し、亜鉛板を葺いているので、２階の軽量コンクリートブロックの外壁にも同じ亜鉛板を葺いている。コンクリートブロックを素地のまま表現するところは見映えの良い「馬目地」で積み、２階の内外の表に出ない部分は「いも目地」で積んでいる。 P.50 「内壁については化粧のコンクリートブロックとパネルのラワン合板にクリアラッカーの塗装で終了。唯一仕上げられているのが１階両親の領域の和室である。天井は、上階の水回りの下になるところにのみジプトーンという塗装済みのもっとも簡便かつ安価な処品を張っている。高橋は色で何かを表現しようとすることは決してなかった。林立するパイプの色は、近くにあったドイツ語の辞書のカバーの色と同じ緑がかったグレーでみる。あのパイプが黄色や赤だったりしたら随分違った空間になるだろう。高橋にとって、建築空間を決定するのは構造としての架構であり、それはすなわちインテリアでもあったから、常に色は二次的な要素として扱われた。管の家の場合はさまざまな生活の背景となるためのグレーとなっている。しかし、パイプによる架構は空間を強く印象づけている。」 PP.64.65 「２階の土台から棟までは、一枚の亜鉛板を３２cmピッチの瓦棒で現場の曲げ加工によって施工した。当初は光沢があり光っているのだが、時とともに酸化し、落ち着いた色になるはずであった。しかし、板厚が薄いので、べこべこのしあげになってしまった。酸化の状況も一様ではなく、雨垂れの跡が目立ってしまった。メーカーはこれに懲りて、後に工場で酸化させて出荷する方式に切り替えた。P.64 ①-B「「家型」を半分に割った形の６０．５φのパイプを細い鉄筋で引っ張り合っているのがこの鳥カゴの正体である。３スパン４本（端部は２スパン３本）のパイプを１パーツとして工場でブレースを溶接し、ひとつおきに現場で組み立てその間のブレースを現場で溶接していく。 一番端の妻側のパーツ部分のみブレースが太い。他は細い９mmの鉄筋で結ばれている。パイプのピッチは６４cmと、高橋が以前から使っていたＧＭモデュールが採用されている。 PP.52-54 「２階は土台として機能する鉄筋コンクリートの２階床版から棟までを一本のパイプを曲げた鉄骨でカゴをつくった。木製のパネルを工場でつくり、そのカゴから浮かせるようにして現場でカゴに取り付けるという手順である。鉄骨はすべて隠されることなく露出されている。全体の鉄骨が約６時間で組み上がった。鉄骨建方が半日ちょっとで済んでしまうスピードである。少なからず音の出る作業で、搬入車両も大きいことを考えると近隣の住民にとっても望ましいことである。」P.57 「高橋の住宅は屋根が特徴的だ。全体を単純なかたちに整理しようとする中で、どうして陸屋根ではなく屋根型が載せられたのか。どの住宅もかなり大胆な屋根型をしている。陸屋根は初期の作品にまれに見られる。「Ｙａ邸」（３章ｃａｓｅ１参照）では新築時には陸屋根であったが、その後増築時にヴォールトの屋根が載り、後半の住宅には陸屋根は登場しない。それぞれ、屋根がかたちづくられる経緯は道路斜線、北側斜線などの法規にの理由もあるが、陸屋根にせず屋根の勾配で水を切っておくというのは、自然に抗わないかたちである。鉄骨造で「ふわりと軽く」つくりたいのに、陸屋根にすると鉄骨の梁にデッキを敷き、コンクリートを流し、そこには雨水を貯めてから流す重い屋根を頂上に載せることとなる。「ふわりと軽く」を通していくのなら水を貯めずに流せる勾配の付いた屋根になるのである。高橋の鉄骨造へのこだわりがこの屋根形状にも現れている。PP.62 64 ①-C「普通そのままあらわさないものを素地のままあらわしてつくるというのは、つくり手としてはなかなか面倒なことである。ざっくりと仕上げておけば、そのあと内壁を張って、ときにはビニールクロスを張って仕上げられるのに、かぶせるものがなければ、コンクリートブロックにしろ鉄骨にしろジョイントの位置から溶接の跡、荷揚げの時の傷も慎重に気を配らなくてはならない。つまり隠さないディティールは、その分、手間がかかるのである。」P.52 「鉄骨建方のあとは、壁、屋根のパネルを取り付け、断熱材、合板、大平板、遮音シート、そして亜鉛板で仕上げられる。内部はパネルのラワン合板のあらわしだ。」 P.58
外部空間と内部空間の関係	②-A「管の家では、「混じる空間」として玄関ホールが位置づけられた（fig-3,4）。このホールは庭まで通り抜けられる土間のような空間で、東側が親世帯の住居，西側がアトリエになっていた。」P.82 ② Ｂ１９９６年には、庭に面した２階の階段つき当たりの壁を透明はめ殺し窓とした。これにより、 自然の光や色が身近に感じられ、生活が楽しくなった」と高橋は語っている。高橋は日常的な自然体感の仕掛けを追求しており、吹抜け、天窓、ロフト、広いベランダ、テラスなどを積極的に住空間に設え、住みこなしていた。その極意について、高橋は新聞、雑誌、著書などで、折に触れ披露している。例えば天窓については、「雨音でテレビが聞こえにくくなるが、朝夕のほのあかりを眺めるのは楽しい」（『住まいの近景・遠景』彰国社、1994 年）。その根底には、たとえ少々不便であろうとも、自然との対話を大切にする姿勢があった。PP.92-94

「管の家」実現効果

個室と共用室の関係	③-A「玄関は親世帯、子世帯そしてアトリエに来る人々のための共用空間であり、郵便物の受け渡しの際にお互いの姿を確認したり、ちょっとした会話をかわす場所となった。ただし高橋がアトリエで施工者と真剣に仕事の打合せをしている典以中に、「おい、公子」と父親に声をかけられ、ドキッとしたなどというエピソードもあったようである。 同じ家に暮らしてはいても、仕事に追われがちな日常においては、時折互いいの気配を感じられる空間は有効に機能したようである。」P.82 ③-B「旧宅では、母親が娘の家事を少しでも手伝おうとの親心から、日中よく２階の子世帯の領域へ上がってきていた。これには娘として自分たちの生活リズムを乱されると感じていた高橋は、あえて新しい階段には手すりを付けなかった。このためか、また７４歳という年齢のためか、母親は２階へは訪れなくなったという。扉や、ましてや鍵を掛けたわけではないのだが、建築的工夫で二つの空間を緩やかに分節した。」P.84
家族関係の形成に対する対応	④-A「親世帯の住居には専用の台所と浴室があり、高齢であることを考慮して寝室にも便所が設けられた。またトイレやふろ場には母のみが不自由になってから手すりが設置された。つまり機能的、住居計画的には、充足されていたといえる。しかし後年、高橋は両親の日常における生活行動を分析することで、母親にとっての「居場所」が確保されていなかったと振り返っている。父親は耳が遠くなっており、一日中大音量でテレビをつけていた。チャンネルの主導権はもっぱら父親にあり、旧宅において母親はこの騒音から逃れるように、１階や２階の子世帯の領域に自分の居場所を獲得していたのである。それが新居に移り、二人は一日中１階の住まいに一緒に居ることになったのだ。その数ヵ月後、母親は疲れやストレスが原因といわれる脳梗塞を発病することになる。」PP.84-86 ④-B「高橋は、夫妻のみで私的生活を完結させるのではなく、住まいを人々に積極的に開放した。この管の家を通じて育まれてきた人と人、人と環境とのつながりを考えるとき、まさに、高橋夫妻が「管ーパイプ」となっていたといえよう。」P.101
空間的適応性を実現するための造形的着想	⑤-A「電機は、ケーブルやスイッチ・ボックスも壁から突き出し、露出である。化粧気のないブロックの壁にはそれもまたしっくりくる。これがプラスターボードに柄のついたビニールクロスが張られている壁なら露出のケーブルなど目も当てられない。コストを抑えると同時にあまり美しくないものがたくさん出て来ても仕方がないという理由で、２階のスイッチの高さ以上に電気の配線は上がっていない。ロフトのＵ型蛍光灯以外はコンセントから明かりを取っている。照明器具は行為と場所に応じて必要となるので、ルーズな空間には照明もルーズに対応できる方がよい。」P.66 ⑤-B「管の会とは、管の家にて２カ月に１回開かれるパーティーのことであり、1988年から今日に至るまで開催されている。夫妻ともに社交的であるため、メンバーは、学生、建築関係者のほか、ひいきの飲食店、出版社、旅行関係者といった多彩な面々であり、数十人が三々五々に集う。　主会場となる管の家２階の約３００㎡の大空間には、芳醇なアルコールや料理が待ち受け、ジャズ主体のBGMが人々を心地よく包み込み、宴たけなわともなればドン・ジョバンニのオペラ放映、と楽しい時間が夜更けまで続いた。「男子厨房に入るべからず」とは対極に、キッチンでは男性達が極めて自然に料理をしていた。一方、高橋はというと、教団とは打って変わったカジュアルスタイルに身を包みグラス片手に、リビングで場を盛り上げている。「カナッペはいかがですか」と学生陣に勧めるエプロン姿の紳士は、高橋の夫、鷹志である。」PP.96.97 「それにしても管の家は書籍をはじめ全体的に非常にモノが多く、それらがすべて隠されていないのになぜか不思議と散らかっているようには見えない。その理由は、住宅自体の構造体（スチールパイプや紫地に近いラワン合板、そしてコンクリートブロック、テント地の間仕切りなど）をはじめ空間を構成する実に多くの部材が隠されないで露わになっているためと考えられる。その結果、モノをたくさんおいても目立たなくて違和感がない。そして何よりも天井の高い大空間がもつ包容力によるものではないだろか。いくらモノを置いても空間の迫力のほうが勝っているのである。」PP.106-108 ⑤-C「変形の敷地の形をなぞるかのように平面は構成されている。１階はコンクリートブロックによる壁構造。頂部に架梁と２階床版を鉄筋コンクリートとして１階が基壇であるかのように扱われ、２階は軽い鉄骨に、水回りの一部がコンクリートブロック造である。重量コンクリートブロックの角を鉄筋コンクリートの壁柱でかため、９６cmのモデュールと４０cmのブロックの寸法を調整、つまり半端な寸法をコンクリートで吸収させている。P.48 「家型」を半分に割った形の６０．５φのパイプを細い鉄筋で引っ張り合っているのがこの鳥カゴの正体である。３スパン４本（端部は２スパン３本）のパイプを１パーツとして工場でブレースを溶接し、ひとつおきに現場で組み立てその間のブレースを現場で溶接していく。　一番端の妻側のパーツ部分のみブレースが太い。他は細い９mmの鉄筋で結ばれている。パイプのピッチは６４cmと、高橋が以前から使っていたＣＭモデュールが採用されている。」PP.52 54

高橋公子　Ya 邸　1969

図 3.1　平面図

fig-1　竣工当時（1969 年）

写真 3.1　北東面外観

図 3.1
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，
彰国社，P.123,2003.7

写真 3.1
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，
彰国社，P.120,2003.7

fig-3　竣工当時の居間兼応接間

写真 3.2　居間・応接室

fig-14　正介さんの書斎

写真 3.3　書斎

写真 3.1
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，
彰国社，P.125,2003.7

写真 3.1
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，
彰国社，P.135,2003.7

設計　高橋公子

所在地　東京都国立市

構造規模　鉄骨造　半地階　中 2 階建て　延床面積 120.33 ㎡

1. 空間構成原理：連結構成、ユニット連結

2. 空間相互の関係：接続的

3. 内外空間の関係：接続的

4. 共用室の扱い及び配置：主要な扱い

5. 個室と共用室の関係：分離

6. 移行空間：共用空間兼用

技法：ユニット連結、スキップフロア、対面型キッチン

効果：建主が奇邸であると言う、それは使い勝手とか温度・湿度とか、一般的に機能性という言葉であらわされるもの、五感で認識できるもの以外のところで一種の拒絶反応が起きているらしい。

高橋公子　菅邸　1981

図3.1　平面図

fig-1　竣工時（1981年）

写真3.1　南面外観

図3.1
「日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい」
彰国社，2145,2003.7

写真3.1
「日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい」
彰国社，P.140,2003.7

fig-11　親棟内観（竣工時）

写真3.2　親棟内観

fig-10　親棟から庭をとおして子棟を見る（竣工時）

写真3.3　親棟から庭

写真3.2
「日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい」
彰国社，P.155,2003.7

写真3.3
「日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい」
彰国社，P.155,2003.7

設計：高橋公子

所在地：埼玉県坂戸市

建築概要：鉄骨造　2階建て　延床面積 168.57 m²

1. 空間構成原理：連結構成、合掌による親棟と子棟の連結
2. 空間相互の関係：接続的　合掌により対峙が緩和
3. 内外空間の関係：接続的
4. 共用室の扱い及び配置：十字形な扱い
5. 個室と共用室の関係：接続的
6. 移行空間：共用空間兼用

技法：合掌による棟連結、工型コートハウス

効果：それぞれの世帯に合掌やお風呂があって、干渉せず、お互いのことは気配としてわかる使性感覚で生活が成り立っています。

高橋公子　えごのきの家　1997

図 3.1　平面図

写真 3.1　東立外観

図 3.1
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい、
彰国社、2185/2003.7

写真 3.1
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい、
彰国社、F/85,2003.7

写真 3.2　リビング

写真 3.3　中庭

写真 3.2
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい、
彰国社、F/82,2003.7

写真 3.3
日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい、
彰国社、F/89,2003.7

設計　高橋公子

所在地　東京都渋谷区

構造形式　鉄筋コンクリート造　鉄骨造　3 階建て　延床面積 208.38 ㎡

1. 空間構成原理：分棟構成、六分割された三世代住宅
2. 空間相互の関係：接続的　中庭やブリッジを介して接続
3. 内外空間の関係：接続的
4. 共用室の扱い及び配置：主要な扱い
5. 個室と共用室の関係：中庭やブリッジを介して接続的
6. 移行空間：ブリッジ、廊下

技法：六分割のコートハウス、CT 鋼ラーメン、多機能な 6 つの部屋

効果：家族各自の生活場面が隔離されることなく、かつ適度の距離を保ちつつ、家全体の気配がかようような環境をもった。

「管の家」と「Ya 邸」、「菅邸」、「えごのきの家　の比較分析

	管の家	Ya 邸	菅邸	えごのきの家
空間構成原理	内包構成、 二次連結構成	連結構成 ユニット連結	連結構成、書庫による親棟と子棟の連結	分割構成、六分割された三世代住居
空間相互の関係	内包的一体と接続	接続的	接続的 書庫とで世帯を繋ぐ	接続的、中庭やブリッジを介して接続
内外空間の関係	天窓等による接続 柔らかく閉じる	接続的	H型コートハウス	接続的
共用室の扱いと配置	中心的、内包	主要な扱い	中心的な扱い	主要な扱い
個室と共用室の関係	接続的	分離	接続的	中庭やブリッジを介して接続
技法	細ラ・メン膜構造 ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 切妻屋根型 内包構成 コンクリートブロック	ユニット連結 ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 陸屋根 連結構成 スキップフロア	鉄骨ラ・メン構造 ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 片流れ屋根 連結構成 コートハウス二世帯	ＣＴ鋼ラ・メン ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 ヴォールト屋根 分割構成 六分割のコートハウス
効果	住宅自体の構造体をはじめ空間を構成する多くの部材が露わになっているため、モノが多くても気にならない。 天井の高い大空間がもつ包容力が、迫力ある空間になっている 包容力ある大空間では、さりげなく各ふるまいをアフォードする場が設えられ、使い手によって適宜可変可能であった。	使い勝手とか温度・湿度とか、一般的に機能性能という言葉であらわされるもの、五感で認識できるもの以外のところで一種の拒絶反応が起きているらしい あらわしの鉄骨の色を少し紺紺の入った黒にしたら、住まい手曰く「腐った黒だった」という 居間の床がアスファルト仕上で、柔らかくてよかったが、スリッパがすぐにダメになった 高橋が自身も言うようにコミュニケ・ション不足といえる	分棟配置は自由度が高く、家族や時間に対する適応性が高い空間となっている。 それぞれの世帯に台所やおふろがあって、干渉せず、お互いのことは気配としてわかる位置感覚で生活が成り立っている。 モノが溢れていても天井が高いから気にならない 二つの世帯を結び地域に開くかたちである	一組の夫婦を中心に組み立てられるモダンリビングの限界を感じ、多様な人間が居合わされる空間が意識されている。 家族各自の生活場面が隔離されることなく、かつ適度の距離を保ちつつ、家全体の気配が通うような環境をもった。 従来の家族が自明の存在でなくなった時代にあって、新たな集住体の確かなイメージを私たちに残した。

2.5　場面転換の時間的適応性の分析

2.5.1　空間構成

住宅形態の実現効果 (B) と作品のアイデア（設計理念）(A) の対応と対象作品の比較分析 (X) との対照を分析する

「私の家」の空間構成の分析 1

①-A 「壁と天井スラブとの継目など諸所にティルト・アップのディティ ルの痕跡がある。 P.56 のは①2 ｜・・・戦後復興の課題に取り組んでいた。この自宅もその解決方法のひとつとしての、自作自演の試作住宅である。」P.146 となっている。自邸をもとに大量供給が可能なプレファブリック化を試みようとしたためである。実際にはティルト・アップ工法では住宅金融公庫の融資が不可能なため断念したとされる。

① B　数寄屋以来の不健康な住居デザインの谷間のなかで、私たちは、住居をまぎれもなく、空間についてでなく、材料や木割や、細々としたプロポ ションについて小突き廻していたようである。そこでは、空間は、空間ではなくて、展開面に囲まれた箱にしか過ぎなかった。清家清は、材料や木割や、その他細々としたことはどうでもよくて、デザインとは、要するに空間を作る技術なのだと主張しているようである。」P.178 と林昌二は清家の空間つくりを評価している。清家は①-1 「私の家」としたのは、それが単に容器としての建物、いわゆるハードウェアである住宅ではなくて、ソフトウェアとしての家族や社会環境のようなモノでないものを含んでのコンセプトであるからだ。」 ①-3「建築は本来そうした形而上的な存在をひとつの調和のある個体として形而下的というかフィジカルな存在として獲得する技術であろう。」 PP.52 54 ① 5　私のは、私の手の高さかな。私はあの家の亭主であり、全部をコントロールするという、専制君主的な平清盛的な発想があるんです。天井直付けの電球の取り換えも亭主がするわけです（笑）。」P.108 といっている。ここでの空間は清家にとって、家族を含めたイエであり、形而上的な存在を調和する形而下的な存在であり、生活をする場であるといえる。

① C　「舗設」という言葉も、時々刻々そのなかで変化があるわけです。朝昼晩、春夏秋祭。本来、日本の住宅の住まい方のよいことは朝、ご飯を食べたところで、ちゃぶ台を片付け、そこへ針箱を持ってきておかみさんが針仕事をする。亭主が帰ってくる前にまた食事の用意をして、そこで飯を食うしつらえをする。今度はまたそこに布団を敷いて寝る。でまた翌朝、布団をたたんでそこへちゃぶ台を出して、という時間のシークエンスの中で自由に空間をつくりかえていくところにあったと思います。さらに春夏秋冬の中で、夏になれば夏のしつらえをする、秋になれば秋のしつらえをする、自然と交流しながらしつらえをしていくというのが日本の住宅の演出だと思います。」PP.102.102 と清家は言い、「自邸において実践しています。これは清家が①-4「建物の方は文字通り不動産ですが日本人の住まい方は、生活の中のシークエンスに動きがあるわけです。だからディメンションとして増えるのです。時間のディメンションがそこに入ってくるから。建築というのは、あるいは住宅といってもいいですが、二次元です。プランは二次元だというけれど、建物にしただけで三次元になるし、そこに時間のシークエンスを入れると四次元になるものです。マルチ。ディメンションだからね。ユ クリッド幾何学からリ マン幾何学になってくるのだと思います。」P.106 というように、住宅は時間のシークエンスを含めた四次元の時空間と考えていたからだ。

「私の家」の空間構成の分析２

①-E「この住宅は森邸以来、清家が一貫して追求してきたワンルームの住宅の一つの帰結ともいえるもので、彼の住宅感が極めて直截に表現されている。・・・清家のこの期のコンクリート造住宅では構造体であるプレーンな壁体によって空間の規定が行われているが、ここでも二枚の壁が規定する空間がさらに短い壁体の存在で二つの部分に分かたれている。」P.188 と横山正は言い、

①-F「・・・H型壁ワンルーム型式が、清家流の鉄筋コンクリート住宅の基本形でした。「私の家」はこの基本形の代表です。」と林昌二は言っている。これは ① 6 「経済性に裏付けされた構造的合理性を、戦後単純に平面計画の方法論として出発していた住居計画の中に持ち込んで、これに建築家への可能性を開拓した」P.Appendix 11 と林昌二が言うように住居計画と構造的合理性の一体化が図られた結果である。H型壁はH型鋼の断面二次モーメントの高効率にみられるように、最小壁量に近い経済性を発揮しながら、南面と北面の全面開口を可能にしている。

これらを実現している技法「構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント」、「舗設」は清家の他の作品にも共通してみられるものであり、この四つ技法の組み合わせは清家清のアイデンティティと考えられる。
また「私の家」住居群が、そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく過程は、人間と住宅（建築）との自然な相互作用が展開されているかのようだ。

空間構成は抽象化した分割構成でワンルームになっている。そのため内包的空間構成を併せ持つ。

「塔の家」の空間構成の分析 1

①-A「居間・食堂の吹抜けの手前に階段スペースがあり、踊り場があって、その右手がトイレと浴室です。私の家は家中どこにもドアや間仕切がありません。家全体がワンルームです。しかし風呂場だけは多少プライバシーのこともありますから、吹抜けとの境はコンクリート壁を立ち上げていますが、それも天井との間に二〇センチ程、隙間をあけているんです。この隙間は、空間の連続性を強調するために、壁を自立させて天井から切り離してあるわけですけれど、実際上もこの隙間が風呂場の湿気を全体に散らして緩和するという役目を果たしているようですね。」P.69

「一層が一室で、縦方向に積み上げられているので、ドアがなくとも視線は断たれ、その面でのプライバシーは守られる。」PP.37.38

「塔の家では、各室各室、縦に積み重ねられている故に、ノー・ドアにも拘わらず、視線のプライバシーは保たれている。外界へのそれは、将来、周辺により高い建物が、密接して建ったとしても、直通の視線は避けるよう、当初、東が、設計した故に、近隣との視線に関する摩擦はない。むしろ、上へ下へと流動する視線の移動が、開放的な景観をつくって快い。P.98「塔の家」には室内にドアはなく、ワンルームになっている。それでもプライバシーは保たれていると証言している。

① 1「私は前に個室を　家の中の家」といいましたが、居間はそういう意味では「家の中の広場」か「公園」というぐらいに捉えれば良いと思うんです。つまり、日くじら立てて応接間は不要だとか、団らんを優先してとか、仰々しく考えなくとも、広場または公園と考えれば、ある程度のスペースとかコーナー分けが必要ですが、片隅で老人が日なたぼっこをしている、こちらではこちらでは子供が走り回って遊んでいる、お母さんが乳母車で赤ちゃんと散歩などという公演風景が想像できるでしょう。居間も、家族がめいめい勝手気ままに使っている方が、さあ団らんしましょうというわざとらしい家族のあり方よりは、ずっと現代人らしい素直な居間の風景ではないかと思うんですね。PP.64.65 と言うように規範的ではなく、自律的な棲み分けを東は考えた。

① B 地下の書庫からガレージ、食堂、バスルーム、寝室からペントハウスの子供室まで、六坪の敷地に建築面積三・六坪、延約二〇坪の六層のすまいがその結果である。浴室のガラス越しに足許を走る自動車の流れが視野を横ぎり、階段を登りおりするにつれて細長い窓から歩道を歩く人、向う側のビルが次第に変化して、屋上へ出ると遠く東京タワーや渋谷、新宿のスカイラインを望む。内に向っては、吹抜けの上の窓から朝の光が食卓のテーブルに落ち込み、階段の窓から夕陽が斜の細い線となって、コンクリートの壁に縞模様を画く。夜は再び高窓に月がうつり、私が地下の書庫にとじこもると、歩道面に設けた窓のあかりでその存在を通る人に示すことになる。時々奥通りに通り抜けとなっているガレージの床からコツコツと靴音が私の頭の上でひびく。このすまいには、一枚もとびらがないので、日曜日など小学生の娘がパーティを開くと十数名の子供達のカン声が上から下までにひびきわたって私達夫婦にうれしい悲鳴を上げさせる。PP.25.26 空間の繋がりは、内部に留まらず外部や都市とも繋がっている。

①-2「塔の家の設計は、たった六坪の土地の上に、六割の建ぺい率で 3.6 坪という極限的な広さで住居が成立するかという命題が、デザイン上の私の意図を超えて圧倒的な強さで私の上におおいかぶさってくるというものであった。だから、もちろん外観などについての初期のスケッチもいろいろ残ってはいるが、図面としての正念場は、平面と断面、つまり内部をどうつくるかにほとんど百パーセントの比重がかかっていたように思う。」PP.116-118 東は自らの身体が「塔の家　の内部にどう納まるか、綿密な試行錯誤を繰り返した。表層としての形ではなく、内部という空間をどうつくるかに、極限に近い条件下が向かわせた。

「塔の家」の空間構成の分析２

①-C「このコンクリート打放しの壁が意外に暖か味のある、優しい表情を持っていることに気付いたのは、やはり自分で住んでみての実感なのである。私のところでも、いずれは壁の仕上げをと話し合ってのスタートであった。ところが、そんな必要もないと妻や娘たちは言うのである。ただ、それなりの工夫が自然に生まれてのことであることを忘れてはなるまい。いつの頃からか、妻は玄関ポーチにつたの大きな鉢を置いて壁にそれをはわせ始めた。またそのうちに植木鉢をたくさん針金で壁にしばりつけてベゴニアの鉢植えも始まった。塞くなるとみどりは室内に引越してきてにぎやかである。また、布を織り、手造りのクッションを家中に氾濫させて、それなりのインテリアが、自らできあがった。ところがそうなってみると逆に、室内のみどりや布、クッションの向う側に控えているこの灰色の壁の表情が、意外に生々と豊かに見えてくることにも気付くようになった。コンクリート打放しは、流し込む型枠の木口や小さな凸凹が写し出されて、人間の手でつくられたことを感じさせてくれる。色も、単に灰色というものではなく、半光沢で、かすかにみどりを感じさせる暖か味のあるグレー、多少の吸湿性もあって、晴の日と雨の日では肌も違う。永年一緒に暮らしてみると、結構、表情豊かな素材なのである。」PP.154.155「塔の家」に入ると、安心と親しみを感じた。身体的スケールがそうさせただけでなく、コンクリートのラフで様々な表情によるところも大きい。

①-3「セメントも何処でも採れるといいながらやはりその国の大地から生まれたものですし、まして砂利とか砂は地域的なものだと思うんですね。そういう意味ではコンクリート打放しというのは、土地の匂いと"人間の手"みたいなものを仕上げに反映させていくことのできる素材なんです。」P.151 このように東が解説するように、土の匂いと手仕事感が、ラフで様々な表情をつくっている。

① D「この塔の家は、実は、石造りの西洋の住宅よりもずっと、日本の木造住宅に似ているということだ。P.38

「昔の日本人は畳に触れる足の感触を大切に考えていたんじゃないだろうかと。じつは私は自分の家でそのことを思い知らされたわけです。といいますのは靴下ひとつで歩いていますと、凸凹の床ですから非常に足ざわりがいいというか、床の感触が伝わってくるんですね。それに馴れてきますと大体この辺に山っ張ったところがあるなあということが全部分かってきます。つまり細かな床の感覚というものがはっきりしてくる。これは健康のためにもいいんじゃないかと。 P.149

「この家のどこが日本的であるのか、という説明が、はじめの頃はなかなかできなかったのです。なぜタタミがないのか、なんて議論を吹っかけられたりしたときに。結局、上下の空間のつながり方が日本的なんだということが10年ぐらい経ってから分かるようになった。」P.253

日本的な空間という要因が、空間のつながりにあるという。

①-4「私は、ある広がりがあっても、それを知覚する存在がないかぎり、空間は存在しないという認識論の次元をいっているわけではない。人がたんなる空間を知覚するだけでなく、その場所に存在する意味を知って初めて、その場所が空間となるだろうことをいうのである。建築家の設計作業とは、その意味づけの行為でなくて何であろうか。注意しなければならないのは、それが、建築家の意味づけだけに終っている間は、仮りのものであって、やがて空間性を失ってしまうこと。彼の意味づけと一致してもしなくても、その空間を占める人間が、どんな意味を獲得することができるのかが、重要なのである。私の住まいは、東京の都心にあるが、それはたえず直接間接にたくさんの友人にかこまれていたいという欲求からすべてが始まった。どうしても都心に住みたいという意味づけがなければ、そしてそれが見る人にも伝わらなければ、それは狭い土地を私有化した、階段ばかりの不便な家でしかありえないのだ。」P.164 空間の繋がりとともに、空間の意味付けに関わる住まい手の主体性がなければ、やがて空間性は失ってしまう。

「塔の家」の空間構成の分析３

これらを実現している技法のうち「重層連結構成」、「コンクリート打放し」、吹抜空間」、「仕上なし」は東の他作品にも多く共通している。

その効果で「自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人間が、一つの匂いとなり、香る」と妻の節子が言っている。これは東の言う、それぞれの歴史を重ねてきた存在である人間が、何かをつくろうと決意したその瞬間に、すでに生み落とされるものの運命は決定されていると私は見る。建築家があらかじめ抱いている固定的なイメージがその運命の前では如何にもろいものであることか。私はむしろ、相手の人間をひきずり出し、展開し、実体化させることを建築家の役割と考える。それが、一体となった両方の人格の本当の展開、実体化に肉迫する限り、どうして見るものを感動させないことがあり得よう。それが、私の住まいへの抽象的な解明であり、また、私の建築家としての倫理でもある。」P.28 の実践に基づく結果であろう。

空間構成は重層連結で、重層連結の結果一体となった内包的構成を併せ持つ。

「管の家」の空間構成の分析 1

①-A「コンクリートブロックという素材自体は、ラフな表情の工業製品の筆頭である。管の家には、内部外部でコンクリ・トブロックを素地であらわすところと被覆をしているところがある。２階より上の層を鉄骨によるシンプルなカゴの様につくり、カゴからはみ出す水回りの部分をブロック造にしている。鉄骨のボリュームには、外壁をパネル化し、亜鉛板を葺いているので、２階の軽量コンクリートブロックの外壁にも同じ亜鉛板を葺いている。コンクリートブロックを素地のまま表現するところは見映えの良い「馬目地」で積み、２階の内外の表に出ない部分は「いも目地」で積んでいる。 P.50

「内壁については化粧のコンクリートブロックとパネルのラワン合板にクリアラッカーの塗装で終了。唯一仕上げられているのが１階両親の領域の和室である。天井は、上階の水回りの下になるところにのみジプト・ンという塗装済みのもっとも簡便かつ安価な処品を張っている。高橋は色で何かを表現しようとすることは決してなかった。林立するパイプの色は、近くにあったドイツ語の辞書のカバーの色と同じ緑がかったグレーでみる。あのパイプが黄色や赤だったりしたら随分違った空間になるだろう。高橋にとって、建築空間を決定するのは構造としての架構であり、それはすなわちインテリアでもあったから、常に色は二次的な要素として扱われた。管の家の場合はさまざまな生活の背景となるためのグレーとなっている。しかし、パイプによる架構は空間を強く印象づけている。」PP.64.65

「２階の土台から棟までは、一枚の亜鉛板を３２cmピッチの瓦棒で現場の曲げ加工によって施工した。当初は光沢があり光っているのだが、時とともに酸化し、落ち着いた色になるはずであった。しかし、板厚が薄いので、べこべこのしあげになってしまった。酸化の状況も一様ではなく、雨垂れの跡が目立ってしまった。メーカーはこれに懲りて、後に工場で酸化させて出荷する方式に切り替えた。P.64

①-1「管の家で鉄筋コンクリート造にしなかったのは、鉄筋コンクリートだと自由自在にいろいろな形が作れてしまうからであり、前述した木造でなく鉄骨造を選択する理由と同じである。コンクリ・トブロックは高橋にとっては、何時でも同じ大きさと性能のものが集められる工業製品の一つであったから、「硬い壁」であるとか、「ふんわりとした空間の基壇」が必要となる場合選択されていたのである。工業製品を住宅に使うのは品質上の安定性と量産による経済性が普通の人のための住宅に相応しいからという理由だった。PP.49-50

高橋はコンクリートブロックや鉄骨などの工業製品を他作品でもよく使っている。それは建築の曖昧な性能を排除して供給する、普通の人のための住宅の提案を、社会的課題として捉えていたからだ。

①-B「家型」を半分に割った形の６０．５φのパイプを細い鉄筋で引っ張り合っているのがこの鳥カゴの正体である。３スパン４本（端部は２スパン３本）のパイプを１パ・ツとして工場でブレ・スを溶接し、ひとつおきに現場で組み立てその間のブレースを現場で溶接していく。　一番端の妻側のパーツ部分のみブレースが太い。他は細い９mmの鉄筋で結ばれている。パイプのピッチは６４cmと、高橋が以前から使っていたＧＭ-モデュ・ルが採用されている。」PP.52-54

「２階は土台として機能する鉄筋コンクリートの２階床版から棟までを一本のパイプを曲げた鉄骨でカゴをつくった。木製のパネルを工場でつくり、そのカゴから浮かせるようにして現場でカゴに取り付けるという手順である。鉄骨はすべて隠されることなく露出されている。全体の鉄骨が約６時間で組み上がった。鉄骨建方が半日ちょっとで済んでしまうスピードである。少なからず音の出る作業で、搬入車両も大きいことを考えると近隣の住民にとっても望ましいことである。」P.57

「高橋の住宅は屋根が特徴的だ。全体を単純なかたちに整理しようとする中で、どうして陸屋根ではなく屋根型が載せられたのか。どの住宅もかなり大胆な屋根型をしている。・・・陸屋根にせず屋根の勾配で水を切っておくというのは、自然に抗わないかたちである。鉄骨造で「ふわりと軽く」つくりたいのに、陸屋根にすると鉄骨の梁にデッキを敷き、コンクリ・トを流し、そこには雨水を貯めてから流す重い屋根を頂上に載せることとなる。「ふわりと軽く」を通していくのなら水を貯めずに流せる勾配の付いた屋根になるのである。高橋の鉄骨造へのこだわりがこの屋根形状にも現れている。PP.62-64

「管の家」の空間構成の分析２

①-2「高橋の選択は、より現実的だった。キッチンの作業台の高さと住宅政策を等価な問題として捕らえるスタンスは、今と将来を同時に考えるということであり、それが高橋の住宅設計へのスタンスであった。そんな高橋がした現実的選択とは、モダンリビングの日本化と言えるかもしれない。「管の家」に代表される高橋の住宅の中には、伝統的な日本の住宅のもっていた機能に対するルーズさに通じるものがある。それは、家族と住宅の緊密な関係を解除する操作とも言い換えられる。高橋の建築に現れた細い鉄骨の架構に覆われたおおらかな空間は、家族という人間関係とその時間の変化をルーズに包み込む装置である。P.32
「管の家でも鉄骨が選択された。かねてから「がらんどう」な空間を状況に合せて使いこなして行く空間をつくってきたが、それには空間の大外枠だけをつくり、中に柱が存在しない、構造によって空間と暮らし方を規定しないことをモットーとしており、そのためには体育館のような大きさでも出来てしまう鉄骨造が最適であった。同じような柱梁の構造に木造があるが、鉄骨の方がより大空間が可能である。また、鉄骨造を好んだもうひとつの大きな理由は、高橋が常にこだわっていた「GMモジュール」が通常木造に用いられる尺貫法（関東間）やメートル法のモジュールとは異なるからでもある。P.46

高橋が考えていたことは、単にその現場やその住宅のことだけではなく、システムとしての普及性や普遍性を絶えずさぐっていた。「がらんどう」な空間の用意さえあれば、状況に合せて使えるということは、普通一般の人のための住宅の可能性を探っていたからだ。

①-C「普通そのままあらわさないものを素地のままあらわしてつくるというのは、つくり手としてはなかなか面倒なことである。ざっくりと仕上げておけば、そのあと内壁を張って、ときにはビニールクロスを張って仕上げられるのに、かぶせるものがなければ、コンクリートブロックにしろ鉄骨にしろジョイントの位置から溶接の跡、荷揚げの時の傷も慎重に気を配らなくてはならない。つまり隠さないディティールは、その分、手間がかかるのである。」P.52
「鉄骨建方のあとは、壁、屋根のパネルを取り付け、断熱材、合板、大平板、遮音シート、そして亜鉛板で仕上げられる。内部はパネルのラワン合板のあらわしだ。」P.58
①３「ドライな印象を与える管の家だが、その建設プロセスは鉄骨工事と金物工事の職人との多くのやりとりの中から形を探し出し細部を決定していくというものだった。高橋はそういうものをつくるプロセスに大きな喜びを感ずると記しており、人と話すこと、協同することを楽しんでいた。こうした思いこそ、高橋が設計を一生の仕事とした大きな理由の一つだったかもしれない。いくら部品が機械生産されたとしても、実際に現場でつくっていくのは何人もの生身の人間の手に依っている。彼らの仕事に依って設計という仕事は成立しているのである。」P.58

材料や架構を素地のままあらわすことで、空間の質感は力強いものになる。手間がかかるだけでなく、しっかりとした仕事が要求される。勿論、その仕事をする人となりもあらわれるだろうから、職人への信頼は欠かせぬこととなる。

高橋の空間をつくる技法で、他３作品とも共通するのが池辺陽から継承された「GMモジュール」、「プレファブリック化」である。「細ラーメン膜構造」は「管の家」の後、「えごのきの家」でも採用されている。えごのきの家の設計中に病気で倒れ、その後設計活動は不可能となったが、「細ラーメン膜構造」に、空間とシステムの可能性を見ていたと思われる。

空間構成はスチールパイプによる内包構成であり、二次的操作段階の貫入による連結構成も併せ持つ。「細ラーメン膜構造」は「管の家」設計時に考案したものであり、「管の家」のアイデンティティといえる。

2.5.2　外部空間と内部空間の関係

住宅形態の実現効果 (B) と作品のアイデア（設計理念）(A) の対応と対象作品の比較分析 (X) との対照を分析する

「私の家」の外部空間と内部空間の分析

②-A「ユカは鉄平石の乱貼りで、カーテンの西側の部分は床の輻射暖房になっているから風のない日は冬でも外気の中で生活できる。庭と室内の間ではいちいち靴を脱がないで、そのまま出入りする。P.35

②-B「靴のまま室内に入る住様式は困難もあるが、何とか続けていきたい。その困難というのは来客の教養の問題だけで、庭から室内、室内から庭の circulation で靴をいちいち脱いだり履いたりしていては、庭と室内を一体に運営できない。家族はむしろハダシで庭へ飛び出している。庭の樹々もずっとよくなってきた。」P.39

②-C「南東隅の仕事部屋のガラス窓は枠が地下に潜ってしまうから、開口が一ぱいに開く。台風などの非常時にはガラスの窓の更にその外側に防護扉が地下室からせり上ってくる。窓台の腰は蛇紋砕石とポルトランド・セメントの人造石研ぎ出し、室内は同じ原料の人造石小叩。粗いテクスチャは結露 (condensation) し難いので、室内にはよい。北側は夏の通風のため内倒しの欄間が両隅にあるのと、洗濯物の般出のためにつけた西北隅ゆ扉のほかは開口がない。」P.42

と清家は言っている。

②-1「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込まして、狭小住宅の解決を計っている。内外の生活をオーバラップさせるための living garden は厳冬の数週間を除いては有効に働いている。室内も石敷、庭も石敷と意匠的な連りがあるように、生活も内外の同じ場で運ばれている。建物の南面は全部開放して戸外と接触できる。そのために、東西方向の耐震壁を建物の中心軸に後退させて、外壁を開放した。」P.34 と言うように狭小住宅の解決を図るとともに、

②-2「「夏巣冬穴」というフレーズもある。巣という文字の巛は鳥の象徴、田は鳥の巣の象徴、木はその環境である。越冬するには穴にもぐるか南の国に渡る。それはもともと私が考えていた家族の生活は、いってみれば自然な姿でいきいきと暮らすものであったからである。その意味ではわが家はいたって快適で、文字通りスキンシップの濃厚な生活であった。」P.59 と言うように、家族生活の理想像が自然なふるまいや、自然との関わりにあったからだ。

清家の他３作品は、いずれも開放的だが、生活空間があふれ出して融合させているのは私の家だけである。24 作品の空間配列を比較した中でも最も開かれており、内外一体化の方に最も寄っている。

「塔の家」の外部空間と内部空間の分析

②-A「南に面した台所の、窓ガラス一枚の外は、東京の真只中、外苑、青山を通り抜ける環状四号線。調理する私と、我が街は、直かに繋がる。テクノカットにもんぺパンツの若者たち。花金（花の金曜日）と月末の定期的な、加えて、突発事態を予測させる定期的ならざる、車の渋滞。景気の度合を感じさせる交通量の変化。デモの回数とその主張で知る大衆の動き。目前でバーンと起こる交通事故。大都会の真只中の出来事が、窓ガラス一枚こちらの台所で働く私に、ビンビン伝わってくる。我が家の一隅に取りついているのみか、流動する社会の一隅にも、しっかり取りついた我が台所。世の中と一緒になって動いているこの場所。」PP.49.50

②-B「南！　最上部のヴェランダは、南面上方いっぱいに口を開け、光る太陽の熱を吸い飲み込む。太陽　この源なるもの！　塔の家は、その敷地面積に通常受ける以上の量の太陽を受けている。太陽の故に、台所の俎は日光消毒され、風呂場の本の風呂桶はよく乾き、寝室のベッドを光の手が伸びて撫で、ウェランダではシーツや布団が蘇る。

人間生活での一番の贅沢は清潔さ。わが家のサン＆バスルームは、全階通しての真ん中の三階に、太陽と家族にこよなく愛されて、塔の家の生活の核を成す。」PP.67.68

②-C「私の部屋はバルコニーに面している。勉強をしている時、本を読んでいる時、ふと顔を上げると、バルコニーの植物などの自然や青い空が目に入ってくる。雪が降ると、誰にも荒らされていない幸を踏むことができる。庇にぶら下がった"つらら"を食べることもできる。雀がやってきて、山椒の若芽やグレープフルーツの若芽を食べてしまった。蝶が卵を産みつけていった。光に誘われて、虫がガラスにへばりついた。これは、皆んな、私の部屋からの眺め。」P.80

②-D「一段一段廻る階段空間を昇るにつれて、縦に並ぶ小窓を軸に、大窓、中窓、東窓、南窓、目線の流動を誘って、何時の間にか昇り着く最上階。上⇔下、流動する階段空間。最初の階段小窓は、外苑から来る車の走行を見るのに良い角度。続く浴室の窓いっぱいに街路樹の大枝小枝。さらに東側大窓は、すべての南面窓とは正反対に、ひっそりした東側の家並みと道を描く風景画。二つ目の階段小窓は、視線を上に引き上げて写す向かいの原宿団地。左に上れば、右手壁の鏡に写る、寝室内部の相似形を疑似体験し、やっ！　やっ！　とまごつく目に入る、左手大窓の、銀幕上の都市的近景。ここでの車の走行は、青山方向を強く感受させる。同じ道路を走る中の受け止め方が、窓の向き向きにより異なる事を知った窓。最も高い階段小窓からは、空と同地とその向うのビル達の連なり広がる、都市的遠景。そして、ヴェランダへの開口部、最上階の窓へと上る。部屋の中から伸びた間いが、ウェランダの目隠しとなっている故に、ヴェランダは空に向かってパックリ開いた、空へのステップ。下から廻り廻って昇った上昇感を空いっぱいに放出する。」PP.95.96　妻の節子と、娘の利恵が表現豊かに、「塔の家」の都市とのつながり、太陽の恩恵を浴びた外部とのつながりを証言している。

②-1「やはり自分のすまいについては一言あってしかるべきであると、私自身も内心ひそかに賛成しているからである。そこで私は、このすまいはどんなことをしてでも都会の真只中に住みたいという私自身の姿勢の実体化に他ならないと答えることによってその責を果たすことにしよう。」P.24

②-2「私たちの場合、この町に住む、住みたいというこだわりがあって、その上での塔の家なのだ。しかも、事実この町全体で生活が成り立っている。みどりが欲しい時は公園で、人とのつき合いは町かどの喫茶店、仕事場は歩いてゆける近くのビルという風に。たしかに郊外でも変形の土地とか狭い敷地なら割安で、そこに建てる方法があるなら経済的だろう。しかし、町に住むという総体がなくて、ただ塔状の家というだけでは不便さが先に立つだけなのである。」P.113

東は、町に住むという総体があって「塔の家」が成り立つと言う。その通りに都市施設や都市的設備による補完があって、「塔の家」の生活が成り立っている。

空間配列は連続的で、外部に対しては接続的である。

「雪の家」の外部空間と内部空間の分析

※A「雪の家」では、「見える空間」として変化のバルが空間で切られた（fig 3.4）。このホールは屋根で覆り抜けられる土間のような空間で、二側が親世帯の住居、西側がアトリエになっていた。」P.82
※B「1996年に、暗にかしたく巻の巻頭つを当たりの壁を撤去はお渡し窓とした。これにより、「自然の光や色が身近に感じられ、生活が楽しくなった」と高橋は言っている。高橋は日常的な自然体験の十指を追求しており、吹抜け、天窓、ロフト、広いベランダ、テラスなどを積極的に住宅内に設え、住みこなしていた。その様子について、高橋は新聞、雑誌、テレビなどで、さらに熱心に紹介している。例えば天窓については、雨音でテレビが聞こえにくくなるが、明るい昼のあかりを味わえるのは楽しい。」（『住まいの新景』産業新聞社、1994）。その根底には、かとえ少々不便であろうとも、自然との交流を大切にする姿勢があった。PP.92-94

雪の家の平面図を見ると、敷地の庭手（接道）部分が建物内に侵入しているように見える。敷地との関係によりできた通り土間は、建物に風穴を抜いただけでなく、庭を内部空間と地域社会へとつなぎている

※1「冬は夜の明かりが美しく、それで庭をあらわしたくなる」。庭の建築はかと内とがあいまいで、「暮らしの中で庭は外を想い、外部はふわりと浴衣のようにぎかいものだ」。P.40
※2「築20年を経て、雪の家の変化は大変なものだが、そのずっと前から変わらずそこにあるものがある。庭の大きなにマツヤ杉と敷地分割の時に移植した樺の木。この木は第二次世界大戦の大空襲からこの辺りの風景を見ていたという木である。雪の家における外構工事は、その大きな木を残すことと、二分たりの手で庭のをなつくり、15間をかけて今でもものであった。フェンスの無い伸びでは刈られながら元気にしきている。建物も植物も生き物であり、手を入れることでより後者がわき、共生する。PP.66-67

庭の建築は鉄骨も美しいが木造も美しい。恐らく贅肉のない庭の状態が美しいのであろう。建物には耐用年数がある。それを寿命として考えれば生き物だ。手入れをすることで、住まい手の感覚に愛着が湧くと同時に、住まいの管理も行き届く。

2.5.3　個室と共用室の関係

住宅形態の実現効果 (B) と作品のアイデア（設計理念）(A) の対応と対象作品の比較分析 (X) との対照を分析する

「私の家」の個室と共用室の関係の分析

③-A「清家の自邸は、地下室に在る長男・長女のヘヤの間に扉一枚があるだけで、あとは便所さえもドアがなく、夫婦寝室もカーテンでしきっているだけである。住宅の中で、家族の内にかくすべきものは何もない。・・・・プライバシーを確立するため空間を遮断するという「単純」な解決方法は、子供の非行化の温床になったり、それをまた心配してかぎ穴からのぞいたり、留守中に日記を開けて読むと言った重大なプライバシーの侵害を親がやってのけるといった過ちにつながる、単純素朴な発想であることは明らかである。プライバシー要求の内容や強度は家族成長の時期によって微妙に変化するし、その過程での家族間の人間関係・付き合いのし方、その処理のし方は、それぞれの家族によってちがっている。日本の戦後の家族生活の民主化は、その処理の確然とした方式を提供しうるほど経験を蓄積していない。それは、それぞれの家庭で様々な形をとって進行しつつあり、全体としては激しく変わりつつある。そのようにみるべき現在、その解決の方法を一つの枠にはめることはむつかしい。 PP.194.195 と西山卯三は言い、

③ 1「寝室―居間―仕事部屋を区切るカーテンが唯一の間仕切りだから、極端にいって、戸外を含めての完全な一室住居。それを年中行事や生活に合せて舗設――しつらえる。」P.35

③-2「建築家が自邸を建てる目的のなかには、もうひとつ、他人さまの住宅を設計するときにはできない冒険や実験をやってみたいということがある。たとえば、この家は便所にも扉がないことで有名になっているが、それには私の哲学があって、他所さまではできないことだろう。畏友故池辺陽（東大教授）氏の自宅も便所に扉がなかった。 P.56

③ 3「清家教授はインタビューにこたえて、親豚のまわりに子豚が集まってくるような暮らし方、住み方をしたいとのべている。」P.194 と清家は言っている。戸外を含めて完全な一室住居とする発想は自然なすがたでいきいきと暮らすということに共通し、扉がないのは実験だと証言し、豚のように仲睦まじく暮らしたいと言っている。しかし、これは子どもが小さい時の話である。ずっとこの状態であったのではなく、子どもの成長過程に合わせて、地下室を子ども部屋にし、子ども用の小屋をつくり、それぞれの個室のある住宅「続・私の家」をつくり、倅の家までつくっている。これは状況（子どもの発達段階）に合せて個室と共用室の関係をしつらえていったといえる。

清家の他３作品を見ても、個室と共用室がまったく分節されておらず、室内に扉が１枚もないのは「私の家」だけである。完全な一室住居は、ある発達段階の時期にのみ可能な空間形態ともいえる。

24 作品の個室と共用室の関係を分析したなかでは SII-1 も「私の家」に匹敵する一体性をもっているが、SH-1 はバス・トイレに扉がある。SH-1 も広瀬鎌二が結婚時に建て１０年後に増築している。このことを考えると、完全一室住居は限られた家族構成、発達段階にのみ適応可能な空間形態と考えられる。

「塔の家」の個室と共用室の関係の分析

③-A「私は、家中の部屋を使っているので、実際には、友人よりも広い部屋に住んでいることになるのではないだろうか、などと思ってしまう。 P.37

③ B　高校の頃は、さっきも言ったけど演劇に夢中だったということもあるけど、自分の生活のペースを意識的に守ろうとしていたみたい。家の構造だからすぐ人にまきこまれちゃうのよね。」P.245

と一人娘の利恵は言う。自室のみの面積は小さいが全ての空間を共有化し使っているから広い。自律的に自らの生活を組み立てることで可能にしている。

③-1「全ての部屋にプライバシーが必要なのではなくて、家の中のパブリックスペース、つまりみんなで使う共用の場所に対して、個人の場所にプライバシーが必要なんだというふうに考えていた方がいいと思います。」P.83

東はプライバシーについてこう述べている。また縦の概念、レベル差を利用することで、壁をつくらずにプライバシーの確保を可能とした。

③-2「自分の城に閉じこもる子にはしたくなかった。どんな環境にいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった。」P.181

東の親としての思いは、現実として成功したといえる。創意工夫で自らの環境を確保し、自らの空間をつくることに繋がった。

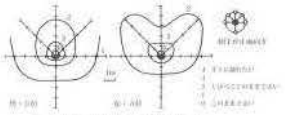
「塔の家」は空間構成原理：連結構成の中では24作品中最も個室と共用空間が融合的である。壁をつくらずにレベル差でプライバシーを確保していることが、最大の要因だ。

「竹の家」の個室と共用室の関係の分析

③-A「玄関は親世帯、子世帯そしてアトリエに来る人々のための共用空間であり、郵便物の受け渡しの際にお互いの姿を確認したり、ちょっとした会話をかわす場所となった。ただし高橋がアトリエで施工者と真剣に仕事の打合せをしている典只中に、「おい、公子」と父親に声をかけられ、ドキッとしたなどというエピソードもあったようである。

同じ家に暮らしてはいても、仕事に追われがちな日常においては、時折互いの気配を感じられる空間は有効に機能したようである。」P.82

③ B「旧宅では、母親が娘の家事を少しでも手伝おうとの親心から、口中よく２階の子世帯の領域へ上がってきていた。これには娘として自分たちの生活リズムを乱されると感じていた高橋は、あえて新しい階段には手すりを付けなかった。このためか、また７４歳という年齢のためか、母親は２階へは訪れなくなったという。扉や、ましてや鍵を掛けたわけではないのだが、建築的工夫で二つの空間を緩やかに分節した。」P.84

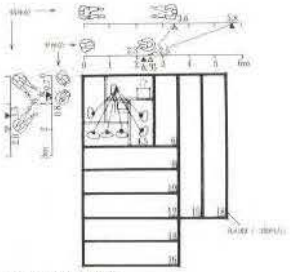


③-1「玄関がこの二世帯住宅を積極的に繋ぐ空間であるとすれば、ゆるやかに親世帯と子世帯を分節する装置として機能したのが階段である。」P.82

③-2「fig-3は、他人から離れたい感覚の分布であり、パーソナルスペース（個人空間、固体空間）と呼ばれているもののひとつである。fig 4は、人間同士がさまざまな姿勢で対面するとき、

しばらくはこのままでもよい　と感じる距離について、空間の大きさと比較したものである。

椅子に腰かけるより、床に座る方が距離が近く、真正面より斜め向きの方が距離が近い。ここから、何人かの人が集まるには「おおざっぱにいって、最小で８畳はほしい」と高橋は言及している。P.94



世帯間が混じりあい、お互いを繋ぐ場所が玄関であり、ゆるやかに分節したのが階段だという。手摺のない階段は、高齢者にとって大きなバリア（障壁）であり、指向性の強い弁になっていたと思われる。構成員を取捨選択するバリア（障壁）を家族間で意図的に配置するのは問題であり、高橋本人も、このことを悔やんでいる。

2.5　場面転換の時間的適応性の分析

2.5.4　家族関係の形成に対する対応

住宅形態の実現効果 (B) と作品のアイデア（設計理念）(A) の対応と対象作品の比較分析 (X) との対照を分析する

「私の家」の家族関係の形成に対する対応

④-A「清家のリンル・ム形式に対する執着は、彼の理想とする日本的な同居を主体とする家族の生活像からきており、これは近代的な個室至上主義に対するアンチテーゼともなっていて、30 年後の現在において再び意味深いものがる。」PP.200.201 と山下和正は言っている。このことは

④-1「この戦後小住宅の底流には、一方でアメリカの住宅、住まいについての考え方が色濃く反映していたともいえる。敗戦の痛手から立ち直ろうとすると当時、どっと流入したアメリカ流民主主義とともに、われわれもこの home という言葉と、そこに込められた深い意味への憧れを感じたのかもしれない。実際、住宅にはそのようなスピリットが必要なのである。」P.233　とも清家が言っているように、伝統的なものと同時に棄て去られようとしていた、日本人の民族的な住まいについての考え方に基づいたスピリットが必要だと考えていたからだ。

④-B「その意味ではわが家はいたって快適で、文字通りスキンシップの濃厚な生活であった。 P.232

④ C「有名な物語としてこの家には便所を含むどんな場所にも、屋内には一枚のドアもないということがあります。個室は必要ない、便所でもドアがいらないのが家族というものだという、独特に見えて実は家族の原点を見つめて見ればだれにも納得のいく、温かい絆で結ばれた家族の像が、そこには明確に打ち出されています。それが家族像・住宅像としてしめされているだけでなく、清家清という現実の家族が、そのようにくらしていたのでした。」P.Appendix 9 と林昌二は言っている。このことは

④-2「「夏巣冬穴」というフレ・ズもある。巣という文字の巛は鳥の象徴、冖は鳥の巣の象徴、木はその環境である。越冬するには穴にもぐるか南の国に渡る。それはもともと私が考えていた家族の生活は、いってみれば自然な姿でいきいきと暮らすものであったからである。」PP.231.232

④-3　「清家教授はインタビュ・にこたえて、親豚のまわりに子豚が集まってくるような暮らし方、住み方をしたいとのべている。」P.194

と清家が言っているように、清家が願った家族の生活は、恣意的につくられた姿ではなく、人間本来の家族の姿であった。発達段階により変化し、若夫婦と幼い子どもの時は小さな一室でかたまって暮らし、それぞれが成人した時には複数の棟からなる「私の家」住居群をつくって、係に囲まれて暮らした。その姿は、原始共同体的家族生活をもとに描いたように無理なく自然だ。

「塔の家」の家族関係の形成に対する対応

④-A 「都市的なところに住みたいという欲求がみんなの中に広まっています。それは、昔なら住宅の中で要求されたいろんな機能が、外で果たされるようになるということなんです。例えば、たまにはレストランで食事するとか、お客さんをホテルに泊めるとか、あるいは子供が喫茶店やスナックに入りびたっていて、夜寝に帰るだけという現象もある。これは、個人の人格優先で、家族の各人が属する職場とか学校とかの外部での結びつきが相対的に強くなるからです。」P.61

と東は都市型住居要求の高まりと家族の関係を見ている。

④-1「家族は分解する。つまり今まで住宅は社会に対する防波堤であり、その内側で同じ屋根の下に住む家族が団結して暮らし、同じ考え方や興味の対象を持っていた。しかし大家族主義の否定、個人の人格優先で家族を結びつける枠がゆるむ。そして核家族化。寝室とか食堂という決まった用途の部屋はそう変化がなくとも、居間というような家族の関係と対応する部分は大きく変化して当然なんです。」P.60

このように考えれば、家族の共用室のありかたも変化する。

④ B　高校生までは、父と私の生活がまったくずれていて、なかなか顔を合わすこともできない時には、寝る前の数十分、出かける前の数分、父はベッドで、私は階段にすわって、お互いの近況を報告しＲったりしたこともある。」P.37

「この家じゃあ必死で自分を保とうとしなければ親の暮しに引きずり込まれてしまう。だから、何なことは何と大声ではっきり叫ぶ主体性が身についてはずですよ。」P.181

分解していく家族のなかで、自律的な人間関係が「塔の家」で築かれてきたことがわかる。

④-2「自分の城に閉じこもる子にはしたくなかった。どんな環境にいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった。 P.181

東がのぞんだ親子の関係だ。

④-C「浴室とトイレの同時使用なども、家族同士ならぜひ試みられてはいかがかと私は思う。最初は抵抗があるだろうが、馴れればそれほどでもない。それこそ裸の対話になったりするのもよいではないか。」P.73

④ 3「外の社会に対するプライバシー。これは必要です。しかし、家族同士については厳密に考えすぎていたのではないでしょうか・それを手に入れるために、私たちはもっと大きな何かを失って来たような気がします。」P.182

特殊解ともいえるが、東が考える家族の中でのプライバシーに対する考えが、実践された例である。

東は「家族は分解する」と冷ややかに見ながら、家族が自律的に構築されることを試したのではないか。規範で囲い込むのではなく、自らお互いの意識で寄り添うことをのぞんだ。住宅空間が家族関係をアフォードするという考えではなく、まち、建築、空間、人間、家族の共存を描いたのだと理解できる。

「管の家」の家族関係の形成に対する対応

④-A「親世帯の住居には専用の台所と浴室があり、高齢であることを考慮して寝室にも便所が設けられた。またトイレやふろ場には母の身が不自由になってから手すりが設置された。つまり機能的、住居計画的には、充足されていたといえる。しかし後年、高橋は両親の日常における生活行動を分析することで、母親にとっての「居場所」が確保されていなかったと振り返っている。父親は耳が遠くなっており、一日中大音量でテレビをつけていた。チャンネルの主導権はもっぱら父親にあり、旧宅において母親はこの騒音から逃れるように、１階や２階の子世帯の領域に自分の居場所を獲得していたのである。それが新居に移り、二人は一日中１階の住まいに一緒に居ることになったのだ。その数ヵ月後、母親は疲れやストレスが原因といわれる脳梗塞を発病することになる。」PP.84-86

④-B「高橋は、夫妻のみで私的生活を完結させるのではなく、住まいを人々に積極的に開放した。この管の家を通じて育まれてきた人と人、人と環境とのつながりを考えるとき、まさに、高橋夫妻が「管ーパイプ」となっていたといえよう。」P.101

④-1「高橋は「住居は、不自由さを内に含んだ"まざる空間"だと主張する。巷には二世帯住宅と銘打っておきながら、プライバシーを重視するあまり、玄関もお風呂もトイレも全部別々、インターホンをつけて「おばあちゃん元気？」といった住宅もある。しかし高橋は二世帯住宅（３章ｃａｓｅ２）の設計に携わり、かねてから二つの世帯がいかに混じわり合い、いかに分節されるかについて考えていた。そして自邸（管の家）においても、両者の微妙な関係をデザインの力によって演出しようと試みた。管の家は、基本的に１階が親世帯の住居と高橋のアトリエ、２階およびロフト部分は子世帯の住居として構成された。旧宅においても１階が親世帯、１階の一部（ダイニングキッチンと鷹志の書斎）と２階が子世帯という空間配置であったこと、また高齢である両親への配慮から同じ空間構成を取り入れた考えられる。しかしこの空間的配置は、両者（この場合は二つの世帯）の心理的距離にも影響することを、環境心理に精通していた高橋は感じ取っていた。PP.80-82

二世帯を家族同士の関係と考えるのか親子と考えるかは、その家族によってそれぞれである。高橋の場合、実の親子である。母親が２階に上がらなかったのは階段のせいだけではないと考える。自分達の家に転がり込んできた娘夫婦であれば、もともと自分達の家であるところに住まわせているという意識がある。ところが、娘夫婦が建てた家に住まうのは、勝手が大きく違う。住まわせてもらっているに変化するのだ。主導権が逆転する。そのことは、今までのようにわがもの顔で娘夫婦の領域に入ることが、困難になるということだ。空間のあり方だけでなく、住宅建設行為の背景も、心理的に作用したのではないか。

高橋夫妻が積極的に住まいを人々に開放したのは、夫妻それぞれの持つ社会的関係を整合し、共有しようとしたのではないか。それは血縁を超えた家族の可能性を模索していたのかもしれない。

2.5.5　空間的適応性を実現するための造形的着想

住宅形態の実現効果 (B) と作品のアイデア（設計理念）(A) の対応と対象作品の比較分析 (X) との対照を分析する

「私の家」の空間的適応性を実現するための造形的着想

⑤-A「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込まして、狭小住宅の解決を計っている。内外の生活をオーバラップさせるための living garden は厳冬の数週間を除いては有効に働いている。室内も石敷、庭も石敷と意匠的な連りがあるように、生活も内外の同じ場で運ばれている。建物の南面は全部開放して戸外と接触できる。そのために、東西方向の耐震壁を建物の中心軸に後退させて、外壁を開放した。」P.34 と清家が言うように、建物を戸外と有機的に結びつけるために、外壁の開放が必要であった。それを実現するための着想に屋根スラブとハブマイヤ・トラスがある。

⑤-1「屋根のスラブは東西にたる中心軸に架けられたトラス梁（ハブマイヤ　トラス）と耐震上に支えられて、南北の両方向で天秤構造になっている。スラブの厚みは棟（中央）で二五センチ、軒先で一〇センチ。耐震壁は日型に配してある。スラブの上はスラブの型枠に使った板を野地板に使って、アルミの瓦棒葺になっているから、屋根スラブの気候に対する抵抗はよい。トラス梁は鉄筋の溶接で、下弦は二二ミリを二本、ラチスは一八ミリを使ってある。」P.70

⑤ B　狭い空間を広く感じさせるにはどうすればよいかという研究があって、ホモジニアスな空間は広く感じ、ゴタゴタと分節した空間は狭く感じるという一応の結論を持っていた。それで、その頃の私の作品は、どれもユカ、天井、壁など何となくノッペラボウで、この「私の家」も多分にもれず平坦にできている。
　ユカの鉄平石は庭にある緑泥岩の平坦な石敷きパターンとしてもホモジアスに連絡して、ユカの広さというよりはわずか 50 平方メートルの狭さを救っている。」P.58　と清家が言うように、ホモジニアスに連絡するために内部と外部が同じ仕上する必要があった。また冬でも建具を開放できる必要があった。

⑤-2「ユカはパネル暖房になっているが、寝室と仕事部屋は低温のほうがよいので輻射暖房はなく、床下は地下室になっている。パネル暖房のユカは、地表面に割栗をつき、捨コンクリート（一〇センチ）、敷砂（三センチ）、軽量コンクリートブロック等で熱遮断してそのうえに一インチのパイプコイルを三〇センチのピッチで配管してコンクリートに埋め、鉄平石を貼って仕上げた。P.69

⑤ C「舗設」という言葉も、時々刻々そのなかで変化があるわけです。朝昼晩、春夏秋冬。本来、日本の住宅の住まい方のよいことは朝、ご飯を食べたところで、ちゃぶ台を片付け、そこへ針箱を持ってきておかみさんが針仕事をする。亭主が帰ってくる前にまた食事の用意をして、そこで飯を食うしつらえをする。今度はまたそこに布団を敷いて寝る。でまた翌朝、布団をたたんでそこへちゃぶ台を出して、という時間のシークエンスの中で自由に空間をつくりかえていくところにあったと思います。さらに春夏秋冬の中で、夏になれば夏のしつらえをする、秋になれば秋のしつらえをする、自然と交流しながらしつらえをしていくというのが日本の住宅の演出だと思います。」PP.101.102 と清家が言うように、舗設のための装置が必要であった。

⑤ 3「タタミの台は下にゴムの車が付いていて、どこへでも転がして行ける。天気のよい日には庭にも出せる。夏の夕涼みなどにもよい。また、我々の生活の中にはどうしてもタタミのいる伝統的な仕様式があって、たとえば和服をたたむ時などにはどうしてもこのくらいのタタミがいる。また、資料の整理などの時にもそれを広げるに便利。勉強机は檜で、製図板にもなる。食卓・製図机・仕事机・タタミの台・ガラス戸のモジュールを統一して、しつらえを楽にしようと試みている。」P.36

「塔の家」の空間的適応性を実現するための造形的着想

⑤-A「全部の部屋が方形の形ではなく、階段で繋がり、その間にドアが一枚もない、まるで鉛筆のようで、たいへんおもしろい楽しい家だとワクワクした気持ちを感じたことも覚えている。近所や学校の友達にも、おもしろいと人気の家で、よく、"かくれんぼ"などをして遊んだものだった。今でも、この家にやってくる子供たちは、喜びの声をあげて、階段を駆けあがったり、降りたりする（不思議にこの階段でケガをした人は、家族二人の中にも、お客さんの中にも一人もいない）。おとなにとって、時には衝撃を与えることもあるこの家も、子供たちには、すんなりと受け入れられるようだ。」PP.34.35

「私の部屋は、「塔の家」の最上階、バルコニー付の屋根裏部屋である。この部屋は、小さい頃、友達にたいへん人気があった。この部屋は、私達にとってお姫様の閉じ込められた塔の天辺の部屋であり、宝物の在りかをしるしだ秘密の地図が隠された屋根裏部屋だった。家中を使っての"かくれんぼ"や"探険ごっこ"。その頃、代々木のオリンピック競技場や富士山まで見えたバルコニーと私の部屋を使っての"おままごと"。「小学生になったらね」と母親に言われてわが家で遊べず、泣いていた近所の男の子がいた。」P.79

「「塔の家」の各室独自の臭香は、廻り階段上下して、相交じり、複合香を醸し出す。「塔の家」の空間は、極々自然に造り出されたその結果、外には風情を、内には香りを齎した。作家が意識意図して演出した空間は、無機的、固定的、拘束的。自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人、その共存が、一つの匂いとなり、香る。その香りを糧として、建築も、空間も、人も、同じ香りの媒体、共有者、構成素材としての、各々の持ち分の責任任を果したいと望んで、生きる。有機的臭香の立ち込める「塔の家」の、連続流動する空間を、上下しながら無意識に、においのポリフォニーを聞く私。」PP.99.100

「塔の家」を娘の利忠、妻の節子はこのように評価している。

⑤-1「内外共、普通パネル型枠打放しのまま。床はナイフで切断したビニールフロアリングを置いただけ。窓は錆止めのままアングルサッシュに網入ガラス。家具はラワン材そのまま。釘頭が見えている。勿論予算の関係もあるが、ここしばらく店舗インテリアデザインで試みて来た、建築家が内部空間を緻密に構成すればする程それに加えられる仕上げや家具の自由度が開けるのではないかと言う持論の延長でもある。」P.26

「私にとってはその壁の内側の広さが、本当に自分や家族の身の置き所を作り出してくれるのかどうか、それを確かめるために、より大きな図面を描き、その空白部分をにらんでは、椅子を置いたりベッドを描き込んだりしては身体で確かめていったのであった。」P.119

東が言う、内部空間を緻密に構成する持論の実践が、検証されたといえる。

「管の家」の空間的適応性を実現するための造形的着想

⑤-A「電機は、ケーブルやスイッチ・ボックスも壁から突き出し、露出である。化粧気のないブロックの壁にはそれもまたしっくりくる。これがプラスタ・ボ・ドに柄のついたビニ・ルクロスが張られている壁なら露出のケーブルなど目も当てられない。コストを抑えると同時にあまり美しくないものがたくさん出て来ても仕方がないという理由で、２階のスイッチの高さ以上に電気の配線は上がっていない。ロフトのU型蛍光灯以外はコンセントから明かりを取っている。照明器具は行為と場所に応じて必要となるので、ル・ズな空間には照明もル・ズに対応できる方がよい。」P.66

⑥１　スチールパイプや素地に近いラワン合板（シナ合板に比べて色も木目もきついのでより物質感があり、「濃い」印象を与える）、コンクリートブロック、テント地の間仕切りなど、空間を構成する部材、部品は多いといえる。カ二の両端は鉄骨のスラブで低い天井のコ・ナ・をつくっているが、そこは、こもってオペラの映像を楽しんだり、気に入ったお酒をゆっくり飲むのに心地よい小空間である。こうした多種多様な因子を統合しているのが、あの林立するパイプであり、大きなボリュームであるといえよう。」P.68

構造のリズムと、空間のボリュームが差材やモノを制御している。

⑤B「管の会とは、管の家にて２カ月に１回開かれるパーティーのことであり、1988年から今日に至るまで開催されている。夫妻ともに社交的であるため、メンバ・は、学生、建築関係者のほか、ひいきの飲食店、出版社、旅行関係者といった多彩な面々であり、数十人が三々五々に集う。　主会場となる管の家２階の約３００㎡の大空間には、芳醇なアルコールや料理が待ち受け、ジャズ主体のBGMが人々を心地よく包み込み、宴たけなわともなればドン・ジョバンニのオペラ放映、と楽しい時間が夜更けまで続いた。「男子厨房に入るべからず」とは対極に、キッチンでは男性達が極めて自然に料理をしていた。一方、高橋はというと、教団とは打って変わったカジュアルスタイルに身を包みグラス片手に、リビングで場を盛り上げている。「カナッペはいかがですか」と学生陣に勧めるエプロン姿の紳士は、高橋の夫、鷹志である。」PP.96.97

「それにしても管の家は書籍をはじめ全体的に非常にモノが多く、それらがすべて隠されていないのになぜか不思議と散らかっているようには見えない。その理由は、住宅自体の構造体（スチ・ルパイプや素地に近いラワン合板、そしてコンクリートブロック、テント地の間仕切りなど）をはじめ空間を構成する実に多くの部材が隠されないで露わになっているためと考えられる。その結果、モノをたくさんおいても目立たなくて違和感がない。そして何よりも天井の高い大空間がもつ包容力によるものではないだろか。いくらモノを置いても空間の迫力のほうが勝っているのである。」PP.106-108

⑤-2「高橋公子は建築の空間を音楽になぞらえて、次のように語っている。「住居はそこにいることに喜びがなくては、と思う。空間は音楽と同じように人の心に呼応するものである」。そして、高橋はどんなに小さな家を設計するときでも天井高や吹抜けや階段で広さやリズムを感じさせるように設計したと記している。実際、管の家の２階部分には空間のリズムを肌で感じられる楽しさがある。天井をぐるりと見渡すと、視線を遠くまで伸ばし、吹抜けやロフトを通じて上下に居る人の気配を感じることができる。リビングの中心にあるらせん階段は上下の空間をつなぎ、ロフトに上る楽しさを演出する。それらは結果として何とも心地よい人と人の距離をつくり出しているのである。

「管の会」がいまでも続き、管の家に人が集まる所以は、住まい手の人柄と併せて、やはり空間のもつ魅力が大きいからであろう。」PP.112-114

「きまったリズムで刻まれる強い構造。小さな空間なら特に目についてしまうことも気にならなくなる大きな空間。生活の中で存在してくる、たくさんの大事なものたちを排除してしまうまっさらな空間よりも、気に入ったものを好きなだけ並べておける大らかな空間を提示したといえよう。」P.70

「管の家という包容力ある大空間では、さりげなく各ふるまいをアフォードする場が設えられ、それらは使い手によって適宜可変可能とされていたからこそ、そこには円滑なパーティー展開があった。」P.100

大きな「がらんどう」の空間が使い手によって適宜可変されて使われた。住まい手や使い手を拘束しない、大らかな空間だから可能となった。

2.6　時間転換の時間的適応性の分析

2.6.1　時間的転換のしつらえ

住宅形態の実現効果 (B) と居住経過 (C) の対応と対象作品の比較分析 (X)・作品のアイデア（設計理念）(A) との対照を分析する

「私の家」の時間的転換のしつらえ

⑥-A タタミの台は下にゴムの車がついていて、どこへでも転がして行ける。天気のよい日には庭にも出せる。夏の夕涼みなどにもよい。また、我々の生活のなかにはどうしてもタタミの要る伝統的な仕様式があって、例えば和服をタタムときなどにはどうしてもこの位のタタミがいる。また、資料の整理などのときにもそれを拡げるに使利。勉強机は檜で、製図板にもなる。食卓・製図机・仕事机，タタミの台・ガラス戸のモジュールを統一して、しつらえを楽にしようと試みている。P.36

⑥ B 門がはじめは東側に建物に接してあったのに、いまではずっと南東隅に移っている。この位置に門が移る前には、今のと、初めのとの丁度中間ぐらいのところに門があったこともある。いまの門はずっと本屋から離れて庭を縦断して門から玄関への長いアプローチになっている。動線学的にいえば門から玄関までは近いのがよいのにきまっているし、その玄関までのアプローチが延々と主庭の中を抜けているなどというのは建築評論家をして云わしめなくても、世に流布されている住宅書の公式からすれば最も愚かしいことのようである。だからこそはじめは公式通りに、玄関のすぐ横に門があったのだが、この来客にとっての都合のよい動線は同時にコソ泥棒氏にとっても都合がよいわけだし、こうした一室住居に住んでいると、突然目の前にどこかよその人が現われるよりも、玄関からは三〇メートルもある門から延々と誰かが入ってくるのを木の間がくれに発見できるほうが、暮らし易い。P.40

⑥-C「特に冬のパネルヒーティングをはじめてからは、椅子などもあまり利用しないで石のユカの上にみんなペッタリと尻を落着けたり、靴など履いているよりも足袋だけか、ハダシのほうが気持ちがよい。靴を脱ぐというよりもハダシの生活は内部事情からはじまって、いまは庭でも子供達は勿論私も合めてみんなハダシ同様で暮らしている。家には犬と猫がいるが彼等はもちろんハダシで家の内外を歩きまわっている。この家の最大の実験はどのくらい扉なしで暮らせるだろうかということであった。これは家人に関する限り成功している。」P.43

と清家は言う。「舗設」、「状況に合せてつくる」、「ホモジニアスな空間」という清家の理論の展開である。清家は「私の家」で、機能及び領域の特化・固定化をせずにその都度つくり、しつらえている。

個室と共用室の関係では 24 作品中最も一体化しており、床面積は最小の部類に入っていることからも、領域の分節がなく融合的であり、複合用途的、無限定用途的だ。

「塔の家」の時間的転換のしつらえ

⑥-A 新築の当初、最小限の家具をということでテーブルの上につり戸棚をつけた。テーブルの上は食器棚のつもり、・・・。　私は我が家の食器の数など、どれ位あるのか全然知らなかったので、これ位の棚で適当に使ってくれると思っていたらこれだけでは忽ち駄目が出た。そこで流しコンロの反対側、吊戸棚の下に何か家具をということになった。それに冷蔵庫とあり合わせの台の上に置かれたガスオーブンの廻りも処理しなければならない。台所だけでなく、居間の廻りに必要な最小限の事務用品や薬品庫、それにテレビの収納台などが必要だ。それらをひとまとめにしてユニット式の棚を作ろうということになったのが現在の収納家具で、その上部を全部使って食器類の置き場所にしている。孝光 P.56

⑥-B 我が家は、日本古来の仕来たり〝衣替え〟を保っている。地下室納戸にブリキ製の衣裳缶が一六個。結婚当初、東と私、一つずつ持って来たのが、一つずつえて一六個。今では、衣服をこれに合わせて納めるのに懸命の衣替え。その時は、藍染めの大風呂敷数枚に衣服を包み込み、寝室⇔地下室、何度も何度も上下する。重い衣裳缶を、荷役人夫並みに、下ろしたり積んだり、それはもう、大へんな重労働。何時もこの時、私は、われながら〝何と、力持ちである事よ！〟と自賛する。P.76

⑥ C 年に二回の大片付けが、地下室の保持方法。その時、私は夜叉と化し、情愛、執着かなぐり捨てて！わが身、わが心、切り刻む思いでバッサバッサと、家から物を切り捨てる。普段でも私は、かなり物離れの良い方で、「読んだものは頭の中へ」「感じたものは心の中へ」と、自分にかけ声をかけているのだが、それでもこの整理時には、本当に大切なものを見極めて、なんとなく大事に思えるものは思い切って切り捨てる。切り捨てた時には、確かに寂しく心細いが、心細さを補い、寂しさを埋めようと、次を求め希んで活きる。人間生活の新陳代謝。P.87

限られた空間を最大限利用するための、住まい手の創意工夫と努力がある。この家で暮らすためには真剣さが必要だ。東は空間が日本的だと言うが、暮らし方そのものが昔の日本的なのではないか。

「管の家」の時間的転換のしつらえ

⑥-A寝室（2階）とクローゼット（ロフト）交換、寝室をロフトへ移す
可動トップライト（小）２カ所新設　大トップライト外部に電動ブラインド設置
⑥ B場所については、竣工時は寝室が食堂の奥にあり、その上部のロフトは洋服などを収納する納戸になっていた。しかし、いつからかベッドの上に脱いだ服がたまるようになったため、この関係を逆転して、ロフトを寝室、その下つまり食堂の奥をクローゼットとした。その結果、洋服を着替えてから折り畳み階段を昇って寝るという、動線に従った使い方となり、これにより衣服の散乱は止んだようである。
⑥ C「管の会」とは、管の家にて２カ月に１回開かれるパーティーのことであり、１９８８年から今日に至るまで開催されている。夫妻共に社交的であるため、メンバーは、学生、建築関係者のほか、ひいきの飲食店、出版社、旅行関係者といった多彩な面々であり、数十人が三々五々に集う。
主会場となる管の家２階の約３００㎡の大空間には、芳醇なアルコールや料理が待ち受け、ジャズ主体のＢＧＭが人々を心地よく包み込み、宴たけなわともなればドン・ジョバンニのオペラ放映、と楽しい時間が夜更けまで続いた。
「男子厨房に入るべからず」とは対極に、キッチンでは男性たちが極めて自然に料理をしていた。　一方、高橋はというと、教壇とは打って変わったカジュアルスタイルに身を包みグラス片手に、リビングで場を盛り上げている。「カナッペはいかがですか」と学生陣に働めるエプロン姿の紳士は、高橋の夫、鷹志である。
PP.96,97
「きまったリズムで刻まれる強い構造。小さな空間なら特に目についてしまうことも気にならなくなる大きな空間。生活の中で存在してくる、たくさんの大事なものたちを排除してしまうまっさらな空間よりも、気に入ったものを好きなだけ並べておける大らかな空間を提示したといえよう。」P.70
「管の家という包容力ある大空間では、さりげなく各ふるまいをアフォードする場が設えられ、それらは使い手によって適宜可変可能とされていたからこそ、そこには円滑なパーティー展開があった。」P.100

「管の家」では竣工後早い段階から、模様替えや用途変更が繰り返されてきた。使い勝手が悪いと思われたり、こうした方がと思われる度に試行錯誤されている。高橋夫妻とも空間を扱う学術研究者であるから、その実験的性格もあるだろうが、その対応と試みは頻繁である。それを可能としたのが大きな「がらんどう」な空間である。日常的な動線に無理なく配置した機能空間が、それらの可変を支えたということも重要だ。

2.6.2　家族成員の発達段階に対する対応

住宅形態の実現効果 (B) と居住経過 (C) の対応と対象作品の比較分析 (X)・作品のアイデア（設計理念）(A) との対照を分析する

「私の家」の家族成員の発達段階に対する対応 1

⑦ A ⑦ A「妻の健康のこともあるので最小限の house keeping ですむように設計したから、台所にしてもおそらく最小の台所に属する。それでいて、パーティなどのときは誰かが手伝えるようにもなっている。・・・かみさんがその少し前に肺浸潤になったので、「大気。安静。栄養」をテーマにした家でもあるのです。だから開けっ放しです。親父がよく「この家は寒いね」って感心してました。」P.107

⑦ -B 1957 年頃から防空壕であった地下室を子供室として利用

⑦ C そのうち、子ども達も大きくなってきて、ＲＣ造の五〇平方メートルに私たち夫婦と四人の子どもがヒシメキ、隣の六〇坪の木造は老人二人と女中だけというアンバランスと、機能が老朽化、陳腐化した昭和初期の木造住宅は、掃除にしても接客にしても老境に入った両親達の手に負えなくなってきた。折角いてくれた女中も良縁を得て暇をということ等、この木造家屋の建て換えの必然性が生じてきた。しかし、それを一気にこわしては、建て替える間の両親の居場所がなくなるので、まず両親の居室を建てることにして、まずは無用の長物化し、家人は洋館といいならわしていた、室内の壁と天井はプラスター、外壁はラスモルタルの人造石洗い出しという大正末から昭和初期にかけて流行した応接室を取りこわし、その跡とその西側にあった庭をつぶして両親のための隠居所を建てた。」P.45

⑦ -D 両親は新居が気に入って、二人ともこの隠居所で死んだ。ほとんど隣地いっぱいに建てたので隣地との間の外壁はＲＣ造とし、ＲＣ造の浴室を控え壁にしてあとは木造になっている。南の窓は４メートル×二メートルの大きな一枚ガラスはめ殺しのピクチャーウインドーになっていて、窓下は掃き出し窓の通風窓になっている。母はこの窓から戸外を見るのが好きだった。庭の四季の移り変わりが見えるように植樹にも気を配った。大きなザクロの樹は妹が小学生の頃に植えた樹だったり、母にとっては思い出が多かったのだろう。P.47

⑦ -E「私の家」が建ってから四半世紀が経って、家族のライフサイクルでは一世代が交替することになる。　一九七八年、私は還暦となって東京工業大学を定年。大学に置いていた本だの、何かと滞った垢のようなものを持ち帰らねばならなくなり、外洋船に乗せる中古コンテナを購入してそれに格納、「私の家」の上に載せた。P.57

「私の家」の家族成員の発達段階に対する対応２

⑦-F 昨年の九月、ちょうど１０年間連れ添った私の妻が亡くなった。この春から体調をくずしてすぐ向かいの在原病院に入院していたが、九月初めにわが家に帰って月が変わらぬうちに帰らぬ身となった。わが家は代々プロテスタントのクリスチャンなので、葬儀は私たちの信仰に則り、牧師夫妻と近親者だけで、私たちの家の西側の続き部屋で行なわれた。P.243

1954 年　「私の家」竣工　長女　ゆり：7 歳、長男　篤：誕生

1956 年　この頃から靴を脱ぐ　次女　いせ：誕生

1957 年　防空壕だった地下室を子供部屋に利用　長女　ゆり：10 歳　小学５年生

1962 年　敷地南西の隅に子供用の小屋を建てる　長女　ゆり：15 歳　高校１年生

1965 年　西北隅にあった応接室を取り壊し、両親の隠居所を建てる　三女　あさ：誕生

1970 年　「続・私の家」竣工　長女　ゆり：23 歳、長男　篤：16 歳　高校２年生、次女　いせ：14 歳　中学３年生、三女　あさ：5 歳、子ども達はそれぞれ個室を持つことになる

1971 年　長女　ゆり：結婚　シリアへ、母：逝去

1973 年　父：逝去

1974 年　長女家族「私の家」に住む

1978 年　書庫兼物置として船舶用中古コンテナを載せる　清：東京工業大学を退官

1989 年　「倅の家」竣工　長男家族「倅の家」に住む

1991 年　次女家族、長女家族に代わって「私の家」に住む

1996 年　妻　ゆき：逝去

2005 年　清：86 歳で逝去

家族の発達段階に応じて住宅の使い方は変化しており、合せて増築もされている。

清家の言う「状況に合わせてつくる」通りに実践されており、家族の生活がシークエンスに変化するのと同時に、住まいもシークエンスに変化し続けたといえる。

「塔の家」の家族成員の発達段階に対する対応

⑦-A「自分の城に閉じこもる子にはしたくなかった。どんな環境にいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった」節子
この家じゃ必死で自分を保とうとしなければ親の暮しにて引きずり込まれてしまう。だから、イヤなことはイヤと大声ではっきり叫ぶ主体性が身についたはずですよ」孝光 P.181
⑦-B「娘も大きくなりまして、家族三人で同じ本を読みそれについて話し合うのが楽しみ」なだけに、特に本が増えてきた。「本は地下室と娘の部屋と東の枕元、それに建築の専門書は事務所に置くようにしていますが、大分一杯になりこれからどこに本棚を作ったらいいか考えている所です。P.175
⑦-C「二〇代から四〇代へという変化だからまだ余り差はないけれど、六〇歳位になると新しい局面を迎える可能性があると思う。正直な所、多少、若さというものが必要な家かもしれない。絶えずしゃきっとしていないと住みこなせない、という緊張感を幾らかは感じている。」P.177
⑦-D 最近、私の部屋の模様替えをした。中学生時代から使っていた勉強机と椅子をまず追放した。パネル型の暖房器も、背の低い横長のコンパクトなものに替えた。階段の壁に取り付けてあった棚も取り外した。古い、子供用二段ベッドの下の部分を母が改造したベットも取り替える予定だったが、これは、部屋の寸法が大人用ベッドをいれるのに数センチ短く断念した。三畳あまりの広さの部屋だが、少し広くなった。二十数年、"子供部屋"だった部屋が、"寝室"になった。P.81　利恵

驚くことに、特別な変化が「塔の家」では見受けられない。しいていえば娘の利恵の部屋が子供部屋から個室へと変化していることだ。家族関係の形成でも指摘したが、住宅空間が家族関係や発達過程をアフォードするという考えはなく、自律的に、まち、建築、空間、人間、家族の共存を描いたのだと理解できる。その前提になるのは、内部空間を緻密に構成することだと、東は言うだろう。

「管の家」の家族成員の発達段階に対する対応

⑦-A 引っ越しからの最初の５年間である第一期は、二世帯住宅として、高橋が親世帯と一つ屋根の新しい住まいにいかに生活を形づくるかという試行錯誤の時期であった。５年という短い時間ではあったが、高橋が建築家や研究者としてだけでなく、生活者として高齢者介護に直面し、高齢者と住まいとの関わりについて自らの問題として受け止めるきっかけとなった時間であった。P.78

⑦-B 引っ越しから間もなくして母親が発病し、闘病の末、管の家完成からわずか１年後に他界、またその３年後に父親も亡くなった。プロの設計者としてまた娘として、自宅の新築に携わりその後間もなくして両親を失うという経験は、高橋にとってまた大きなショックであった。大学の教壇で高橋が　建築は人を生かすことも、また殺すこともできるのよ」ときっぱりと言い切ったその言葉には、重みと実感がこもっていた。P.80

⑦ C 親世帯の住居には専用の台所と浴室があり、高齢であることを考慮して寝室にも便所が設けられた。またトイレや風呂場には母の身が不自由になってから手すりが設置された (fig-10)。つまり機能的、住居計画的には、充足されていたといえる。

しかし後年、高橋は両親の日常における生活行動を分析することで、母親にとっての「居場所」が確保されていなかったと振り返っている。父親は耳が遠くなっており、一日中大音量でテレビを付けていた。チャンネルの主導権はもっぱら父親にあり、旧宅において母親はこの騒音から逃れるように、１階や２階の子世帯の領域に自分の居場所を獲得していたのである。それが新居に移り、ふたりは一日中１階の住まいに一緒に居ることになったのだ。その数カ月後、母親は疲れやストレスが原因といわれる脳梗塞を発病することになる。PP.84 86

⑦-D 当時、高橋公子は５６歳、日本女子大学住居学科の教授であり、教鞭を執ると同時に、多岐に渡る研究活動（ライフスタイル、高齢者、女性、空間認知など）を行いながら、省庁（建設省、国土庁、通産産業省、大蔵省、経済企画庁など）や学会（日本建築学会、都市住宅学会など）における理事、主査、委員を精力的にこなしていた。さらに主宰している建築ユニット設計事務所の活動として「枝垂れ桜の家」を１９９２年に竣工、遺作となる「えごの木の家」の設計を１９９５年に着手している（３章ｃａｓｅ３、ｃａｓｅ４参照）。

こういった過密スケジュールの中であっても、充実したライフスタイルを展開した。P.90

⑦-E １９９６年の夏ごろから、高橋公子は体の不調を感じていた。当時の高橋は、大学の講義、設計活動、学会や官庁の委員会活動等々で、その生活はまさに多忙を極めていた。自覚症状はそれほど重大ではなく、近くの病院で診察を受けながら相変わらず仕事に忙殺される日々を送っていた。そのうちに、体調が思わしくないまま迎えた新年の早々、検査入院が必要であるという電話を受けて、急きょ東大病院に入院することになる。１９９７年１月のことであった。

急な入院のためにやりかけの仕事がそのままで、高橋は病室の中まで持ち込んで熱心にそれらを片づけていた。本書の３章で紹介する「えごの木の家」もその一つであり、高橋公子が入院中に設計が終了して工事が始まっている。１月というと大学も大変な時期である。卒業論文、修士論文の提出、入学試験、年度末提出の報告書、病室で高橋はそれらのことをしきりに気にかけていた。また周囲が自分の病気を心配することを嫌い、見舞いの訪問も基本的に断っていた。

検査の結果は良くなかった。かなり進行した癌にかかっていたのである。そして、わずか５カ月後の６月１２日、高橋公子はついにその病院から一度も出ることなく６５歳の若さで亡くなった。高橋公子の居なくなった管の家に残ったのは、夫の鷹志と愛猫であった。しかし１カ月後、その猫もすぐ後を追うように病気でこの世を去り、管の家は急に単身世帯となった。PP.102-104

高齢の親との同居ということもあるが、「管の家」家族の発達段階の変化は目まぐるしい。成長していくより老いていく経過は、それまで前向きに捉えられていなかったこともあり、その対応と記録は貴重だ。領域の特化・固定化をせずに、その都度淡々と転用している。そのことで建物が活かされている。

2.6.3　家族関係の変容に対する対応

住宅形態の実現効果 (B) と居住経過 (C) の対応と対象作品の比較分析 (X)・作品のアイデア（設計理念）(A) との対照を分析する

「私の家」の家族関係の変容に対する対応

⑧-A こうしたライフサイクルの中での過渡期現象は、タイミングを失うとなかなかできないものだ。もう少し早くやっておけばよかったかと思うが、まずまずの成功だった。それで私たちのときはもう少し早くやらなければならないと思って、いま次の計画を立てている。P.47

「続・私の家」竣工

⑧-A 昭和二九年に旧居五〇平方メートルを父の裏庭に建てた。その後一六年、家族計画と建築計画の離船、生活諸般の変化に対処して、新しくこの家をつくった。この新主屋は、昭和初年に建った旧主屋の改築である。

この一六年間に環境も変った。静かだった住宅地も、自動車の騒音、ちりがみ交換のスピーカーと、勉強のときは窓も開けておけないほどになってしまった。私も静けさが必要な齢になったのかもしれぬ。

まず、旧居の失敗の第一は靴をはいたままで暮らそうと企てたこと。それで、当時いいふるされたことばだが、玄関というような封建的な所産は排除するという意味もあって、庭からじかにという試みをしてみた。ところが招かれざる客だけでなく、ゴミ, 大, 騒音 etc. が遠慮会釈なく侵入してくるのにはおどろいた。それで、こんどの家は立派な玄関がついている。P.46

⑧ B 「私の家」に長女の家族が住む

現在もこの家に世代交替して次の世代の親子四人が住み、その狭さをエンジョイしている。P.147

⑧-C オモヤの木造をつぶしたあとには鉄骨造の新しいオモヤ（「続・私の家」）を建てた。工期を短縮しなければ工期中の仮り住まいが解消しないので、半地下と基礎の部分はＲＣ造にしたが、あとはH鋼で全構造を一気に組立て、地階から二階までの三階分を同時に竣工させる方式にした。鉄骨造はプレファブ化が容易で、工場加工が多いから、現場工程が少なくてすみ、建て替えなどのときに具合がよい。ＲＣ造だと仮枠の梁下の支柱を外すのに四週間はかかり、コンクリートの固まるまでは、造作工事もできないが、鉄骨造なら、溶接のホトボリが冷めればすぐに大工の仕事ができる。PP.47-49

発達段階への対応と同様に、家族関係の変容にも合せて、「計設」、「状況に合せてつくる」が実践されている。なかでも 1974 年に長女家族が「私の家」に住み始め、1996 年に次女家族が代わって住み始めていることが興味深い。子どもたちにとって清家が求めた home のスピリットが、ここに宿んでいるからなのかはわからないが、子育て中の若い世代の家族に、「私の家」が少なからず世代を超えて適応していることだけは事実だ。

「塔の家」の家族関係の変容に対する対応

⑧-A この家は、もともと夫婦と子供のために設計された、言うなれば２．５人向け住宅なので、成人が三人ともなるとさすがに、狭くなってくる。特に私の部屋は本であふれかえってしまう。家族同上の関係も、子供時代とは違った友人的な関係に移行している。P.39
利恵

「塔の家」の家族構成は、孝光、妻：節子、娘：利恵の三人である。著書「塔の家」「書」に掲載される 1966 年から 1988 年の間には、家族構成の変化は見当たらない。しいていえば、利恵が言うように、子ども時代の親子関係から、大人同上の友人的な親子関係への移行だ。東が子どもに対して自律的な生活態度や成長を求めてきたように、依存的でない自律的な人間関係、家族関係が築かれてきたと思われる。ここに見えるのは、自律的に、まち、建築、空間、人間、家族の共存を描いた結果なのだと理解できる。その前提になるのは、やはり自然に生じた空間であり、緻密に構成された内部空間の存在だ。

「管の家」の家族関係の変容に対する対応

⑧-A 83歳で伴侶を失った父親の日常生活の自立もひとつの課題となった。明治生まれ、明治育ちの長男で家事にまったく無縁であったという父親に対して、家電製品の使い方指導から始まったようだ。「ガスが怖い」とのことで、電磁調理器や電気ポットなどを設え、パン食であった朝食の支度を手始めに、洗濯機の操作をおぼえ、靴下一足を洗濯したいのだが、２階のほうで何か洗うものはないかというほどの変化を遂げた。もともと機械関係の仕事をしていたことから、道具の使い方には長けていたようである。その父親はカメラを趣味としており、四季折々の管の家の姿をアルバムに多く残してい (fig-11)。人生の達人である高齢者の能力は、その可能性を引き出すことで、日常生活に結びつけることができるといえる。１階の住まいで父親は見事に自立した生活を送り、週末には可能な限り２階で夕食を共にしながら妻なき後の３年間を過ごしたのであった。P.88

⑧ B 鷹志の書斎（２階）を父親寝室（１階）へ移す。居間拡大。

⑧-C 二世帯から一世帯となり、管の家の使われ方も変化した（75頁参照）。

これまで親世帯部分であった１階の父の寝室に鷹志の書斎を移し、その分２階のリビングスペースを拡大した。その後、両親の遺品などの整理が一段落したところで、場所を大きく変化させた。具体的には、ロフトにあった寝室と２階のクローゼットと１階の鷹志の書斎とを入れ替えた。

１階のアトリエでは、高橋は、大学その他の打合せを行うこともあった。ちなみに風呂については、１階が和式、２階が洋式と形式が異なり、１階は夫が愛用、２階は高橋公子が愛用した。P.92

⑧-D 家族が減り、当然ながら管の家にも徐々にいくつかの変化が見られた。一つはモノや書類が急に増えたことである。それは、高橋公子が職場で使用していた物品や本・書類を自宅に引き取ったこと、そして夫の鷹志もちょうどこの時期２２年間勤めた大学の退官を迎え、書物の山々が研究室から自宅に運ばれたためである。その量は段ボール５０箱分にも及び、結果として２階西側の壁全面に自作の棚が備え付けられ、他にも多数の本棚が管の家の各所に増設されることになる。しかし、それでも収まらない大量の物品・書物のために、とうとう庭に足場パイプと現場囲いを使った２階建ての大型書庫が新設されるのは２０００年のことであった PP.104-106

⑧-E 永年にわたり高橋公子と一緒に仕事を続けてきた大原工務所が管の家の１階に入居することになるのは、２００１年のことである。こうして、４年間続いた単身世帯に終止符が打たれ、管の家は最近増えている「住宅＋オフィスの混合」という利用形式に転用されることになる。これを機に各部分の使い方は、７６頁の phase3 に示すように改変された。１階にあった寝室はロフト階に、２階の書斎と食堂は一体的に利用する形式に家具が移動された。P.114

「家族が亡くなりモノが増える」。清家も同じことを言っている。「管の家」が誕生して１４年の間に母親、父親、公子の３人が亡くなっている。３人とも病気によるものだが、公子を除き、父親と母親は寿命をまっとうしたといえる。老いていく過程の対応でも指摘したが、領域を特化・固定せず、淡々と転用している。そのことがまさしく「管の家」を活かしている。これらをすべて包み込む包容力が「管の家」にはあったからなのか。その可能性は否定できない。

2.6.4　環境及びその変化に対する対応

住宅形態の実現効果 (B) と居住経過 (C) の対応と対象作品の比較分析 (X)・作品のアイデア（設計理念）(A) との対照を分析する

「私の家」の環境及びその変化に対する対応

⑨ A もともとこの家は靴のまま入ろうと計画し、はじめの二年ほどはそれを実行し、子供達にはたいへん評判がよかったのだが、掃除をする側から抗議がでた。家の連中だけのときは、家の近所は完全な舗装道路ばかりだし、庭も芝生と緑泥片岩の石畳みで、ちょっと気をつければ泥が家の中へ入ってくるハズはない。私を含めて、夏などはむしろハダシで庭へ出たり、自動車で出かけるときなどはハダシのほうがアクセルの感じがでてよいものなので、いわゆる下足と上足の区別なしで暮らしていた。しかし掃除側の苦情というのは、お客の泥靴と煙草の灰や吸殻の始末である。泥拭いのマットを置いてあっても、まず靴を拭う人は殆んど稀で、さらに悪いことは煙草の吸殻を絨毯の上に棄てた上をその泥靴でギュッと踏みつぶす人まで現れて、とうとう下足のまま室の中に入ることはそういう外部事情からやめてしまった。P.42

⑨ B 建てた頃は迫剥が出そうなほど静かだった家の前の道は、近頃では車が氾濫して、毎月一回ぐらいは衝突の事故が近所である程になった。PP.43.44.

⑨-C この新主屋は、昭和初年に建った旧主屋の改築である。

この一六年間に環境も変った。静かだった住宅地も、自動車の騒音、ちりがみ交換のスピーカーと、勉強のときは窓も開けておけないほどになってしまった。私も静けさが必要な齢になったのかもしれぬ。

まず、山居の失敗の第一は靴をはいたままで暮らそうと企てたこと。それで、当時いいふるされたことばだが、玄関というような封建的な所産は排除するという意味もあって、庭からじかにという試みをしてみた。ところが招かれざる客だけでなく、ゴミ，犬，騒音 etc. が遠慮会釈なく侵入してくるのにはおどろいた。それで、こんどの家は立派な玄関がついている。P.46

⑦ E「私の家」が建ってから四半世紀が経って、家族のライフサイクルでは一世代が交替することになる。　一九七八年、私は還暦となって東京工業大学を定年。大学に置いていた本だの、何かと滞った垢のようなものを持ち帰らねばならなくなり、外洋船に乗せる中古コンテナを購入してそれに格納、「私の家」の上に載せた。と言ってもそれは建物の上には直接載っていない。コンテナを単純梁に見立て、「私の家」の西側にこしらえた洗濯場と、東側の道路の間に丁度あった余地を利用した支柱に渡し込んで架けた。コンテナ自体は剛体の単純梁。洗濯側がピンで、東側の支柱がローラということになる。道路側からクレーンで釣り込んだが、釣り込みに二〇分も要しなかった。P.57

⑨-D 成人ひとりずつが自動車の運転免許をもっていて、文句をいえる義理ではないのですが、この五〇余年の間の社会変化の中で大きいのは、モータリゼーションとコミュニケーション・システムです。お陰で騒音・排気ガス公害と長電話に悩まされています。P.60

ここでも清家は「状況にあわせてつくる」を実践している。たとえ家族で成功していても外来者に適応されなければ靴での室内生活を取止め、逆に今度ははだしを愉しんでいる。また、この時に三女が誕生していることも関係あるだろう。車の氾濫や事故への対応は電電公社の電柱を受入れることで結果的に対応され、コンテナも書庫と物置というだけでなく、近くにできたマンションからの視線を、上手に妨げている。これらは抵抗するのではなく受入れることでしなやかな対応が、結果としてよい方向に向かっている。

「塔の家」の環境及びその変化に対する対応

⑨-A 南に面した台所の、窓ガラス一枚の外は、東京の真只中、外苑、青山を通り抜ける環状四号線。調理する私と、我が街は、直に繋がる。・・・大都会の真只中の出来事が、窓ガラス一枚こちらの台所で働く私に、ビンビン伝わってくる。我が家の一隅に取りついているのみか、流動する社会の一隅にも。しっかりと取りついた我が台所。世の中と一緒になって動いているこの場所。PP.49.50

外部を遮り内部をつくるのではなく、都市との共存を意図した結果だ。

⑨ B この二〇年近く、青山の界限で暮らしてきた。暮らしてきたなどと何気なく書いているようだが、実は私の場合、文字どおりの意味なのである。”職住近接”それも都心に住み、かつそこで仕事をするというのが私の主義。そのため、神宮前に家をつくり、原宿や青山にアトリエを置いて、毎日歩いて通ってきた。私にとって、この街を歩くということが大切な暮らしの一部だし、またそのお陰でこの街の魅力や変化を見守ることもできたのである。P.102　孝光

まちそのものに暮らしてきたといえる。

⑨ C 最初にペゴニアの鉢を三つ、玄関先に、屋上テラスでは、和蔦、柾木、グレープフルーツなどの他に、バラ、チューリップ、山椒、橙々、紅葉、紫蘇、朝顔、水仙、折鶴蘭などが、この二〇年に交代した。玄関脇と屋上に置いた和蔦が外壁の一部を蔽う。P.92　節子

まち、建築、空間、人間の共存関係が、ひとつの環境をつくり、「塔の家」そのものがまちの環境を形成している。

「管の家」の環境及びその変化に対する対応

⑨-A「これからの住宅を予測する上でのポイントは、一つは女の人が働きに出ること、二つ目は科学技術が住居の中に入ってくること、三つ目は高齢者の存在です。中でも女の人が家の中にいなくなって家が無人化するようになる点が決め手だと思っています。」P.108

②-2「築20年を経て、管の家の変化は大変なものだが、そのずっと前から変わらずそこにあるものがある。庭の大きなヒマラヤ杉と敷地分割の時に移植した欅の木。この木は第二次世界大戦の大空襲からこの近辺の延焼を防いだという木である。管の家における外構工事は、その大きな木を残すことと、自分たちの手で庭の芝をつくり、時間をかけて育てるものであった。フェンスの蔦も伸びては刈られながら元気に生きている。建物も植物も生き物であり、手を入れることでより愛着がわき、長生きする。PP.66.67

②-B １９９６年には、庭に面した２階の階段つき当たりの壁を透明はめ殺し窓とした。これにより、「自然の光や色が身近に感じられ、生活が楽しくなった」と高橋は語っている。高橋は日常的な自然体感の仕掛けを追求しており、吹抜け、天窓、ロフト、広いベランダ、テラスなどを積極的に住空間に設え、住みこなしていた。その極意について、高橋は新聞、雑誌、著書などで、折に触れ披露している。例えば天窓については、「雨音でテレビが聞こえにくくなるが、朝夕のほのあかりを眺めるのは楽しい」（「住まいの近景・遠景」彰国社、1994年）。その根底には、たとえ少々不便であろうとも、自然との対話を大切にする姿勢があった。PP.92 94

「高橋の選択は、より現実的だった。キッチンの作業台の高さと住宅政策を等価な問題として捕らえるスタンスは、今と将来を同時に考えるということであり、それが高橋の住宅設計へのスタンスであった。」P.32

高橋は、社会環境の変化や対応を、目の前の現実の問題として捉えていた。日本女子大学の教授という立場からしてもうかがえるのは、女性の社会進出と住まいの問題だ。高橋は、家事労働から女性を解放するという思考ではなく、男性と女性それぞれの家事参加の可能性を探っていたと思われる。「男女平等参画」というと、絵に描いた政策的だが、生活の生の部分で、実践し展開していたのだろう。「男性にも家事の心得が必要である」P.109という高橋の持論は、現在の社会においてより説得力を増している。

自然環境との対話は、自然へ目を向け耳を傾ける姿勢である。

2.6.5　時間的適応性を実現するための造形的着想

住宅形態の実現効果 (B) と居住経過 (C) の対応と対象作品の比較分析 (X)・作品のアイデア（設計理念）(A) との対照を分析する

「私の家」の分析

⑩-B「清家は、生活が複雑であるのに単化してゆく「機能主義」には限界があるといって、「舗設方式の復活」を提案する。しかし彼は、このような転用よりもむしろ耐用年限のながくなってゆく建築が、めまぐるしい生活の変化に耐えられるようにと、生活様式の急速な変化の方を重く見ている。たしかに戦後は住様式の変化がめまぐるしかった。P.197

⑩ A家相当には乾（北西）に歳、巽（南東）に門を設けるのは吉相ということで、乾には貨車（緩急車ワフ、七・五×二・五メートル）があります。巽にはステイションワゴンがあります。なぜか孫六人全員男の子に恵まれて、その孫の友人の男の子たちが、この「私の家」住居群を十分に利用してくれているようです。子供たちと犬と鳥と鳩と小鳥と昆虫と……、芝生は倅や娘、さらに孫と犬とがすっかり荒してしまいました。踏まれてやっと伸びたところで、名も知らぬいわゆる雑草が越冬するようです。宿根もあるでしょう、蒔種もしないのに生えてくる草花があって、孫と一緒に図鑑で探しています。そのうち草葉の陰から・・・・・。PP.60-62

「生活の中のシークエンスに動きがあるがあるから、時間のディメンションを入れて住宅は四次元になる」と清家は言う、清家のアイデンティティともいえる　構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント 、「舗設」は、四次元の時空間を構成するアイデアだ。「私の家」築後６０年以上経過した現在でも、時間的適応の可能性を示している。さらに清家が言う home のスピリットが住宅に宿るとすれば五次元になる。「建築は本来そうした形而上的な存在をひとつの調和のある個体として形而下的というかフィジカルな存在として獲得する技術であろう。」P.53 と清家はさらに言う。

⑤-D「不要なものはそちらにおいて、必要なものだけをこちらに移す。親父の家が隣にあったから、あのような15坪のところで暮らせたわけです。「実は昨年の九月に私の妻が亡くなって、その葬儀は私たちの信仰に則り、現在の私の住まいである「続・私の家」の西側、もともとはなくなった父母のための居室として増築された続き部屋で行われました。この部屋の舗設をちょっと変えることにより、そこはわが家の小さなチャペルになります。そのときは、奥の納戸の舞良戸を外して手前の和室の茶ダンスの前面に立て、代わりに和室の襖を納戸の戸として納めて舗設をしました。」P.128 と清家が言うように必要に応じて舗設ることで空間的な適応を図ってきた。

⑤-4「われわれはこの与えられた空間に舗設し、年中行事にあるいはその他のいろいろなファクターにしたがつて「几帳」「屏風」「障子」「置畳」等で生活空間と与えられた空間の不調をカヴァーしなければ到底人間的な生活は送れないであろう。このような意味からも家具の固定化よりも家具の本来的な使命にしたがつて自由に舗設　すなわち自由に置き換えて生活空間のフレキシビリテイを保持させる方向を支持したいと思っている。大きな一室をとってそこに自由に舗設する、そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義というのもこういう点を多く含んでいる。PP.136-138
と清家が言っている。細部に渡って固定化された住まいは生活の変化に適応できずに、早々に破綻するという指摘だ。

「しかし、うまく使い方を考え、必要な設備をきちんとつくっておかねばならぬ狭小住宅を、こういう方法で解決しようとするのは、総合的設計の責任放棄になる恐れがある。建築の機能に対する綿密な研究と、それに基づく設備の建築化を進めてきたこれまでの努力の積極的な面を否定することはあやまりである。自由自在にとりかえられる「舗設」にすることで、それをボヤかしてしまってはならない。‥‥住宅の「型」による建設は、その生産の合理化のために今後ますます重要なものとなってゆくであろうが、この場合、どこまでを「住宅の型」とし、どこから先をそこに入る居住者の自由なより好みや組み合わせにまかせることにするか、多様な中間段階、中間形態のものを含めて、そのシステムをつくりだすことは、将来の住宅建設の重要な問題となってくる。」P.198 と西山卯三は言っている。「舗設」の利点を認めた上で、どのように扱うかで総合的設計の責任放棄とも、将来の住宅建設の重要な鍵にともなるということだ。

家族の生活の変化、家族関係の変化、家族枠組みそのものの変化は、現在その多様さを増すばかりであり、「舗設」の可能性を探ることは、今後さらに重要ににあるであろう。

「塔の家」の時間的適応性を実現するための造形的着想

⑩-A 台所道具もなるべく買わない。道具を使うとかえって手間が煩雑になるからだ。たとえばとろろいも。ミキサーですりおろせば一見簡単そうに見えるが、後始末が大変。それくらいなら、すり鉢で丹念にすった方がいい。洗うのも簡単だし、その上ずっとおいしいのだから。お鍋も大中小と揃えなくとも、小さいものひとつで回数を増やせば済むというわけだ。P.217　節子

ものに頼らない姿勢が窺える。モノや設備機器に依存しない自律的な生活である。利便性の高いモノ、高機能な設備機器は、汎用が利かなかったり、些細な故障で全ての機能を失う。住宅空間も同様に、領域の特化や固定化が進むほど応用は利かなくなる。人間の一生に比べて生活の変化は目まぐるしく、住宅の耐用年数に比べても同様だ。住宅や設備機器に依存した生活は、生活の変化とともに住宅やその設備を変更しなければならない。その点、最低限の原始的な機器を使い、自らの能力と腕をふるうものならば、自らの能力と体力の続く限り可能である。人間の基礎代謝能力や、基本能力は、明らかに後者の方が高く、さらに開発可能性も高い。

⑩-B「快適さとは、欲望の充足によって得られるものではなく、欲望を野放しにせずしっかり抑え込んでコントロール可能という状態から得られるものらしい。居住空間の場合にも、これ迄の快適さ追求路線では、欲望の充足に応ずるハードな空間や道具のつくり方に偏り過ぎていた嫌いがある。ここでは触れ得なかったが、使用者の空間形成への「主体性」とか「参加」の問題と共に、生活行動の姿勢や哲学の掘り起しという面が、今後大いに望まれるところだと私は考えている。P.143

最後にその快適さのこと。住まいは、丈夫で長持ちして、快適でなければならない。当然のことだ。ただし、その快適さの内容が問題らしい。

いくつもの住まい、いくつもの家族とおつき合いしてみると快適さというか、その家に対する満足度と、実際の家の内容とが、必ずしも一致しない。つまり予算がなくてかなり切り詰めたり、省略したりした簡単な家でも（そんな例が私の場合には多いのだが）、住み始めてからの様子を拝見すると、家族が実に楽しく、生き生きと暮らしている。P.147　孝光

欲望の充足に応ずるハードな空間や道具では、快適さが得られないということだ。そのことは、ハードな空間や道具の耐用年数や適応年数の短命化につながる。空間形成及び住まい方に自律能動的に関わり努めることは、人任せではない分、自らの責任において適応への努力が積み重ねられることになる。その場合に建築家の責任は、合意形成のプロセスを経ることに注がれた結果、放棄されるようなことがあってはならない。東の姿勢も、後に揺れている。

「管の家」の時間的適応性を実現するための造形的着想

⑩-A 高橋は「住む人が考えるべきこともある」と、設計者や住宅メーカーが住宅の隅々までつくりすぎてしまうことを嫌っていた。大和ハウス工業の石橋社長とのある対談で、「最近浴室にはシャンプ　やらトリートメントやらで物が溢れているから、壁面を凹ました置き場所でもつくるかなんて考えているのですが」との石橋の提案に、「それはまずいですよ。メーカーがそこまで親切にならなくても。置く棚などは色々売っているわけですし」と高橋は語っていた。この主張は自邸でも実践され、家具を動かすなどの模様替えから、窓を大きくするといった軽工事まで、時に応じて住まいに手を加えていった。PP.86.87

⑩　管の家においては、住まいもそして人もまた創意工夫の中で変化してきたといえる。その過程の中で、家族が相互の気配を感じつつ、人として基本的な生活の作法といったものを互いに気遣いながら、生活を築いてきたようすが浮かんでくる。| P.88

[住宅建築は、そこで人びとが演じる芝居の目撃者、記憶装置である。子どもの誕生を祝い、生きている喜びを共にし、はたまた死という結末を悲しむ演劇の舞台でもある。本書の主題のひとつである「管の家」に関して白状すれば、かくも短時間に演劇の場面がめまぐるしく変わろうとは、計画・設計の時点で誰もが予想だにし得なかった。ただ　管の列」だけが、このことを冷徹に予測し、諸々の出来事を見下ろし、記憶したに違いない。| P.3

大きな「がらんどう」の空間が使い手によって適宜可変されて使われた。住まい手や使い手を拘束しない、大らかな空間だから可能となった。領域の特化・固定化がなされずに、その時々に変化させたことも重要だ。

大きな「がらんどう」の空間は、絶対的な容積が必要だ。そのための必要な条件は敷地でもあり、工法、素材も限られる。工法・素材は高橋が示したものがある。途半ばで倒れた高橋の意志を継ぐものが出ることを期待したい。

家事労働を固定化させずに、家族成員それぞれが家事労働にあたることは、昔の日本の家事労働の分担にも似ている。子どもであれ、誰であれ、家の作業任務を担っていた時代だ。現在のようにサービスをする方とサービスを受ける側という家族のあり方の方が本来は不気味だ。女性解放を声高に叫ぶのではなく、発達した成員(大人)家族のありようとして、当然のことを求め、示したともいえる。

第３章

3.1　対象作品の歴史的・社会的背景
3.2　空間適応性の考察
3.3　時間的適応性の考察
3.4　空間構成の図式的シミュレーション
3.4　考察

第３章　考察

3.1 「私の家」、「塔の家」、「管の家」の歴史的・社会的背景及び家族構成

フランク・ロイド・ライトの山邑邸 1924 が茶室的連結構成を住宅に採用している。外観やインテリアからは想像がつかないが、庭（車寄せ、バルコニー）から露地（廊下、階段）を通って寄付き待合（応接室）、腰掛待合（談話室）、茶室（和室）へと建物に導かれると、茶室に招かれる一連の作法を想わせる。日本の文化から芽生えた近代住宅の歩みが始まった。藤井厚二の聴竹居 1927 は数寄屋的連結構成をに初めて住宅に採用した建物とされている。そのアイデアは山邑邸で既に芽吹いていた。その後堀口捨己によって数寄屋は学術的にも住宅への応用にも掘り下げられていていった。前川邸 1941 は分割構成を民家のような空間で操作することで、民家的な内包構成を造り上げている。モダンリビングの吹抜とは異なる、日本的、民家的吹抜内包空間をつくった。第二次大戦後のレイモンドハウス 1951、清家清の森博士の家 1951 は同時期に、日本の伝統的な分割構成を用いて、近代的空間をつくり上げている。この頃の日本は、戦災による住宅不足からの復興が急がれただけでなく、住宅を取り巻く議論も活発に行われ、一般の人々の関心も集めていた時期である。住宅が建築の花形であった時代だ。当時、西山卯三は都市住宅のありかたについて「食寝分離」を唱え、浜口ミホは「床の間」や「玄関」は封建的反動であると否定し、日本の伝統につながるいっさいのものが封建的で排斥すべきとみなす論調が横行していた。そのような中完成した清家清の「森邸」1951、は日本調の復活といわれ大きな話題を投げかけた。「私の家」1954 は、その後の「斎藤邸」1952、「宮城邸」1953 に続く同様のワンルーム構成で、一連の作品が結実した住宅といえる。戦後小住宅の代表作の一つといってもいいであろう。空間構成は抽象化した分割構成でワンルームになっている。そのため内包的空間構成を併せ持つ。

その頃から日本は高度経済成長期へと向かう。東孝光の「塔の家」1966 ができたのは東京オリンピック後の日本の高度経済成長期の真只中である。戦後小住宅の時代を終え、大邸宅も建つようになる一方、都市の過密化や環境悪化は激しさを増し、都市に住むということは閉じた空間をつくることとなっていた。そのような中あえて都市に住もうとした試みが東孝光の「塔の家」1966 であった。6 坪の極小で変形した敷地に建った住宅は、建物そのものへの関心と同時に、如何に住んでいるのかという興味も注がれてきた。都市住居の特殊解として扱われがちであるが、その中に先進的事例や試みが潜んでいる可能性は高い。空間構成はロケットをドッキングさせたような重層連結構成で、重層連結の一体化による内包的構成を併せ持つ。

1970年代に入り、日本は二度のオイルショックを受ける。伊東豊雄の中野本町の家1976は問題作でもある。芸術的で質の高い空間であるが、内に向き過ぎた住宅は、家族にとってどうであったかという問題だ。1970年代半ばから、ポストモダニズムが広がりを見せ始め、1985年のプラザ合意後のバブル景気に支えられて開花していった。このような時期に「管の家」1983は誕生する。ポストモダニズムとは正反対の工業化・量産化を可能とする合理的プロセスと、現実的な生活を設計する姿勢から生まれた。工業化・量産化はハウスメーカーが担い、公的な住宅供給は一定の軌道にのり、建築家は私的な問題解決に入り込み、建築家の住宅に関する社会的使命は終わったかのように思えた時期であった。そのような中、社会一般の普通の人々に共有されうる普遍性を探し続けた高橋公子が身を持って試したのが「管の家」1983であった。空間構成はスチールパイプによる内包構成であり、二次的操作段階の貫入による連結構成も併せ持つ。

三つの住宅はそれぞれにその時々の社会的要請や社会的課題に向き合った住宅である。1950年代、1960年代、1980年代と違う背景において、「私の家」は戦後復興住宅、「塔の家」は環境悪化する都心型住居、「管の家」は社会一般の人々に共有されうる建築システム住宅、とそれぞれが違う課題と向き合っていた。

家族構成も大きく違う。「私の家」は清家清、妻、長女、長男、次女、三女、分棟だが敷地内同居の父、母の8人家族だ。「塔の家」は東孝光、妻、娘の3人家族。「管の家」は、高橋公子、鷹志、父、母の4人家族だ。それぞれの家族成員の発達段階も異なり、「私の家」は誕生したばりの子どもから、老齢期の父母まで。「塔の家」は夫婦とひとり娘のみ。「管の家」は夫婦と老齢期の父母。その暮らし方も大きく違い、「私の家」は一つの敷地内に血縁が集まって暮らす家族であり「原始共同体的現代家族」、「塔の家」は都市に暮らす核家族であり「まち、建築、空間、人間、共存自律型近代家族」、「管の家」は全て大人で構成されている家族であり「発達した成員（大人）の平等参画家族」と名前をつけた。

3.2 空間的適応性の考察

3.2.1 空間構成

「私の家」はワンルームの分割構成である。抽象化された分割は内包的でもある。清家清のアイデンティティともいえる「構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント」、「細設」を活かすのに最も適した空間構成だ。

「塔の家」は、重層連結構成で、重層連結の結果一体となった内包的構成を併せ持つ。東の他作品にも共通する技法は「重層連結構成」、「コンクリート打放し」、「吹抜空間」、「仕上なし」である。住宅において縦に連結する空間構成の手法は東が開発したといってもよく、彼の代表的手法でありアイデンティティといえる。

「管の家」の空間構成は、スチールパイプによる内包構成であり、二次的段階操作の貫入による連結構成を併せ持つ。高橋の他作品にも共通する技法「ＧＭモジュール」、「プレファブリック化」、「細ラーメン構造」である。「管の家」に続き「えごのきの家」でも採用された「細ラーメン構造」に空間とシステムの可能性を見ていたと思われる。

3.2.2　外部空間と内部空間

「私の家」で清家は「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ませて、狭小住宅の解決を図っている。」と言っている。外部を含めての完全一室住居である。清家が求めたものは「自然な姿でいきいきと暮らす」ものであったからである。

「塔の家」は、まちに住むという総体があって「塔の家」が成り立つという。その通りに都市施設や都市的設備による補完があって、「塔の家」の生活が成り立っている。

「管の家」で高橋は、「雨音でテレビが聞こえにくくなるが、朝夕のほの明かりを眺めるのは楽しい」といい、自然環境に目を向け、耳を傾ける姿勢があった。また「管の会」を定期的に開き、外部の人に住まいを開放していた。

「私の家」は外部に、「塔の家」はまちに、「管の家」は人に開いていたといえる。分割構成は外部に開き、連結構成はまちに連続し、内包構成は人を招き集めやすい。

3.2.3　個室と共用室の関係

「私の家」は戸外を含めて完全一室住居であるからトイレも個室にならない。しかしこれは子どもが小さな時の話である。広瀬鎌二の SH-1 も完全一室住居だが、結婚時に建て、１０年後に増築している。完全一室住居は、限られた家族構成・発達段階にのみ適応可能な空間形態といえる。

「塔の家」は縦の概念、レベル差を利用することで壁をつくらずにプライバシーを確保した。「どんなかんきょうにいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった」P.181 と東は言う。「塔の家」もお風呂もトイレも個室にもドアはない。子ども時代だけでなく成人しても適応している。東が促した自律的な家族関係であるから、この家に適応できたのかもしれない。

「管の家」では、世帯間が混じりあい、お互いを繋ぐ場所が玄関であり、ゆるやかに分節したのが階段だという。手摺のない階段は、高齢者にとって大きなバリア（障壁）であり、見た目のゆるやかさとは裏腹に、指向性の強い弁になっていたと思われる。指向性の強い弁が家族の構成員によって働いたり働かなかったりするのは差別的だ。指向性の強い弁は圧力差をつくりかねない。

分割構成は分割を曖昧化すると融合的・内包的になり、連結構成は連結後に一体化させると融合的になり、内包構成は他との接続を分節的にすると、閉鎖的になる。

3.2.4　家族関係の形成に対する対応

「私の家」では、「清家のワンルーム形式に対する執着は、彼の理想とする日本的な同居を主体とする家族の生活像からきており、これは近代的な個室至上主義に対するアンチテーゼともなっていて、30年後の現在において再び意味深いものがる。」PP.200.201と山下和正は言っている。戦後急激に進んだ近代的な個室至上主義に警鐘をならしたものだ。また「親豚のまわりに子豚が集まってくるような暮らし方、住み方をしたい」と清家が言っているのは、人間が自然に集う家族の姿のことだ。清家は実際に、夫婦と小さな子どもの時は小さな一室でかたまって暮らし、それぞれが成人した時には複数の棟からなる「私の家」住居群をつくり、孫に囲まれて暮らした。その姿は、原始共同体的家族生活をもとに描いたように、無理なく自然だ。

「塔の家」では、東は「家族は分解する」と冷ややかに見ながら、自らの家族が自律的に構築されることを実践した。規範で囲い込むのではなく、自らのお互いの意識で寄り添うことをのぞんだ。まち、建築、空間、人間の共存し自律しあう家族の造を描いたのだ。

「管の家」では、「管の会」というパーティーが定期的に行われ続けた。そこに集まる人々は一つのファミリーとも言える。そこでは、家人、来客者の別はなく、立てる人が台所に立ち、人を拘束せず、作業を拘束させない雰囲気があった。性差も立場も関係なく平等に参画できる場所であったのだ。「男にも家事の心得が必要である」と高橋は言っている。「管の会」を定期的に開いたのは、夫妻それぞれの持つ社会的関係を整合し、共有しようとしたのであろう。ともに空間を扱う学術研究者であるから、メリットは高い。勿論それだけではなく、若い人たちを育てたいという、教育者の思いと血縁を越えた家族の模索あったのではないか。

3.2.5　空間的適応性を実現するための造形的着想

「私の家」で、「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ます」ためには内部を外部に開放する必要があった。そのために私の家ではH型の最小壁量とハブマイヤー・トラスで屋根が支えられている。最小壁量は空間を緩やかに区切る役目も果たしており、まさしく「構造と空間の一体性」が実現されている。また冬でも建具を開放できるようにユカはパネル暖房になっている。「自然と交流しながらしつらえをしていくのが日本の住宅の演出だと思います」と清家が言うようにしつらえたのが「可動たたみ台」でもある。

「塔の家」での生活を「自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人、その共存が、一つの匂いとなり、香る。その香りを糧として、建築も、空間も、人も、同じ香りの媒体、共有者、構成素材としての、各々の持ち分の責任任を果したいと望んで、生きる。」と妻の節子は言う。この空間は作家が意識

意図してつくられた空間ではないという。

「私にとってはその壁の内側の広さが、本当に自分や家族の身の置き所を作り出してくれるのかどうか、それを確かめるために、より大きな図面を描き、その空白部分をにらんでは、椅子を置いたりベッドを描き込んだりしては身体で確かめていったのであった。」と東が言う。限られた最小限の空間と向き合う時、作家の恣意はまったく通用しないのである。

「管の家」では、「きまったリズムで刻まれる強い構造。小さな空間なら特に目についてしまうことも気にならなくなる大きな空間。生活の中で存在してくる、たくさんの大事なものたちを排除してしまうまっさらな空間よりも、気に入ったものを好きなだけ並べておける大らかな空間を提示したといえよう。」といわれている。構造のリズムと、空間のボリュームが素材やモノを制御しているといえる。大きな「がらんどう」の空間が使い手によって適宜可変されて使われた。住まい手や使い手を拘束しない、大らかな空間だから可能となった。

3.2.6　時間的転換のしつらえ

「私の家」では、「タタミの台は下にゴムの車がついていて、どこへでも転がして行ける。天気のよい日には庭にも出せる。夏の夕涼みなどにもよい。また、我々の生活のなかにはどうしてもタタミの要る伝統的な仕様式があって、例えば和服をタタムときなどにはどうしてもこの位のタタミがいる。また、資料の整理などのときにもそれを拡げるに便利。勉強机は檜で、製図板にもなる。食卓・製図机・仕事机，タタミの台・ガラス戸のモジュールを統一して、しつらえを楽にしようと試みている。」と清家は言う。「舗設」。状況に合わせてつくる、「ホモジニアスな空間」という清家の理論の展開である。清家は機能及び領域の特化・固定化をせずにその都度つくり、しつらえている。

「塔の家」では「我が家は、日本古来の仕来たり”衣替え”を保っている。地下室納戸にブリキ製の衣裳缶が一六個。結婚当初、東と私、一つずつ持って来たのが、一つずつえて一六個。今では、衣服をこれに合わせて納めるのに懸命の衣替え。その時は、藍染めの大風呂敷数枚に衣服を包み込み、寝室⇔1地下室、何度も何度も上下する。重い衣裳缶を、荷役人夫並みに、ドろしたり積んだり、それはもう、大へんな重労働。何時もこの時、私は、われながら”何と、力持ちである事よ！”と自賛する。」と妻の節子は言う。限られた空間を最大限利用するためには、住まい手の創意工夫と努力が必要である。この家で暮らすためには真剣さが必要だ。東は空間が日本的だと言うが、暮らし方そのものが昔の日本的ともいえる。

「管の家」では竣工後早い段階から、模様替えや用途変更が繰り返されてきた。使い勝手が悪いと思われたり、こうした方がよいと思われる度に試行錯誤されている。高橋夫妻とも空間を扱う学術研究者であるから、その実験的せいかくもあるだろうが、その対応と

試みは頻繁に行われている。それを可能としたのが大きな「がらんどう」な空間だ。日常的な動線に無理なく配置した機能空間が、それらの可変をささえたということも重要だ。

3.2.7　家族成員の発達段階に対する対応

「私の家」では、家族の発達段階に応じて住宅の使い方は変化しており、合せて増築もされている。清家の言う「状況に合わせてつくる」通りに実践されてており、家族の生活がシークエンスに変化するのと同時に、住まいもシークエンスに変化し続けたといえる。完全一室住居の生活は、「私の家」竣工後３年ほどしてから、防空壕だった地下室を子供室に利用することで、変化をはじめ、子ども小屋、続・私の家、倅の家と敷地内にその都度増築されている。

「塔の家」では、驚くことに、特別な変化が「塔の家」では見受けられない。しいていえば娘の利恵の部屋が子供部屋から個室へと変化していることだ。住宅空間が家族関係や発達過程をアフォードするという考えはなく、自律的に、まち、建築、空間、人間の共存を描いたのだと理解できる。その前提になるのは、内部空間を緻密に構成することだと、東は言うだろう。

「管の家」では、高齢の親との同居ということもあるが、「管の家」家族の発達段階の変化は目まぐるしい。成長していくより老いていく経過は、それまで前向きに捉えられていなかったこともあり、その対応と記録は貴重だ。領域の特化・固定化をせずに、その都度淡々と転用している。そのことで建物が活かされている。

3.2.8　家族関係の変容に対する対応

「私の家」では、家族関係の変容にも合せて、「舗設」、「状況に合せてつくる」が実践されている。なかでも 1974 年に長女家族が「私の家」に住み始め、1996 年に次女家族が代わって住み始めていることが興味深い。子どもたちにとって清家が求めた home のスピリットが、ここに宿んでいるからなのかはわからないが、子育て中の若い世代の家族に、「私の家」が少なからず世代を超えて適応していることだけは事実だ。

「塔の家」の家族構成は、孝光、妻：節子、娘：利恵の三人である。著書「塔の家白書」に掲載される 1966 年から 1988 年の間には、家族構成の変化は見当たらない。しいていえば、利恵が言うように、子ども時代の親子関係から、大人同士の友人的な親子関係への移行だ。東が子どもに対して自律的な生活態度や成長を求めてきたように、依存的でない自律的な人間関係、家族関係が築かれてきたと思われる。それは、自律的に、まち、建築、空間、人間、家族の共存を描いた結果なのだと理解できる。その前提になるのは、やはり自然に生じた空間であり、緻密に構成された内部空間の存在だ。

「管の家」が誕生して１４年の間に母親、父親、公子の３人が亡くなっている。３人とも病気によるものだが、公子を除き、父親と母親は寿命をまっとうしたといえる。老いていく過程の対応でも指摘したが、領域を特化・固定せず、淡々と転用している。そのことがまさしく「管の家」を活かしている。これらをすべて包み込む包容力が「管の家」にはあったからだろうか。その可能性は否定できない。

3.2.9　環境及びその変化に対する対応

「私の家」では、「状況にあわせてつくる」が実践されている。たとえ家族で成功していても外来者に適応されなければ靴での室内生活を取止め、逆に今度ははだしを愉しんでいる。また、この時に三女が誕生していることも関係あるだろう。車の氾濫や事故への対応は電電公社の電柱を受入れることで結果的に対応され、コンテナも書庫と物置というだけでなく、近くにできたマンションからの視線を、上手に妨げている。これらは外部の変化や対応に抵抗するのではなく受入れることで、しなやかな対応が、結果としてよい方向に向かっている。

「塔の家」では、南に面した台所の、窓ガラス一枚の外は、東京の真只中、外苑、青山を通り抜ける環状四号線。調理する私と、我が街は、直に繋がる。・・・大都会の真只中の出来事が、窓ガラス一枚こちらの台所で働く私に、ビンビン伝わってくる。我が家の一隅に取りついているのみか、流動する社会の一隅にも。しっかりと取りついた我が台所。世の中と一緒になって動いているこの場所。」と妻の節子は言う。外部を遮り内部をつくるのではなく、都市との共存を意図した結果が成功している。まち、建築、空間、人間の共存関係が、ひとつの環境をつくり、「塔の家」そのものがまちの環境を形成している。

「管の家」で高橋は、社会環境の変化や対応を、目の前の現実の問題として捉えていた。日本女子大学の教授という立場からしてもうかがえるのは、女性の社会進出と住まいの問題だ。高橋は、家事労働から女性を解放するという思考ではなく、男性と女性それぞれの家事参加の可能性を探っていたと思われる。「男女平等参画」というと、絵に描いた政策的だが、生活の生の部分で、実践し展開していたのだろう。「男性にも家事の心得が必要である」という高橋の持論は、現在の社会においてより説得力を増している。

自然環境との対話は、自然へ目を向け耳を傾ける姿勢である。

3.2.10　時間的適応性を実現するための造形的着想

「私の家」では、「生活の中のシークエンスに動きがあるがあるから、時間のディメンションを入れて住宅は四次元になる」と清家は言う、清家のアイデンティティともいえる「構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント」、「舗設」は、四次元の時空間を構成するアイデアだ。「私の家」築後６０年以上経過した現在でも、時間的適応の可能性を示している。さらに清家が言う home のスピリットが住宅に宿るとすれば五次元になる。「建築は本来そうした形而上的な存在をひとつの調和のある個体として形而下的というかフィジカルな存在として獲得する技術であろう。」P.53 と清家はさらに言う。

「塔の家」では、「快適さとは、欲望の充足によって得られるものではなく、欲望を野放しにせずしっかり抑え込んでコントロール可能という状態から得られるものらしい。居住空間の場合にも、これ迄の快適さ追求路線では、欲望の充足に応ずるハードな空間や道具のつくり方に偏り過ぎていた嫌いがある。ここでは触れ得なかったが、使用者の空間形成への「主体性」とか「参加」の問題と共に、生活行動の姿勢や哲学の掘り起しという面が、今後大いに望まれるところだと私は考えている。」欲望の充足に応ずるハードな空間や道具では、快適さが得られないということだ。そのことは、ハードな空間や道具の耐用年数や適応年数の短命化につながる。空間形成及び住まい方に自律能動的に関わり努めることは、人任せではない分、自らの責任において適応への努力が積み重ねられることになる。その場合に建築家の責任は、合意形成のプロセスを経ることに注がれた結果、放棄されるようなことがあってはならない。東の姿勢も、後に揺れている。

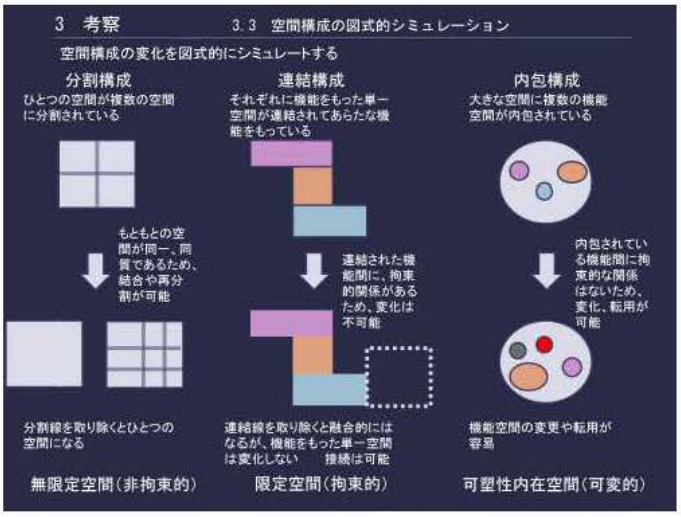
「管の家」では、大きな「がらんどう」の空間が使い手によって適宜可変されて使われた。住まい手や使い手を拘束しない、大らかな空間だから可能となった。領域の特化・固定化がなされずに、その時々に変化させたことも重要だ。

大きな「がらんどう」の空間は、絶対的な容積が必要だ。そのための必要な条件は敷地でもあり、工法、素材も限られる。工法・素材は高橋が示したものがある。途半ばで倒れた高橋の意志を継ぐものが出ることを期待したい。

家事労働を固定化させずに、家族成員それぞれが家事労働にあたることは、昔の日本の家事労働の分担にも似ている。子どもであれ、誰であれ、家の作業任務を担っていた時代だ。現在のようにサービスをする方とサービスを受ける側という家族のあり方の方が本来は不気味だ。女性解放を声高に叫ぶのではなく、発達した成員（大人）家族のありようとして、当然のことを求め、示したともいえる。

3.3　空間構成の図式的シミュレーション

表 10.　空間構成の図式的シミュレーション



空間構成の変化を図式的にシミュレートした。

「分割構成」は、ひとつの空間が複数の空間に分割されている。もともとが同一、同質であるため、結合や再分割が可能であり、分割線を取り除くと一体的になる。無限定空間（非拘束的）。

「連結構成」はそれぞれに機能をもった単一空間が連結されてあらたな機能をもっている。連結された機能間は、拘束的関係があるため、変化は不可能である。連結線を取り除くと融合的になるが、機能をもった単一空間は、基本的に変化しない。限定空間（拘束的）。接続は可能。

3.3　考察

「私の家」、「塔の家」、「管の家」の空間構成と家族構成、場面転換・時間転換の時間的適応性をみてきた。

場面転換の時間的適応性、時間転換の時間的適応性を適応の段階と程度にわけてみる。

適応の段階を、そのまま - 模様替え - 修繕 - 追加 - 転用 -

0　1　2　3　4

改築 - 増築 - 解体撤去に分けた。

5　7　10

左から右に向けて、エネルギー及び環境負荷が増大する。適応の程度を、範囲や面積に置き代えてみると、

極 一部　一部　半分　過半　大半　全部に

0.1　0.2　0.5　0.6　0.8　1.0

分けた。左から右に向けて、適応にかかったエネルギー及び環境負荷が増大する。

適応の段階、適応の程度ともエネルギー及び環境負荷が少ない程、適応にエネルギーがかからないとみる。エネルギー及び環境負荷が大きい程、適応に際し変化しているとみる。適応の段階の下の数値はエネルギー及び環境負荷の大小の目安とする。適応の程度の下の数値はその範囲とし、適応の段階の数値に乗じる。場面転換の時間的適応は、時間を経過しない状況への適応や固定化しないものとする。時間転換の時間的適応は時間を経過したのちの状況への適応かつ固定化したものとする。

「私の家」に見られる場面転換の時間的適応は、舗設によって、「そのまま」適応されている。適応にかかったエネルギーは「0」である。

「塔の家」に見られる場面転換の時間的適応は、時間差的用途変更がみられるが、エネルギー及び環境負荷はかからないため、「そのまま」とした。キッチンの簡単な吊棚が入居後すぐにつくりかえている。棚はインテリア家具として扱い、「模様替え」とする。範囲はキッチンの吊棚なので、「極 一部」とする。適応にかかったエネルギーは「1*0.1 = 0.1」である。

「管の家」に見られる場面転換は、入居後すぐに寝室とクローゼットを交換し、トップライトの追加設置が行われている。「転用」の範囲は「一部」、追加」の範囲は「一部」である。「転用・一部」、「追加・一部」で、適応にかかったエネルギーは、「4*0.2+3*0.2 = 1.4」である。

「私の家」の時間転換の時間的適応は、防空壕を地下室利用「転用 一部」、子ども小屋増築「増築一部」、続・私の家増築「増築過半」、倅の家増築「増築半分」で、適応にかかったエネルギーは「4*0.2+7*0.2+7*0.6+7*0.5 = 9.9　9.9/42 年 = 0.23」である

「塔の家」の時間転換の時間的適応は、地下室を事務所から倉庫に転用「転用 一部」、外壁コンクリートの大規模な修繕「修繕過半」で、適応にかかったエネルギーは「4*0.2+2*0.6 = 2.0　2.0/20 年 = 0.1」である。

「管の家」の時間転換の時間的適応は、物置３カ所設置「追加極一部」、１階床を木製フローリング張へ変更「模様替え一部」、鷹志書斎を父親寝室へ移す「転用一部」、居間拡大「転用 一部」、寝室と鷹志書斎を入れ替える「転用 一部」、クローゼットを和室へ移動「転用 一部」、１階改変「改築一部」で、適応にかかったエネルギーは「3*0.1+1*0.2+4*0.2+4*0.2+4*0.2+5*0.2=3.93　3.93/18 年 =0.21 である。

適応にかかったエネルギー（数値）は比較の目安とする。

	私の家」	「塔の家」	「管の家」
場面転換	0	0.1	1.4
時間転換	0.23	0.1	0.21

この比較では場面転換に最もエネルギーがかかっていないのが「私の家」、続いて「塔の家」、「管の家」となる。時間転換に最もエネルギーがかかっていないのが、「塔の家」、続いて「管の家」、「私の家」である。時間転換は、経過スパンが代わると、配点に大きな違いが出る可能性がある。ここでは配点そのものの数値的正当性がそこまで高くないため、同じスパンに置き代えての比較はしていない。あくまでも目安である。

「私の家」が場面転換のエネルギーが最も低いのは、舗設によるものと外部空間まで含めた一体利用だ。その場合に空間構成と構造と空間の整合性は欠かせないだろう。「塔の家」の場合は、ここには現れずに配点されていない、住まい外（まち）における適応が多分にある。エネルギー及び環境負荷と考えると加点されない。「管の家」は、竣工後すぐに用途転用と追加工事が行われているため、適応にエネルギーがかかっている。

「塔の家」が時間転換のエネルギーが最も低いのは、家族の暮らし方と空間の性格にある。殆ど変化させずに、家族成員の創意工夫と自律的な生活姿勢で、住まいに暮らし方を適応させている。増築が可能な敷地がないことも加えなければならないが、連結された密度の高い空間は変化しずらい。適応が破綻すれば住み続けることは困難になる。現在もなお、住み続けられているのは、少なからず破綻していないことが示されている。「塔の家」での生活は、決して楽な生活ではないかもしれないが、不快ではなく、彼らにとって快適な暮らしなのだろう。ただ東が「この家で暮らすのは多少若さがいる」と言うように、いつまでも暮らせるとは限らない。元気な身体機能がなければ、住むことは不可能である。

「私の家」は敷地内に増築を重ねて来た。1,000㎡の敷地がなければ不可能だったといえる。しかし、46年の歳月を経て、「私の家」に次女夫婦が暮らし続けているということが、時間的な適応を証明している。「管の家」は家族関係の変容が目まぐるしかったこともあり、その対応による転用や変化が度々繰り返された。最も内部変化した建物といえる。すなわち建物内部の可変性が高いということだ。

「私の家」外部への増築が多く、拡張性が高いといえる。敷地が最も大きいことが要因でもあるが、もともと内外融合しての生活であるため、どちらかというと外側に意識が向かうのだろう。

「塔の家」この中では最も変化が少ないということになる。上にも横にも拡張はできず、内部構成も密度が高いため、変化が難しい。

「管の家」は内部変化が多く、内部の可変性が高いといえる。

第４章

第４章　　まとめ

第4章　まとめ

本研究の結果、住宅において、共用空間の形態とその空間構成が家族生活の変遷に関わっていることを実例を通してさし示し、その可能性を探ることができた。

空間構成の変遷

日本の住宅が近代化への歩みを始めてからの24作品の空間構成原理を見る。数寄屋的連結構成の住宅への応用からはじまり、民家的内包構成、伝統的分割構成の再発見と、昭和の初めから戦後にかけて、西洋文化の移入や切張でない、日本文化から住宅の近代化を目指した、住宅の空間構成の軌跡が見える。その後空間構成は、現代に向かうほど複雑な操作や多段階的操作、アクロバティックな操作を伴い変化している。

空間構成と空間配列

24作品の空間構成原理と空間配列の関わりを見る。分割構成は空間配列において、開かれている方向、一体的な、融合的な方向に向う傾向がある。連結構成は3つの空間構成原理の中では、開かれていない方向、分離的な、連続的な方向に向かう傾向がある。内包構成は、開かれていると開かれていないの中間的な位置にあたり、二次的段階や、その他操作の影響を受けて分割構成は開かれているへ、連結構成は開けれていない方向へ向かう。この傾向については24作品の分析に基づく傾向であるため、偏りが見られる恐れがある。空間構成と空間配列の関係を正確に見るためには、より多くの作品の分析が必要である。

空間配列と共用空間

24作品の空間配列と共用空間の関わりを見る。全体的には空間配列の開かれていると、共用空間の一体性は正比例の関係がある。中でも分割構成はほぼ正比例の関係にあり、連結構成は平均よりも開かれていない、分離的な傾向になり、内包構成は空間配列の状態とは別で、独立的である。

空間構成と空間的適応性

設計意図と居住経過の検証ができる作品として清家清「私の家 1954」、東孝光「塔の家 1966」、高橋公子「管の家 1983」がある。２４作品の中でそれぞれの作品の空間構成は、「私の家 1954」は分割構成に、「塔の家 1966」は連結構成に、「管の家 1983」は内包構成にあたる。「私の家」は分割の抽象化により、内包的な性格を持ち、「塔の家 1966」は連結後の一体化により内包的な性格を持ち、「管の家 1983」は二次的操作の貫入により連結的な性格を持つ。この3作品から空間的適応性との関わりを見た。

空間的適応性では分割構成の「私の家」が最も適応性が高く、次に連結構成の「塔の家」、内包構成の「管の家」と続く。「私の家」が最も高いのは舗設による適応と、外部空間まで含めた一体利用である。日本の伝統的分割構成が舗設によって生活が支えられていたこと、「自然と交流しながらしつらえをしていくのが日本の住宅の演出」であれば、分割構成が空間適応性が高いことが理解できる。「塔の家」が次に適応性が高いのは、住まいの中だけで完結させずに都市施設や都市設備を利用し、まちそのものに暮らしているからである。連結構成を住宅内部だけで終わらせず、まちに連結させているのが適応性に繋がっている。「管の家」が３つの住宅のうちで最も適応性が低かったのは、時間的転換ではなく、初期対応で用途転用や追加が行われたためだ。大きな「がらんどう」な空間を用意して後からつくるというスケルトンインフィルの発想は、竣工後に生活に対応した工事が必要となるからだ。いずれもエネルギーや環境負荷をかけていない程適応性が高いと設定した場合の結果である。

空間構成と時間的適応性

時間的適応性では連結構成の「塔の家」が最も高く、「私の家」、「管の家」は次で同等である。「塔の家」が最も高かったのは家族の暮し方にある。殆ど住まいを変化させずに、家族成員の創意工夫と自律的な生活姿勢で、住まいに暮らし方を適応させているからだ。また、住まい以外の都市施設や都市設備が適応している部部もあり、まちに連結してまちに暮らしていることが、住まいの適応性を補完している。「私の家」は敷地内にたび重なる増築をして、家族生活の変遷に対応しているが、築後４６年の歳月を経て尚、次女夫婦が「私の家」に暮らしているということが、時間的な適応を証明している。「管の家」は家族生活の変化が短期間で目まぐるしかったことが、以外に加点となり時間的適応性を下げている。しかしその変化に対応して適応したことを考えれば、変化への適応性は高いということになる。また、この配点を逆にみれば、建物が変化をしたということであり、建物の可塑性が高いということでもある。

連結構成は内部だけでなく外部への連結の可能性が高く、「塔の家」のようにまちや、地域社会に連結することで、住まいの時間的適応性が補完されることがわかる。分割構成は外部への拡張性が高い。「私の家」は 1,000 ㎡の敷地があったためではあるが、内外を融合させやすく、外側に意識が向かいやすいことが、外部拡張性を高くしているともいえる。内包構成は、内部変化を許容し、内部の可塑性が高いことがわかる。「管の家」のような目まぐるしい家族生活の変化にも対応できる、柔軟な内部構造だということだ。

共用空間と家族生活の変遷

「私の家」の共用空間は戸外を含めての一室である。個室と共用室は融合し一体化している。完全一室住居も家族の発達段階に応じて変化をしている。子どもが小さいうちは、小さな一室にかたまるように集まって暮らしている。子どもの成長、発達段階に合わせて、子どもの部屋が用意されていく。成長した子どもたちはそれぞれに自室が用意され、共用室とは分離し、接続的となる。子どもが独立して家族を持った時、自らが育った「私の家」で暮らし始めている。「塔の家」の共用空間は分節されてはいるが融合的だ。時間差的に共有されているといえる。例えば夫婦の寝室であっても、温かい日中は子どもがそこに寝っ転がって本を読む。暑い夏の最中には、地下室で涼をとりながら本を読む。領域が特化されておらず、固定化もなされていない。しかし自ら領域を獲得していかなければならないため、自律的であり能動的である。勿論住まいの外に、自分の領域を求める場面もあるだろう。「管の家」の共用室は中心的である。この大ホールともいえる共用室が様々なものや行為を内包している。家族生活の変遷は目まぐるしく変わり、その度に転用されてきた。しかしこの共用室は殆ど変わらずに、その変化を静観しているようだ。「管の家」の家族成員は発達した大人家族だ。家族生活の変遷はその老いていく過程でもある。管の会にあつまる人々を一つのファミリーと考えることもできる。その家族の関係はいたって、性差や立場に関係なく、対等平等である。

結論

空間構成ごとにみた図式的変化の可能性と、これまでみてきた３作品の時間的適応をもたらすための対応や変化は、ほぼ相応することがわかった。分割構成は「私の家」に、連結構成は「塔の家」に、内包構成は「管の家」にあてはまる。

分割構成は無限定空間（非拘束的）であり、再分割や結合が可能である。「私の家」の例では、実際の生活やその変化には「新設」や「状況に合せてつくり」対応している。子どもたちが、大きくなると一室住居では適応できなくなり、増築している。

連結構成は限定空間（拘束的）であり、変化は基本的に不可能である。接続は可能である。機能間の仕切りをとり、連続融合的にすることは可能だが、単一の機能空間は変化しない。「塔の家」では時間差的利用や、領域を開放することで、最大限の利用を可能にしている。まちに接続することで都市施設の連携や補完が可能になっている。

内包構成は可塑性内在空間（可変的）であり、内包された機能空間は変化や転用が容易に可能である。「管の家」では場面転換で生活を開放し多くの人を招き、時間転換では家族生活の変化に合せて変更や転用を度々している。

住宅の共用空間の形態及び構成が、環境因子の一つとして家族生活の変化に適応していることがわかった。あらためて、建築と空間と人間は、共に時を刻み出来事を重ねながら、築き合ってきたといえる。本研究はその一部を垣間見たに過ぎない。人間の生活の可能性は、空間に含意され展開されることもあれば、生活のために空間を変化させることもある。可能性は空間にのみ含意されるのではなく、人間の生活と相俟って双方の展開の可能性が生みだされるといえる。

参考文献

清家清：「私の家」白書，住まいの図書館出版局，1997.

東孝光＋節子＋利恵：「塔の家」白書，住まいの図書館出版局，1988.

日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，彰国社，2003.

横山正：新建築臨時増刊 昭和住宅史，新建築社，1976.11

石堂威・小巻哲：日本の現代住宅 1985-2005, TOTO 出版，2005.12

栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，1974.8

菊竹清訓：代謝建築論，彰国社，1969.1

篠原一男：住宅論，鹿島出版会，1970.10

山本理顕：新編住居論，平凡社 2004.3

黒沢隆：個室群住居，住まいの図書館出版局，1997.9

布野修司：戦後建築論ノート，相模選書，1981.6

藤森照信：昭和住宅物語，新建築社，1990.3

宮脇檀：日本の住宅設計，彰国社，1976.10

大河直躬：住まいの人類学，平凡社，1986.9

謝辞

本研究の調査にこころよく応じて下さった高橋鷹志氏ならびに東利恵氏に心より謝意を表します。

富岡義人先生　一方ならぬご指導を賜り感謝に尽きません

田端千夏子先生　論文を見てみたいとのお言葉は、励みになりました

神谷悠実さん　いつも温かくやさしくご教授頂き、有難うございました

小池道宏さん　先に修了されましたが、支えて頂き有難うございます。

岡田響子さん、野並和紗さん、劉さん　周回遅れで同期になり、その後数々のお世話取りを頂き、有難うございました。皆さんと一緒だったから、歩めたと感謝しています。

松田さん　その節はお世話になりました。

石黒さん　タイトル検討、有難うございました。

弘重麻衣さん、宮司典弘さん、米田春香さん、いつもいたわって頂き、有難うございました。

家族生活の変遷に対する住宅共用空間の時間的適応性に関する研究
清家清：私の家、東孝光：塔の家、高橋公子：管の家の作品分析を軸として

関口啓介　info@jin-ken.com
指導教員　富岡義人教授 tomioka@arch.mie-u.ac.jp

1. 序論

1.1　研究の目的

本研究の目的は、住宅における、共用空間の形態とその空間構成が家族生活の変遷にどのように関わっているのかを実例を通してさし示し、その可能性を探ることである。

1.2　研究の背景

住宅における共用空間をどのように扱うのかは、多くの近代建築家が取り組んできたものである。菊竹清訓、篠原一男、山本理顕らの発言に共通している問題意識は、住宅において家族全員に共通される空間の存在が不可欠であり、その共用空間とその他の空間との関係及び構成が、プランニングの中心を占めるというところにある。

1.3　研究の対象

2系列の事例を対象とした。前者を、空間構成の歴史的経過と、その発展形態が確認できる住宅作品を選定した。後者は、24作品のうち、居住経過についての観察記録がある3作品を事例とした。戦後小住宅の代表的作品、清家清：私の家、都心型住居の提案を果たした、東孝光：塔の家、普通一般の人々の普遍的住宅を求めた、高橋公子：管の家である。

空間構成原理は、分割構成を、一つの空間がより小さい空間に分割されている。連結構成を、複数の単一空間が連結されている。内包構成を、大きな空間に複数の機能空間が内包されている、と定めた。

分割構成：土浦邸1935、谷口邸1935、若狭邸1939、、レーモンド自邸1951、ＳＨ-1　1953、丹下邸1953、私の家1954、OHTA HOUSE MUSEAM 2004

連結構成：山邑邸1924、聴竹居1927、岡田邸1934、笠間邸1938、吉村邸1958、塔の家1966、中野本町の家1976、SPRINGTECTURE びわ

内包構成：前川邸1941、増沢邸1952、石津邸1957、スカイハウス1958、管の家1983、シルバーハット1984、PLATFORM1 1988、屋根の家2001である。

1.4　研究方法

1.4.1　空間構成原理ごとに8作品を選定し、その作品分析（空間構成、外部空間と内部空間の関係、個室と共用室の関係）を行う。

1.4.2　「私の家」、「塔の家」、「管の家」が空間構成原理の分類においてどの範囲に属し、どのような位置にあるのか比較し、分析を行う。

1.4.3.　「私の家」、「塔の家」、「管の家」について

Ａ：作品のアイデア（設計理念）について、本人陳述を整理する。

Ｂ：住宅形態の実現効果を作品形態・技法・効果に分類整理し、その関係と共通や差異を示す。

Ｃ：居住経過を、本人や家族の陳述、居住歴をもとに整理する。

1.4.4　場面転換の時間的適応性の分析

空間構成及びそれを実現する素材と工法
外部空間と内部空間の関係
個室と共用室の関係
家族関係の形成に対する対応
空間的適応性を実現するための造形的着想

1.4.5　時間転換の時間的適応性の分析

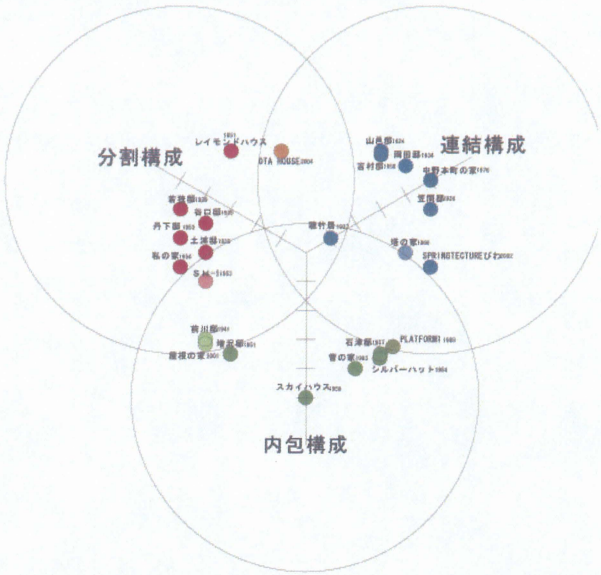
時間的転換のしつらえ
家族成員の発達段階に対する対応
家族関係の変容に対する対応
環境及びその変化に対する対応
時間的適応性を実現するための造形的着想

2.　分析

2.1　昭和初期から現代に至る住宅作品の空間構成

24 作品の空間構成を読み解き、分類した。

表 1.　空間構成分布



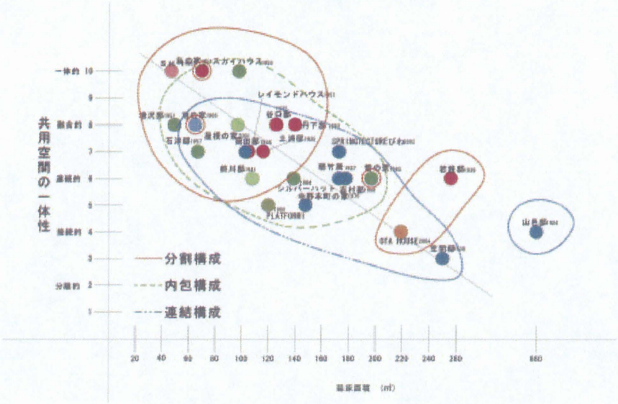
2.2 対象作品の分類

清家清「私の家」1954 ができた第二次大戦後は、戦災による住宅不足からの復興が急がれただけでなく、住宅を取り巻く議論も活発に行われ、一般の人々の関心も集めていた時期である。西山卯三は都市住宅のありかたについて「食寝分離」を唱え、浜口ミホは「床の間」や「玄関」は封建的反動であると否定し、日本の伝統につながるいっさいのものが封建的で排斥すべきとみなす論調が横行していた。そのような中完成した清家清の「森邸」1951、は日本調の復活といわれ大きな話題を投げかけた。「私の家」1954 は、その後の「斎藤邸」1952、「宮城邸」1953 に続く同様のワンルーム構成で、一連の作品が結実した住宅といえる。戦後小住宅の代表作の一つといってもいいであろう。空間構成は抽象化した分割構成でワンルームになっている。そのため内包的空間構成を併せ持つ。

東孝光の「塔の家」1966 ができたのは東京オリンピック後の日本の高度成長期の真只中である。戦後小住宅の時代を終え、大邸宅も建つようになる一方、都市の過密化は激しさを増し、都市に住むということは閉じた空間をつくることとなっていた。そのような中あえて都心に住もうとした試みが東孝光の「塔の家」1966 であった。6 坪の極小で変形した敷地に建った住宅は、建物そのものへの関心と同時に、如何に住んでいるのかという興味も注がれてきた。都市住居の特殊解としがちであるが、その中に先進的事例や試みが潜んでいる可能性は高い。空間構成はロケットをドッキングさせたような重層連結構成で、重層連結の一体化による内包的構成を併せ持つ。

高橋公子の「管の家」1983 のできた 1980 年代は、1970 年代半ばからのポストモダニズムが広がりを見せ始め、1980 年の後半からのバブル景気に支えられて開花した時期であった。「管の家」1983 は、ポストモダニズムとは正反対の工業化・量産化を可能とする合理的プロセスと、現実的な生活を設計する姿勢から生まれた。工業化・量産化はハウスメーカーが担い、公的な住宅供給は一定の軌道にのり、建築家の社会的使命は住宅に関しては終わったかのように思えた時期であるが、一般の人々に共有されうる普遍性を探し続けた高橋公子の一つの解といえる。空間構成はスチールパイプによる内包構成であり、二次的操作の貫入による連結構成も併せ持つ。

表 2.　共用空間と延床面積の相関



共用空間の一体性は、住宅における共用空間の扱い及び配置と、個室と共用室の関係を、一体的・融合的・連続的・接続的・分離的　のそれぞれに相応する部位に配置し、延床面積は住宅部分を基本とした。若狭邸と、OHTA HOUSE MUSEUM については、体操場と美術館が含まれている。

表では、一体的な傾向に「分割構成」、融合的な傾向に「内包構成」、連続的・接続的な傾向に「連結構成」があり、延床面積との関係は、逆相関の関係にある。

2.3　対象作品の分析

居住経過観察のある３作品を見る。

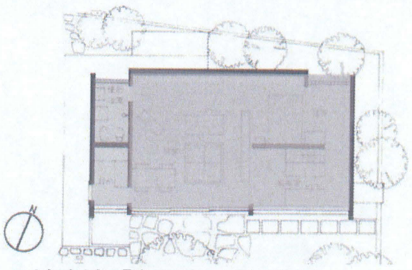


図 1.　清家清「私の家」平面図

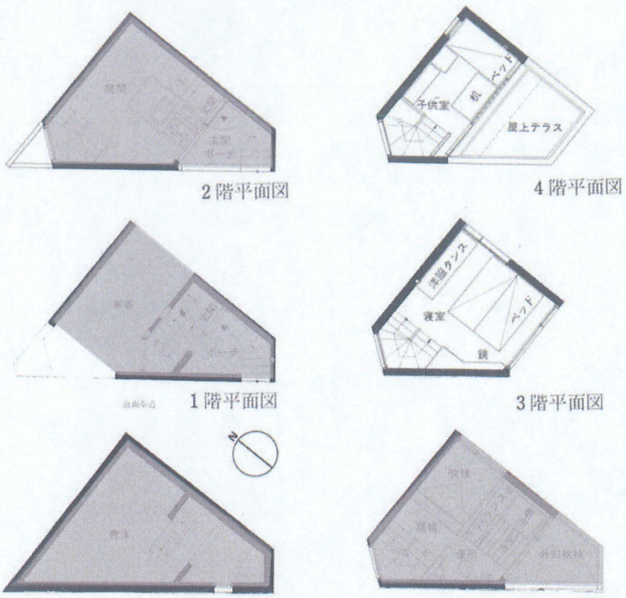


図 2.　東孝光「塔の家」平面図

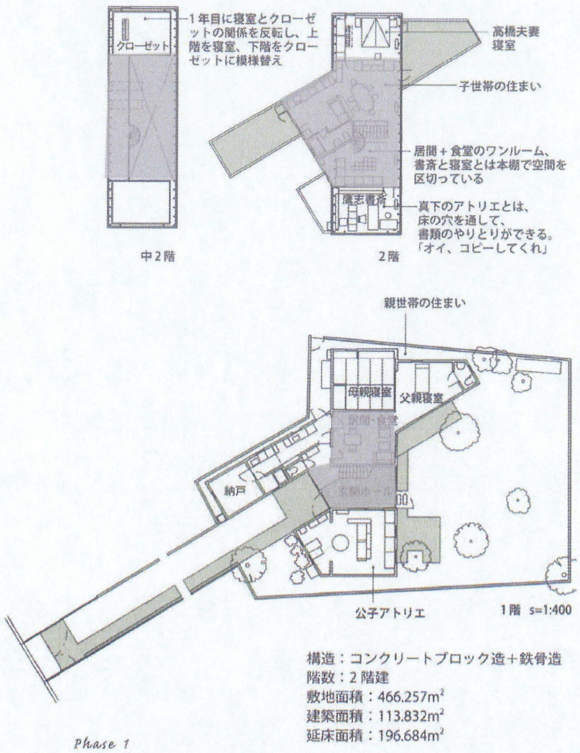


図 3.　高橋公子「管の家」平面図

平面図にグレーのトーンがかけてある部位が共用空間である。

「私の家」は戸外を含めての完全一室住居。構造と空間が一体となった分割構成である。

「塔の家」は一層一室を縦に連結した、重層連結構成である。

「管の家」は、「細ラーメン膜構造」の内包構成である。

対象作品のアイデア（設計理念）について、本人陳述を整理した。

その住宅形態の実現効果を作品形態、技法、効果に分類整理し、その関係と共通や差異を示す。清家清、東孝光、高橋公子の住宅作品を対象作品の他３作品選定し、併せて比較分析することで、共通や差異を明らかにする。

表 3.　清家清の住宅作品の比較分析

	私の家	森博士の家	斎藤助教授の家	宮城教授の家
空間構成原理	内包的分割構成	連結構成 部分的：分割構成	分割構成	分割的内包構成
空間相互の関係	融合、一体化 ワンルーム形式	連結融合、可変一体化 ワンルーム形式	連結融合、可変一体化 ワンルーム形式	融合、一体化 ワンルーム形式
内外空間の関係	内外融合、内外を通じて生活空間	開放的	開放的	開放的
共用室の扱いと配置	中心的、ワンルーム、南面配置	中心的、ワンルーム、南面配置	中心的、ワンルーム、南面配置	中心的、ワンルーム、南面配置
個室と共用室の関係	一体化、棲み分け	開閉による分節	開閉による分節	一体化、棲み分け
技法	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設 ハブマイヤー・トラス 内外融合 床：石張りパネルヒーティング 未分化	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設 未分化	構造と空間の一体性 ホモジニアスな空間 日本的エレメント 舗設 ハブマイヤー・トラス 内外融合 スケルトン・インフィル
効果	ホモジニアス（均質）な空間は空間のパースペクティブが強調されるので見かけの空間は奥行きが増大し、室の広さを大きく感じさせる。 未分化のままの単位空間であるから、住まう人がより使いやすい場所、快適な場所を選んで利用できる。 建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込まして、狭小住宅の解決を図っている。 そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義である。	←	←	← ← ← ←

表 4.　東孝光の住宅作品の比較分析

	塔の家	矢野邸	赤塚邸	大山邸
空間構成原理	重層連結構成、二次内包、部分分割	連結構成、スキップフロア６層連結	重層構成、５層連結 層の拡大縮小	連結構成、レベル差や屈曲による断裂と連続
空間相互の関係	連続的	連結的、遠路性	接続的	連続的
内外空間の関係	都市風景や日照の取り込み	連続的、連続空間が外部まで拡張	接続的、展望の取り込み	接続的、ブリッジによる接続
共用室の扱いと配置	中心的、上下貫通	中心的、落ち着いた空間	主要な扱い	中心的な扱い
個室と共用室の関係	連続、時間的棲み分け	連続的、レベル差	接続的	接続的
技法	重層連結構成 塔状住居 都市型住居 コンクリート打放し 吹抜空間 身体的空間 全ての空間の共有 まちに暮らす 階段室型住居 バス・トイレ共用 仕上なし	重層連結構成 水平連結構成 田園型住居 コンクリート打放し 吹抜空間 余裕のある空間 個／共　層による分節 内外連続空間 スキップフロア 世帯を繋いで分ける 仕上あり	重層連結構成 塔状住居 山の上の塔 コンクリート打放し 層の拡大縮小 見晴らしの良い空間 個／共　層による分節 山に暮らす 階段室＋空間 住まい手の参加 仕上なし	ブリッジによる連結 水平連結構成 アトリエ付住宅 コンクリート打放し 吹抜空間 大空間 ブリッジによる貫入 ブリッジの外部接続 生活パターンの空間化 多様と統一 仕上あり
効果	密度の高い空間は仕上やディティールに頼らずに成り立つ 自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人間が、一つの匂いとなり、香る 家中の部屋を使っているので広い部屋に住んでいる 世の中と一緒になって動いている場所 西洋の住宅よりも日本的である	スキップフロアによる迷路的空間 夫婦、成人に近い子ども、老母を繋ぎながらエリア分けしている 連続空間が外部まで拡張し、外の庭も建築的空間構成に編込まれている 敷地全体の建築的空間化	室内から見えるパノラマが内部空間を構成 住み手が積極的に建築の形成に参加し、創造的対話の可能性を示唆 敷地の領域を区切らず開放することで、誰でもが敷地を散策し横切る 層による緩やかな分節	変化の多い空間がブリッジの貫入で統一されている 住まい手がもつ固有の生活パターンを空間化 フリースの比率が高く、魅力的な連続空間が可能となった レベル差や屈曲や小さな遮断を繰り返しながら繋がる生活空間となった

表 5. 高橋公子の住宅作品の比較分析

	菅の家	Ya 邸	菅邸	えごのきの家
空間構成原理	内包構成、 二次連結構成	連結構成 ユニット連結	連結構成、書庫による親棟と子棟の連結	分割構成、六分割された三世代住居
空間相互の関係	内包的一体と接続	接続的	接続的 書庫とで世帯を繋ぐ	接続的、中庭やブリッジを介して接続
内外空間の関係	天窓等による接続 柔らかく閉じる	接続的	H型コートハウス	接続的
共用室の扱いと配置	中心的、内包	主要な扱い	中心的な扱い	主要な扱い
個室と共用室の関係	接続的	分離	接続的	中庭やブリッジを介して接続
技法	鞭ラーメン膜構造 ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 切妻屋根型 内包構成 コンクリートブロック	ユニット連結 ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 陸屋根 連結構成 スキップフロア	鉄骨ラーメン構造 ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 片流れ屋根 連結構成 コートハウス二世帯	ＣＴ鋼ラーメン ＧＭモジュール プレファブリック化 距離感の創出 ヴォールト屋根 分割構成 六分割のコートハウス
効果	住宅自体の構造体をはじめ空間を構成する多くの部材が露わになっているため、モノが多くても気にならない。 天井の高い大空間がもつ包容力が、迫力ある空間になっている 包容力ある大空間では、さりげなく各ふるまいをアフォードする場が設えられ、使い手によって適宜可変可能であった。	使い勝手とか温度・湿度とか、一般的に機能性能という言葉であらわされるもの、五感で認識できるもの以外のところで一種の拒絶反応が起きているらしいあらわしの鉄骨の色を少し紺紺の入った黒にしたら、住まい手曰く「腐った黒だった」という 居間の床がアスファルト仕上で、柔らかくてよかったが、スリッパがすぐにダメになった 高橋が自身も言うようにコミュニケーション不足といえる	分棟配置は自由度が高く、家族や時間に対する適応性が高い空間となっている。 それぞれの世帯に台所やおふろがあって、干渉せず、お互いのことは気配としてわかる位置感覚で生活が成り立っている。 モノが溢れていても天井が高いから気にならない 二つの世帯を結び地域に開くかたちである	一組の夫婦を中心に組み立てられるモダンリビングの限界を感じ、多様な人間が居合わされる空間が意識されている。 家族各自の生活場面が隔離されることなく、かつ適度の距離を保ちつつ、家全体の気配が通うような環境をもった。 従来の家族が自明の存在でなくなった時代にあって、新たな集住体の確かなイメージを私たちに残した。

2.4　対象作品の居住経過

表 6.　清家清の居住経過 1

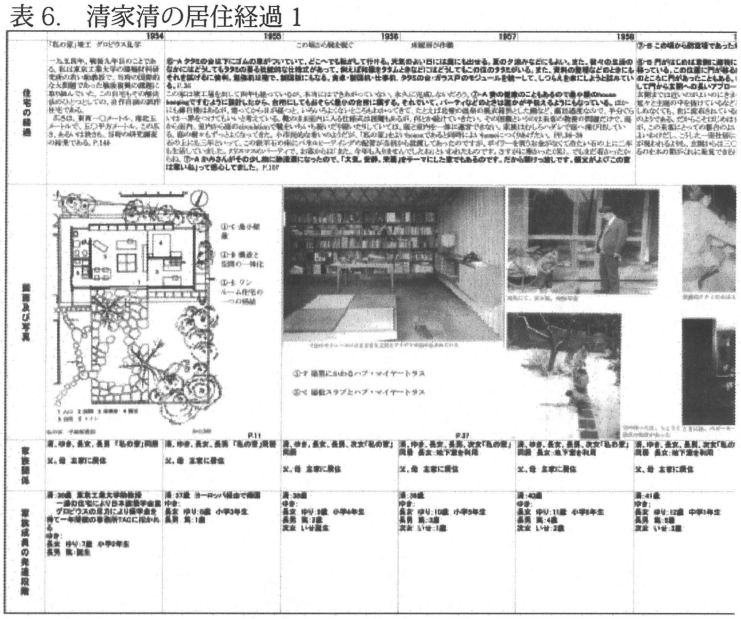
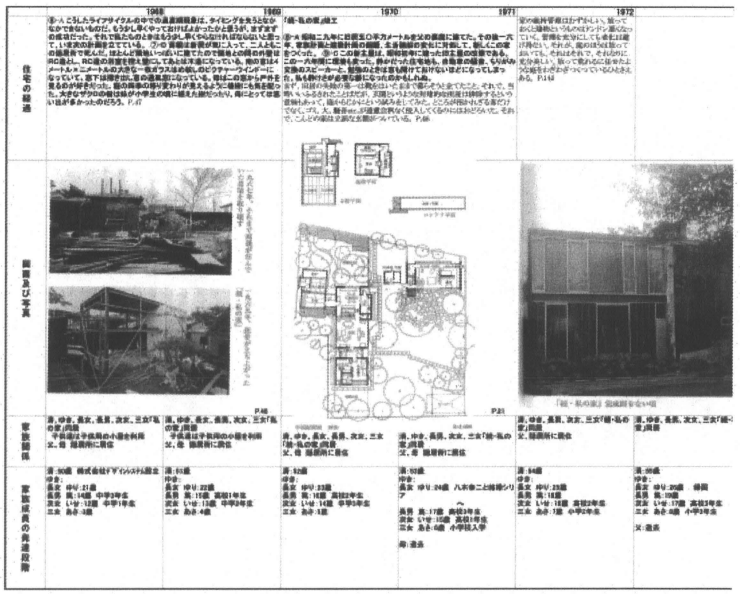


表 7. 清家清の居住経過 2



居住経過をそれぞれまとめた、その一例を示す。

表は「私の家」の居住経過をまとめたものの一部である。「私の家」が竣工した 1954 年から、妻が亡くなる 1996 年までの、42 年間の住宅の経過・その図面及び写真、家族関係、家族成員の発達段階をまとめたものだ。「私の家」が竣工した年に長男が生まれ、家族の発達段階に合せて増築が繰り返されている。この表では、長男が高校二年、次女が中学三年の時に「続・私の家」が竣工し移り住んでいる。翌年の 71 年に母、73 年に父が亡くなり、74 年には帰国した長女家族が「私の家」に住み始めている。

2.5　時間的適応性の分析

表 8.　場面転換の時間的適応性の分析

2　分析　2.4　場面転換の時間的適応性　意図と効果　本人及び家族の言説

	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
意図 ソフト	「自然と交流しながらしつらえをしていく」 「形而上的な存在をひとつの調和のある個体に」	「空間の意味付けに関わる住まい手の主体性」「建築家があらかじめ抱いている固定的なイメージが如何にもろいものか」	「家を最後に設計するのは住み手なんです」 「構造によって空間と暮らし方を規定しないこと」
意図 ハード	「構造と空間の一体性」 「ホモジニアスな空間」 「日本的エレメント」 「舗設」	「一層一室の重層連結」 「内部空間を緻密に構成」 「自律的な住まい方」	「「がらんどう」な空間を状況に合せて使いこなして行く」 「細ラーメン膜構造」
効果 状態	「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ました」 「戸外まで完全一室住居」	「上下空間の日本的繋がり」「まちそのものに住む」 「空間の繋がりは外部や都市まで繋がっている」	「伝統的な日本の住宅のもっていた機能に対するルーズさ」 「包容力ある大空間」
効果 検証	「50平方メートルの狭さを救っている」 「住居計画と構造的合理性の一体化が図られた」	「自然に生じた空間は、人に強要せず、人に負担を与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人間が、一つの匂いとなり、香る。」	「家族と住宅の緊密な関係を解除する操作」 「使い手によって適宜可変可能となった」

場面転換の時間的適応性を実現する意図と、その効果を本人及び家族の言説をもとに対照した。

「私の家」では、「自然と交流しながらしつらえをしていく」という意図に対し、「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ました」「戸外まで含めた完全一室住居」という効果が整合されている。

表 9.　時間転換の時間的適応性の分析

2　分析　2.5　時間転換の時間的適応性　意図と効果　本人及び家族の言説

	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
意図 ソフト	「そのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義」 「時間のディメンションを入れて住宅は四次元」「めまぐるしい生活の変化に耐えられるように」	「快適さとは、欲望を野放しにせずしっかり抑え込んでコントロール可能という状態から得られる」「生活行動の姿勢や哲学の掘り起こしが望まれる」	「住居は、不自由さを内に含んだ"まざる空間だ"」「住宅は生活が日々刻まれるもの」 「住み手が自分になじんだ生活を自らの手でつくっていくためのおおらかな空間を求めて」
意図 ハード	「構造と空間の一体性」 「ホモジニアスな空間」 「日本的エレメント」 「舗設」「状況に合わせてつくる」	「全ての空間を共用」 「内部空間を身体に合せる」 「領域を自らつくり獲得」 「限られた空間(最大限利用)」	「きまったリズムで刻まれる強い構造」「包容力のある大空間」「がらんどう」な空間を状況に合せて使いこなして行く」
効果 状態	「子どもの発達段階に合せてつくる」。「私の家」住居群：私の家、続・私の家、倅の家ができる。戦後は住様式の変化がめまぐるしかった。 「私の家」は長女家族、次女家族が住み、人の動きを伴い、住み続けられた。「私の家住居群を十分に利用してくれている」	「日本古来の仕来たり"衣替え"を保っている。」 「年二回の大片付けが、地下室の保持方法。」「住まい手の創意工夫と努力が必要」 「人格の本当の展開、実体化に肉迫する限り、どうして見るものを感動させないことがあり得よう。」「建築も、空間も、人も、同じ香りの媒体、共有者、構成素材としての、各々の責任を果たす」	性差や立場に関係なく、動ける人が動き、作業できる人が作業する空間になった。「さりげなく各ふるまいをアフォードする空間が設えられた」 「使い手によって適宜可変可能となった」「住まいもそして人もまた創意工夫の中で変化してきた」「家族という人間関係とその時間の変化をルーズに包み込む装置であった。」

時間転換の時間的適応性を実現する意図と、その効果を本人及び家族の言説をもとに対照した。

「私の家」では、「そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義」という意図に対して、「子どもの発達段階に合せてつくる」という状況が整合されている。

3　考察

3.1 空間構成と家族構成

「私の家」はワンルームの分割構成である。抽象化された分割は内包的でもある。清家清のアイデンティティともいえる「構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント」、「舗設」を活かすのに最も適した空間構成だ。

「塔の家」は、重層連結構成である。重層連結の結果一体となった内包的構成を併せ持つ。東の他作品にも共通する技法は「重層連結構成」、「コンクリート打放し」、「吹抜空間」、「仕上なし」である。一住戸において、一室一層を縦に連結する空間構成の手法は、東が開発したといってもよく、「塔の家」のアイデンティティといえる。

「管の家」の空間構成は、スチールパイプによる内包構成である。二次操作の貫入による連結構成を併せ持つ。高橋の他作品にも共通する技法は「ＧＭモジュール」、「プレファブリック化」、「細ラーメン膜構造」である。この組合せは、「管の家」のアイデンティティといえる。

「私の家」は戸外を含めて完全一室住居である。子どもの発達段階に合せて増築している。広瀬鎌二の SH-1 も完全一室住居だが、結婚時に建て、１０年後に増築している。一つに固まって暮らす、完全一室住居は、限られた家族構成・発達段階に適応しており、家族成員の発達とともに、増築等の改変や追加を伴って適応している。

「塔の家」は縦の概念、レベル差を利用することで壁をつくらずにプライバシーを確保した。「どんな環境にいても、自分を見失わず、自分の場所を見つけられるたくましさを身につけてほしかった」と東は言う。「塔の家」もお風呂やトイレ、個室にドアはない。子ども時代だけでなく娘が成人したのちも適応している。東が促した自律的で共存的な家族関係は、家族の時間的変遷と「塔の家」との適応に少なからず関わっている。

「管の家」では、世帯間が混じりあっている。お互いを繋ぐ場所が玄関であり、ゆるやかに分節したのが階段だという。手摺のない階段は、実際には高齢者に大きなバリア（障壁）になった。内包空間内は性差や立場を越えた自由なふるまいがあり、対等に家事も担い合っている。内包空間とその他の空間との接続が分節的であり、その他の空間に対して閉鎖的になっている。

分割構成は分割を曖昧化すると融合的・内包的になり、連結構成は連結後に一体化させると融合的になり、内包構成はその他の空間との接続を分節的にすると、閉鎖的になる。

それぞれの住宅の家族構成は、「私の家」は清家清、妻、長女、長男、次女、三女、分棟に敷地内同居の父、母の8人家族だ。「塔の家」は東孝光、妻、娘の3人家族。「管の家」は、高橋公子、鷹志、父、母の4人家族だ。それぞれの家族成員の発達段階も異なり、「私の家」は誕生したばかりの子どもから、老齢期の父母まで。「塔の家」は夫婦とひとり娘のみ。「管の家」は夫婦と老齢期の父母。その暮らし方も大きく違い、「私の家」は一つの敷地内に血縁が固まって暮らす家族、「塔の家」は都心そのものに自律的に暮らす核家族、「管の家」は全て成人した成員で構成されている二世帯家族である。

3.2　時間的適応性の考察

表 9.　場面転換の時間的適応性

3　考察　　3.1　場面転換の時間的適応性

	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
空間構成	ワンルームの分割構成。抽象化された分割は内包的。「構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント」、「舗設」を活かすのに適した空間であることが示されている。	一層一室の重層連結構成。重層連結後一体化させることで内包的構成を併せ持つ。「塔の家」のアイデンティティともいえる技法で、狭小敷地における都心型住居の可能性が示されている。	スチールパイプによる内包構成。二次的段階操作の貫入による連結構成を併せ持つ。「細ラーメン構造」による内包空間とシステムの可能性が示されている。
外部空間と内部空間	東西軸の耐力壁を中央寄りにすることで、南面の全面開放を可能とし、内外空間を一体化させている。	内部空間で完結させずに、まちに連結させることで、都市施設との連結や補完の可能性が示されている。	大らかな包容空間が、人を招きやすく、人が集まりやすい空間になりうることが示されている。
個室と共用室	構造と空間の一体性をはかり、暮らし方と構造体が整合されると、部屋の分節がなくても、住み分けが可能となることが示されている。	一層一室とすることで、仕切りやドアをつくらずに分節しながら、プライバシーが確保できることが、示されている。	中心的な大空間があることで、個室の転用や変化を無理なく受容していることが示されている。
家族関係の形成	完全一室住居において、原始共同体的家族生活が展開されうることが示されている。	一層一室が全て連続していることで、家族全員が全ての部屋を共用することが可能になることが示されている。固定化されていない分自律的である。	日常的な動線において、台所が無理なく配置されていることで、家事労働が固定化されず、それぞれが担いあっていることが示されている。
空間的適応性	一体的共用空間において、無限定用途的、複合用途的に家族生活が展開されうることが示されている。	連続融合的共用空間において、空間の内容密度が高く、時間差利用的、機能応用的に家族生活が展開されうることが示されている。	包容的共用空間において、空間は変化や転用への適応が高く、生活の変化や、暮らし方に合せて適宜変化されうることが示されている。

表 10.　時間転換の時間的適応性

3　考察　　3.2　時間転換の時間的適応性

	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
時間的転換のしつらえ	一体的共用空間は、機能及び領域が特化・固定化されず、その都度つくり、しつらえている。「舗設」、「状況に合せてつくる」ことが示されている。	連続融合的共用空間を最大限利用するための創意工夫がみられる。日本古来の暮し方が時間的転換のしつらえを可能にしていることが示されている。	包容的共用空間のなかで、模様替えや用途変更が頻繁に繰り返されてきた。変化を受容し、適応することが、示されている。
家族成員の発達段階	戸外を含めた完全一室住居は、子どもの発達段階に合せて増築されている。外部拡張に適応していることが示されている。	特別な変化はない。自律的に生活を組み立て、都市施設との連携や補完が、家族成員の発達段階を支えうることが示されている。	包容的共用空間のなかで、老いていく経過に、領域の可変、機能変更が繰り返されてきた。変化を受容し、適応することが示されている。
家族関係の変容	子育て中の若い世代に、「私の家」が世代を越えて適応している。住まい手を限定しない無限定性があることが示されている。	厳密に構成された内部空間において、自律的な家族関係が育まれ、まち、建築、空間、人間の自律的、共存関係が構築できうることが示されている。	包容的共用空間では、家族が減り、単身家族になっても、人が集まる管の会が開かれ続けた。人を集め続ける、空間の可能性が示されている。
環境及びその変化	外部の変化や対応に抵抗するのではなく、受入れることが可能な、適応性があることが示されている。	外部を遮り内部をつくるのではなく、都市との共存を図る、連続性が、まちに暮らすという総体を可能にしていることが示されている。	家族生活を私的に閉じ込まずに、雑然としたモノまで含めて人々に開放されている。空間のボリュームがこれらを可能にしている。
時間的適応性	無限定空間を「舗設」、「状況に合せてつくり」をもちいて、家族生活の変遷に適応させている。	限定空間を「都市施設と連携」、「時間差利用」、「領域開放」をもちいて、家族生活の変遷に適応させている。	内包された機能空間を、家族生活の変遷に合せて、変化、転用させて、適応させている。

場面転換の時間的適応性を考察した。

「私の家」は、分割構成。東西軸の耐力壁を中央にずらすことで、南面を全面開放させ、構造と空間の一体性が、一室内での棲み分けを可能にしている。

「塔の家」は、重層連結構成。内部空間で完結させずに、まちに連結させることで、都市施設との連携や補完を可能にし、一層一室にすることで、ドアをつくらずにプライバシーを確保している。

「管の家」は、スチールパイプによる内包構成。大らかな包容空間が人を招きやすく、集まりやすくし、中心的大空間が、個室の転用や変化を無理なく受容している。

時間転換の時間的適応性を考察した。

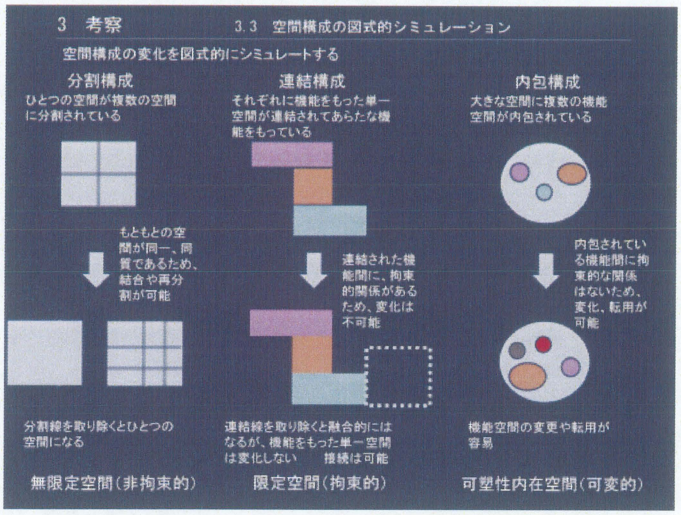
「私の家」では、戸外を含めた完全一室住居が、子どもの発達段階に合せて増築されている。無限定空間を「舗設」、「状況に合せてつくり」、適応させている。

「塔の家」では、都市施設との連携や補完が、家族成員の発達段階を支えている。限定空間を「都市施設との連携」、「時間差利用」、「領域開放」等ををもちいて、適応させている。

「管の家」では、老いていく経過に合わせて、領域の可変、機能変更が繰り返されてきた。内包された機能空間を、転用変化させている。

3.3　空間構成の図式的シミュレーション

表 10.　空間構成の図式的シミュレーション



空間構成の変化を図式的にシミュレートした。

「分割構成」は、ひとつの空間が複数の空間に分割されている。もともとが同一、同質であるため、結合や再分割が可能であり、分割線を取り除くと一体的になる。無限定空間（非拘束的）。

「連結構成」はそれぞれに機能をもった単一空間が連結されてあらたな機能をもっている。連結された機能間は、拘束的関係があるため、変化は不可能である。連結線を取り除くと融合的になるが、機能をもった単一空間は、基本的に変化しない。限定空間（拘束的）。接続は可能。

「内包構成」は大きな空間に複数の機能空間が内包されている。内包されている機能間は拘束的な関係がないため、変化、転用が可能。可塑性内在空間（可変的）。無限定空間（非拘束的）、限定空間（拘束的）、可塑性内在空間（可変的）は、それぞれの構成原理によってもたらされる、空間的性格と位置付けられる。

3.4　考察

「私の家」、「塔の家」、「管の家」の空間構成と家族構成、場面転換・時間転換の時間的適応性をみてきた。

場面転換の時間的適応性、時間転換の時間的適応性を適応の段階と程度にわけてみる。

適応の段階を、そのまま - 模様替え - 修繕 - 追加 - 転用 -
0　1　2　3　4

改築 - 増築 - 解体撤去に分けた。

5　7　10

左から右に向けて、エネルギー及び環境負荷が増大する。適応の程度を、範囲や面積に置き代えてみると、

極一部 - 一部 - 半分 - 過半 - 大半 - 全部に

0.1　0.2　0.5　0.6　0.8　1.0

分けた。左から右に向けて、適応にかかったエネルギー及び環境負荷が増大する。

適応の段階、適応の程度ともエネルギー及び環境負荷が少ない程、適応にエネルギーがかからないとみる。エネルギー及び環境負荷が大きい程、適応に際し変化しているとみる。適応の段階の下の数値はエネルギー及び環境負荷の大小の目安とする。適応の程度の下の数値はその範囲とし、適応の段階の数値に乗じる。場面転換の時間的適応は、時間を経過しない状況への適応や固定化しないものとする。時間転換の時間的適応は時間を経過したのちの状況への適応かつ固定化したものとする。

「私の家」に見られる場面転換の時間的適応は、舗設によって、「そのまま」適応されている。適応にかかったエネルギーは「0」である。

「塔の家」に見られる場面転換の時間的適応は、時間差的用途変更がみられるが、エネルギー及び環境負荷はかからないため、「そのまま」とした。キッチンの簡単な吊棚が入居後すぐにつくりかえている。棚はインテリア家具として扱い、「模様替え」とする。範囲はキッチンの吊棚なので、「極一部」とする。適応にかかったエネルギーは「1*0.1 = 0.1」である。

「管の家」に見られる場面転換は、入居後すぐに寝室とｸﾛｰｾﾞｯﾄを交換し、トップライトの追加設置が行われている。「転用」の範囲は「一部」、「追加」の範囲は「一部」である。「転用・一部」、「追加・一部」で、適応にかかったエネルギーは、「4*0.2+3*0.2 = 1.4」である。

「私の家」の時間転換の時間的適応は、防空壕を地下室利用「転用一部」、子ども小屋増築「増築一部」、続・私の家増築「増築過半」、倅の家増築「増築半分」で、適応にかかったエネルギーは「4*0.2+7*0.2+7*0.6+7*0.5 = 9.9　9.9/42 年 = 0.23」である

「塔の家」の時間転換の時間的適応は、地下室を事務所から倉庫に転用「転用一部」、外壁コンクリートの大規模な修繕「修繕過半」で、適応にかかったエネルギーは「4*0.2+2*0.6 = 2.0　2.0/20 年= 0.1」である。

「管の家」の時間転換の時間的適応は、物置３カ所設置「追加極一部」、１階床を木製フローリング張へ変更「模様替え一部」、鷹志書斎を父親寝室へ移す「転用一部」、居間拡大「転用一部」、寝室と鷹志書斎を入れ替える「転用一部」、クローゼットを和室へ移動「転用一部」、１階改変「改築一部」で、適応にかかったエネルギーは「3*0.1+1*0.2+4*0.2+4*0.2+4*0.2+5*0.2=3.93　3.93/18 年 =0.21 である。

適応にかかったエネルギー（数値）は比較の目安とする。

	「私の家」	「塔の家」	「管の家」
場面転換	0	0.1	1.4
時間転換	0.23	0.1	0.21

この比較では場面転換に最もエネルギーがかかっていないのが「私の家」、続いて「塔の家」、「管の家」となる。時間転換に最もエネルギーがかかっていないのが、「塔の家」、続いて「管の家」、「私の家」である。時間転換は、経過スパンが代わると、配点に大きな違いが出る可能性がある。ここでは配点そのものの数値的正当性がそこまで高くないため、同じスパンに置き代えての比較はしていない。あくまでも目安である。

「私の家」が場面転換のエネルギーが最も低いのは、舗設によるものと外部空間まで含めた一体利用だ。その場合に空間構成と構造と空間の整合性は欠かせないだろう。「塔の家」の場合は、ここには現れずに配点されていない、住まい外（まち）における適応が多分にある。エネルギー及び環境負荷と考えると加点されない。「管の家」は、竣工後すぐに用途転用と追加工事が行われているため、適応にエネルギーがかかっている。

「塔の家」が時間転換のエネルギーが最も低いのは、

家族の暮らし方と空間の性格にある。殆ど変化させずに、家族成員の創意工夫と自律的な生活姿勢で、住まいに暮らし方を適応させている。増築が可能な敷地がないことも加えなければならないが、連結された密度の高い空間は変化しずらい。適応が破綻すれば住み続けることは困難になる。現在もなお、住み続けられているのは、少なからず破綻していないことが示されている。「塔の家」での生活は、決して楽な生活ではないかもしれないが、不快ではなく、彼らにとって快適な暮らしなのだろう。ただ東が「この家で暮らすのは多少若さがいる」と言うように、いつまでも暮らせるとは限らない。元気な身体機能がなければ、住むことは不可能である。「私の家」は敷地内に増築を重ねて来た。1,000 ㎡の敷地がなければ不可能だったといえる。しかし、46 年の歳月を経て、「私の家」に次女夫婦が暮らし続けているということが、時間的な適応を証明している。「管の家」は家族関係の変容が目まぐるしかったこともあり、その対応による転用や変化が度々繰り返された。最も内部変化した建物といえる。すなわち建物内部の可変性が高いということだ。

「私の家」外部への増築が多く、拡張性が高いといえる。敷地が最も大きいことが要因でもあるが、もともと内外融合しての生活であるため、どちらかというと外側に意識が向かうのだろう。

「塔の家」この中では最も変化が少ないということになる。上にも横にも拡張はできず、内部構成も密度が高いため、変化が難しい。

「管の家」は内部変化が多く、内部の可変性が高いといえる。

4. 結論

空間構成ごとにみた図式的変化の可能性と、これまでみてきた 3 作品の時間的適応をもたらすための対応や変化は、ほぼ相応することがわかった。分割構成は「私の家」に、連結構成は「塔の家」に、内包構成は「管の家」にあてはまる。

分割構成は無限定空間（非拘束的）であり、再分割や結合が可能である。「私の家」の例では、実際の生活やその変化には「舗設」や「状況に合せてつくり」対応している。子どもたちが小さいうちはいいが、大きくなると一室住居では適応できなくなり、増築している。

連結構成は限定空間（拘束的）であり、変化は基本的に不可能である。接続は可能である。機能間の仕切りをとり、連続融合的にすることは可能だが、単一の機能空間は変化しない。「塔の家」では時間差的利用や、領域を開放することで、最大限の利用を可能にしている。まちに接続することで都市施設の連携や補完が可能になっている。

内包構成は可塑性内在空間（可変的）であり、内包された機能空間は変化や転用が容易に可能である。「管の家」では場面転換で生活を開放し多くの人を招き、時間転換では家族生活の変化に合せて変更や転用を度々している。

住宅の共用空間の形態及び構成が、環境因子の一つとして家族生活の変化に適応していることがわかった。あらためて、建築と空間と人間は、共に時を刻み出来事を重ねながら、築き合ってきたといえる。本研究はその一部を垣間見たに過ぎない。人間の生活の可能性は、空間に含意され展開されることもあれば、生活のために空間を変化させることもある。可能性は空間にのみ含意されるのではなく、人間の生活と相俟って双方の展開の可能性が生みだされるといえる。

参考文献

清家清：「私の家」白書，住まいの図書館出版局，1997.

東孝光＋節子＋利恵：「塔の家」白書，住まいの図書館出版局，1988.

日本女子大学高橋研究室の会：時間の中の住まい，彰国社，2003.

横山正：新建築臨時増刊 昭和住宅史，新建築社，1976.11

石堂威・小巻哲：日本の現代住宅 1985-2005, TOTO 出版，2005.12

栗田勇：現代日本建築家全集，三一書房，1974.8

菊竹清訓：代謝建築論，彰国社，1969.1

篠原一男：住宅論，鹿島出版会，1970.10

山本理顕：新編住居論，平凡社 2004.3

黒沢隆：個室群住居，住まいの図書館出版局，1997.9

布野修司：戦後建築論ノート，相模選書，1981.6

藤森照信：昭和住宅物語，新建築社，1990.3

宮脇檀：日本の住宅設計，彰国社，1976.10

大河直躬：住まいの人類学，平凡社，1986.9

平成２２年度修士論文発表 February 18, 2011

家族生活の変遷に対する住宅共用空間の時間的適応性に関する研究

清家清：私の家、東孝光：塔の家、高橋公子：管の家の作品分析を軸として

三重大学大学院　工学研究科　建築学専攻
富岡研究室　関口啓介

1.1　研究の目的

本研究の目的は、住宅における、共用空間の形態とその空間構成が家族生活の変遷にどのように関わっているのかを実例を通して指し示し、その可能性を探ることである。

1.1　研究フレーム

第一章 序論

第二章 分析

1924年以降の日本の住宅 24作品の空間構成

対象作品「私の家1954」、「塔の家1966」、「管の家1983」の分類

対象作品の分析（設計のアイデア・住宅形態の実現効果・居住経過）

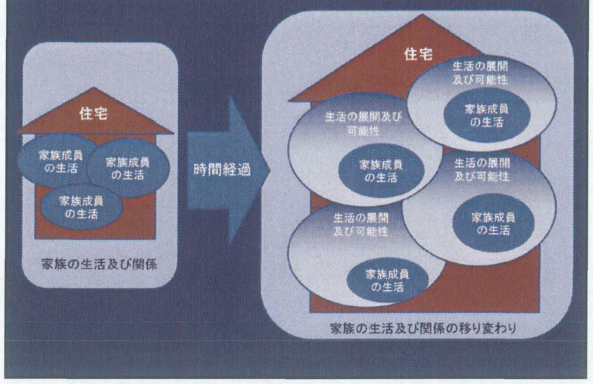
場面転換の時間的適応可能性の分析 （実現効果とアイデアの対応）

時間転換の時間的適応可能性の分析 （実現効果と居住経過の対応）

第三章 考察

第四章 結論

1.2　研究の問題意識



1.3　研究対象

空間構成の系譜及びその発展形態が確認できる住宅作品

1924年以降の日本の24住宅作品

空間構成原理	
分割構成	一つの空間がより小さい空間に分割されている
連結構成	それぞれに機能をもった単一空間が連結されて新たな機能をもっている
内包構成	大きな空間に複数の機能空間が内包されている

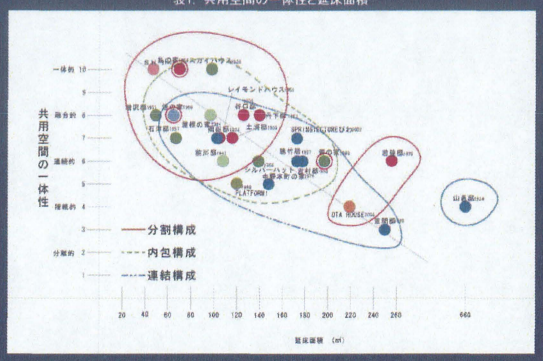
居住経過についての観察記録のある住宅作品

建築家の自邸

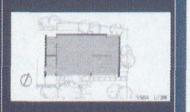
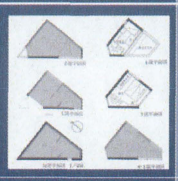
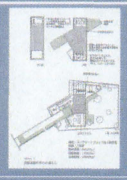
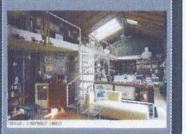
清家清「私の家1954」	戦後小住宅の代表的作品
東孝光「塔の家1966」	都心型住居の提案を果たした作品
高橋公子「管の家1983」	普通一般の人々の普遍的住宅を求めた作品

2　分析　　2.1　空間構成の系譜分析

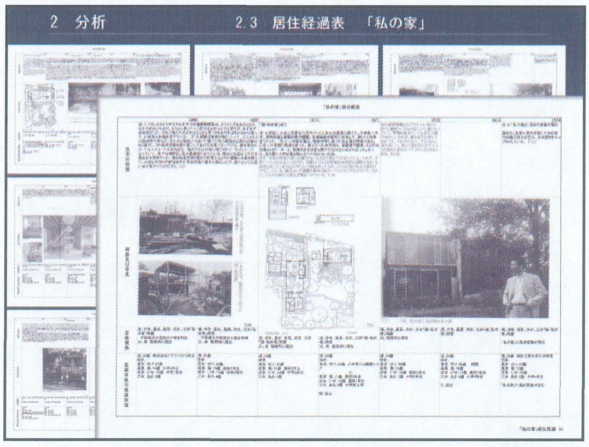
表1. 共用空間の一体性と延床面積



2　分析　　2.2　居住経過観察のある3作品の分析

	清家清「私の家」	東孝光「塔の家」	高橋公子「管の家」
平面図			
内観写真			

2 分析　2.3 居住経過表　「私の家」



2 分析　2.5 時間転換の時間的適応性　意図と効果　本人及び家族の言説

	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
意図 ソフト	「そのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義」 「時間のディメンションを入れて住宅は四次元」「めまぐるしい生活の変化に耐えられるように」	「快適さとは、欲望を野放しにせずしっかり抑え込んでコントロール可能という状態から得られる」「生活行動の姿勢や哲学の掘り起こしが問われる」	「住居は、不自由さを内に含んだ"まざる空間だ"」「住宅は生活が日々刻まれるもの」 「住み手が自分に合じんだ生活を自らの手でつくっていくためのおおらかな空間を求めた」 「きまったリズムで刻まれる強い構造」「包容力のある大空間」「からんどう」な空間を状況に合せて使いこなして行く」
意図 ハード	「構造と空間の一体性」 「ホモジニアスな空間」 「日本的エレメント」 「舗設」「状況に合わせてつくる」	「全ての空間を共用」 「内部空間を身体に合せる」 「領域を自らつくり獲得」 「限られた空間（最大限利用）」	
効果 状態	「子どもの発達段階に合せてつくる」、「私の家」住居群：私の家、続・私の家、倅の家ができる。戦後は住様式の変化がめまぐるしかった。 「私の家」は長女家族、次女家族が住み、人の動きを伴い、住み続けられた。「私の家住居群を十分に利用してくれている」	「日本古来の仕来たり"衣替え"を保っている」 「年二回の大掃付けが、地下室の保持方法」「住まい手の創意工夫と努力が必要」 「人格の本当の展開、実体化に肉迫する限り、どうして見るものを感動させないことがあり得よう。」「建築も、空間も、人も、同じ書りの媒体、共有者、構成素材としての、各々の責任を果たす」	性差や立場に関係なく、動ける人が動き、作業できる人が作業する空間になった。「さりげなく各ふるまいをアフォードする空間が設えられた」 「使い手によって適宜可変可能となった」「住まいもそして人もまた創意工夫の中で変化してきた」「家族という人間関係とその時間の変化をルーズに包み込む装置であった。」
効果 検証			

3 考察　3.1 場面転換の時間的適応性

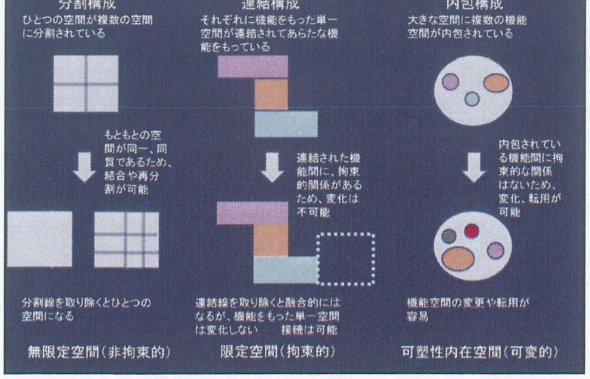
	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
空間構成	ワンルームの分割構成。抽象化された分割は内包的。「構造と空間の一体性」、「ホモジニアスな空間」、「日本的エレメント」、「舗設」を活かすのに適した空間であることが示されている。	一層一室の重層連結構成。重層連結後一体化させることで内包的構成を併せ持つ。「塔の家」のアイデンティティともいえる技法で、狭小敷地における都心型住居の可能性が示されている。	スチールパイプによる内包構成。二次的段階操作の貫入による連結構成を併せ持つ。「細ラーメン構造」による内包空間とシステムの可能性が示されている。
外部空間と内部空間	東西軸の耐力壁を中央寄りにすることで、両面の全面開放を可能とし、内外空間を一体化させている。	内部空間で完結させずに、まちに連結させることで、都市施設との連結や補完の可能性が示されている。	大らかな包容空間が、人を招きやすく、人が集まりやすいい空間になりうることが示されている。
個室と共用室	構造と空間の一体性をはかり、暮らし方と構造体が整合されると、部屋の分節がなくても、住み分けが可能となることが示されている。	一層一室とすることで、仕切りやドアをつくらずに分節しながら、プライバシーが確保できることが、示されている。	中心的な大空間があることで、個室の転用や変化を柔軟な受容していることが示されている。
家族関係の形成	完全一室住居において、原始共同体的家族生活が展開されうることが示されている。	一層一室が全て連続していることで、家族全員が全ての部屋を共用することが可能になることが示されている。固定化されていない分自律的である。	日常的な動線において、台所が無理なく配置されていることで、家事労働が固定化されず、それぞれが担いあっていることが示されている。
空間的適応性	一体的共用空間において、無限定用途的、複合用途的に家族生活が展開されうることが示されている。	連続融合的共用空間において、空間の内容密度が高く、時間差利用的、機能応用的に家族生活が展開されうることが示されている。	包容的共用空間において、空間は変化や転用への適応が高く、生活の変化や、暮らし方に合せて適宜変化されうることが示されている。

3 考察　3.2 時間転換の時間的適応性

	清家清 「私の家」	東孝光 「塔の家」	高橋公子 「管の家」
時間的転換のしつらえ	一体的共用空間は、機能及び領域が特化・固定化されず、その都度つくり、しつらえている。「舗設」、「状況に合せてつくる」ことが示されている。	連続融合的共用空間を最大限利用するための創意工夫がみられる。日本古来の暮し方が時間的転換のしつらえを可能にしていることが示されている。	包容的共用空間のなかで、機材替えや用途変更が頻繁に繰り返されてきた。変化を受容し、適応することが、示されている。
家族成員の発達段階	戸外を含めた完全一室住居は、子どもの発達段階に合せて増築されている。外部拡張に適応していることが示されている。	特別な変化はない。自律的に生活を組み立て、都市施設との連携や補完が、家族成員の発達段階を支えることが示されている。	包容的共用空間のなかで、老いていく経過に、領域の可変、機能変更が繰り返されてきた。変化を受容し、適応することが示されている。
家族関係の変容	子育て中の若い世代に、「私の家」が世代を越えて適応している。住まい手を限定しない無限定性があることが示されている。	緻密に構成された内部空間において、自律的な家族関係が育まれ、まち、建築、空間、人間の自律的、共存関係が構築できうることが示されている。	包容的共用空間では、家族が減り、単身家族になっても、人が集まる管の会が開かれ続けた。人を集め続ける、空間の可能性が示されている。
環境及びその変化	外部の変化や対応に抵抗するのではなく、受入れることが可能な、適応性があることが示されている。	外部を遮り内部をつくるのではなく、都市との共存を図る、連続性が、まちに暮らすという総体を可能にしていることが示されている。	家族生活を私的に囲い込まずに、雑然としたモノまで含めて人々に開放されている。空間のボリュームがこれらを可能にしている。
時間的適応性	無限定空間を「舗設」、「状況に合せてつくり」をもちいて、家族生活の変遷に適応させている。	限定空間を「都市施設と連携」、「時間差利用」、「領域開放」をもちいて、家族生活の変遷に適応させている。	内包された機能空間を、家族生活の変遷に合せて、変化、転用させて、適応させている。

3 考察　3.3 空間構成の図式的シミュレーション

空間構成の変化を図式的にシミュレートする



4 結論

空間構成ごとにみた図式的変化の可能性は、これまでみてきた3作品の時間的適応をもたらすための対応や変化に、ほぼ相応することがわかった。分割構成は「私の家」に、連結構成は「塔の家」に、内包構成は「管の家」にあてはまる。

分割構成は無限定空間非拘束的）であり、再分割や結合が可能である。「私の家」の例では、実際の生活やその変化には「舗設」や「状況に合せてつくり」対応している。子どもたちが小さいうちはいいが、大きくなると一室住居では適応できなくなり、増築している。

連結構成は限定空間（拘束的）であり、変化は基本的に不可能である。接続は可能である。機能間の仕切りをとり、連続融合的にすることは可能だが、単一の機能空間は変化しない。「塔の家」では時間差的利用や、領域を開放することで、最大限の利用を可能にしている。まちに接続することで都市施設の連携や補完が可能になっている。

内包構成は可塑性内在空間（可変的）であり、内包された機能空間は変化や転用が容易に可能である。「管の家」では場面転換で生活を開放し多くの人を招き、時間転換では家族生活の変化に合せて変更や転用を度々している。

住宅の共用空間の形態及び構成が、環境因子の一つとして家族生活の変化に適応していることがわかった。

あらためて、建築と空間と人間は、共に時を刻み出来事を重ねながら、築き合ってきたといえる。本研究はその一部を垣間見たに過ぎない。人間の生活の可能性は、空間に含意され展開されることもあれば、生活のために空間を変化させることもある。可能性は空間に含意されるのではなく、人間の生活と相俟って双方の展開の可能性が生みだされるといえる。

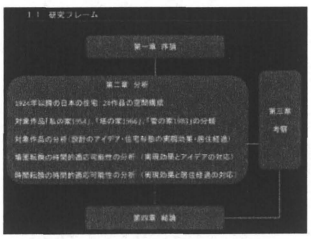
修士論文読み原稿

2011.2.18　関口啓介

家族生活の変遷に対する、住宅共用空間の、時間的適応性に関する研究
と題して、社会人学生の関口が発表します。

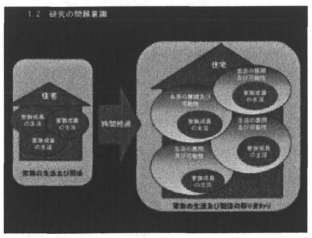
本研究の目的は、住宅における、共用空間の形態と、その空間構成が、家族生活の変遷にどのように関わっているのかを実例を通して指し示し、その可能性を探ることであります。

１１３字　0：20



本研究は、第一章　序論、第二章　分析、第三章　考察、第四章　結論で構成されています。

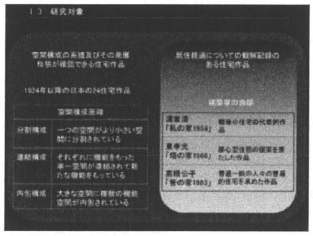
１７８字　0：29



住宅では、家族成員の関係や個々の生活が、時間とともに変化します。それゆえ、住宅はそのような変化に対応できる性能が求められます。本研究はこのことに意識を傾けて、1924 年以降の日本の住宅を題材として、共用空間の時間的適応性を観察しようとするものです。

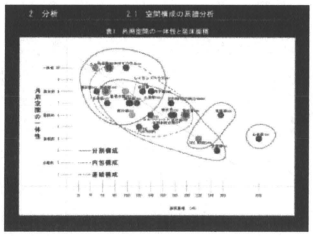
３０６字　0：50

とり上げたのは 2 系列の事例です。前者は空間構成の歴史的経過と、その発展形態が確認できる住宅作品を選定し、1924 年以降の日本の住宅、24 作品を事例としました。

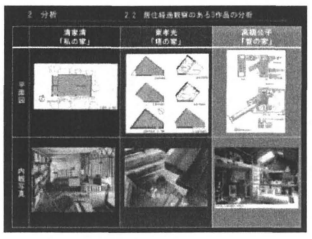


後者は、24 作品の内、建築家の自邸である 3 作品を事例としました。いずれも、設計意図と住宅形態の対照ができ、居住経過観察が記録されているものです。また、社会的課題に私費と生活をかけて取り組んだ作品でもあります。
戦後小住宅の代表的作品、清家清：私の家。
都心型住居の提案を果たした、東孝光：塔の家。
普通一般の人々の普遍的住宅を求めた、高橋公子：管の家です。
　空間構成原理を分割構成、一つの空間がより小さい空間に分割されている。連結構成、それぞれに機能をもった単一空間が連結されて、新たな機能をもっている。内包構成、大きな空間に複数の機能空間が内包されている。分類し、定めました。

６７２字　1：50

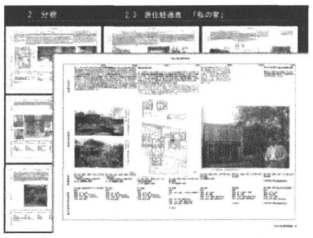


3 作品を対象に、24 作品の中での空間構成の分類や、空間配列、共用空間のありかたを比較し、用いられた場面転換の時間的適応性と、時間転換の時間的適応性を分析しました。
653 字　1:50
空間構成の系譜分析では、24 作品をいくつかの指標をもとにプロットしてみましたが、その一例を示します。表は共用空間の一体性と延床面積の関係を示したものです。共用空間の一体性は、住宅における共用空間の扱い及び配置と、個室と共用室の関係を、一体的・融合的・連続的・接続的・分離的　のそれぞれに相応する部位に配置し、延床面積は住宅部分を基本としました。若狭邸と、OHTA HOSE MUSEUM については、体操場と美術館が含まれています。
表では、一体的な傾向に「分割構成」、融合的な傾向に「内包構成」、連続的・接続的な傾向に「連結構成」があり、延床面積との関係は、逆相関の関係にあります。
１，０２６字　2：45

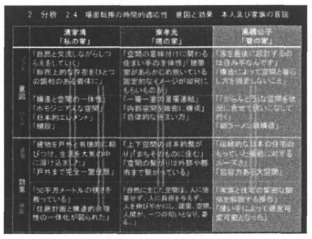


居住経過観察のある３作品をみてみます。
平面図にグレーのトーンがかけてある部位が共用空間です。
「私の家」は戸外を含めての完全一室住居です。構造と空間が一体となった分割構成です。
「塔の家」は一層一室を縦に連結した、重層連結構成です。
「管の家」は、「細ラーメン膜構造」の内包構成です。

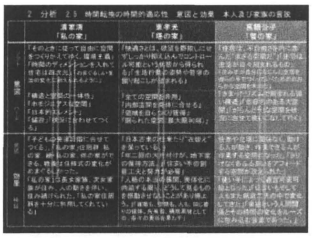
１，１７４字　3：12



続いて居住経過表の一例をみてみます。
表は「私の家」の居住経過をまとめたものです。
「私の家」が竣工した 1954 年から、妻が亡くなる 1996 年までの、42 年間の住宅の経過・その図面及び写真、家族関係、家族成員の発達段階をまとめたものです。「私の家」が竣工した年に長男が生まれ、家族の発達段階に合せて増築が繰り返されています。この表では、長男が高校二年、次女が中学三年の時に「続・私の家」が竣工し移り住んでいます。翌年の 71 年に母、73 年に父が亡くなり、74 年には帰国した長女家族が「私の家」に住み始めています。
１，４２６字 3:50



場面転換の時間的適応性実現する意図と、その効果を本人及び家族の言説をもとに対照しました。
「私の家」では、「自然と交流しながらしつらえをしていく」という意図に対し、「建物を戸外と有機的に結びつけ、生活を大気の中に溶け込ました」「戸外まで含めた完全一室住居」という効果が整合されています。「塔の家」では、「建築家があらかじめ抱いている固定的なイメージが、如何にもろいものか」というを与えず、人を伸びやかにし、建築、空間、人間が、一つの匂いとなり、香る。」と効果が対照されています。
「管の家」では、「構造によって空間と暮らし方を規定しないこと」という意図に対して、「家族と住宅の緊密な関係を解除する操作があった」として効果が整合されています。
1,780 字　4：50



時間転換の時間的適応性を実現する意図と、その効果を本人及び家族の言説をもとに対照しました。

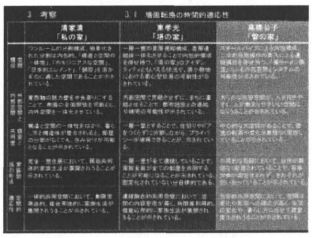
「私の家」では、「そのときそのときに従って自由に空間をつくりかえてゆく、環境主義」という意図に対して、「子どもの発達段階に合せてつくる」という状況が整合されています。

「塔の家」では、「快適さとは、欲望を野放しにせず、しっかり抑え込んでコントロール可能という状態から得られる」という意図に対して、「建築も、空間も、人も、同じ香りの媒体、共有者、構成素材としての、各々の責任を果たす」として、自律的・共存的な生活が、確認されています。

「管の家」では、「住宅は生活が日々刻まれるもの」という意図に対して、「家族という人間関係と、その時間の変化をルーズに包み込む装置であった。」というように、「包容力のある大空間がその効果を発揮した」ことを確認しています。

2,154字 5：50

考察



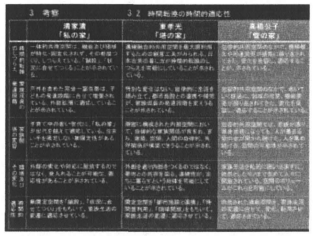
場面転換の時間的適応性をみます。

「私の家」は、分割構成です。東西軸の耐力壁を中央にずらすことで、南面を全面開放させ、構造と空間の一体性が、一室内の棲み分けを可能にしています。

「塔の家」は、重層連結構成です。内部空間で完結させずに、まちに連結させることで、都市施設との連携や補完を可能にし、一層一室にすることで、ドアをつくらずにプライバシーを確保しています。

「管の家」は、スチールパイプによる内包構成です。大らかな包容空間が人を招きやすく、集まりやすくし、中心的大空間が、個室の転用や変化を無理なく受容しています。

２，４１７字　６：35



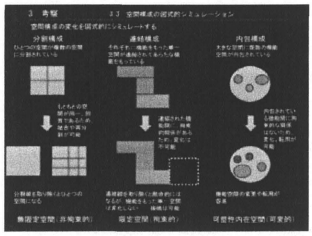
時間転換の時間的適応性をみます。

「私の家」では、戸外を含めた完全一室住居が、子どもの発達段階に合せて増築されています。無限定空間を「舗設」、「状況に合せてつくり」をもちいて、適応させています。

「塔の家」では、都市施設との連携や補完が、家族成員の発達段かを支えています。限定空間を「都市施設との連携」、「時間差利用」、「領域開放」をもちいて、適応させています。

「管の家」では、老いていく経過に合わせて、領域の可変、機能変更が繰り返されてきました。内包された機能空間を、転用させています。

2,668 字　7：15



考察

空間構成の変化を図式的にシミュレートしました。

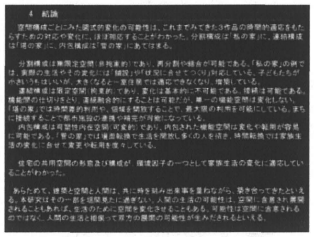
「分割構成」は、ひとつの空間が複数の空間に分割されています。もともとが同一、同質であるため、結合や再分割が可能であり、分割線を取り除くと一体的になります。無限定空間（非拘束的）です。

「連結構成」はそれぞれに機能をもった単一空間が連結されてあらたな機能をもっています。連結された機能間は、拘束的関係があるため、変化は不可能です。連結線を取り除くと融合的になりますが、機能をもった単一空間は、基本的に変化しません。限定空間（拘束的）です。

「内包構成」は大きな空間に複数の機能空間が内包されています。内包されている機能間は拘束的な関係がないため、変化、転用が可能です。可塑性内在空間（可変的）です。

無限定空間（非拘束的）、限定空間（拘束的）、可塑性内在空間（可塑的）は、それぞれの構成原理によってもたらされる、空間的性格と位置付けます。

３，０６３字　8：20



4　結論

空間構成ごとにみた変化の可能性は、これまでみてきた3作品の時間的適応をもたらすための対応や変化に、ほぼ相応することがわかった。分割構成は「私の家」に、連結構成は「塔の家」に、内包構成は「管の家」にあてはまる。

分割構成は無限定空間（非拘束的）であり、再分割や結合が可能である。「私の家」の例では、実際の生活やその変化には「舗設」や「状況に合せてつくり」対応している。子どもたちが小さいうちはいいが、大きくなると一室住居では適応できなくなり、増築している。

連結構成は限定空間（拘束的）であり、変化は基本的に不可能である。接続は可能である。機能間の仕切りをとり、連続融合的にすることは可能だが、単一の機能空間は変化しない。「塔の家」では時間差的利用や、領域を開放することで、最大限の利用を可能にしている。まちに接続することで都市施設の連携や補完が可能になっている。

内包構成は可塑性内在空間（可変的）であり、内包された機能空間は変化や転用が容易に可能である。「管の家」では場面転換で生活を開放し多くの人を招き、時間転換では家族生活の変化に合せて変更や転用を度々している。

住宅の共用空間の形態及び構成が、環境因子の一つとして家族生活の変化に適応していることがわかった。

あらためて、建築と空間と人間は、共に時を刻み出来事を重ねながら、築き合ってきたといえる。本研究はその一部を垣間見たに過ぎない。人間の生活の可能性は、空間に含意され展開されることもあれば、生活のために空間を変化させることもある。可能性は空間に含意されるのではなく、人間の生活と相俟って双方の展開の可能性が生みだされるといえる。

結論

空間構成ごとにみた変化の可能性は、これまでみてきた３作品の時間的適応をもたらすための対応や変化に、ほぼ相応することがわかりました。

分割構成は無限定空間（非拘束的）であり、再分割や結合が可能である。「私の家」の例では、実際の生活やその変化には「舗設」や「状況に合せてつくり」対応している。子どもたちが小さいうちはいいが、大きくなると一室住居では適応できなくなり、増築している。

連結構成は限定空間（拘束的）であり、変化は基本的に不可能である。接続は可能である。機能間の仕切りをとり、連続融合的にすることは可能だが、単一の機能空間は変化しない。「塔の家」では時間差的利用や、領域を開放することで、最大限の利用を可能にしている。まちに接続することで都市施設の連携や補完が可能になっている。

内包構成は可塑性内在空間（可変的）であり、内包された機能空間は変化や転用が容易に可能である。「管の家」では場面転換で生活を開放し多くの人を招き、時間転換では家族生活の変化に合せて変更や転用を度々している。

住宅の共用空間の形態及び構成が、環境因子の一つとして家族生活の変化に適応していることがわかりました。

あらためて、建築と空間と人間は、共に時を刻み出来事を重ねながら、築き合ってきたといえる。本研究はその一部を垣間見たに過ぎない。人間の生活の可能性は、空間に含意され展開されることもあれば、生活のために空間を変化させることもある。可能性は空間に含意されるのではなく、人間の生活と相俟って双方の展開の可能性が生みだされるといえます。

3,724 字　　10：00

死滅する脳細胞とのたたかいの手記（論文工期）

関口　啓介

さぞや晴れ晴れとした気持ちで論文後記というものを書くのだろうなと思い描いていた。それが最終提出を目前に控えた３月３日に、引き渡し直前の建物を点検しては、ダメを見つけて修正しているような状況になるとは思ってもいなかった。思えば私の論文つくりのための工期（３年間）は、予定調和の破綻からはじまり、破綻で終わったといえる。

修論発表当日２月１８日午前８時５０分、発表者の集合時間を迎えた。私はまだ名古屋の事務所で梗概の修正をしていた。発表のスライドの修正を終えたのが午前６時過ぎ。読み原稿の修正を終えたのが８時前だ。

発表前日２月１７日午前10時、野並さんのレクチャーに続き私のスライドと読み原稿の指導を受けた。「考察と結果がわからない」と先生は硬い表情でつぶやいた。３年間叱られに叱られ続けて来たドグマが、考察から結論に溢れ出していた。それに気づいたのが午前１１時過ぎであった。「じゃあいいかな」という先生の言葉に、「大丈夫です」と答えたのは、考察から結論を書き変える腹が据わったからだ。

戻る車の中で、考察と結論の組み立てと時間のシミュレーションをした。午後９時からのクライアントの打合せは飛ばせない。私が社会人として修士課程に籍を置いているということは、仕事をひっくるめてクリアするという前提であるからだ。打合せ前の資料準備と往復・打合せ時間で５時間はかかる。１３時に事務所に戻り翌朝出発の７時までが１８時間でそこから５時間差し引くと１３時間ある。できる。そう確信した。

１３時過ぎに事務所に戻り、ドグマの除去をしながら、「なぜあれだけ叱られ続けたのに噴出しているのだろうか」と自分に嫌気がした。それと同時に「絶対変えてやる。そうしなければ自分の３年間は無に等しいものになる。」と言い聞かせた。２０時に打合せの準備を済まし事務所を出る。それまでに出来たのは構想だけだった。実際に居住経過観察を扱ったのは３例に過ぎず、「そこから何がわかるのか」冷静に考えた。私の間違いは「そこから何が言えるか」を考えて、組み上げていたことだった。わかっていることを何かに結びつけるために、独断的な意見や見解（個人的な思考）に走っていた。３例しかない経過観察で空間構成ごとの対照は無理なのか。例がなければ実験をすればいい。今からどうやって？実際の作品ではなく、空間構成の図式的シミュレーションなら可能だ。打合せに向かう車の運転をしながら、頭の中でシミュレートした。「いける！」、空間構成原理は、完成後に変形させるときの演算にも、明らかに「命題」として生きている。それに３つの作品は、ほぼシミュレートと同様の変化をしている。

クライアントの都合で遅れて始まった打合せは、普段よりも倍速で動いているかのように軽やかな頭の回転で、難題も軽々とクリアし、笑いの内に早めに終わった。事務所に戻ったのは午後１１時２０分。この日の夕飯を食べた記憶がまったくない。それからこれだけ集中したのは生まれて初めてではないかという未知の時間がながれ、集合時間を迎えた。しかし、私はまだ、名古屋で梗概の修正をしていた。

午前１１時に近鉄電車に乗り、読み原稿を黙読しながら練習する。言葉づかいがかなり変だ。昼間なのに座ることができない。立った状態で修正するが、揺られていつもより余計汚い字は、自分でも間を空けないと判読できないものとなる。座れないのは眠気予防に功を奏したが、読み原稿はかなり汚い仕上がりとなった。

発表を控え、研究室の仲間と固まって座っていた。昨日見た野並さんのスライドが修正されている。と思った瞬間、眠りに落ちていた。そんなに長い時間ではないと思ったが、数秒の仮眠を直前にとった。弘重さんが、野並さんの論文がないと前に来られて我に返った。

我ながら人前でこんなに下手くそな発表はしたことがないというくらい、つっかえたりした。すべて、汚い読み原稿が招いた演出だった。質疑応答はかなり冷静だった。加藤先生が私の回答に頷いて下さっていたのが印象的だった。大月先生の補集合は、あの場ではまったくわからなかった。共用室と個室が二律背反的だなどという質問の意図がまったくわからなかった。浦山先生がいう時代変化の影響はあると思う。率直にこの研究に読み取れるだけの材料はなかった。時代や地域の関数を客観的に導き出せるほどのケースを扱っていないからだ。ここでのチャート図の役割は三作品の位置づけと空間構成ごとの分布であり、この図で用を足しているといえるのだが、分析のプロはそれでは済まない。先生から指摘された問題がそのまま露呈された。浦山先生にはわかったようなわからないような応答をしていたが、当の本人は睡眠不足も手伝ってか、何食わぬ顔でふてぶてしく答えていた。今思い返すと笑えてくる。

２月１７日前日からはじまった発表までの、死滅していた数十億の脳細胞がよみがえったかのような数時間は、奇跡のような時間だったのだろうか。でも本当は奇跡なんかではないことを知っている。死滅していたものではなく眠っていたものなのだから。一度呼び起こせたものなら、また呼び起こすことができるだろう。

予定調和の破綻の度に、自分の中の何かが、目覚めて来たような気がする。人間の遺伝子にはあらゆる出来事への準備が刻み記されているらしいが、そのほとんどはスイッチＯＦＦの状態だという。この３年間にいくつかのスイッチがはいってしまった。５か月間散髪していなかった髪をやっと切りに行った時に、「大学院修了したらきっと寂しくなるね」と、理髪店のマスターが言った。「やりたいことと、やらなければいけないことだらけで、そんなこと思ったことなかった」と答えていた。慰労会で松田さんから「関口さんのこれからの目標は？」と聞かれて、「ノーベル平和賞を建築でとること」と言っていた。飲んだ席の大ボラだが、なんていい夢だと自分で感心した。「描くことのできない夢は、実現しない」、とすれば可能性はまったくのゼロではないということだ。３年前に望んでいた自分の姿は、もっと賢くなった姿だったはず。今の私とは、ちょっと、いやだいぶ違う姿だ。３年間の工期を終え、完成予想を大きくはずれた姿だ！これで良かったのでしょうか？

先生　！・・・「そんなの知らねえよ！」という声が聞こえてきそうだ。

富岡先生、脳外科手術を何度か執刀して頂き、有難うございました。死に物狂いで抵抗してきて、最後の最後に、やっとわかった気がします。表象者でありたい（になりたい）と思っていました。でも、その下地に緻密で退屈で堅牢で確かな裏付けが必要なことが。運だけで今まで生きてきたという意味が今ならわかります。ここから先は運だけではすまされません。建築がそんな頼りないものでつくられては困るからです。何より、先生が身体を張って叩きこんで下さったものが、許してくれませんから。出来が悪い私のために、膨大なエネルギーをかけて下さり、有難うございました。発表前日にダメだしするなんて、先生にしかできませんよ。

信じて下さり、有難うございました。